

上越新幹線關係
埋藏文化財発掘調査報告

第 2 集

森 遺 跡

中 I 遺 跡

中 II 遺 跡

1983

群馬県教育委員会

群馬県埋藏文化財調査事業団

日本鉄道建設公団

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第 2 集

森 遺 跡
中 I 遺 跡
中 II 遺 跡

1983

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

1. 奈良三彩陶



2. 須恵器大甕



序

昭和50年代の上越新幹線、関越自動車道、上武道路等大規模な開発は、県内交通体系を一新し、私達の生活に新風を吹き込んでおります。

一方、県内は、恵まれた自然環境のもとに、数万年以前から人々が住みつき、以来、各時代多数の人々が生活しておりました。当時の生活の痕跡の多くは地中に残されております。従って開発に先立って人々の生活の痕跡を調査し、今日の生活に役立てることは重要なことと言えます。

このたび昭和48年度から調査を開始した、上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査のうち、藤岡地区の森、中遺跡の発掘調査報告書が刊行される運びとなりました。この報告書が広く利用され、多数の人々が私達祖先の歴史を理解する手がかりとして有効に活用されることを願います。

なお、発掘調査、整理が円滑に行なわれたことは、ひとえに関係各位のご協力と、ご理解によるもので、厚くお礼申し上げます。

昭和58年 3月31日

群馬県教育委員会

教育長

横 山 巖

例 言

- 1 本書は上越新幹線建設工事に伴って、昭和51年度から52年度に実施した、森遺跡・中I遺跡・中II遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は日本鉄道建設公団の委託を受けて、群馬県教育委員会が実施した。
- 3 藤岡市地域は事前の分布調査で6地区と総称されたが、そのうちの3地点の調査を実施した。遺跡所在地は、次のとおりである。

森遺跡（6-1地区） 藤岡市大字森字口無331-1他
中I遺跡（6-2地区） 藤岡市大字中字社宮司982-3他
中II遺跡（6-3地区） 藤岡市大字中字中西291他
- 4 出土した石器および石製品の石質については、群馬地質研究会 飯島静男氏の指導・助言をいただいた。
- 5 縄文土器の観察については、群馬県立歴史博物館 外山和夫氏の御教示を賜った。記して感謝の意を表します。
- 6 本遺跡の発掘調査にあたり、藤岡市教育委員会及び川越市教育委員会 城近憲市氏の御協力をいただいた。記して、感謝の意を表わす次第である。
- 7 本書の執筆分担は、次のとおりである。

I……………森田 秀策
II……………長谷部達雄
III……………横倉 興一
IV……………長谷部達雄
IV-D-1……………神谷 佳明
V……………長谷部達雄
V-4-(3)……………大江 正行
- 8 本書の遺構写真は各担当者が、遺物写真は佐藤元彦が撮影した。資料整理関係者は次のとおりである。

福田 恭子 福島恵理子 坂庭 常磐 山田キミ子
中野 秀子 金子 吉江 高橋美津子（土器の復原・実測・製図）
浜野和宗作 関 邦一（保存処理）
- 9 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図(高崎)、藤岡市都市計画図(2500分の1)を使用した。
- 10 出土遺物は現在、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 本書の編集は関晴彦が担当した。

目 次

卷首 函 版
序
例 言

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と歴史的環境	5
1 遺跡の立地	7
2 歴史的環境	7
周辺遺跡一覧表	9
III 森 遺 跡	15
A 調査方法と経過	17
1 調査経過	17
2 調査方法及び基本土層	19
B 遺跡の概要	20
C 遺構と遺物	22
1 住 居 址	22
(1) 第1号住居址	22
(2) 第2号住居址	25
(3) 第3号住居址	26
(4) 第4号住居址	31
(5) 第5号住居址	39
(6) 第6号住居址	42
(7) 第7号住居址	46
(8) 第8号住居址	48
(9) 第9号住居址	51
(10) 第10・11号住居址	55

イ 第10号住居址	56
ロ 第11号住居址	57
(11) 第13・14号住居址	59
イ 第13号住居址	61
ロ 第14号住居址	67
(12) 第15号住居址	67
(13) 小 結	70
2 掘立柱遺構	73
(1) 第1号掘立柱家屋	73
(2) 第2号掘立柱家屋	74
(3) 第3号掘立柱家屋	75
3 土 壇	75
第11号土壇	75
4 水路址と耕作址	79
(1) 水 路 址	79
(2) 耕 作 址	79
(3) 小 結	79
5 その他の遺物	81
(1) 石 器	81
(2) 小 結	83
D まとめ	85
1 6世紀末から7世紀後半頃までの土器分類について	85
2 口縁部外面に沈線を施す球形・丸底土器についての予察	87
3 森遺跡をめぐる7～8世紀社会の概観	88
遺物観察表	91
IV 中 I 遺 跡	105
A 調査の方法と経過	107
B 遺跡の概要	108
C 遺構と遺物	109
1 住居址	109
(1) 第1号住居址	109

(2) 第 2 号住居址	115
(3) 第 3 号住居址	118
(4) 第 4 号住居址	123
(5) 第 5 号住居址	127
(6) 第 6 号住居址	129
(7) 第 7 号住居址	130
2 掘立柱遺構	132
(1) 第 1 号掘立柱遺構	132
(2) 第 2 号掘立柱遺構	132
(3) 第 3 号掘立柱遺構	134
(4) 第 4 号掘立柱遺構	135
(5) 第 5 号掘立柱遺構	136
(6) 第 6 号掘立柱遺構	137
(7) 第 7 号掘立柱遺構	138
(8) 第 8 号掘立柱遺構	138
(9) 第 9 号掘立柱遺構	141
(10) 第 10 号掘立柱遺構	142
(11) 第 11 号掘立柱遺構	144
(12) 第 12 号掘立柱遺構	145
(13) 第 14 号掘立柱遺構	146
(14) 第 15 号掘立柱遺構	147
3 井戸址	147
4 土壇	150
5 溝	156
(1) 第 1 号溝	156
(2) 第 2 号溝	158
(3) 第 3 号溝	160
(4) 第 4 号溝	160
6 その他の遺物	161
(1) 鉄製品	161
(2) 石製品	161
(3) 水路工事中の出土遺物	167
D まとめ	169
1 奈良三彩陶	169

2 総括	171
V 中 II 遺跡	173
遺構と遺物	176
1 掘立柱遺構	177
(1) 第1号掘立柱遺構	177
(2) 第2号掘立柱遺構	177
2 墓址	178
(1) 第1号墓址	178
(2) 第2号墓址	180
3 溝	180
(1) 第1号溝	180
(2) 第2号溝	180
(3) 第3号溝	182
4 その他の遺物	193
(1) 各層出土遺物	193
(2) 1区出土縄文式土器	193
(3) 紅皿について	195
5 まとめ	197
遺物観察表	198

図 版 目 次

森遺跡

本文対照頁

図版 1	遺跡付近地形図（縮尺 1/5,000）	5
2	遺跡付近航空写真（縮尺 1/4,000）	5
3	(1) 森遺跡全景（東から）	17
	(2) 5～6区全景（東から）	20
4	(1) 1～4区全景（東から）	20
	(2) 第2・3・5・8号住居址及び第2号水路址（南から）	20
5	(1) 第6・7・10・11・13・14号住居址（北東から）	20
	(2) 1～3区を南西から望む	20
6	(1) 第1号住居址（西から）	22
	(2) 第1号住居址カマド（西から）	22
	(3) 第2号住居址（南から）	25
7	(1) 第2号住居址遺物出土状況（南から）	25
	(2) 第3号住居址（南南東から）	26
	(3) 第4号住居址（東から）	31
8	(1) 第4号住居址遺物出土状況（東から）	31
	(2) 第4号住居址中央部・坏出土状況（東から）	31
	(3) 第5号住居址（南から）	39
9	(1) 第5号住居址カマド付近遺物出土状況（南東から）	39
	(2) 第5号住居址東壁下遺物出土状況（北から）	39
	(3) 第6号住居址（西から）	42
10	(1) 第6号住居址カマド（西から）	42
	(2) 第7号住居址（西から）	46
	(3) 第8号住居址（西から）	48
11	(1) 第8号住居址カマド（西から）	48
	(2) 第8号住居址カマド前遺物出土状況（北西から）	48
	(3) 第9号住居址（西から）	51
12	(1) 第9号住居址カマド前遺物出土状況（西から）	51
	(2) 第10号住居址（西から）	56
	(3) 第10号住居址遺物出土状況（西から）	56
13	(1) 第10・11号住居址（外側11号）	55

	(2) 第11号住居址カマド (手前10号カマド)	57
	(3) 第11号住居址貯蔵穴内遺物	57
14	(1) 第13・14号住居址 (南から)	59
	(2) 第13号住居址遺物出土状況 (南から)	61
	(3) 第13号住居址カマド (南西から)	61
15	(1) 第13号住居址カマド右脇貯蔵穴 (南東から)	61
	(2) 第14号住居址カマド一部と右手貯蔵穴 (西から)	67
	(3) 第14号住居址貯蔵穴 (南から)	67
16	(1) 第15号住居址 (西から)	67
	(2) 第16号住居址 (南西から)	67
	(3) 第11号土壇内須恵器大甕出土状況 (西から)	75
17	(1) 第11号土壇内大甕出土状況 (西から)	75
	(2) 第11号土壇掘り方 (西から)	75
	(3) 第2号掘立柱家屋 (南から)	74
18	(1) 第3号掘立柱家屋 (南から)	75
	(2) 第1号水路址 (南から望む)	79
	(3) 第1号住居址付近畝状小溝群 (南東から)	79
19	(1) 5区弥生時代遺物出土状況	81
	(2) 5区弥生時代石器出土状況	81
	(3) 5区弥生時代土器出土状況	81
20	(1) 第1号住居址以南の遺構	81
	(2) 第6号土壇 (西から)	75
	(3) 第4号土壇遺物出土状況 (南西から)	75
	(4) 第16号土壇 (西から)	75
	(5) 第13号土壇 (北から)	75
21	第1・2号住居址出土遺物	22・25
22	第2・4号住居址出土遺物 (その1)	25・31
23	第4号住居址出土遺物 (その2)	31
24	第4号住居址出土遺物 (その3)	31
25	第5号住居址出土遺物	39
26	第6・8号住居址出土遺物	42・48
27	第9・10・11号住居址出土遺物	51・56・57
28	第13号住居址出土遺物	61
29	第13・14号住居址出土遺物	59

30	第15号住居址出土遺物及びその他の石製品	67
----	----------------------	----

中 I 遺跡

31	遺跡付近地形図 (縮尺 1/5,000)	108
32	遺跡付近航空写真 (縮尺 1/4,000)	108
33	(1) 調査前遺跡全景 (北西から)	108
	(2) 調査風景	107
	(3) 掘立柱遺構群 (北から)	132
34	(1) 第1号溝 (北西から)	156
	(2) 掘立柱遺構群 (北西から)	132
35	(1) 第1号住居址遺物出土状況① (北西から)	109
	(2) 第1号住居址遺物出土状況② (北西から)	109
	(3) 第1号住居址炭化物出土状況	109
36	(1) 第1号住居址 (北西から)	109
	(2) 第1号住居址カマド検出状況 (北西から)	109
	(3) 第1号住居址カマド袖石架構使用状況	109
37	(1) 第2号住居址遺物出土状況	115
	(2) 第2号住居址カマド遺物出土状況	115
	(3) 第2号住居址鉄器出土状況	115
	(4) 第2号住居址 (北西から)	115
38	第3号住居址 (北西から)	116
39	(1) 第3号住居址 (北西から)	116
	(2) 第3号住居址カマド	116
40	(1) 第4号住居址遺物出土状況	123
	(2) 第4号住居址カマド遺物出土状況	123
	(3) 第4号住居址 (北西から)	123
41	第5・6・7号住居址及び第1号溝遺物出土状況 (北西から)	127・156
42	(1) 第5号住居址 (南から)	127
	(2) 第6号住居址 (北西から)	129
	(3) 第7号住居址 (北西から)	130
43	(1) 第1・2・3・4・6・15号掘立柱遺構 (南西から)	132
	(2) 第1・15号掘立柱遺構 (北西から)	132
44	(1) 第2・3・4・5・6・8号掘立柱遺構 (東から)	132
	(2) 第3号掘立柱遺構 (東から)	134

45	(1) 第4号掘立柱遺構(南から)	135
	(2) 第5号掘立柱遺構(南東から)	136
46	(1) 第3・4・6・7・8・10・14号掘立柱遺構(東から)	132
	(2) 第4・6・7・8号掘立柱遺構(東から)	132
47	(1) 第4・6・7・8・14号掘立柱遺構(東から)	132
	(2) 第10・11・12号掘立柱遺構(南から)	132
48	(1) 第1号井戸址(北東から)	147
	(2) 第1号井戸址枠組痕検出状況(東から)	147
	(3) 第1号井戸址井戸枠痕.....	147
49	(1) 第11号土壇(北から)	150
	(2) 第15号土壇(南から)	150
	(3) 第17号土壇(南西から)	150
50	(1) 第18号土壇(西から)	150
	(2) 第18号土壇鉄器出土状況(西から)	150
	(3) 第20号土壇(北から)	150
51	(1) 第22号土壇(西から)	150
	(2) 第25号土壇配石検出状況(南から)	150
	(3) 第25号土壇配石除去後(南から)	150
52	(1) 第26号土壇(南から)	150
	(2) 第1号溝土層断面(北西から)	156
	(3) 第1号溝遺物出土状況(南から)	156
53	第1号溝(北東から)	156
54	第1・2号住居址出土遺物	109・115
55	第3号住居址出土遺物.....	116
56	第3・4号住居址出土遺物	116・123
57	第3・4・5・6号住居址出土遺物.....	116
58	第6・7号住居址、第1号井戸址、第22号土壇、第1号溝出土遺物	129・147・150・156
59	第4号溝出土遺物及びその他の遺物(その1)	160・161
60	その他の遺物(その2)	161
61	鉄器.....	161

中II遺跡

62	遺跡付近地形図(縮尺1/5,000)	174
63	遺跡付近航空写真(縮尺1/4,000)	174

64	(1) トレンチ調査 (南東から)	174
	(2) 1区全景 (北西から)	174
65	(1) 2区東西壁.....	174
	(2) 5区南北壁.....	174
	(3) 7区上層全景 (北東から)	174
66	(1) 上層掘立柱遺構 (西から)	176
	(2) 調査風景.....	174
67	(1) 上層溝全景 (北から)	180
	(2) 下層溝全景 (北から)	180
68	(1) 第3号溝遺物出土状況 (北東から)	182
	(2) 第3号溝遺物出土状況 (その1)	182
	(3) 第3号溝高坏出土状況 (その2)	182
69	(1) 第1号墓址人骨出土状況 (東から)	178
	(2) 第1号墓址敷石出土状況 (西から)	178
	(3) 第1号墓址敷石除去後 (東から)	178
70	(1) 第2号墓址遺物出土状況 (北東から)	180
	(2) 第2号墓址 (北東から)	180
71	第2号墓址、第3号溝出土遺物 (その1)	180・182
72	第3号溝出土遺物 (その2)	182
73	第3号溝出土遺物 (その3)	182
74	第3号溝出土遺物 (その4) 及びその他の遺物	182・193

挿 図 目 次

第 1 図	新幹線と遺跡位置図	2
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	6
森遺跡		
第 3 図	調査区全体図 (1/1,500)	17
第 4 図	基本土層模式図	19
第 5 図	5・6区遺構配置図 (1/300)	21
第 6 図	第 1 号住居址 (1/60)	23
第 7 図	第 1 号住居址カマド (1/40)	23
第 8 図	第 1 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)	24
第 9 図	第 1 号住居址出土遺物・その 2 (1/3)	25
第 10 図	第 2 号住居址出土遺物・その 1 (1/2)	26
第 11 図	第 2 号住居址 (1/60)	27
第 12 図	第 2 号住居址貯蔵穴 (1/20)	27
第 13 図	第 2 号住居址遺物出土状態 (1/60)	28
第 14 図	第 2 号住居址炉 (1/20)	28
第 15 図	第 2 号住居址出土遺物・その 2 (1/4)	29
第 16 図	第 2 号住居址出土遺物・その 3 (1/4)	30
第 17 図	第 2 号住居址出土遺物・その 4 (1/3)	30
第 18 図	第 3 号住居址 (1/60)	32
第 19 図	第 3 号住居址カマド (1/40)	32
第 20 図	第 4 号住居址 (1/60)	33
第 21 図	第 4 号住居址カマド (1/40)	33
第 22 図	第 4 号住居址遺物出土状態 (1/60)	34
第 23 図	第 4 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)	35
第 24 図	第 4 号住居址出土遺物・その 2 (1/3)	36
第 25 図	第 4 号住居址出土遺物・その 3 (1/3)	37
第 26 図	第 4 号住居址出土遺物・その 4 (1/1)	38
第 27 図	第 5 号住居址 (1/60)	39
第 28 図	第 5 号住居址カマド (1/40)	39
第 29 図	第 5 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)	40
第 30 図	第 5 号住居址出土遺物・その 2 (1/3)	41

第 31 図	第 5 号住居址出土遺物・その 3 (1/1)	42
第 32 図	第 6 号住居址 (1/60)	43
第 33 図	第 6 号住居址カマド (1/40)	43
第 34 図	第 6 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)	44
第 35 図	第 6 号住居址出土遺物・その 2 (1/3)	45
第 36 図	第 7 号住居址 (1/60)	46
第 37 図	第 7 号住居址カマド (1/40)	46
第 38 図	第 7 号住居址出土遺物・その 1 (1/3)	47
第 39 図	第 7 号住居址出土遺物・その 2 (1/2)	47
第 40 図	第 8 号住居址 (1/60)	49
第 41 図	第 8 号住居址カマド (1/40)	49
第 42 図	第 8 号住居址出土遺物・その 1 (1/2)	50
第 43 図	第 8 号住居址出土遺物・その 2 (1/4)	50
第 44 図	第 8 号住居址出土遺物・その 3 (1/4)	50
第 45 図	第 8 号住居址出土遺物・その 4 (1/3)	51
第 46 図	第 9 号住居址 (1/60)	52
第 47 図	第 9 号住居址カマド (1/40)	52
第 48 図	第 9 号住居址遺物出土状態 (1/60)	53
第 49 図	第 9 号住居址出土遺物 (1/3)	53
第 50 図	第 10 号住居址 (1/60)	54
第 51 図	第 10 号住居址カマド (1/40)	54
第 52 図	第 10 号住居址出土遺物・その 1 (1/2)	56
第 53 図	第 10 号住居址出土遺物・その 2 (1/4)	56
第 54 図	第 10 号住居址出土遺物・その 3 (1/3)	57
第 55 図	第 11 号住居址 (1/60)	58
第 56 図	第 11 号住居址出土遺物 (1/3)	59
第 57 図	第 13・14 号住居址 (1/60)	60
第 58 図	第 13 号住居址カマド (1/40)	60
第 59 図	第 13・14 号住居址遺物出土状態 (1/60)	62
第 60 図	第 13・14 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)	63
第 61 図	第 13・14 号住居址出土遺物・その 2 (1/4)	64
第 62 図	第 13・14 号住居址出土遺物・その 3 (1/4)	65
第 63 図	第 13・14 号住居址出土遺物・その 4 (1/3)	66
第 64 図	第 13・14 号住居址出土遺物・その 5 (1/4)	67

第 65 図	第15号住居址 (1/60)	68
第 66 図	第15号住居址カマド (1/40)	68
第 67 図	第15号住居址出土遺物・その 1 (1/4)	69
第 68 図	第15号住居址出土遺物・その 2 (1/3)	69
第 69 図	第 1 号掘立柱家屋 (1/60)	73
第 70 図	第 2 号掘立柱家屋 (1/60)	74
第 71 図	第 3 号掘立柱家屋 (1/60)	75
第 72 図	第11号土坑 (1/60)	76
第 73 図	第11号土坑出土須恵器大甕 (1/6)	77
第 74 図	第 1・2・9・13~17号土坑 (1/60)	78
第 75 図	その他の遺物・その 1 (1/3)	81
第 76 図	その他の遺物・その 2 (1/3)	82
第 77 図	その他の遺物・その 3 (1/4)	83
第 78 図	6 世紀末から 7 世紀後半に至る土器編年図 (縮尺不同)	折り込み
第 79 図	旧郡郷と遺跡分布 (1/10万)	88

中 I 遺跡

第 80 図	中 I 遺跡グリッド設定図 (1/1,000)	106
第 81 図	基本土層 (1/40)	108
第 82 図	中 I 遺跡遺構配置図 (1/160)	折り込み
第 83 図	第 1 号住居址 (1/40)	110
第 84 図	第 1 号住居址カマド (1/20)	111
第 85 図	第 1 号住居址遺物出土状況 (1/40)	112
第 86 図	第 1 号住居址出土遺物 (1/3)	113
第 87 図	第 2 号住居址 (1/40)	114
第 88 図	第 2 号住居址カマド (1/20)	114
第 89 図	第 2 号住居址出土遺物 (1/3)	115
第 90 図	第 3 号住居址 (1/40)	117
第 91 図	第 3 号住居址カマド (1/20)	118
第 92 図	第 3 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)	119
第 93 図	第 3 号住居址出土遺物・その 2 (1/3)	120
第 94 図	第 4 号住居址 (1/40)	124
第 95 図	第 4 号住居址カマド (1/20)	124
第 96 図	第 4 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)	126

第97図	第4号住居址出土遺物・その2 (1/3)	126
第98図	第5号住居址 (1/40)	128
第99図	第5号住居址出土遺物 (1/3)	128
第100図	第6号住居址 (1/40)	129
第101図	第6号住居址出土遺物 (1/3)	130
第102図	第7号住居址 (1/40)	131
第103図	第7号住居址出土遺物 (1/3)	131
第104図	第1号掘立柱遺構 (1/60)	133
第105図	第2号掘立柱遺構 (1/60)	134
第106図	第3号掘立柱遺構 (1/60)	135
第107図	第4号掘立柱遺構 (1/60)	136
第108図	第5号掘立柱遺構 (1/60)	137
第109図	第6号掘立柱遺構 (1/60)	138
第110図	第7号掘立柱遺構 (1/60)	139
第111図	第8号掘立柱遺構 (1/60)	140
第112図	第9号掘立柱遺構 (1/60)	141
第113図	第10号掘立柱遺構 (1/60)	142
第114図	第11号掘立柱遺構 (1/60)	143
第115図	第12号掘立柱遺構 (1/60)	144
第116図	第14号掘立柱遺構 (1/60)	145
第117図	第15号掘立柱遺構 (1/60)	146
第118図	第1号井戸址 (1/40)	148
第119図	第1号井戸址出土遺物 (1/3)	149
第120図	第1～14号土坑 (1/40)	151
第121図	第15～22号土坑 (1/40)	152
第122図	第25・26号土坑 (1/40)	153
第123図	第25号土坑出土鉄製品 (1/2)	153
第124図	第22号土坑出土遺物 (1/3)	156
第125図	1区第1～3号溝 (1/240・1/120)	157
第126図	2区第1・4号溝 (1/240・1/120)	158
第127図	第1号溝出土遺物・その1 (1/3)	159
第128図	第1号溝出土遺物・その2 (1/4)	159
第129図	第1号溝出土遺物・その3 (1/1)	160
第130図	第2号溝出土遺物・その1 (1/3)	160

第131図	第2号溝出土遺物・その2 (1/2)	160
第132図	第4号溝出土遺物 (1/3)	160
第133図	各層出土遺物・その1 (1/3)	162
第134図	各層出土遺物・その2 (1/3)	163
第135図	表採遺物・その1 (1/4)	164
第136図	表採遺物・その2 (1/3)	164
第137図	水路内出土遺物 (1/3)	168
第138図	奈良三彩陶 (1/2)	169
第139図	群馬県内の奈良三彩陶の出土遺跡	170

中II遺跡

第140図	中II遺跡グリッド設定図 (1/120)	174
第141図	7区遺構配置図 (1/120)	175
第142図	第1号掘立柱遺構 (1/60)	176
第143図	第2号掘立柱遺構 (1/60)	177
第144図	7区柱列 (1/60)	178
第145図	第1・2号墓址 (1/20)	179
第146図	第2号墓址出土遺物 (1/3)	180
第147図	第1・2号溝 (1/120・1/60)	181
第148図	第2号溝出土遺物 (1/3)	182
第149図	第3号溝 (1/120・1/60)	183
第150図	第3号溝出土遺物・その1 (1/4)	182
第151図	第3号溝出土遺物・その2 (1/3)	184
第152図	第3号溝出土遺物・その3 (1/3)	185
第153図	第3号溝出土遺物・その4 (1/3)	186
第154図	第3号溝出土遺物・その5 (1/3)	187
第155図	第3号溝出土遺物・その6 (1/3)	188
第156図	第3号溝出土遺物・その7 (1/3)	189
第157図	第3号溝出土遺物・その8 (1/3)	190
第158図	第3号溝出土遺物・その9 (1/3)	191
第159図	第3号溝出土遺物・その10 (1/3)	192
第160図	4区B-6グリッド出土遺物 (1/3)	193
第161図	5区トレンチ出土遺物 (1/3)	193
第162図	1区出土縄文土器 (1/3)	194
第163図	紅皿 (1/2)	195

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	9
-------	---------	---

森遺跡

第 2 表	森遺跡遺構編年表	20
第 3 表	竪穴式住居址タイプ別け表	71
第 4 表	第 1 号掘立柱家屋柱穴間の長さ一覧表	73
第 5 表	第 2 号掘立柱家屋柱穴間の長さ一覧表	74
第 6 表	第 3 号掘立柱家屋柱穴間の長さ一覧表	75
第 7 表	土壇一覧表	84
第 8 表	第 1 号住居址出土遺物観察表	91
第 9 表	第 2 号住居址出土遺物観察表	92
第 10 表	第 4 号住居址出土遺物観察表	92
第 11 表	第 5 号住居址出土遺物観察表	95
第 12 表	第 6 号住居址出土遺物観察表	96
第 13 表	第 7 号住居址出土遺物観察表	97
第 14 表	第 8 号住居址出土遺物観察表	98
第 15 表	第 9 号住居址出土遺物観察表	98
第 16 表	第 10 号住居址出土遺物観察表	99
第 17 表	第 11 号住居址出土遺物観察表	100
第 18 表	第 13・14 号住居址出土遺物観察表	101
第 19 表	第 15 号住居址出土遺物観察表	102
第 20 表	第 11 号土壇出土遺物観察表	103
第 21 表	その他の遺物観察表	103

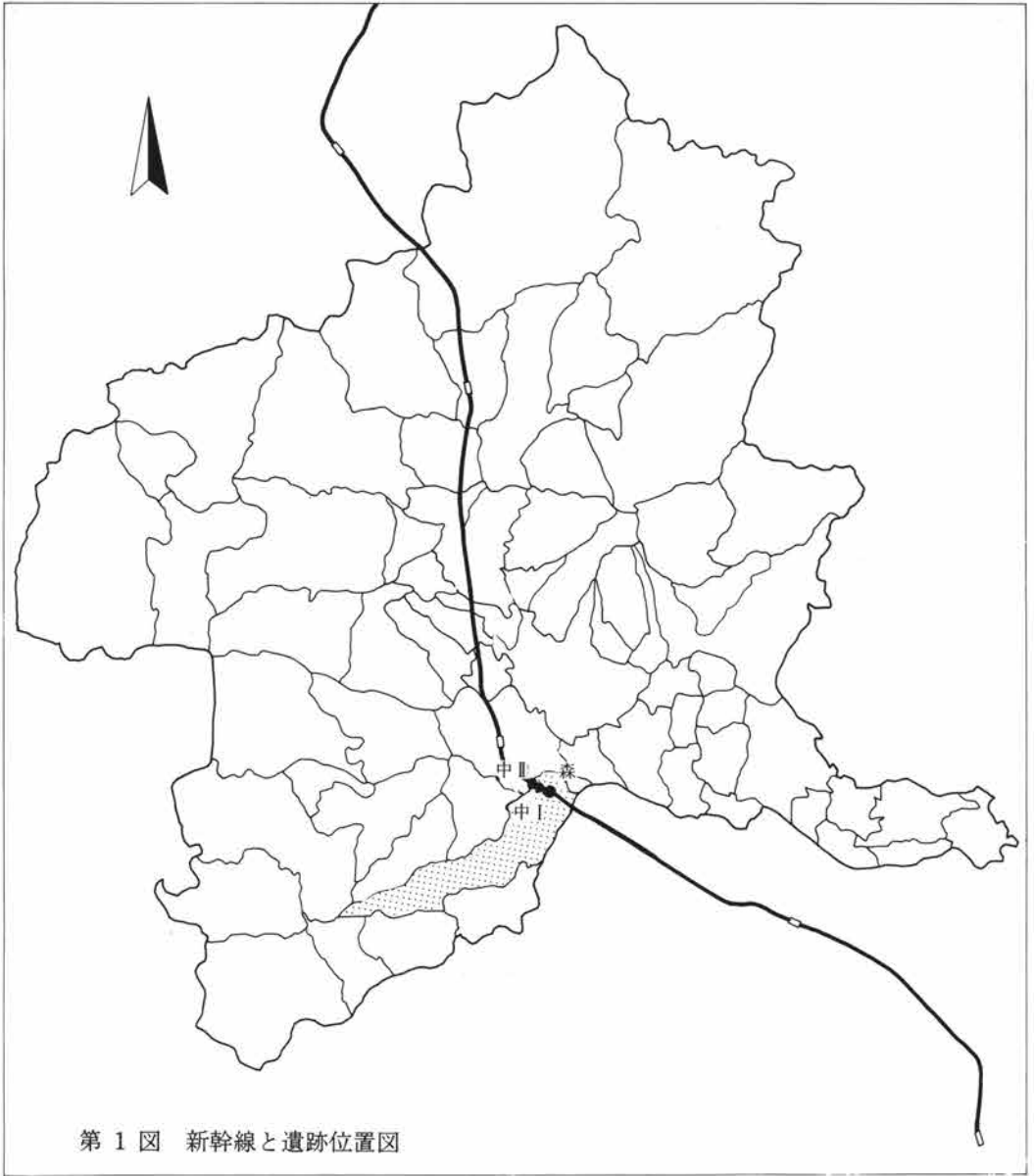
中 I 遺跡

第 22 表	第 3 号住居址出土遺物観察表	118
第 23 表	第 4 号住居址出土遺物観察表	123
第 24 表	第 1 号井戸址出土遺物観察表	147
第 25 表	土壇一覧表	154
第 26 表	各層出土遺物観察表	161
第 27 表	表採遺物観察表	166
第 28 表	掘立柱遺構方位分類表	171

中II遺跡

第 29 表 中II遺跡出土遺物觀察表198

I 調査に至る経過



I 調査に至る経過

わが国の高度成長経済政策に関する代名詞ともいべき上越新幹線の建設計画が具体化したのは昭和46年であった。すなわち日本鉄道建設公団は昭和46年10月14日に路線発表を行ったが、群馬県教育委員会は、文化財保護委員会と日本鉄道建設公団との間で締結されている埋蔵文化財保護に対する覚書にもとづき、群馬県内における上越新幹線建設地内における対応策を所管することになった。そして先ず路線周辺地域における文化財の分布調査を実施し、その結果を昭和47年7月に日本鉄道建設公団東京新幹線建設局へ提出した。この資料により、直接路線にかかる埋蔵文化財包蔵地は県内で22か所になることが決まり、路線の変更は不可能なことから、該当遺跡については記録保存とするための発掘調査を実施することとし、昭和48年度から利根郡月夜野町上津、高崎市下小鳥・大八木町内等で着手したのであった。以後49年度は高崎市上佐野町、同大八木町、50年度には高崎市木部町、利根郡月夜野町洞・前中原等でも順次拡大されていった。

上記の22か所については高崎市木部・阿久津町以北、月夜野町以南で、県南の藤岡市内においては埋蔵文化財包蔵地はないものとみられていた。すなわち、上越新幹線の通過する藤岡市内の北部地域は東に温井川、西を鮎川が北上して東流する烏川に合流する沖積地帯であり、大半は水田で、ごく小地域の微高地は畑になっていることから、古代以降の人間の居住地としては予想し難い地形というのが既成概念でもあった。ところが多野郡新町と藤岡市岡之郷の接する温井川の周辺を関越自動車道新潟線が通過することとなり、かつて温井川の護岸工事により遺物の出土がみられたとの情報にもとづき、昭和48年11月から12月にかけての第1次調査、翌49年1月から5月にかけての第2次調査による温井遺跡の発掘調査がやはり群馬県教育委員会によって実施された。その結果、かなり厚い砂層や粘土層の下部から古墳文化時代の住居跡が最終的には30軒も検出された。このことは従来とかく見逃しがちであった沖積地における遺跡の存在、埋蔵文化財保護対策上心すべき視点であることが明らかになり、貴重な成果であった。一方、上越新幹線、関越自動車道、同関連の藤岡インターチェンジ、及び主要地方道前橋長瀬線のバイパス建設等が具体化し、路線が次々と決定していく段階で、地場産業である藤岡瓦の原材料粘土の採取目的のため、当該地域の水田や畑地に求められ、各地で作業が行なわれるようになった。そうした際、かなり広範の個所で、粘土層の下部から土器類（土師器）の出土が知られ、遺跡は温井川周辺だけでなく、国鉄八高線を越えて西方にも延びていることが十分に予想されるところとなった。

こうした情勢のもとで昭和51年度を迎えたわけであったが、県内各地における日本鉄道建設公団側の用地買収ならびに工事の発注・着工が急ピッチで進行していくことが明白になってきた。烏川架橋と関連して高崎市下佐野町内の下佐野Ⅰ遺跡、月夜野町内の仮称上毛高原駅周辺の洞Ⅰ・Ⅱ、深沢遺跡等の発掘調査が進行していく中で、昭和51年8月には、改めて藤岡市内における現地の地表面での分布調査が実施された。8月14日、その調査結果が集約され、少なくとも3

か所の遺跡の存在が推定されることが明らかになり、同月26日、鉄建公団へ打診したところ、藤岡市内はまだ工事が未発注であり、早くても本年度中位であること、現在耕作中であり収穫後でなければ着手ができないことの情報がもたらされた。ところが、間もない同月30日に情勢は一変し藤岡市内2工区は9月、3工区は52年度、3工区は52年2月に発注予定であるとの報告を受けたことから、急遽9月1日に鉄建公団との協議を行ない、森地区の入札は11月に延期するので、事前調査を9～10月に終了して欲しいとの公団側の要望が出され、中地区は後でもよいので、森地区を先行することの条件が付けられた。

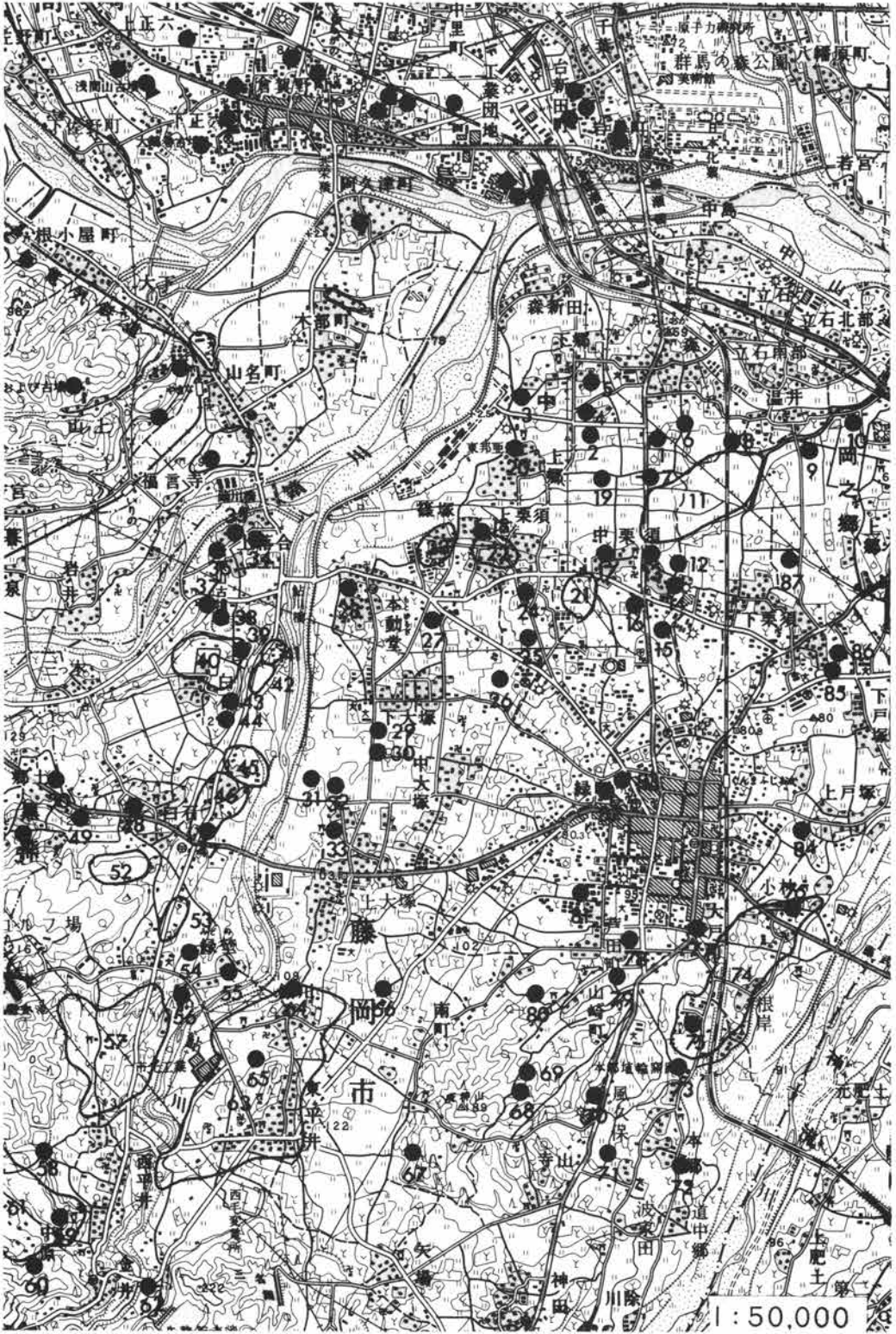
年度途中の方針の変更によって影響を受けるのは調査現場である。昭和51年度の調査が進行している際での新しい調査現場の設定は原則としては困難なことはいふまでもない。調査体制に余裕などない現状の中で、近接していた高崎市下佐野の現場から人員を割いて急遽特別班を新設して対応することが最善策と判断した。そして9月22日から重機を使用しないで遺跡の有無を確認するためのトレンチを入れることにした。しかし粘土層の厚い堆積のため手掘りでは困難になったことから10月21日から11月6日まで本格的トレンチを設定し、試掘を実施した。一方、鉄建公団側では藤岡市内森地区と下佐野II遺跡の両立でなく、下佐野の方を優先してほしい旨の意向でもあったが、11月16日に至り、更に今後の方針についてつめていくことになった。それによれば、①森については11月中に終了の方向で実施してほしいこと、②中については52年2月中に終結すること、③下佐野II遺跡については12月から着手してほしいというのが鉄建側の要望点であった。藤岡市内はもちろんであるが、烏川左岸の高崎市下佐野町内における用地買収及び工事計画が急をうけている情勢であるとの共通認識に立っての対応策の協議であった。

上記のような経過を経て、51年11月中旬からの森地区の本調査は具体的に進展することになったが、調査体制の確立問題が最も困難を極め、同時併行的な臨時体制であったために担当者の労苦は大変なものがあつた。加えて遺跡の状況が粘土層の中の粘質性の強い層序の中での遺構検出であり、水気があればぬかるし、乾燥すれば硬質となるという困難性を伴うという悪条件下での対応を強いられた。しかし担当者の努力で、何とか森地区については51年度末までには終了し、鉄建側へ引渡すことができたのであつた。

一方、森地区の西方、東邦亜鉛 K.K. 藤岡工場への進入道路をはさんで南北にひろがる中遺跡については51年度内には主として中東地区を、52年度の春4月から真夏の8月末までは中西地区を実施した。しかし、遺構の分布は東側の方が比較的多く、鮎川に近接した西方地域になるに従って少なかったため、カバーした面積の割合にしては調査日時が短期間で終了することができた。

上越新幹線建設に伴う藤岡市内における森・中遺跡の発掘調査は、従来断片的にしか知られていなかった藤岡市北部の沖積地域における遺跡の在り方の具体的な証言を可能としたことに大きな意義づけがなされたわけであり、大型プロジェクトへの対応としては当初計画の変更に伴うさまざまな困難点を明確にしたことも、埋蔵文化財のもつ宿命の一つとはいえ今後への教訓として記憶されるべき経過であつたと考えられる。

II 遺跡の立地と歴史的環境



第 2 図 周辺遺跡分布図

II 遺跡の立地と歴史的環境

1 立地

森遺跡は藤岡市森字口無を中心として所在し、中I遺跡は同市中町字社宮司・中沖に、中II遺跡は同町中西に所在する。国鉄八高線藤岡駅の南0.5km付近に位置する。

遺跡の所在する藤岡市は東側を神流川によって埼玉県神川村・上里村に接し、西側は鮎川を境界として多野郡吉井町、及び同河川を合流した鑓川によって高崎市、北側も同河川を合流した烏川によって同市と接している。南側は関東山地の縁部、多野郡鬼石町、山間部の同郡万場町、さらに甘楽郡甘楽町と接している。

同市は大まかに三地形から成り立っている。すなわち、南側の関東山地の山間部と藤岡市の中心部を形成している扇状地形、その扇端部から北側に広がる沖積地形である。

長野県境をつくる十石峠（標高1,356m）、三国山（1,828m）などに水源を有する神流川は山峽を縫うように流路を形成し、鬼石町と藤岡市の境界付近で平野部に流出する。ここを扇頂として、北北東方向に傾斜をもつ扇状地形を形成している。扇央部幅は約10kmあり、ほぼ中央部を神流川が貫流し、対岸は上述のとおり、埼玉県となっている。

さらに、同市西側を貫流する鮎川も関東山地赤久縄山（1,525m）北面に水源をもち、同市金井付近を扇頂とした北北東傾斜の扇状地形を形成する。すなわち、藤岡市街を中心とした地形は神流川と鮎川の形成した扇状地形である。扇央は市街地を中心とした所であり、扇端は上栗須、中栗須、下栗須などを結ぶ線にあたる。

この北側は鮎川、鑓川さらに烏川等の河川により扇端部を切り取る形で貫流し、沖積地を形成したものと考えられ、現在の温井川はその痕跡を示しているものであろう。中I遺跡では粘質土層が約2m堆積し、下層は礫層である。本地形の烏川寄りには微高地状になり、集落を形成している。本報告の二遺跡（三地点）はこの沖積地に展開されている。

本遺跡の所在する藤岡市は古墳の分布の多い地域として知られ、昭和13年発刊の『上毛古墳綜覧』によると、総数1,198基であったが、記載漏れもあるので実数はもっと多かったようである。現在は約471基で著しく消滅したことがわかる（注1）。

2 歴史的環境

同市は近年になり、道路建設・土地改良等による発掘調査が増加し、集落址を中心とした事例が明らかにされつつある。現在までの分布調査や発掘調査によって明らかにされた遺跡は「周辺遺跡一覧表」に記載してある。

先土器時代ではNo57の竹沼遺跡の大形両面加工石器1点と、縦形搔器1点、石片1点がある。ただし、表採の資料と住居址覆土中のものと記録されている（注2）。

縄文時代としては前述の遺跡から中期中葉の勝坂式から加曾利E I式の住居址・土壇等が調査されている。また沖積地形上に中期後葉の加曾利E IV式土器を伴うNo.32の中大塚敷石住居址が存在する。さらにNo.13の神明北遺跡は加曾利E III式・IV式の土器を出土している。後晩期の遺跡としてはNo.7、No.12の滝川、谷地の二遺跡から堀之内I式～安行III a式の土器を確認している。沖積地上のこれらの遺跡は昭和57年の調査により、埋ガメを中心として、打・磨製石斧、多種の石鏃などの他に、スタンプ形石器、石剣、耳飾、土偶、円板など群馬県内では数少ない出土品が確認されている(注3)。

弥生時代の遺跡は少なく、竹沼遺跡の遺構及び遺物が初例であるという。隣接の高崎市や、吉井町では後期の樽式土器を伴う住居址、集落址、水田址が存在する。

古墳時代に入ると遺跡が著しく増加する。特に古墳は神流川、鮎川地域及び扇端地域を中心として分布する。神流川流域では小林、根岸、本郷地区に122基をはじめとして、上・下戸塚に74基、鮎川流域では上落合、白石、緑埜地区に263基、さらに西・東平井、鮎川地区に427基分布していた。しかしながら現在確認できるものは約半数で、多数の古墳が消滅した。

鮎川流域には国指定の七興山古墳をはじめとして、竪穴式石室をもつ白石稻荷山古墳 (No.44)、十二天山古墳 (No.43)、模様積みの胴張り型石室の伊勢塚古墳 (No.36) などがあり、神流川流域には前方後円墳の戸塚神社古墳、諏訪神社古墳 (No.77) などがある。

集落址としては、先述の竹沼遺跡や、沖積地の温井遺跡 (No.10、注4) などがある。集落址として調査が開始されたのは、この二、三年のことで、以前は調査例がほとんどなかった。近年になり、開発関連の調査が多くなり、明らかにされつつある。

生産址としては本郷埴輪窯址があげられる。

奈良・平安時代の集落址としては中I遺跡に隣接するNo.4の社宮司遺跡や、No.8下川前遺跡が沖積地に立地する。

水田址としてはNo.11の小野地区水田址(注5)があげられる。B軽石層直下の水田址で、この広大な水田は、中I遺跡や、社宮司遺跡など広範囲に展開された集落を支えたことだろう。

注1 『東平井古墳群』 昭和55年度遺跡詳細分布調査実績報告、群馬県教育委員会、1981年

注2 『F1 竹沼遺跡』 昭和52年度発掘調査概報、藤岡市教育委員会、1978年

注3 昭和57年度、温井川の河川改修工事で藤岡市教育委員会が実施した。

注4 『温井遺跡』 関越自動車道(新潟線)埋蔵文化財発掘調査報告書第2集、群馬県教育委員会、1981年

注5 『C4 小野地区遺跡群』 一平安時代の水田址と住居址の調査一、藤岡市教育委員会、1980年

『C4 小野地区遺跡群』 昭和55年度発掘調査概報、藤岡市教育委員会、1981年

その他の遺跡は『群馬県遺跡地図』群馬県教育委員会(昭和48年)、及び『群馬県遺跡台帳II—西毛編—』群馬県教育委員会(昭和48年度)を参考にした。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時代	所在地	県遺跡台帳 ナンバー	備考
1	森	集落址	古墳～平安	森町		上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ、1976、群馬県教育委員会
2	中Ⅰ	集落址	古墳～平安	中町中沖		上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ、1977、群馬県教育委員会
3	中Ⅱ	包蔵地 墓址	奈良～近世	中町中西		上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ、1977、群馬県教育委員会
4	社宮司	集落址	平安	中町社宮司	1660	藤岡市教育委員会発掘調査実施
5	中沖	包蔵地	平安	中町中沖		
6	沖	集落址	平安	森町沖		
7	滝川	包蔵地	縄文	森町		藤岡市教育委員会発掘調査実施。縄文時代後期包蔵地（堀之内Ⅱ式）
8	下川前	集落址	奈良 平安	岡之郷		藤岡市教育委員会発掘調査実施。奈良平安時代集落址（住居址6軒、土塚1）
9	岡之台	集落址	古墳	岡之郷		
10	温井	集落址	古墳	岡之郷字温井		関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告第2集、1981、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
11	小野地区 水田址	生産址 （水田）	平安	小野		小野地区遺跡群、1981、藤岡市教育委員会
12	谷地	包蔵地	縄文	藤岡市中栗須		1981年発掘調査実施、縄文後期晩期包蔵地、堀之内Ⅰ式～安行Ⅲa式
13	神明北	包蔵地	縄文	藤岡市中栗須		1981年発掘調査実施、中期包蔵地、加曾利EⅢ・Ⅳ式
14		包蔵地 寺院址	縄文	中栗須町神明 西、諏訪、神 明上	1657～1659	1658寺院址？礎石3個、1659礎石列（4尺間）土師器散布・扇端部縄文土器散布
15	小袋	集落址	平安	藤岡市中栗須		

番号	遺跡名	種類	時代	所在地	県遺跡台帳 ナンバー	備考
16	八反田	集落址	奈良平安	藤岡市中栗須		
17	神明	包蔵地	縄文	藤岡市中栗須		
18	勸堂城	城館址	戦国	本勸堂町字前 屋敷	1664	南面、折のある五角形の本丸(100m×80m)不規則な二の丸(250m×250m)本丸の西南部の土居と堀が明らか。
19	大神宮山の 砦跡		室町 安土桃山	藤岡市藤岡	1706	東北-西南の長軸は200m、西南側を長さ100mに近い堀切りで断つ、堀切りにそう土居は高さ2m、西北側には腰曲輪がつく。
20		包蔵地 城館址	古墳～ 安土桃山	中町堤添 中町東黒田	1655 1656	1655土師器須恵器平安中世の土器石組が地下30cmあたりにある。1656八様城館址北西・南側に土塁
21	篠塚A古墳 群	墳墓	古墳	藤岡市篠塚		
22	篠塚B古墳 群	墳墓	古墳	藤岡市篠塚		
23	古墳群	墳墓	古墳	篠塚町西原、 中組、北口、 伊勢塚	1272～1278	群集墳。小円墳が多い。保存状況は悪い。
24	岡屋敷	城館址	室町	上栗須町岡	1715	鏡川南側平坦地。土居と濠があったが消滅。井戸のみ残す。浅見伊豆守定広享禄4年の台石がある。
25	狐穴	集落址	奈良平安	篠塚字狐穴		
26		墳墓	古墳	藤岡市下大塚	1279 1280	円墳
27	北原	集落址	奈良平安	藤岡市下大塚		
28		墳墓	古墳	本勸堂	1266～1271	
29	平地神社 古墳	墳墓	古墳	中大塚字宮前	1281	市指定史跡

番号	遺跡名	種類	時代	所在地	県遺跡台帳 ナンバー	備考
30	中大塚城	城館址	戦国	中大塚字下郷	1662	複郭城跡。本丸の北・西・南の三方を囲む堀と土居。「駒形の砦」内部は一辺70m不四角。付近に縄文・須恵器散布
31	山伏塚	墳墓	古墳	中大塚字滝前	1282	円墳 11.5×11×0.5m
32	中大塚敷石 住居址	集落	縄文	中大塚字鎌倉		県指定史跡
33	天神塚	墳墓	古墳	中大塚字天神	1284	円墳 昭和43年人骨出土
34	稲荷山	墳墓	古墳	上落合町長津	1294	円墳 9m×12m、高さ2.5m
35	岡の砦	城館址	砦	上落合町岡	1667	堀を東・北・西にめぐらす70m×100mの不規則な四辺形。南虎口か北面の崖下には濠があったらしい。
36	伊勢塚	墳墓	古墳	上落合町岡	1293	円墳27×26×5m、横穴式石室胴張プラン模様積。県指定史跡
37	落合の砦	城館址	戦国	上落合町城山	1666	土囲と濠をめぐらした単郭保(80m×80m)東北は河崖(水堀)、南西は空堀である。
38	七輿山古墳	墳墓	古墳	上落合七輿甲	1292	前方後円墳140、前方部幅100、高18、後円部径80、高さ17、二重周濠。国指定史跡
39	皇子塚	墳墓	古墳	三ッ木町東原	1624	円墳32.2×27.6×6m。横穴式複室、奥壁幅2.3m、長5m、前室幅2m、長2.5m、羨道5m、奥室切石積、前室自然積。
40		集落址	縄文 古墳	三ッ木町東原		
41	鮎川団地	集落址	縄文 古墳	大字白石 字猿田		古墳群あり
42	白石猿田古 墳群	墳墓	古墳	大字白石 字猿田		
43	十二天塚	墳墓	古墳	白石町荷原	1626	前方後円墳。稲荷山古墳のすぐ北側
44	白石稲荷山 古墳	墳墓	古墳	白石町稲荷原	1625	前方後円墳92.5、前方部幅41、後円部52.5、高さ12、葺石円筒埴輪列。多野郡平井村白石稲荷山古墳、後藤守一・相川 龍雄

番号	遺跡名	種類	時代	所在地	県遺跡台帳 ナンバ	備考
45		集落址	縄文・古墳	白石、滝		
	堀越塚	墳墓	古墳	白石、滝	1582	
	江原塚	墳墓	古墳	白石、滝甲	1585	円墳 26×23×3、玄室長4幅2
	オソナエ塚	墳墓	古墳	白石、滝	1601	円墳 20.6×18.2×4、葺石あり
46	白石古墳群	墳墓	古墳	白石、洞		土師器散布地あり
47	天王塚	墳墓	古墳	白石、洞	1572	円墳 28.5×23.9、高さ4
48	喜蔵塚	墳墓	古墳	白石、字中郷	1627	円墳 20×20.7×6、玄室幅2、長2.5。羨道部幅1長4、截石切組両袖型横穴式石室
49	境塚	墳墓	古墳	白石、字根岸	1628	円墳 23×22.8×4、玄室幅1.5、長2、天井石2枚、奥壁切石3段、東壁5段、西壁6段、截石切組積
50	三ッ木城址	城館址	室町 安土桃山	藤岡市字三ッ木	1709	本丸は東西80m、南北50m、東北角に台がある。西南は低土居、東・西・南面に深堀、南面の土居は高4、南中央に虎口址、二の丸は東西130×60。西南が深く角欠きになる。大手は東寄り
51		包蔵地	奈良平安	多野郡吉井町 黒熊	2882	
52		集落址	縄文 古墳	白石、字根岸		
53		集落址	縄文 古墳	大字緑埜		1556、1557の古墳あり。 1556 円墳12.6×12.3×1.5 1557円墳
54	北久尼屋敷	包蔵地 寺院址	縄文 古墳 鎌倉	緑埜、不動前、 北郷	1671	正慶2年の梵鐘あり、付近に縄文・土師器の散布地
55	緑埜古墳群	墳墓	古墳	緑埜	1552～1555	1553は前方後円墳 南北全長31.4後円部東西15.4高2 他は円墳
56	薬師塚	墳墓	古墳	緑埜、久保	1549	円墳 12.2×16×5
57	竹沼	集落址	先土器～ 平安	西平井、的場		竹沼遺跡 藤岡市教育委員会、1978

番号	遺跡名	種類	時代	所在地	県遺跡台帳 ナンバー	備考
58		墳墓	古墳	西平井、上之場、南坂、的場、駒形	1393～1399	小円墳
59	聖武院跡	寺院址	室町	金井、笹曲輪	1689	
60	金井瓦窯跡	生産址	奈良	金井、金山	1688	上野国分寺瓦を生産
61		包蔵地	縄文 古墳	西平井 上之場		
62		墳墓	古墳	金井、岡ノ原	1630、1631	1630 円墳 13.5×9.5×0.5 1631 円墳 8×12×0.5
63	東平井古墳群	墳墓	古墳	東平井 川破・川端・清水・塚間・原前・飛石	1400～1533	1471 長塚あり
64	コウモリ穴	墳墓	古墳	鮎川下の段甲	1547	円墳 12.6×16.6×2.5。玄室幅2長6高2、天井石3枚側壁自然石乱石積
65	金掘り塚	墳墓	古墳	鮎川大歩	1540	円墳 径東西8.2、南北9高2
66	上大塚城跡	城館址	室町 安土桃山	上大塚城	1707	本郭は方70m、北と東に高さ2mの土居と堀が残る
67	常岡城跡	城館址	戦国	藤岡市 字外の平	1650	菱形の丘城。西北から東南に高さ3m土居。南西には4m程の位置に腰曲輪と思われるものあり
68	森城跡	城館址	安土桃山	森町内手	1717	鍋川南側の平坦地。西南部に濠がわずかに残る
69		墳墓	古墳	藤岡市外平	1240	
70		墳墓	古墳	藤岡市南山	1241	円墳 16×15×1.5
71	堂山古墳 かね塚	墳墓	古墳	本郷 別所	1321 1322	円墳 29.4×18×3 円墳
72	土師神社内	包蔵地	古墳	本郷 宮下	1679	
73	本郷埴輪窯跡	生産址		藤岡市本郷	1678	

番号	遺跡名	種類	時代	所在地	県遺跡台帳 ナンバー	備考
74	小林古墳群	墳墓	古墳	小林	1176～1234 1297～1320	1199 田中古墳。1316 ひょうたん塚(円墳28.7×20.5×3)。1233 天満宮円墳(東西23.6×南北19.8×1.5)。1297～1320 古墳群
75	地藏堂	墳墓	古墳	根岸 高江原	1297	円墳 8.3×12×2
76	ヘソノヤマ	墳墓	古墳	小林 中里	1230	円墳 東西10.4×南北6 高1.4
77	諏訪神社 古墳	墳墓	古墳	藤岡町 東裏	1237	前方後円墳
78	森東館跡	城館址	室町～ 江戸	森町 北口	1716	鏡川旧河道南側崖上の平坦地、西半部に土居と濠がわずかに残る
79	一本松	集落址	縄文 古墳	藤岡市外之平	1648 1649	南に突出する舌状台地上。土師器・須恵器
80		墳墓	古墳	藤岡市山崎	1235	
81	藤岡城	城館址	江戸	城屋敷	1704	芦田城 方170m。北の搦手の虎口があり、追手には外柵形が構えられていたと推定される。土居の高さ4m、北西南部に堀を残していた東北角に槽台を残す。
82	奥浅間	墳墓	古墳	藤岡市 高崎道西	1238	円墳 東西29×南北23 高4.6
83	浅間神社	墳墓	古墳	藤岡市 高崎道西	1239	円墳 東西43×南北38 高4.5
84	お熊さま	墳墓	古墳	上戸塚 熊野	1242	前方後円墳。横穴式石室。全長東西39.3。南北径39.2m。後円部径26.2m、高4(戸塚神社古墳)
85	観音堂	墳墓	古墳	下栗須観音堂	1245	円墳 東西22×12×1.5
86	天手長神社	墳墓	古墳	下栗須大道南	1253	円墳 東西23×24×2
87	小林	城館址	鎌倉 室町	小林町 中里	1705	一重の堀と土居をめぐらし、東西100m南北70m 東南部を欠く。東北面一帯に高さ2mの土居が残る。

III 森 遺 跡

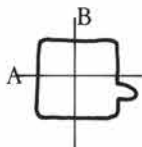
凡 例

1 遺 構 (1) 住居址

①方位：



②規模：



③深さ：住居外地面より床レベル平均値

④柱穴間距離：芯心間 (1-2)・(2-3)・
(3-4)・(4-1)

⑤周溝 (上幅・深さ)

⑥貯蔵穴

⑦カマド測点：

カマド形状：

⑧煙道



(2) 掘立柱家屋

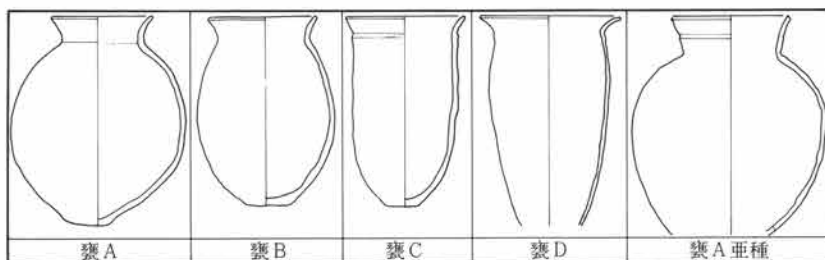
柱穴間測点：芯心間

棟方向：柱穴間距離により求められる完尺値による平面形による。

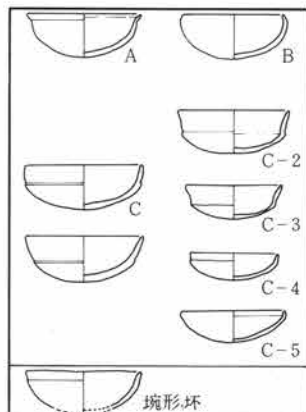
2 遺 物

出土遺物の内、類型化作業の可能な坏形土器及び甕形土器において、類型名称を使用している。

(1) 甕形土器類型分類



(2) 坏形土器類型分類



(3) コシキ分類

①長胴形大型コシキ

②深鉢形小型コシキ

※取り扱った遺物は、鬼高 I 型式後半より奈良時代を代表する土器以前の範囲である。

※須恵器の伴出がなく対比が充分でない。

指導者・協力者

つぎの方に調査中および整理中に御指導、御協力を賜わった。記して謝意を表します。

石川正之助 (県史編纂室)

八賀 晋 (京都国立博物館考古室長)

飯塚 寿男 (藤岡市立平井小学校教頭)

Ⅲ 森 遺 跡

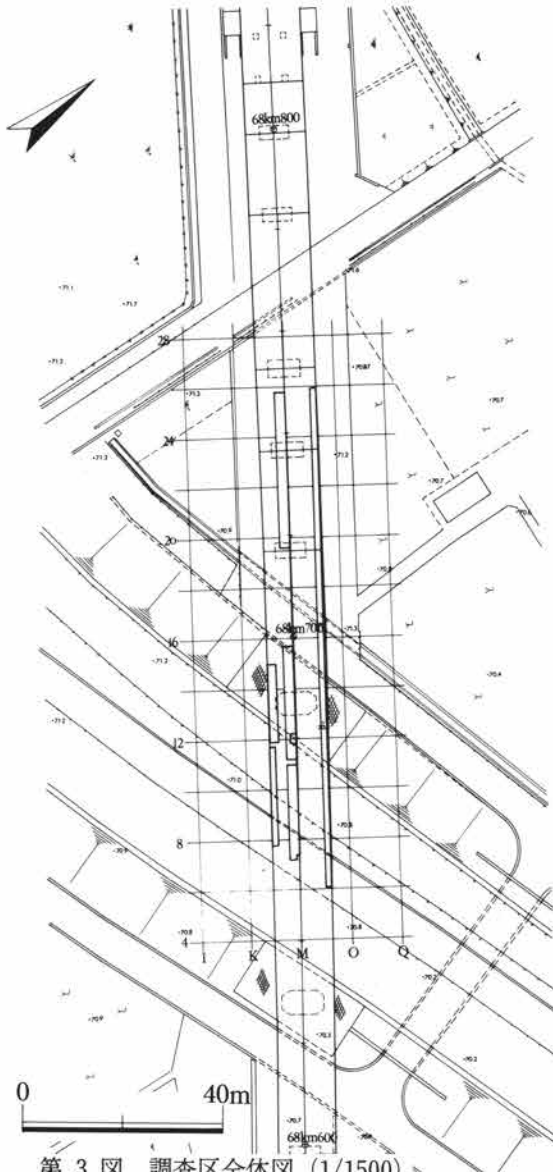
A 調査の方法と経過

1 調査経過

本遺跡は、上越新幹線用地内における遺物散布状況調査時において、平安時代から中世頃に属する遺物の散布が認められていた。しかし、明瞭な遺跡地として認められていた場所ではなかった。関越自動車道用地内温井遺跡の発掘が契機となり、当地においても古墳時代からの遺跡の存在の可能性が増してきて、遺構確認を実施することとなった。昭和51年10月21日（木）に現地において調査区域を設定し予備調査を実施した。予備調査は11月6日まで、実質11日間にわたり実施した。予備調査は、起点68km660mより東へ50m、西へ80mの範囲を設定した。設定した主な理由は次の如しである。

①予備調査区域が以前に実施した分布調査時における、遺物散見区域であることと、この付近が微高地上に位置していること。②東50m付近より東側は、北東に向いて地形が下降しており、旧河道域と推定され、調査区域外とした。調査方法は、25m幅用地に3本の試掘坑を平行して入れて遺構の検出をはかるとともに、平行して3m×3mグリッドを設定し試掘した。遺構面の検出は困難であり、3本の試掘坑は、縄文時代の遺物包含層に達して、部分的に遺構を破損してしまった。

予備調査の結果は住居址または土坑と思われる掘り込みが4カ所、真間期の遺物包含層2カ所、弥生時代及び縄文時代遺物包含地2カ所、B軽石堆積



第3図 調査区全体図 (1/1500)

層及溝状遺構 1カ所であった。この結果により、本調査を開始することとなった。

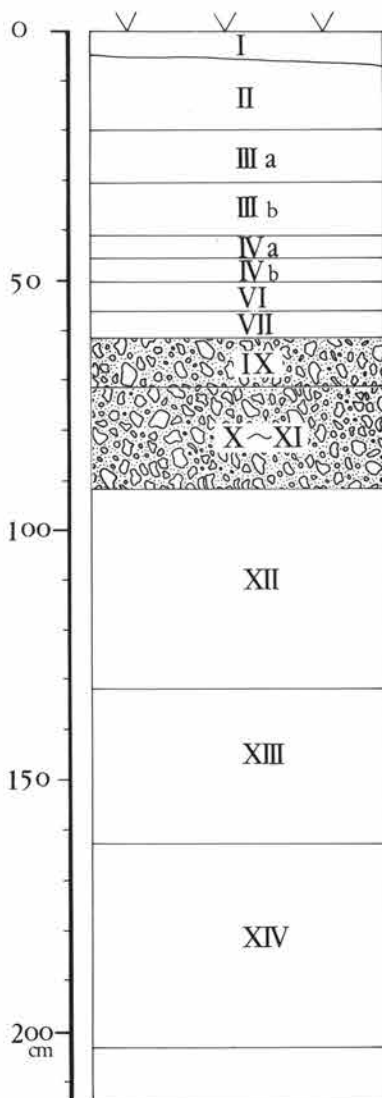
本調査は準備を含めて昭和51年11月15日より開始し、昭和52年3月26日で一応終了した。以下調査経過の概略を示す。

11月15日	掘削を前橋長瀬線県道沿い第5区より開始する。	2月1日	6号・9号住居址検出、精査。 11号土壇内須恵器大甕処理続行。
11月25日	掘削と平行して遺構検出作業を実施する。B列トレンチ内土層の点検を開始し基本土層のチェック及び遺構検出作業を開始す。	2月10日	3号・8号住居址掘開開始。須恵器大甕処理続行。1号・2号・5号住居精査続く。
12月4日	5区において住居址を検出す。A列トレンチ内土層チェックと遺構検出作業を開始。古墳時代中期住居址を検出、トレンチで破壊した部分大きいことが判明。	2月21日	8号・9号住居掘開す。3号・5号住居址精査続行。
12月8日	1区の遺構確認を開始する。やや大型溝、畝間の溝状遺構等がB軽石混合黒色土（V層-a）下位のVIII層上面で検出できた。住居址、土壇に番号をつける。	2月28日	7号住居址、2号掘立柱家屋掘開する。5号・8号・9号住居址精査続行される。
12月20日	2～3区、5区の畝間状小溝群検出実測。住居番号は5号住居址までつく。4号住居址掘り進む。	3月7日	6号・10号住居址、1号掘立柱家屋掘開する。7号住居址精査。
1月5日	作業開始、7号住居址まで検出進む。1号掘立柱家屋検出。	3月15日	10号・11号住居及び13号・14号住居址掘開続く、遺物多く処理に手間どる。
1月13日	4号・1号・2号・3号・5号住居址精査。8号住居址検出す。	3月19日	16号住居址掘開す。10号・11号・12号・13号精査続く。ピット群及び土壇の処理続行する。
		3月24日	12号・13号住居址の処理が終わりとなる。
		3月26日～3月30日	埋めもどし作業を実施、最終となる。

2 調査方法及び基本土層

調査の基本座標は、この付近のセンター杭が直線であることを利用し、大宮起点68km654m45cm 1mmの杭及び68km660mの杭を通す線を東西軸にとり、68km660m地点において直交する線を南北軸として設定した。68km660m杭は座標位置(8-M)である。座標方眼は5mメッシュであり、調査区を呼称するために20mを一区切りとして、東端より1区・2区・3区・4区・5区・6区と大別した。この内、3区西隅及び4区全体、5区南東部分は、瓦用粘土採取のために近年掘り下げられており調査区域外とした。標高原点は、前橋長湊線道路脇に公団の設置した「東幹 BM No5」の標高71.554mを利用している。なお、東西軸と磁北のずれは約N-40°-Wとなっている。

土層の状況は、第4図に示すとおりであるが、瓦焼き粘土の素材になる茶褐色粘質土が基盤にな



第4図 基本土層模式図

っており、1m20cm~1m30cmの厚さに堆積するこの細砂土は、縄文時代から弥生時代にかけて堆積していることが判明している。一方、V層からIX層が堆積する時期は5世紀頃から9世紀頃であり、層数が多いに拘わらず層の厚みが少ないこと、遺構確認面に当たることから考えると、この時期は、この沖積地帯自然状況が比較的良好であったことを示している。また、砂・礫層が1区・2区において浅い深さで認められることは、本遺跡付近より北側が烏川氾濫によって礫が押し流され、水成土の厚く堆積する地帯になることを示しているのであろう。烏川及び温井川の流れによって造られた低地と自然堤防が入り組んだ地帯であることがわかる。

〔基本土層〕

- I層—現耕土。
- II層—茶褐色土(天明3年輕石を含む)。
- III層—褐色土と灰色土(粘質)細砂土。
 - a 褐色土の混合が多い。
 - b 青味を帯びた灰色土が多い。
- IV層—褐色土で鉄分を多量に含む。B輕石をやや含む。
 - a B輕石を混合するが灰色が強い。
 - b B輕石混合黒色土を混入する。
- V層—B輕石堆積層。調査区域北東方向に部分的に認められる。
- VI層—粘質青灰色土。酸化が認められる。
- VII層—粘質青灰色土。
- VIII層—黄色粘質土。
- IX層—青灰色粘質土。鉄分凝集粒を含み、腐植土を含み汚れている。遺物包含層、遺構面。
- X層—褐色をおびた青灰色粘質土。鉄分凝集粒を多量に含む細砂土。遺物包含層、遺構面。
- XI層—茶褐色をおびた青灰色粘質土、細砂土。弥生中期土器を混入する。
- XII層—茶褐色土。青灰色土のブロックが混在。中期縄文土器を混入する。1~2区では砂礫を混じえる。
- XIII層—茶褐色粘質土。固くしまっている。1~2区は砂・礫層となる。
- XIV層—茶褐色粘質土。極めて固くしまる。1~2区は砂・礫層となる。

B 遺跡の概要

縄文時代に属する遺構、遺物

縄文式土器の検出は、A・B・Cトレンチセクション断面において3カ所検出でき採取した。いずれもXII層またはXIII層中で、各々の土砂が堆積する段階で混入したと思われる。本遺跡よりも南の段丘崖下付近においては多量の遺物の堆積する地域が存在している。時期は中期及び後期に属する遺物である。

弥生時代に属する遺構、遺物

これも、5区Bトレンチセクション断面において検出された。層序はXI層中であり、周辺地域を層序各に掘り下げ遺構の検出を試みたがつかめなかった。大型の壺形土器の胴上部と推定され、条痕文を施文する。

古墳時代～平安時代に属する遺構、遺物

① 竪穴式住居址

検出された竪穴式住居址は16軒。この内完掘をおこなったもの14軒、未完掘2軒である。遺物はセットが推定可能な組合せの出土例もあり注意されよう。

第2表 森遺跡遺構編年表

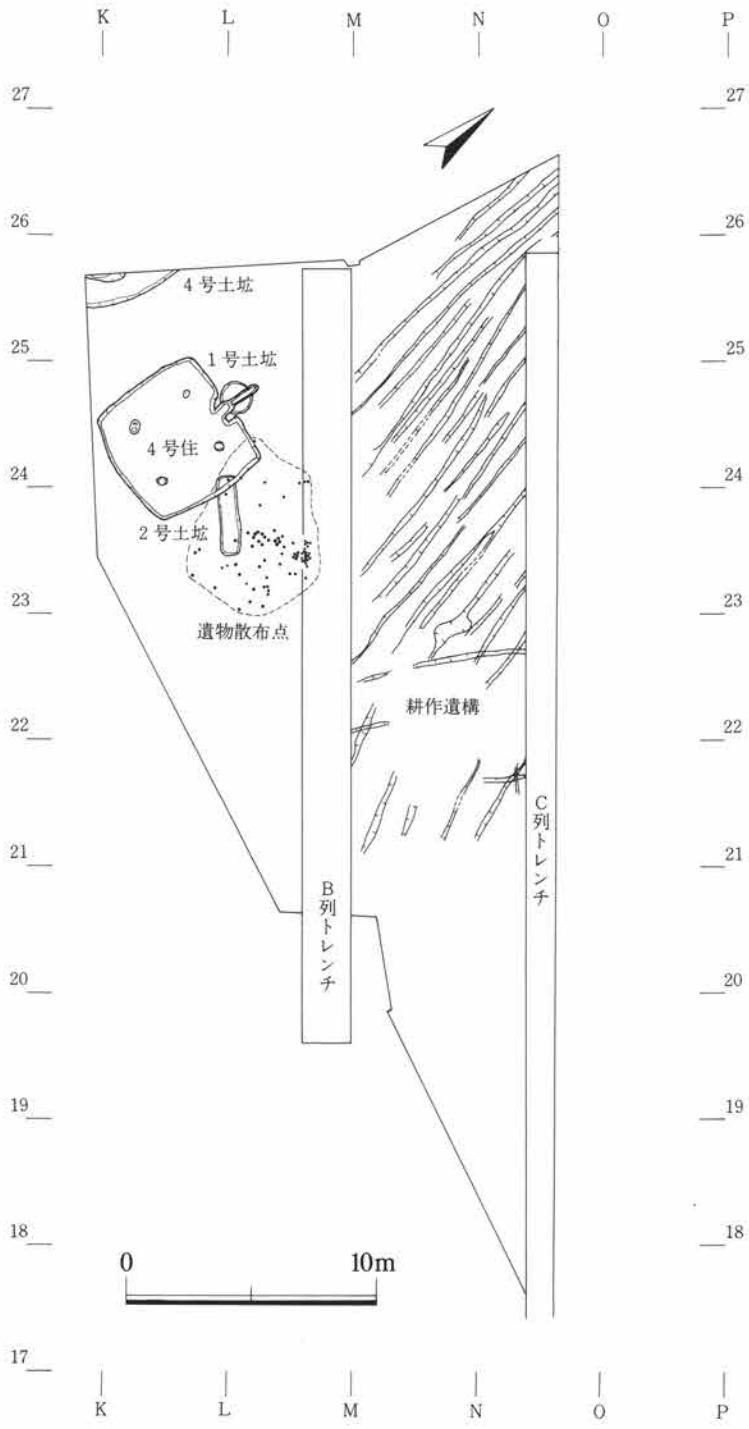
	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀
遺 構	SA 2	SA 4	SA 11	SA 10			
	SA 14	SA 13	SA 8	SA 6			SA 7
			SA 5			SA 15	
			SA 1	SA 9			
	11号土坑		SA 3				

② 掘立柱遺構

明確に家屋であると認定できるものは、南北に棟を有する1号掘立柱家屋である。2号掘立柱遺構は、各々の柱穴掘り方の残存状況は良好であるが、柱穴数が不足するきらいがある。

③ 土壇及びその他の遺構、遺物

11号土壇は、須恵大甕を出土し、土壇墓であろうと推定でき、興味のもてる遺物である。また、ほぼ直交する大型の水路と小溝群は、農耕遺構と考えられ沖積地の条里制地割の問題を提示する。表採ではあるが軒平瓦破片が出土し、瓦当紋様が本県での新種とみられ、武蔵国の瓦窯との関係も検討せねばならないもので興味のもてるものである。



第 5 図 5・6区遺構配置図 (1/300)

C 遺構と遺物

1 住居址

(1) 第1号住居址(第6～9図、図版6、21)

単独住居址である。南西隅が攪乱と試掘トレンチで一部が破壊されている以外に後世の破壊はなかった。ほぼ正方形のこの住居址は、非常に深い掘り込みで当初の姿を留めている。本住居が埋没した状況は図で示すとおりであるが、その所見は次のようである。

埋没状況は比較的細かい土砂の堆積が認められ、住居址が放棄された後に漸次土砂流入によって埋没したことを示そう。この内埋土中間の上位に灰色土が堆積しており、洪水による冠水のあったことが知れ、時期比較の基準土層となろう。東壁寄りに土壇が認められた。

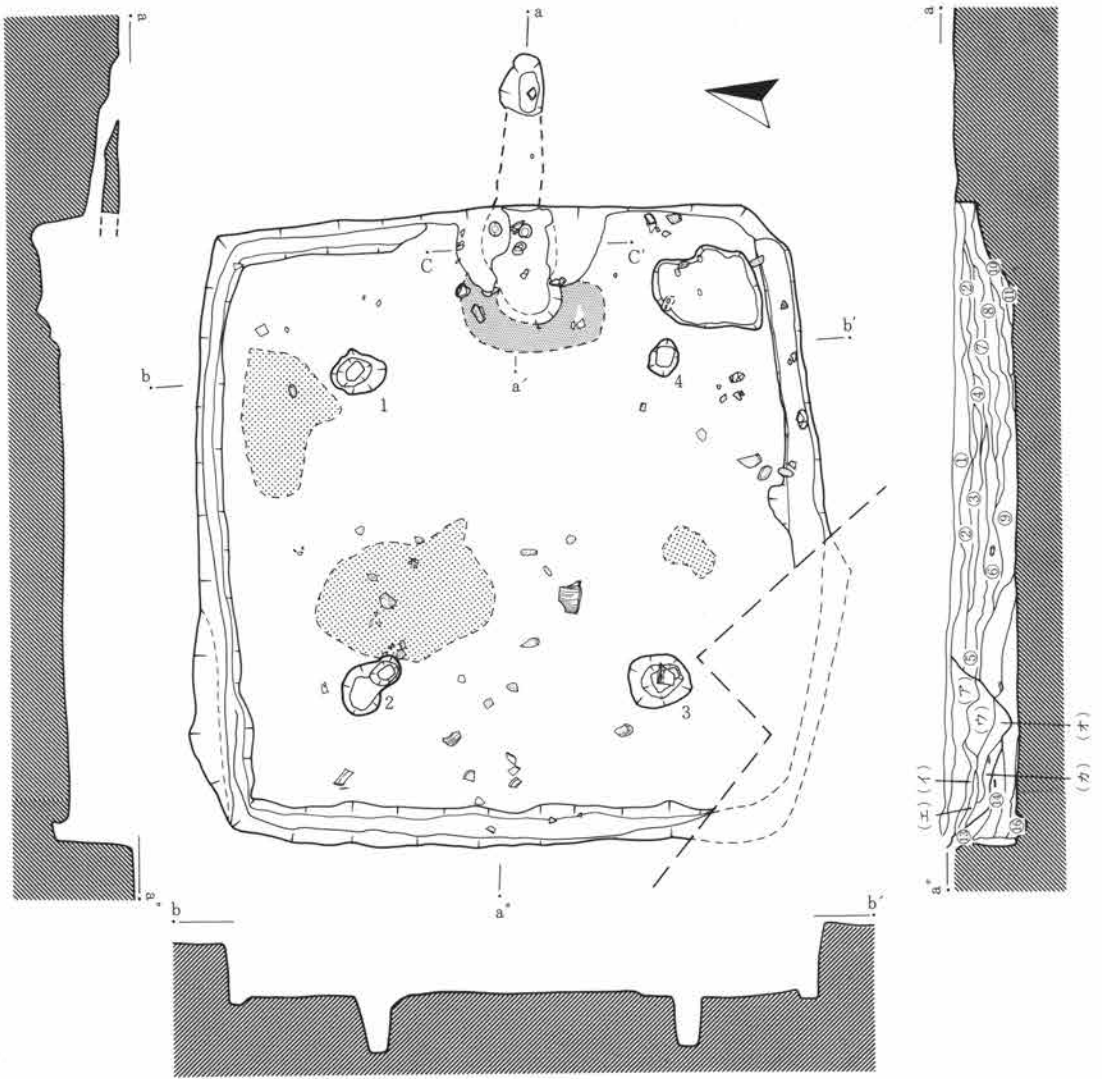
本住居址は、磁北に一致する平面形を示し、カマドを東壁ほぼ中央に造る。住居址床面には、カマド本体、貯蔵穴、柱穴、壁下周溝が認められる。カマド本体は粘土で造るが天井部は破損していた。カマド床は、住居床レベルより下げて設置し奥壁は住居東壁を用い、東壁中頃より住居外へ煙道を掘り抜いている。貯蔵穴は浅く不整の長方形をしており、遺物は出土しなかった。本住居小屋組の4本の支柱穴は、比較的深く掘られ、No.2は添柱があったかと推定できるやや浅い副柱穴を持つ。なお支柱穴は、対角線上に位置し、隅より130cm～150cm入れている。柱穴間の長さは240cm程、柱間対角線は340cm程と測定でき、30cm近値を単位とする尺度に従って設計されていることが推定できる。住居南北軸は磁北方向より10度程西へ傾く。

構造規模

①N-10°-W ②5.1m×5.0m ③50cm ④2.4m、2.3m、2.5m、2.5m ⑤上幅10cm、深さ10cm ⑥60cm×90cm、深さ15cm ⑦カマド 60cm×60cm、高さ60cm、焚口前の窪み 30cm×50cm、深さ12cmの半月形 ⑧煙道長120cm

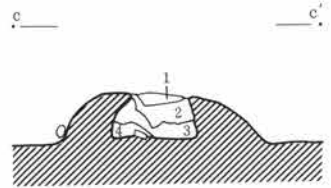
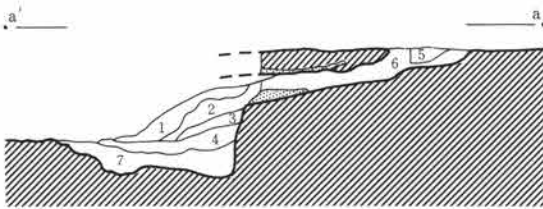
遺物

遺物出土状況は大別して3カ所。第1は、カマド内、焚口部で、高坏形土器と坏形土器。第2は貯蔵穴周辺の坏、カメ破片類である。高坏形土器は完形品3、坏部1である。脚部に特色を持ち、陶邑II型式6段階からIII型式1段階小型高坏脚に類似している。坏はA(平底風で、受け部が凸出する旧来の型)、B(受け部が凸出せず、底部の削り込みによって受け部稜を示す。やや丸底風)の2種類。甕はA(球形胴)、B(垂直な胴)の2種、いずれも口縁部の破片である。甕は底部以外はほぼ残っている。第3は、西壁寄りで、床より20cm程高いレベルで出土した坏とカメの破片で、土壇の範囲内である。口縁の内傾化する丸底の坏類である。以上の遺物の状況は7世紀前半～中葉にかけて使用された須恵器に共通する点も多く、本住居址の下限は7世紀中葉頃から後半にかかる時期に比定できよう。カメ、須恵器の出土が少なく時期に多少のズレはあるであろう。



第 6 図 第 1 号住居址 (1/60)

0 2m



第 7 図 第 1 号住居址カマド (1/40)

0 1m

第1号住居址土層

- ① 鉄分粒を含有する灰色土
- ② ①層より鉄分が少なく黄味を帯びた灰色土
- ③ 灰色土層に鉄分小粒を多量に含む
- ④ 褐色の強い③層
- ⑤ 炭を含む灰褐色粘質土
- ⑥ 炭化物を多量に含む黒色粘質土
- ⑦ 褐色土（地山のIX層）
- ⑧ 褐色土（小石、1～2mmを多量に含む）

- ⑨ 褐色土（焼土、灰をやや含み、小石を多量に含む）
- ⑩ 褐色土（焼土をやや含み、小石を多量に含む）
- ⑪ 灰と小石の混ざらない褐色土との混合
- ⑫ 黒褐色土
- ⑬ 褐色土（小石、鉄分粒を多く含む）
- ⑭ 褐色土（灰色の粘土を含む）
- ⑮ 褐色土（地山のIX層の流入）
- ⑯ 黒味の強い褐色土

第1号住居址土壇土層

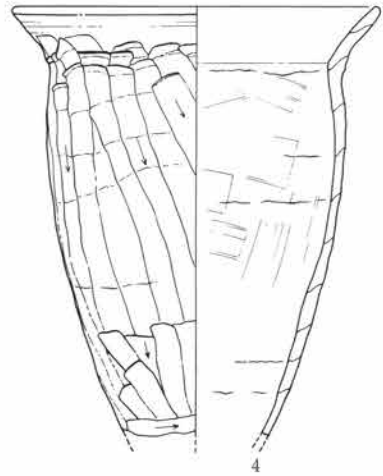
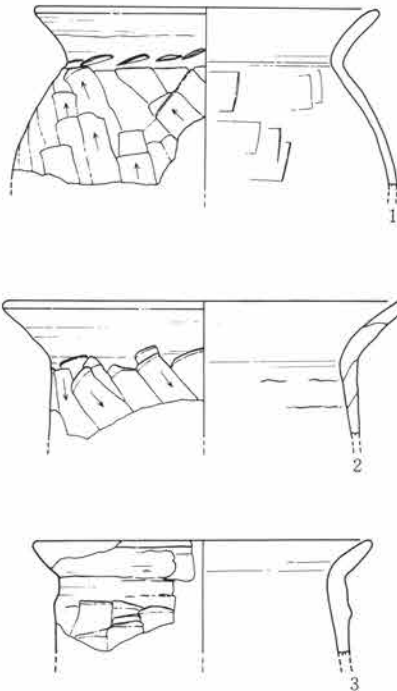
- (ア) 暗褐色土（炭化物、焼土を含む）
- (イ) 暗褐色土
- (ウ) 暗褐色土（灰を多量に含む）

- (ク) 暗褐色土（炭化物、焼土を少量に含む、遺物包含）
- (ケ) 暗褐色土（炭化物、焼土を多量に含む、遺物包含）
- (コ) 暗褐色土（焼土、炭化物、灰を少量含む）

第1号住居址カマド土層

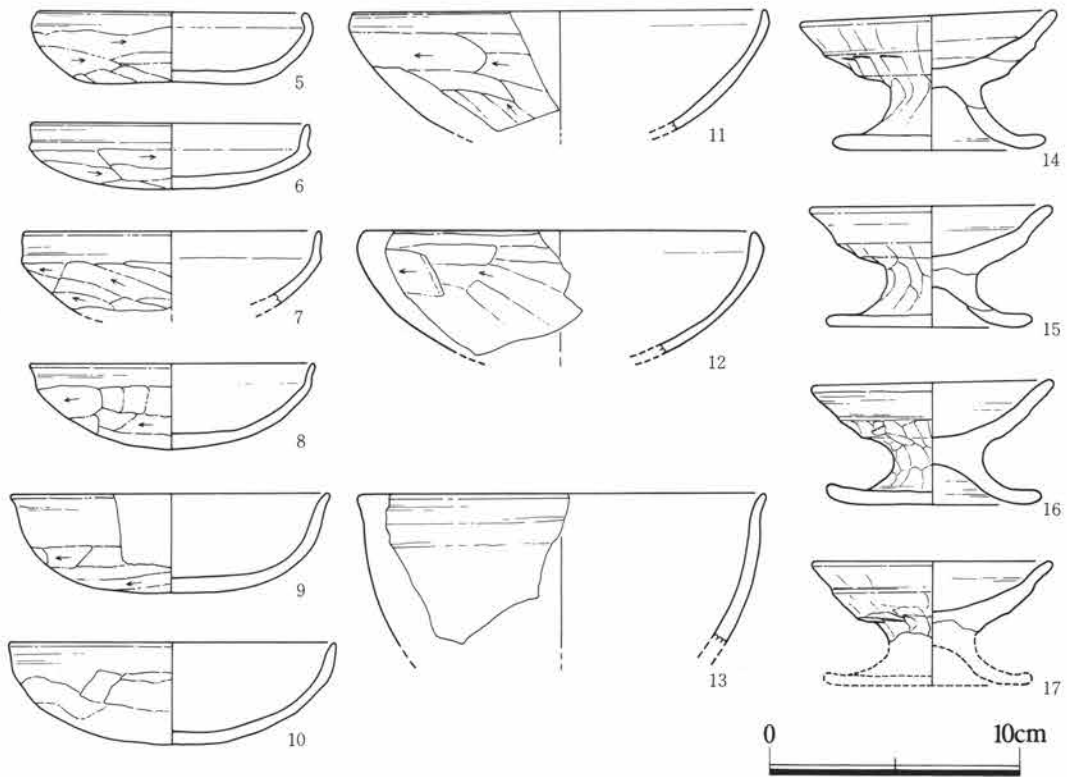
- ① 黒褐色、褐色土（灰の小ブロックをやや混入する）
- ② 黒褐色土と灰の混合土（焼土ブロック（壁のくずれ）が混入する）
- ③ 灰と黒褐色土が混合、灰が多い
- ④ 灰と炭化物との混合層（焼土も混入）

- ⑤ 灰色土と地山の混合
- ⑥ 煙による黒色のすす堆積
- ⑦ 褐色土（やや大きめの焼土粒を少量含む、灰、炭の混入はほとんど見られない、遺物包含も認められない）



0 10cm

第8図 第1号住居址出土遺物・その1 (1/4)



第 9 図 第 1 号住居址出土遺物・その 2 (1/3)

(2) 第 2 号住居址 (第 10～17 図、図版 6～7、21～22)

本住居址は、カマドを持たないために、遺構の輪郭をつかむのに苦労した。また覆土と壁の区別も明確ではなく部分的には不明瞭な部分があった。ほぼ正方形の平面形を示すこの住居は、固い床面の中央に掘り込み炉を造り、方形の貯蔵穴が南壁ほぼ中央に設置されている。東壁の中央には浅い掘り込みがあり、中に甕が出土。この周辺は、床、壁に焼け込みが認められ、カマドの如く使用されていた部分かと推定できる。小屋組の主柱穴は、8本が検出された。正方形に組む 1～4 番の柱穴と、4本の添柱と理解できる。特に 3 番柱穴の上には、遺物が散乱しており、朽ちはてていたことも推想される。また、柱間長、住居平面長等に 35cm 近値が認められるのに注意を要す。住居址の南北軸方向は、磁北より 15 度西へ傾いている。埋土の状況は、比較的薄い堆積の繰返して、大体が灰色土である。住居掘り込み面の土砂の流入であろう。

遺物の出土状況は、炉を中心に周辺に散乱する状況である。が、東南隅は密度が高く、壁寄りに工作台の如き偏平な石 (部分的に加工) が設置されており、東南隅が勝手仕事の如きものに使用された空間であったことを示すであろう。灰は広い範囲で床直上に堆積していた。

構造規模

- ①— ②5.6m×5.3m ③不明、現状30cm ④3.4m、3.5m、3.5m、3.5m ⑤ナシ ⑥40cm×

35cm、深さ35cm ⑦ナシ ⑧ナシ

遺物

遺物の多くは床面に接して出土し、埋土の状況からみて本住居址の遺物として判断できよう。遺物はカメ類、甑、鉢、坏であり、壺、小型壺、高坏を欠く。

甗—A類（口縁部がしまり気味で、胴中央に最大幅を持たせ、丸味がある。5個体。） B類（口縁部がやや開き気味で、胴が丸味を失い長胴形に変化。1個体。）

小型甗—A類（広口・丸底） B類（平底で丸味のない胴）。

小型鉢—一片口型土器に近い。

甑—甗A類の小型のもの底部を穿孔した状況。

坏—A類（小さく、外反する口縁部を有する、浅い坏。）

以上の遺物の状況をみると、坏にC類（須恵器坏身の模倣）が含まれないこと、カメの長胴化が進んでいないこと、一方、4世紀代のいわゆる石田川式土器の系譜と思われる遺物を含まない。従って、5世紀中葉から5世紀後半頃の遺物であり、住居址使用時期も鬼高I型式の時期より古い時期と断ぜられる。

なお床面より紡錘車が2個出土し、北東隅には、緑泥変岩の石棒状の石が4個出土している。

第2号住居址土層

- | | |
|------------------------|-----------------|
| ① 灰色粘質土（細かい砂を含む、地山IX層） | ④ 灰色土 |
| ② 灰色粘質細砂土 | ⑤ 地山のIX層～X層の流入層 |
| ③ 粘質灰色土（粘性強い） | ⑥ IX層の流入 |

第2号住居址貯蔵穴土層

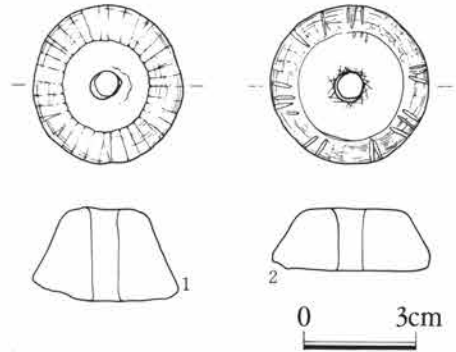
- | | |
|-------------------------------------|----------------|
| ① 灰褐色土、灰色土と褐色土（地山のX層～XI層と思われる）との混合土 | ③ 暗褐色土 |
| ② 褐色土（灰、炭化物、焼土粒を混入する） | ④ 暗褐色土（炭化物を含む） |

第2号住居址炉土層

- | | |
|----------------|----------------|
| ① 焼土層（炭化物を含む） | ⑤ 焼土と地山の混合土 |
| ② 焼土層（灰の焼けたもの） | ⑥ 灰層 |
| ③ 灰堆積層 | ⑦ 焼土 |
| ④ 灰と焼土混合堆積層 | ⑧ 焼土、炭化物、灰の混合土 |

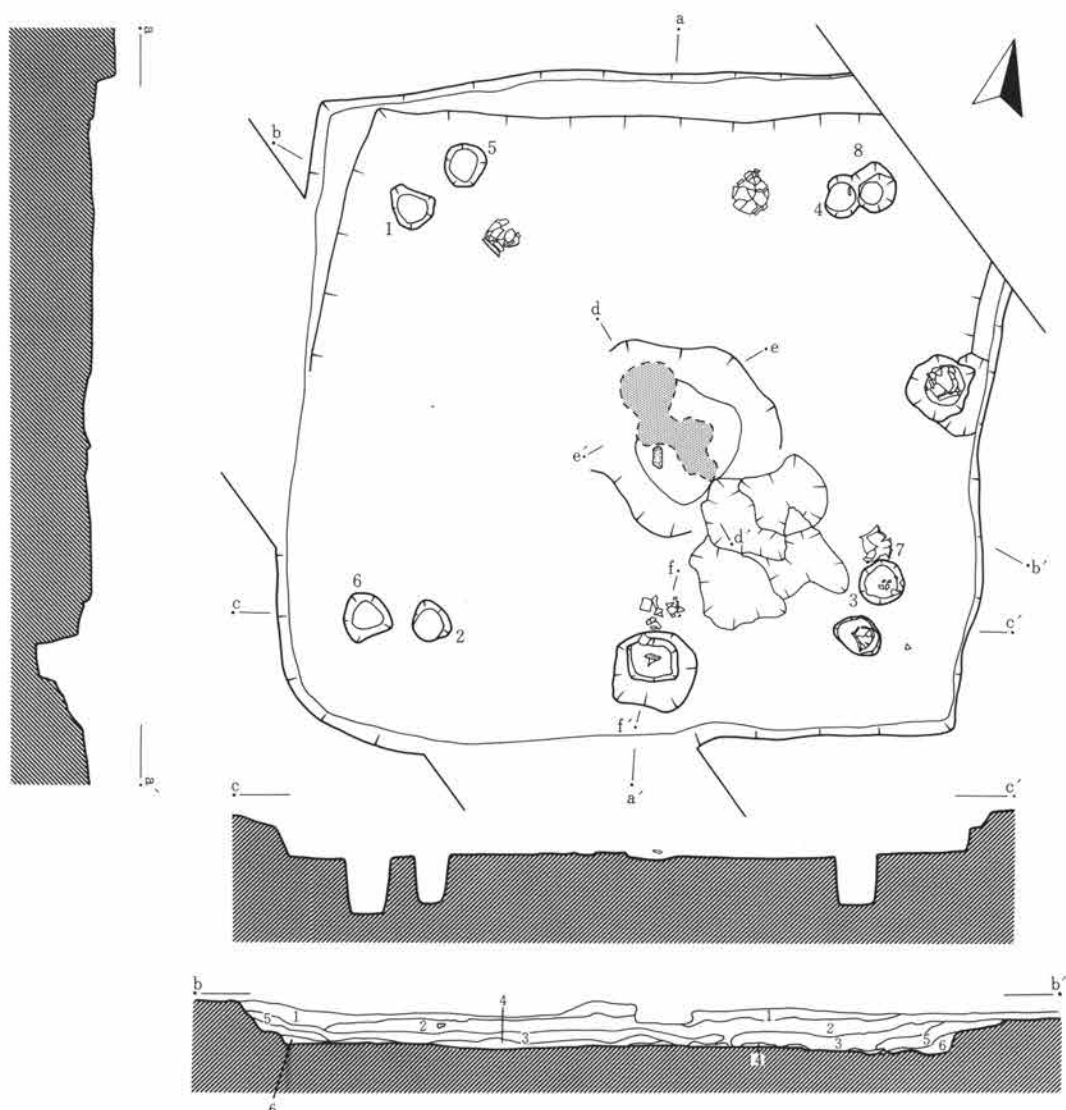
(3) 第3号住居址（第18～19図、図版7）

試掘調査Cトレンチにおいて中央部を破損してしまった。ほぼ正方形の平面形をし、深い掘り込みをする。カマドは北壁中央やや右に設置している。床面には、支柱穴、周溝、貯蔵穴状窪み

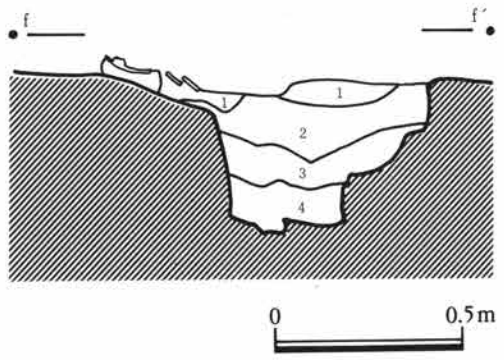


第10図

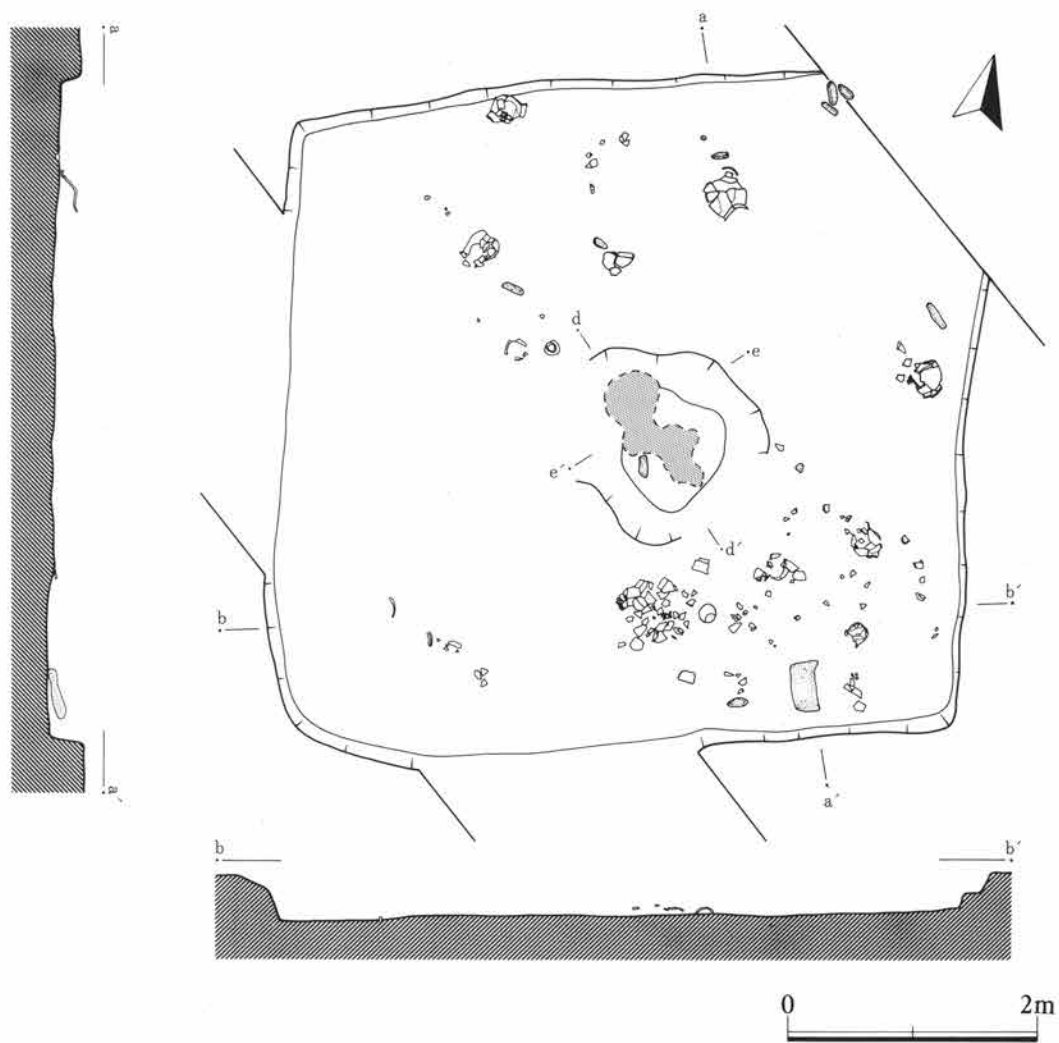
第2号住居址出土遺物・その1 (1/2)



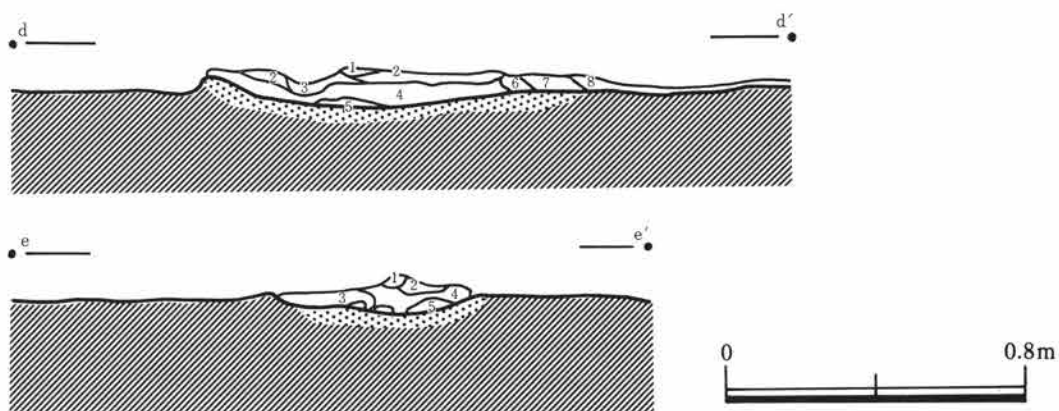
第 11 図 第 2 号住居址 (1/60)



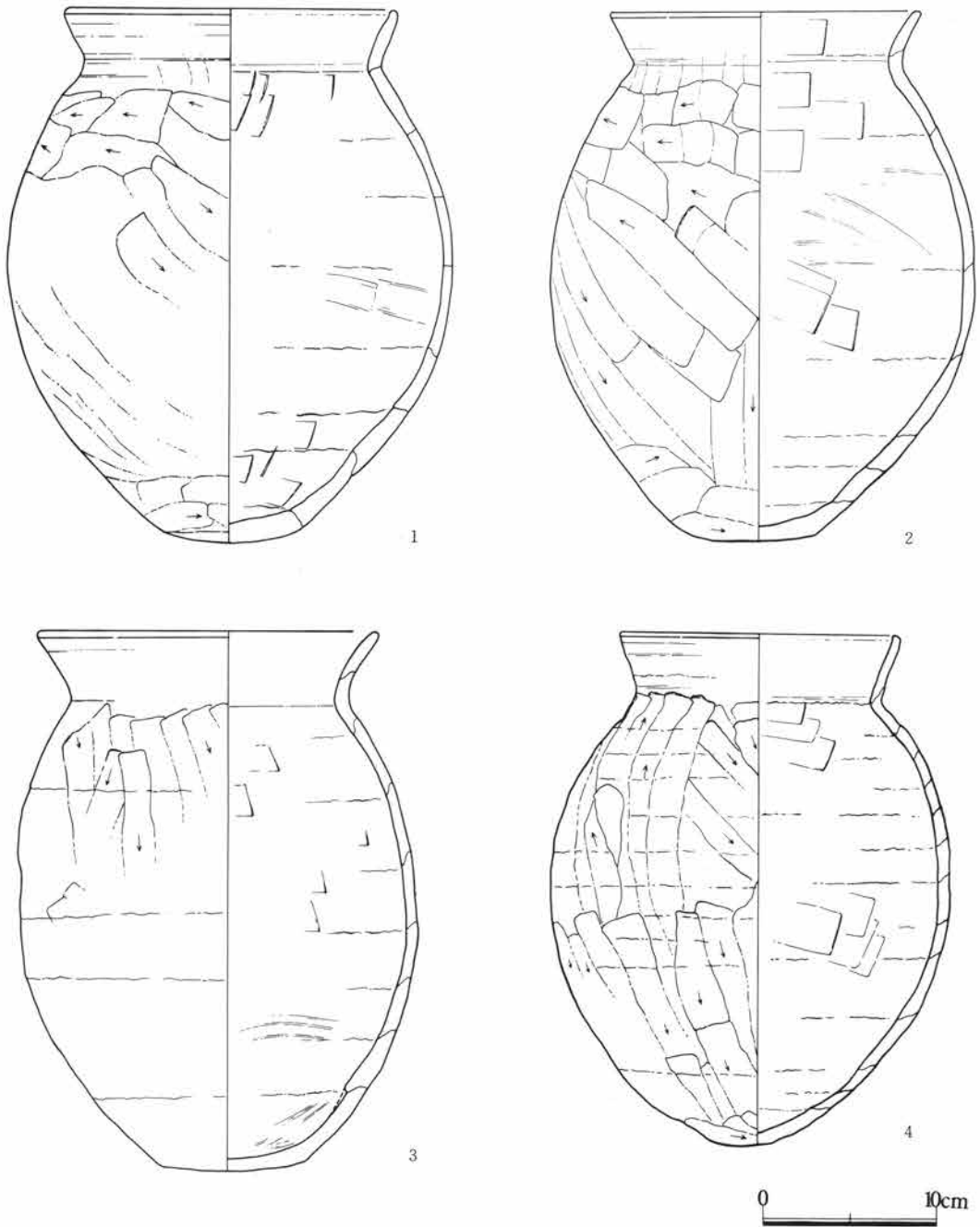
第 12 図 第 2 号住居址貯藏穴 (1/20)



第13图 第2号住居址遺物出土状態 (1/60)

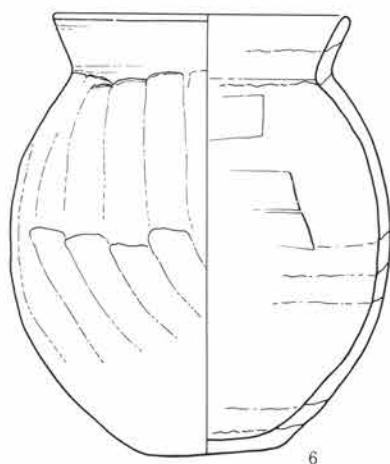
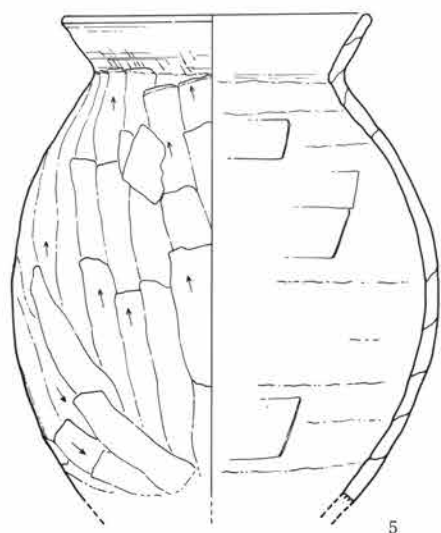


第14图 第2号住居址炉 (1/20)

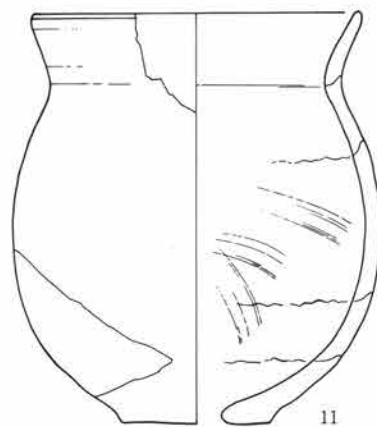
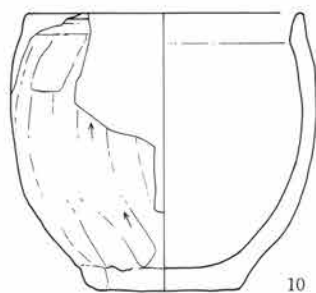
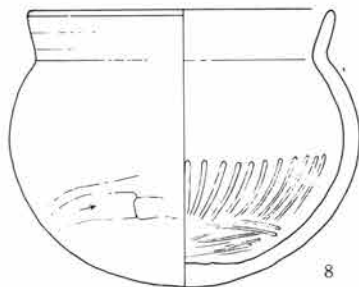
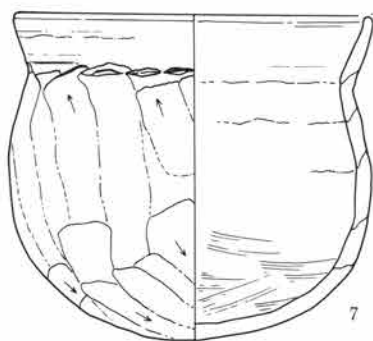


第15図 第2号住居址出土遺物・その2 (1/4)

が認められた。カマドは粘土で造り天井部は崩落していた。煙道は住居壁中位程から住居外へ掘り込め天井部を完全に残している。4本の支柱穴は東西に長辺を持つ長方形をなし、間もまちまちである。貯蔵穴は、極めて浅く、灰が堆積していたが確実性に欠ける。埋没状況は、3期に大別できる。中期は、灰色土が一層で、洪水による冠水の時期に当たる。上・下層は土砂流入層で



第16図 第2号住居址出土遺物・その3 (1/4)



第17図 第2号住居址出土遺物・その4 (1/3)

ある。住居南北軸は、磁北より約28度西へ傾いている。

構造規模

①N-28°-W ②3.0m×3.1m ③60cm程 ④1.25m、2.0m、1.4m、1.9m ⑤上幅10cm程、深さ4～5cm ⑥ナシ ⑦—cm×50cm、高さ60cm程 ⑧煙道長100cm

遺物

遺物出土は極めて少なく、床面に接して坏破片(P₁)1片が出土。他は、覆土の中～上位土層中で検出されたものである。特に最上層中には、高台付埴形土器が多く、灰釉陶器を含んでいる。

第3号住居址土層

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------|
| ① 灰褐色土（鉄分を多量に含む、粘性強く黄色である。Ⅷ層～①層の混入か） | ⑥ 褐色土（黒色土を混合、灰を多量に混合） |
| ② 灰褐色土（鉄分含有なし、粘性強く黄色をやや帯びる） | ⑦ 褐色土（黒色土、焼土、灰を混合） |
| ③ 褐色土（地山のⅨ層～Ⅹ層の流入） | ⑧ 灰の堆積層 |
| ④ 褐色土（灰色土をブロック状に混入） | ⑨ カマド底の堆積層 |
| ⑤ 灰色粘質土（Ⅸ層～Ⅹ層がブロック状になり斑状混入） | ⑩ カマド底の堆積層 |
- *床面直上部には灰が密着して層をなす

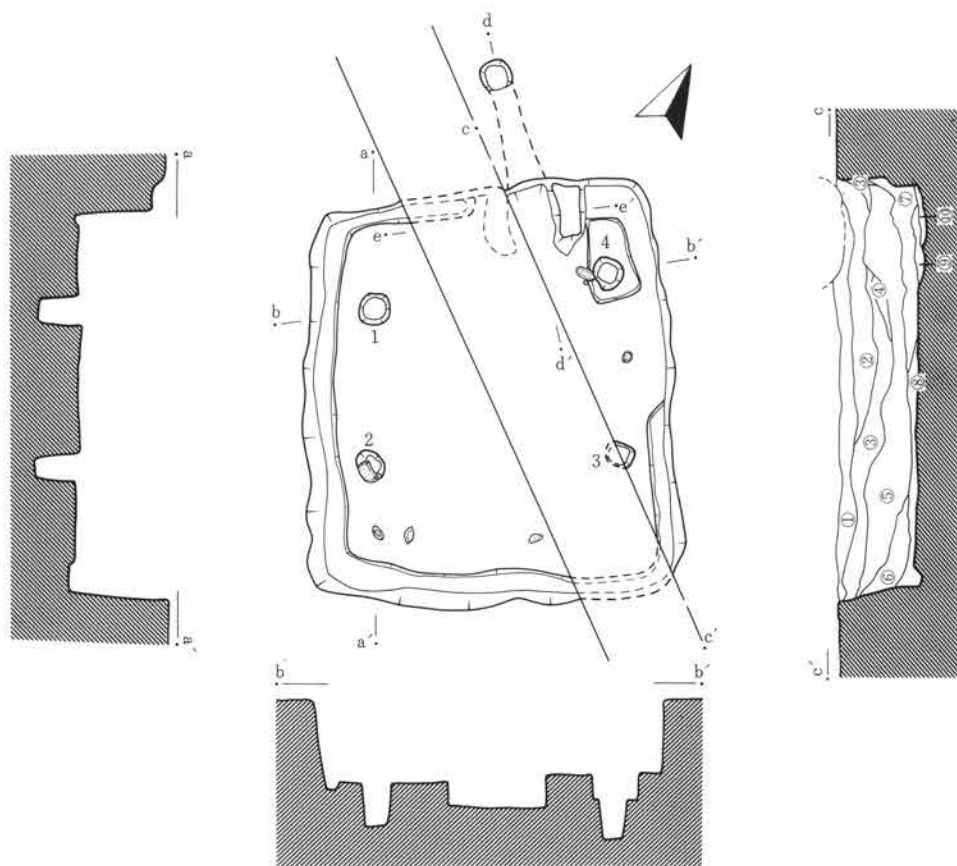
第3号住居址カマド土層

- | | |
|------------------------|-----------------|
| ① 灰色土（褐色土、焼土粒を混入） | ④ 焼土ブロック |
| ② 暗褐色土（壁の土の崩れか、炭化物を混入） | ⑤ 灰と焼土混合 |
| ③ 焼土と褐色土との混合 | ⑥ 焼土ブロック（焼壁の崩落） |

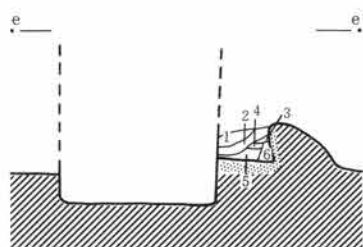
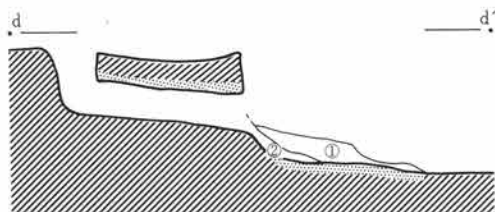
(4) 第4号住居址（第20～26図、図版7～8、22～24）

本住居址は、1号土壇の床面に焼土が認められ住居址の存在することが判明した。付近には住居址は存在せず基盤層は厚い茶褐色粘土質である。周囲は瓦用粘土として持ちさられており、遺構の広がり不明である。住居址平面は正方形で深く掘り下げて造っており、北壁中央にカマドを築く。カマドは、住居址床面に粘土で造られ、やや奥に深い細長い火床で、住居床と同じレベルにしている。火床から煙道へは、強い段差を造らず緩く傾斜し煙突部へ続く。カマド、煙道ともに大半を1号土壇で破損している。住居床面は比較的固くしまっており、住居対角線上に4本の小屋組主柱穴を設置しており、No.2柱穴は、添柱の存在が推定できる柱穴を持っている。貯蔵穴はカマド右脇に造っている。壁下には溝が一周している。なお、南壁下の表面の平らな石は、表面が磨滅しており、位置から推察して、出入口の踏み石の如く使用されたものではと思われる。住居南北軸は、磁北方向より8度30分ほど東傾している。遺物は、最下層中に混在しており、埋没状況からみて当住居址と結びつくものである。

住居の覆土は、全て茶褐色土で、極めて細かい土である。最下層以外は、礫、腐植物質、遺物を全然含んでいない。また、最上層中に灰色土のボールが混入しており滞水時期のあったことを示している。以上の状況から、本住居址は、放棄直後または、使用中に洪水による土砂冠水によって廃絶したと理解できる。



第 18 図 第 3 号住居址 (1/60)



第 19 図 第 3 号住居址カマド (1/40)



第 4 号住居址土層

V~XI 標準土層

IX' 標準土層IXより炭化物の混入が多い

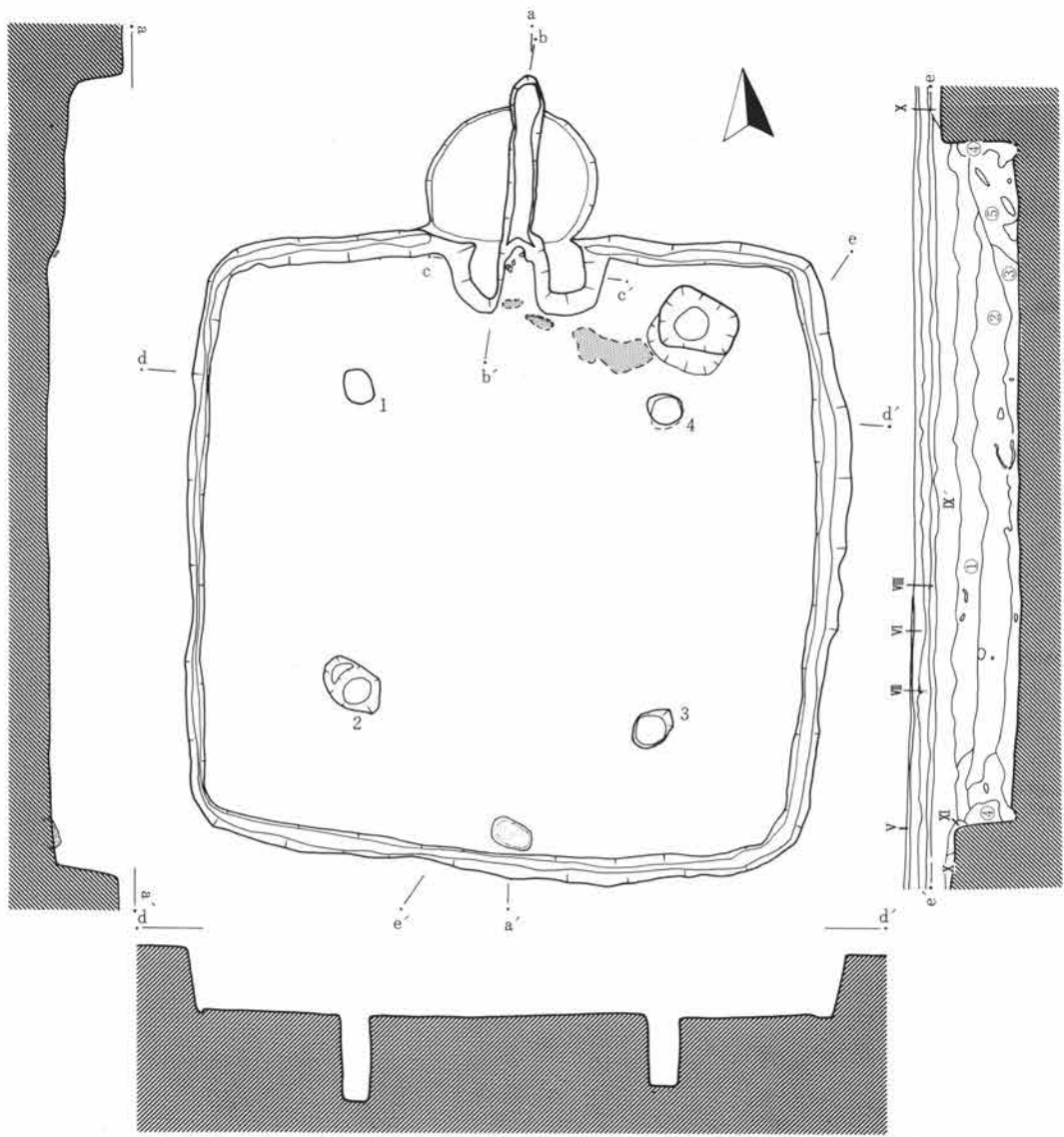
① 茶褐色土 (水成の非常に細かい土で、青灰色土をブロック状に混入する)

② 茶褐色土 (①層と同じであるが青灰色土が多い)

③ 黒色土 (非常に細かい土)

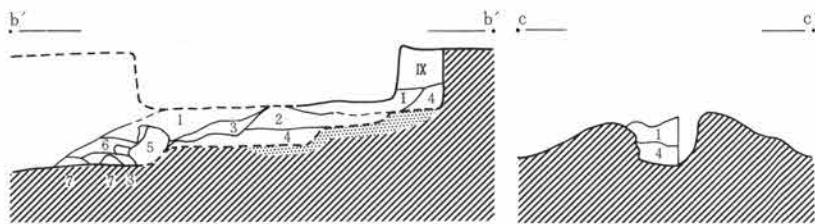
④ 暗褐色土 (壁のX層であり、炭化物等を含んでいる)

⑤ 茶褐色土 (②層よりX層土の混合が多い)



第20図 第4号住居址 (1/60)

0 2m



第21図 第4号住居址カマド (1/40)

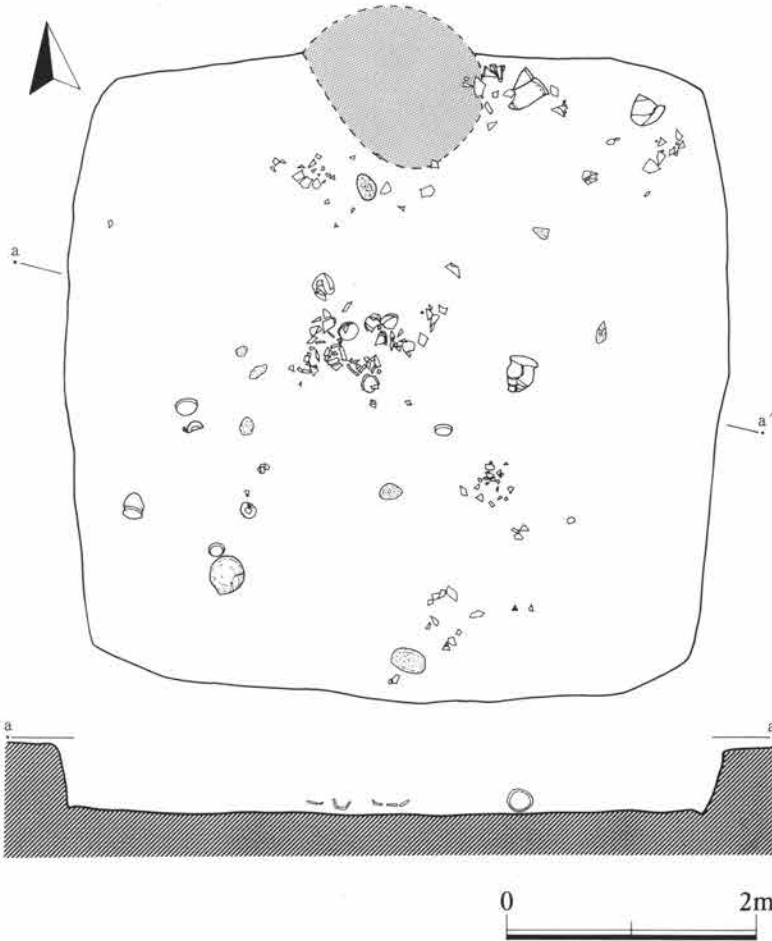
0 1m

構造規模

- ①N-8°30'-E ②5.3m×5.2m ③約55cm ④2.4m、2.4m、2.6m、2.5m ⑤上幅10~15cm
⑥62cm×40cm、深さ55cm ⑦カマド 30cm×45cm、高さ不明 ⑧煙道長 130cm

遺物

床面における遺物は、図と写真で示すとおり、使用されていた旧位置から激しく移動しているとは考えられない状況で、坏類は正立した状況で、小型カメは倒れた状況で、カマド脇のカメの破片は、カマドから崩れ落ちた状況であった。但し、坏等の重量の少ないものは床面との間に一層を入れるが、冠水時の浮きあがりを示すのではないかと思える。坏内に滑石製の白玉が入っているものもあった。遺物の出土状況を見る限りにおいて、本住居内の勝手向きのスペースは、カマド周辺と住居中央と推定でき、出入口が南壁中央とするならば、寝起きに供すべき空間は、北西及び東南の壁下部分の区域に限定されてくるようだ。間仕切と称する小溝が検出される位置と重なっている。



第22図 第4号住居址遺物出土状態 (1/60)

検出された遺物は、大型甕、小型甕、コシキ、鉢、高坏、坏、白玉（7個）及び鉄製品である。

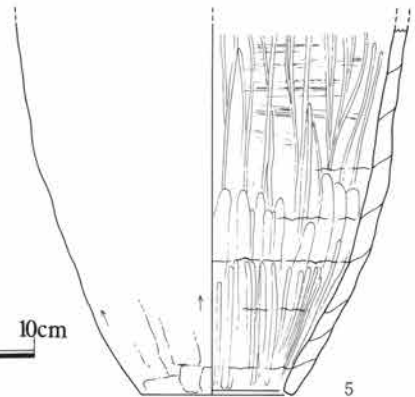
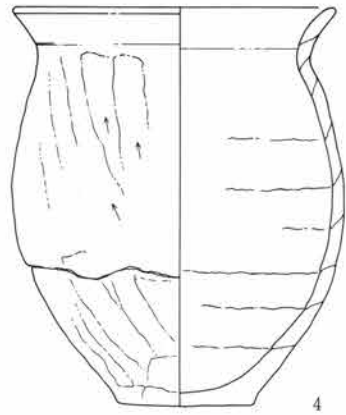
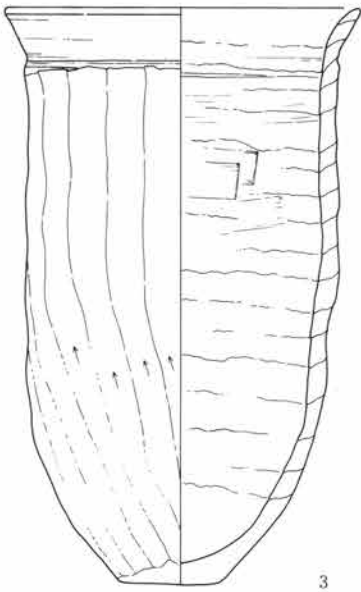
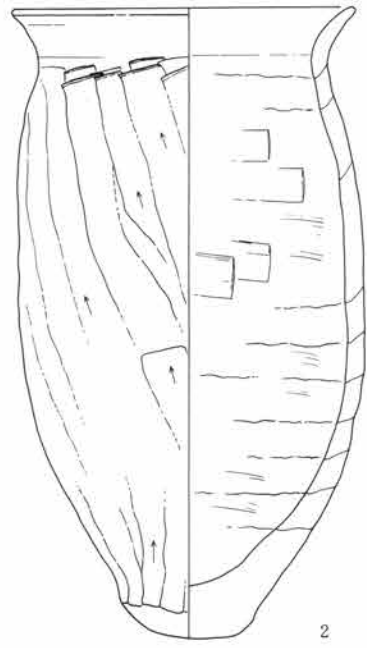
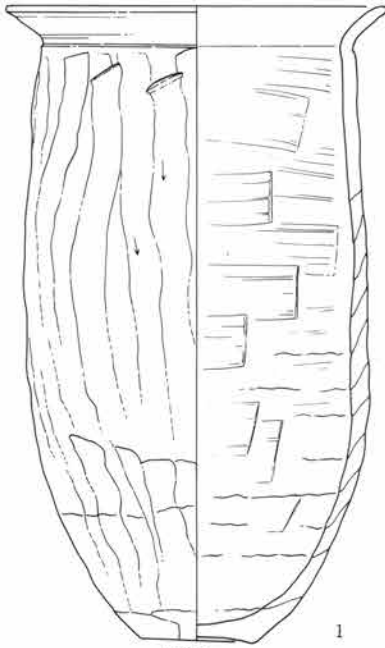
大型甕類 (第23図)

1・2・3ともに口縁部が張らず、胴径が口径より小さくなったC類の長胴甕である。垂直で強く鋭利な削りこみをなしている。1は木葉底である。

小型甕 (第23図4)

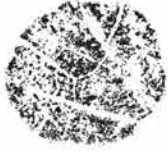
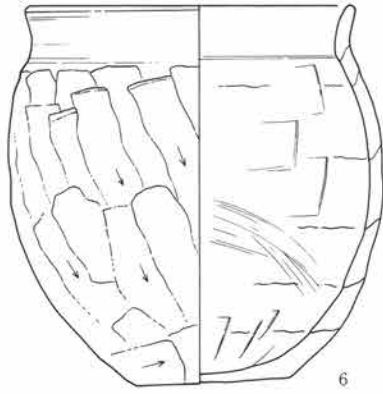
やや球形の残る胴で平底。丸底系の小型甕をA類とするならば、長胴系甕のこの系列をB類と称しておきたい。

小型鉢形土器 (第24図6、7)

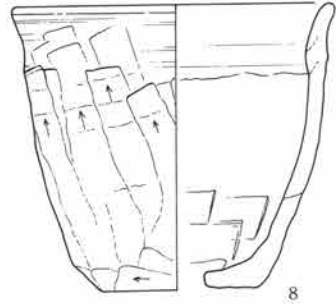


0 10cm

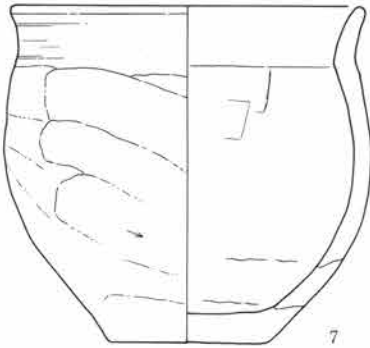
第23図 第4号住居址出土遺物・その1 (1/4)



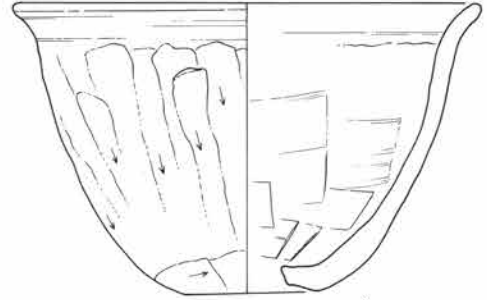
6



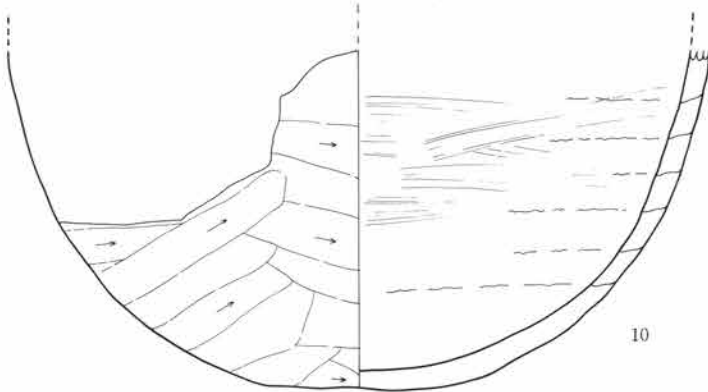
8



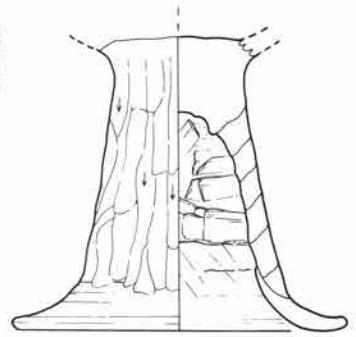
7



9



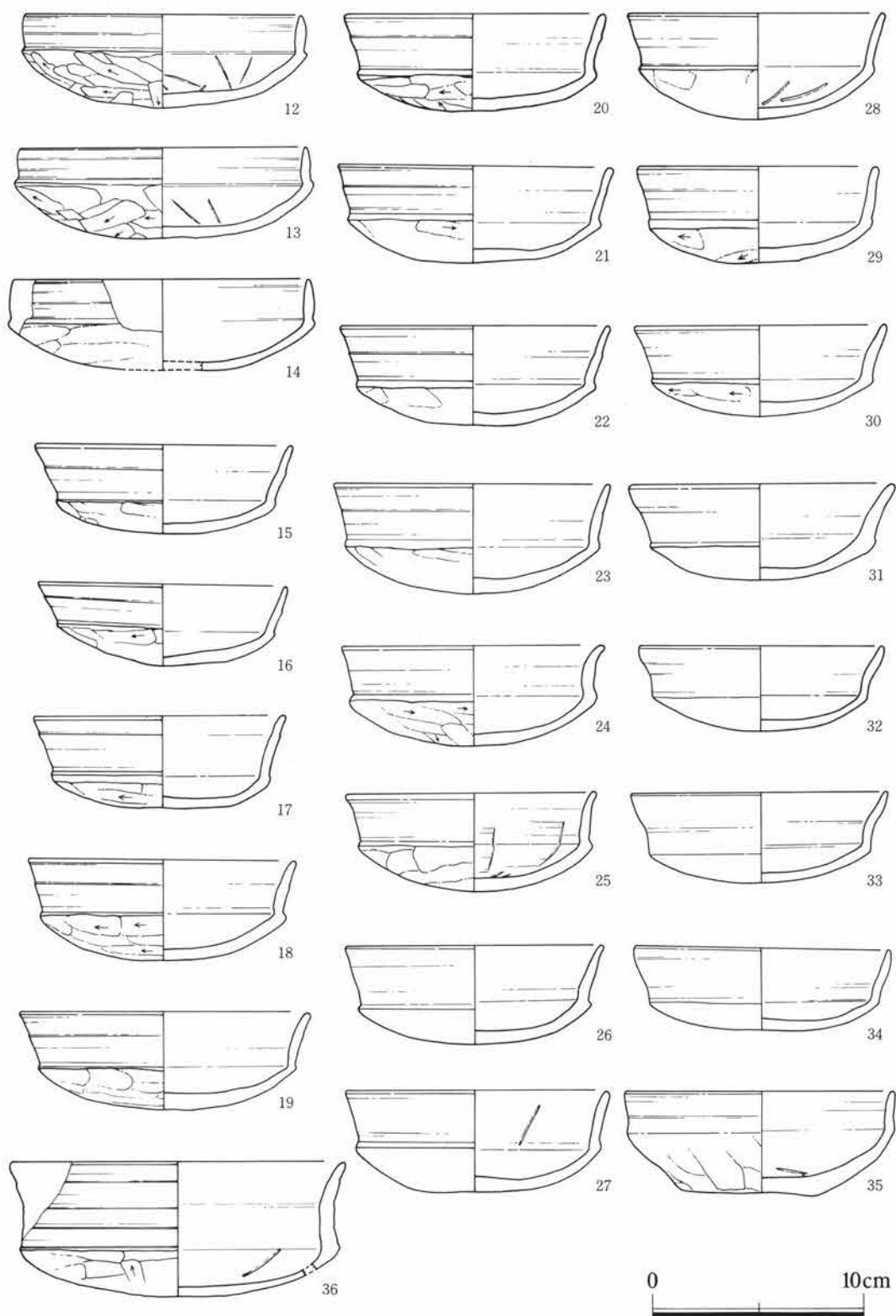
10



11



第24図 第4号住居址出土遺物・その2 (1/3)



第25図 第4号住居址出土遺物・その3 (1/3)

やや球形を示す胴と短かく直立する口縁をなすもので、6は底にヘラ描木葉をつける。

コシキ形土器（第23図5、第24図8と9）

コシキは2系列のタイプがある。第23図5は長胴大型カメを活用したタイプで底部がそのまま蒸気抜き孔となっている。第24図8と9は、伝統的なすり鉢状の器形であり、ラッパ状に開く口縁と底部に蒸気抜き孔をあけている。

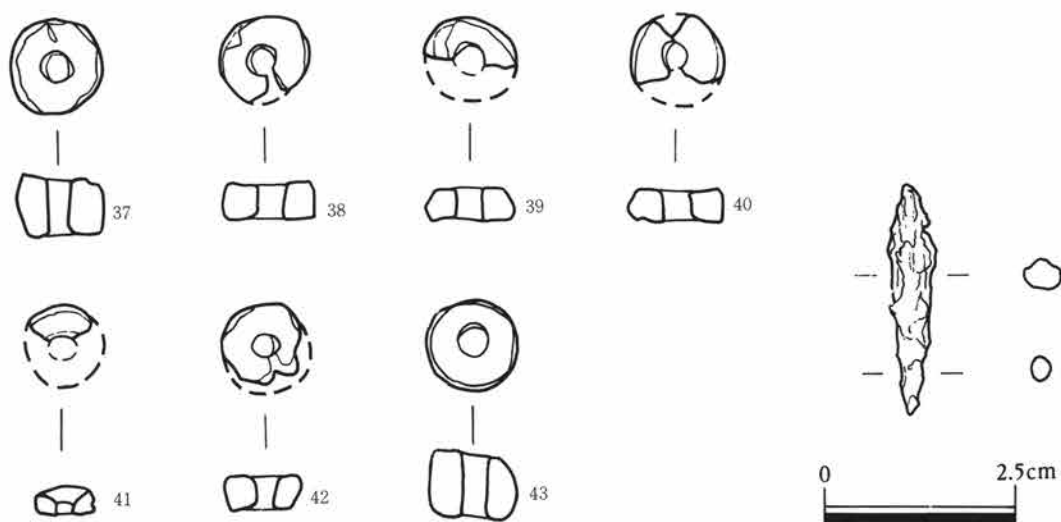
高环形土器（第24図11）

1点の出土で坏部は検出されなかった。

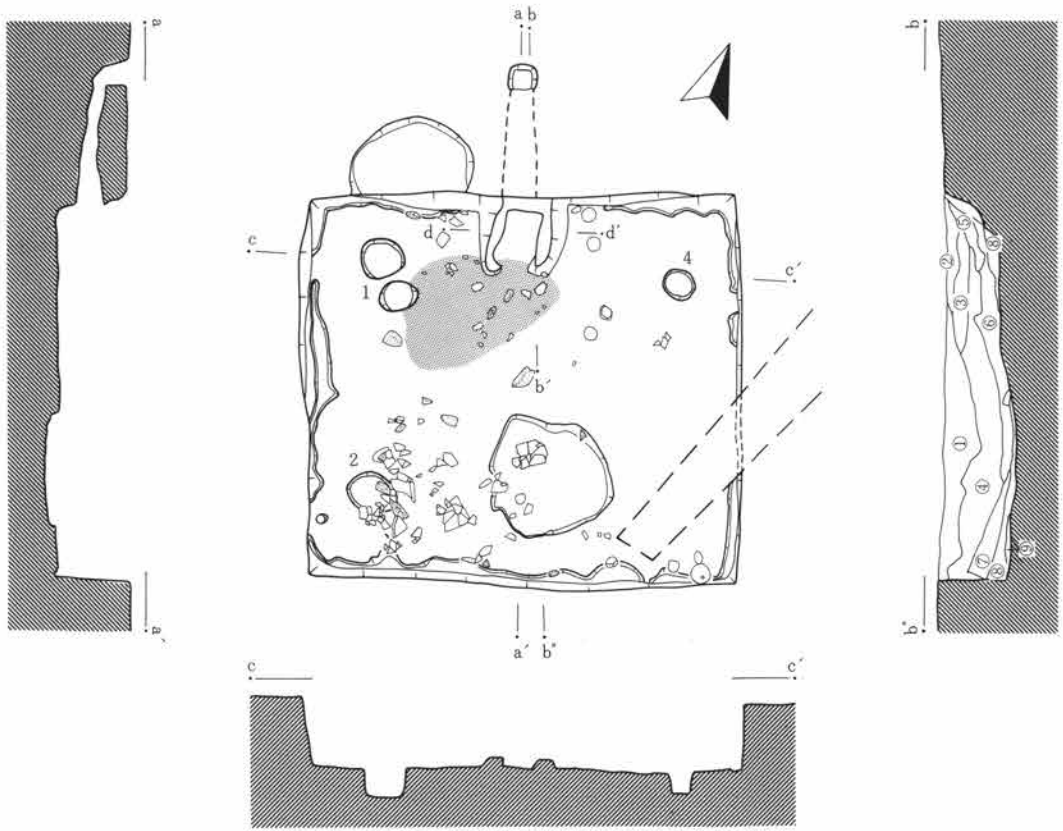
坏形土器（第25図）

坏は、須恵器模造の時期を完全に脱した時期のものである。古墳時代後期の前半～中頃に位置しよう。実測図に示す25個の坏は、(12～14) (15～23) (24～30、36) (31～34) (35)の5種に大別できる。(12～14)は、立ち上がりが短かく垂直、底が丸味を持ち、堅牢な作風であること。須恵器原体をより意識していると仮定できる範囲にあるもの。(15～23)は、立ち上がりが外反し大きくなるとともに底が浅くなり、受け部を造り出さなくなる手法。立ち上がり外面に共通に認められる稜または沈線は、土師器大型壺に須恵器大甕を模したものが出現する時期の特徴を示している。(24～30、36)は、立ち上がり部分の外反(24、36のようにC型をするものを含めて)が激しくなり、受け部稜線が極めて小さくなっている。立ち上がり部外面の線が無いだけで(15～23)に酷似する。一方(31～34)は明らかに後出的手法を示す。外反する立ち上がりは内湾し、受け部は消滅、平底風の器形に大きく変化している。

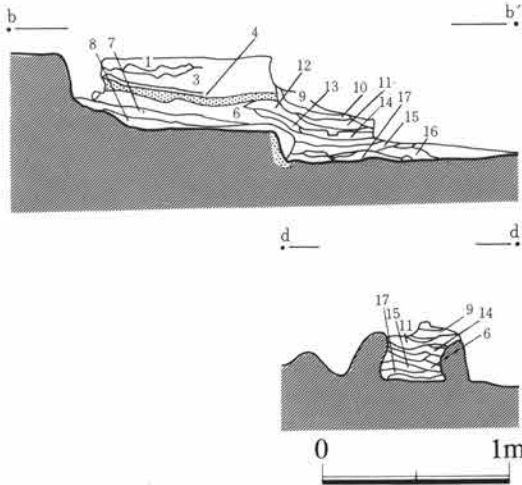
以上の土器の状況を見るならば、古墳時代後期の鬼高第II型式に属している。(31～34)の後出的要素の遺物が混ざり、長胴甕がC類になっている状況を考えると、本住居址を使用した人々の生活の時期が6世紀後半代から7世紀初期に及んでいることを物語ろう。



第26図 第4号住居址出土遺物・その4 (1/1)



第27図 第5号住居址 (1/60)



第28図 第5号住居址カマド (1/40)

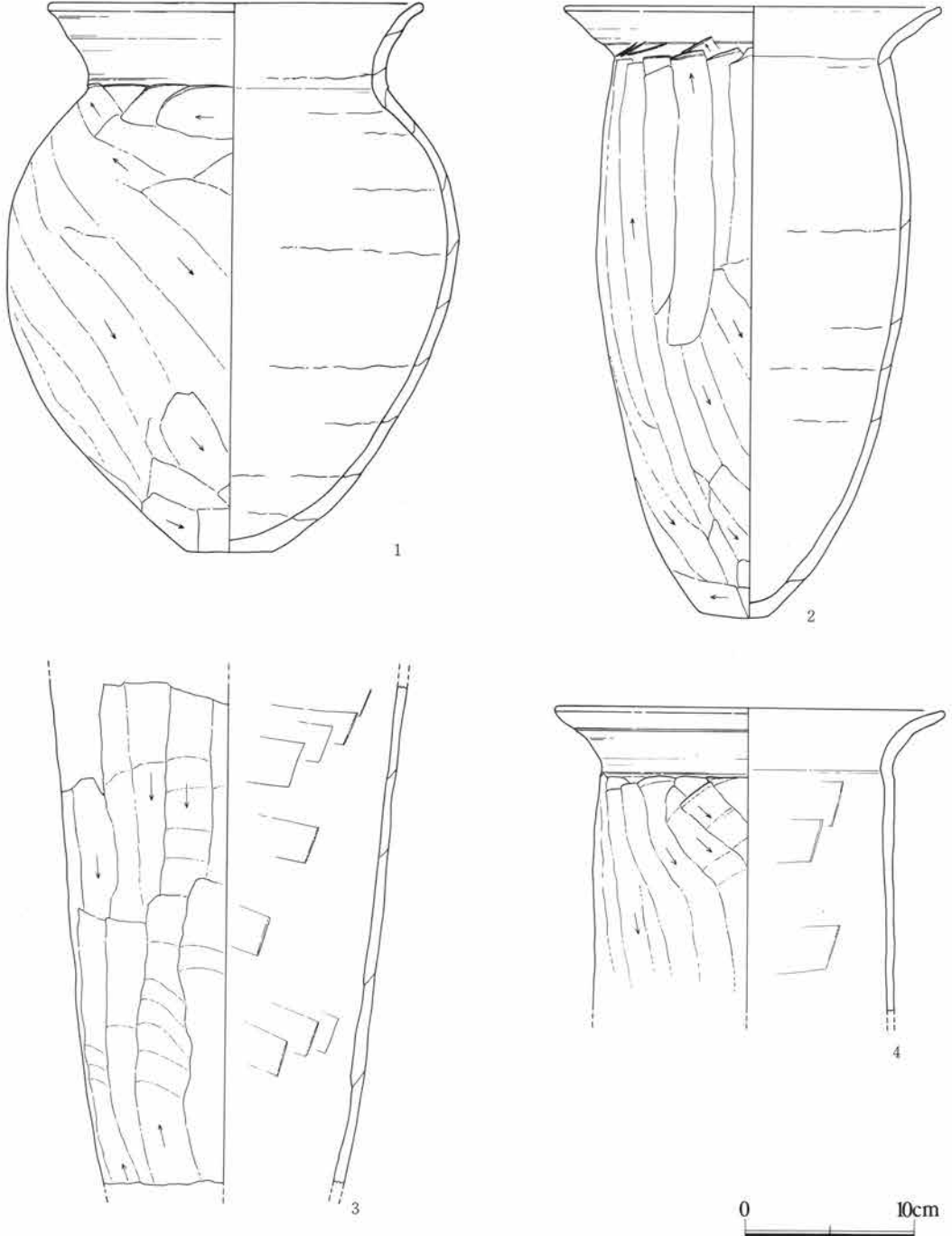
(5) 第5号住居址

(第27～31図、図版8～9、25)

本住居址は、重複しない単独住居である。確認時には、土壇と畝状遺構が認められた。8号住居址の東約2.5mに位置する。カマドを北壁のほぼ中央につけ掘り込みの深い正方形のプランを示す。住居床は、地山X層褐色土中に求め固くしまっている。壁下には不規則ながら浅い周溝が認められ東壁中央で1m程切れていた。小屋組の主柱穴は4本存在したものと考えられるが、No.4は後世の土壇により

破壊され不明である。住居床の四隅に極めて近い位置に立てられている点に特徴がある。また、No.1柱は添柱と推定できる柱穴が認められた。貯蔵穴はカマド脇には検出できなかった。ただ、

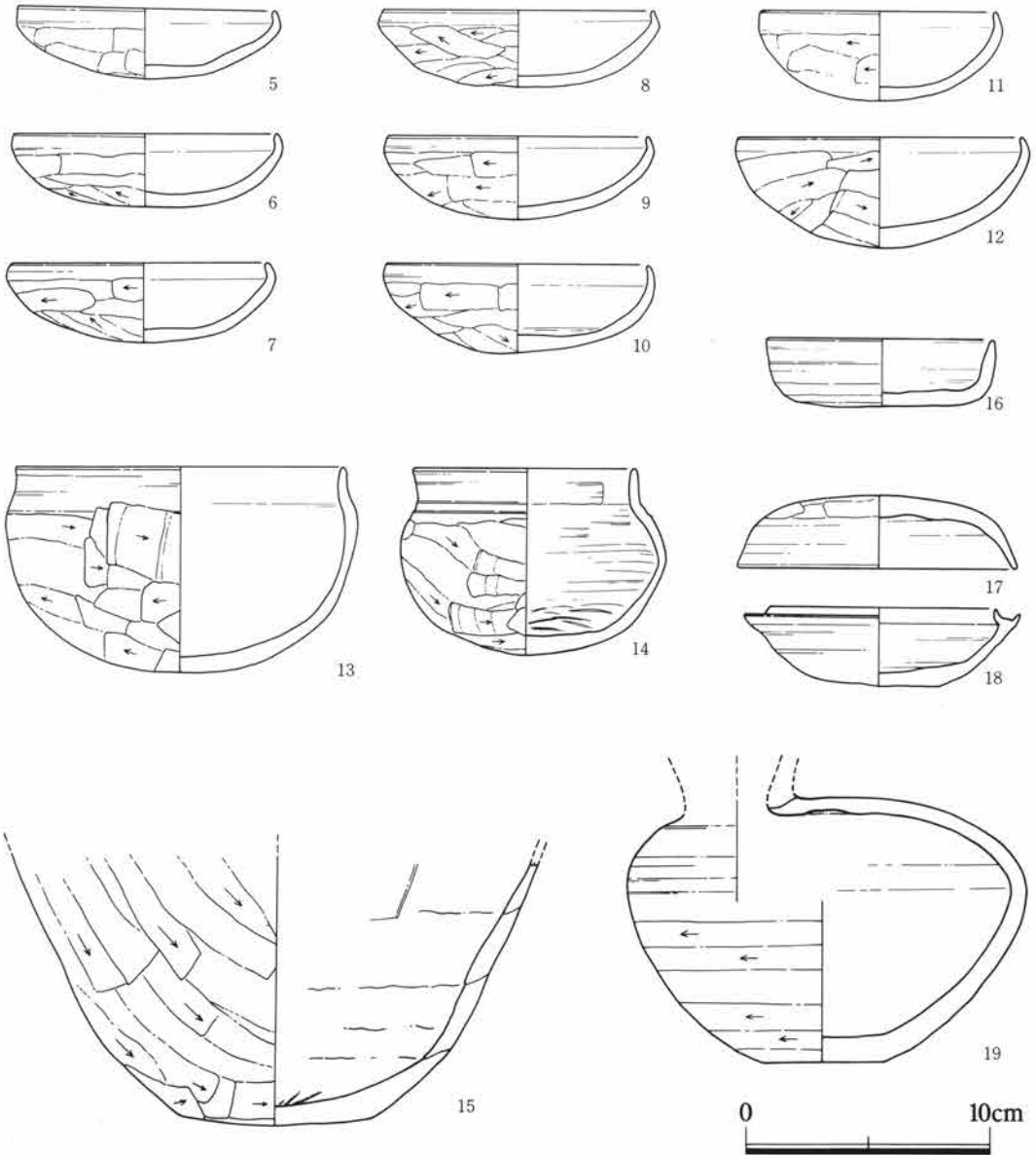
南壁寄りの浅い土壇にカメを中心とした遺物が散布していたことを考えると、この土壇が貯蔵穴を代用した如きものと考えられる。カマドは、粘土造りで正方形の火床を住居内に造り、火床奥壁を住居壁にしている。煙道は、壁中位よりカマボコ型に開け住居外へ緩やかに掘り抜いている。煙出しは垂直で円形に造る。



第 29 図 第 5 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)

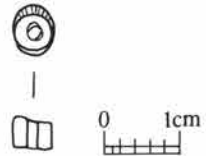
住居の埋没状況は、第27図に示すとおりであるが、二期に大別される。底部は、細かい砂の入る薄い堆積互層である。壁や地表からの流入によるものであろう。後半は一時期に多量の土砂が流入していて厚い堆積である。炭化物や、土器片、小石等を多量に含んでいる。この住居址が放棄後あまり時間が経過しない内に一気に埋没したことを示すと考えられよう。

遺物は、住居址床面で多数が発見された。堆積土の最下層に属し、完形品の多いことから、原位置に近い状況で出土していると理解できようし、この住居址を使用した時期を決定できるものと思われる。遺物の出土位置をみると、当時の生活空間を推定することも可能であろう。カマド



第30図 第5号住居址出土遺物・その2 (1/3)

脇、前面に坏、カメが集中する。また、南壁東隅には須恵器平瓶、土師器坏が並べ置かれており、西寄りにはカメ破片が集中していた。本住居址の使用下限は、カマド脇、南壁下出土の坏の形式よりみて鬼高III型式前半と考えたい。



第31図 第5号住居址
出土遺物・その3
(1/1)

構造規模

- ①N-21°-W ②3.0m×3.5m ③50cm程度 ④1-2 1.9m、4-1 2.4m ⑤上幅10cm前後、深さ4~5cm ⑥貯蔵穴 ナシ ⑦住居内土壇0.9m×0.9m、深さ5~8cm ⑧カマド 0.4m×0.4m ⑨煙道 入口径0.3m、煙出し0.2m、全長110cm

遺物

須恵器は、平瓶、坏身（Y字型）及び坏蓋、及び小型坏蓋の3種。平瓶の口縁部は初めから欠けていたようである。土師器は、坏、深鉢、葉壺状の短頸壺、カメ（A類亜種、C類、D類）が存在する。坏はC類4・C類5が混入する。これらの土器の混合は、古墳時代最終末の時期を示している。が、須恵器はやや古い様相を示し7世紀初頭から7世紀中頃の器形を残している。

住居址の形状と、出土遺物を4号住居址と比較するならば、4号住居址は鬼高IIの最盛期を示し、5号住居址は、それに続き、奈良時代土器セット成立期に位置するものとして基本的な土器セットと理解できよう。

第5号住居址土層

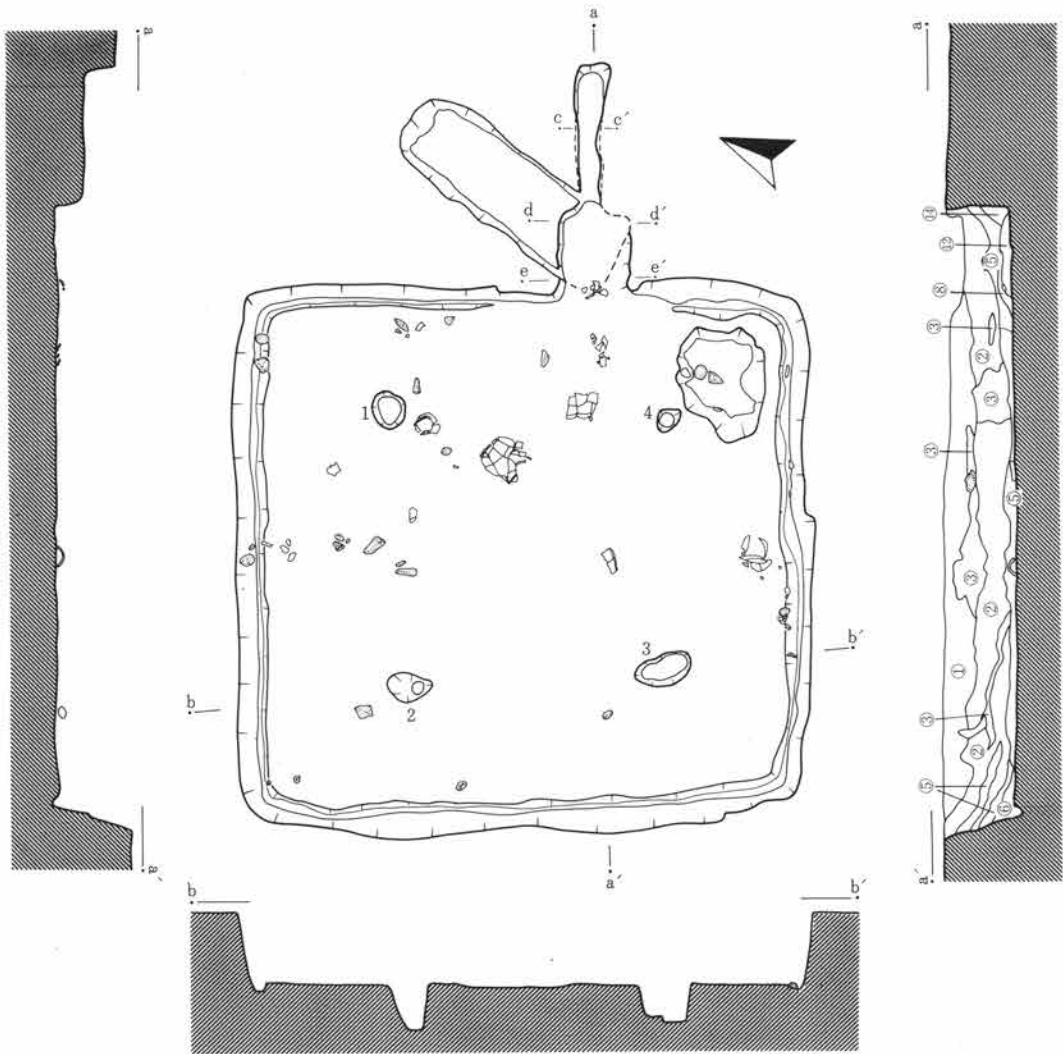
- | | |
|--------------------------------------|--|
| ①黄褐色土 地山の粘性の強い褐色土。小礫と砂を含む。酸化で黄色を帯びる。 | ⑤暗褐色土 ③に近い堆積。 |
| ②暗黄褐色土 ①と③の中間層。褐色土が多く粘性が強い。 | ⑥暗褐色土 ⑤に近い。炭化物が多い。 |
| ③茶褐色土 地山褐色土で炭化物・焼土粒の混入があり、土器も含む。砂質。 | ⑦灰褐色土 灰色の強い褐色土。マンガン粒が多く、炭化物・焼土・灰を混入する。 |
| ④茶褐色土 地山褐色土の崩れか。砂・炭化物を混入する。 | ⑧灰褐色土 ⑦に近い。地山褐色土の混入が多い。 |
| | ⑨黄褐色土 砂質。褐色土であるが、黄色味が強くマンガン粒混入。 |

第5号住居址カマド土層

- | | | |
|------------------------|--------------------|----------------|
| ①黄色土（IX~X層） | ②黒褐色土 | ③褐色粘質土（IX層~X層） |
| ④焼けて変色した③層 | ⑤暗褐色土 | ⑥暗褐色土 灰・焼土を含む |
| ⑦炭化物堆積層 | ⑧暗褐色粘質土 | ⑨灰褐色粘質土 |
| ⑩茶褐色粘質土 | ⑪茶褐色砂質粘土 | ⑫⑥と同じ |
| ⑬黄褐色砂質土 | ⑭黄褐色砂質土 焼土・炭化物含む | |
| ⑮黄褐色砂質土 黄色い変色、焼土・炭化物含む | ⑯灰褐色土 炭化物・焼土ブロック混合 | |

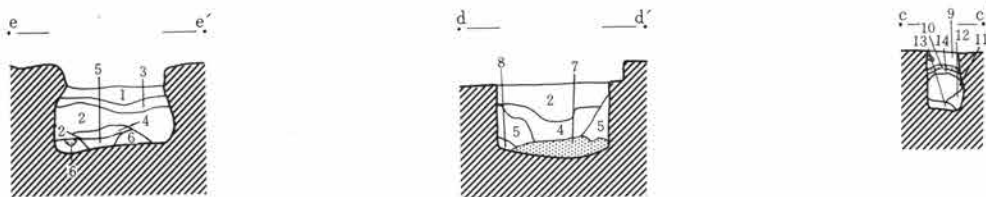
(6) 第6号住居址（第32~35図、図版9~10、26）

6号住居址は、1号掘立柱家屋の北で、10号・11号住居址に接して建てられている。他の住居址との重複は無い。住居は他のものと同様に深く掘り込んで造り、東壁中央やや南にカマドを造



第32図 第6号住居址 (1/60)

0 2m

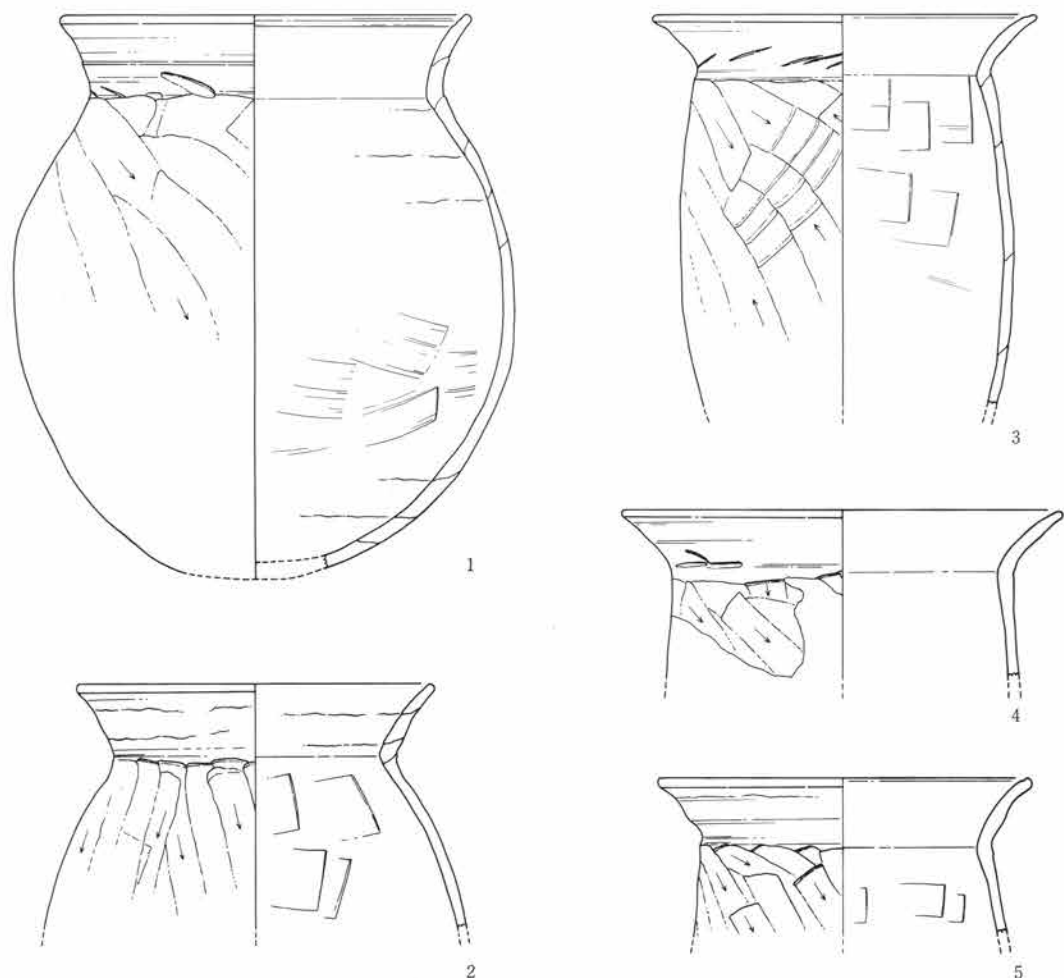


第33図 第6号住居址カマド (1/40)

0 1m

り出していて、方形の床プランを示している。カマドと煙道部の天井は、遺構検出時にすでに欠けており、火床部は土壇によってさらに破損していた。

住居の床は基本土層第X層に求めているが、小礫が多数混合し固くしまっている。壁下には周溝が掘られているが、カマド前は無い。小屋組みの主柱穴は、住居平面の対角線上に掘り込んでいて、比較的深くしっかりしている。No 4 柱は、内側にもう 1 本の柱穴が存在しているが、添え柱か否か土層が不明確で判定できなかった。貯蔵穴は住居東南隅に設置されているが、極めて不規則な形をなし、鍋底状である。遺物の出土量は極く少量であって、床に接しての遺物は、カマド前及び貯蔵穴周辺に集中する。カマド前の長ガメがこの住居址の時期判定の資料となるであろう。本住居カマドの形状は、この住居址が示す時期に比して新しい要素の構造であるといえ、これらの組み合わせに注意をはらわねばならない。カマド本体は一部欠けるものの、本来は立方体



第 34 図 第 6 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)

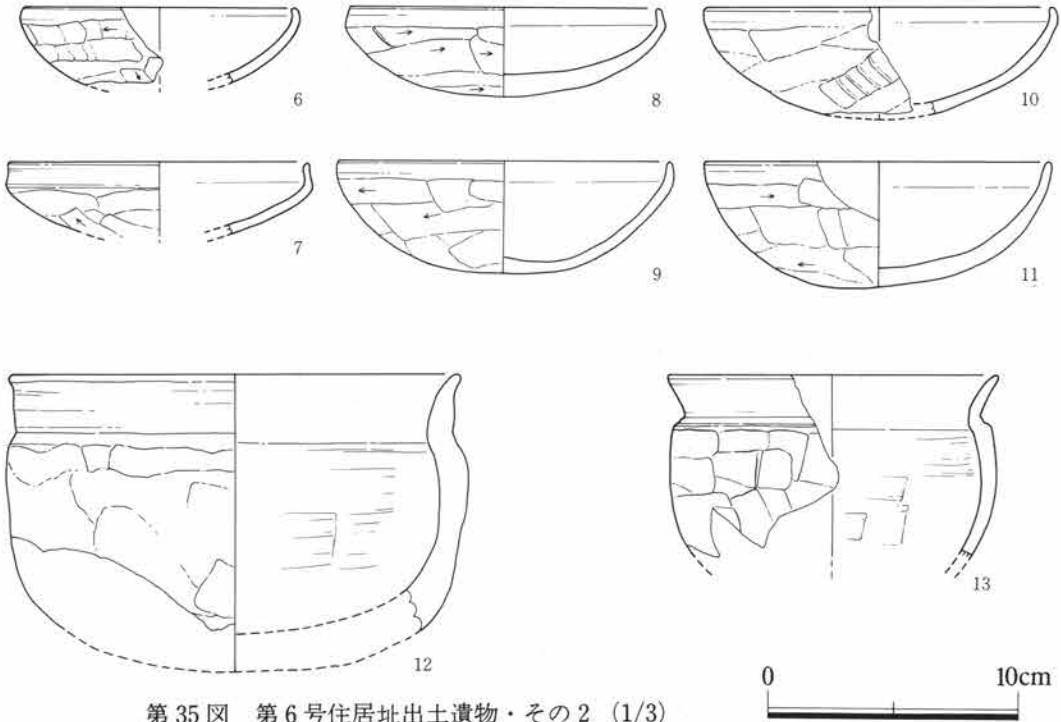
0 10cm

の形状であることがうかがえる。煙道を水平に、煙出しを垂直に掘っているのも特徴的である。

本住居の埋土は壁外から少量の土砂流入を示す下部堆積土と、大量の土砂が流入したことを示す上部堆積土とに大別できる。上層は水田床土にみえる黄色～橙色の着色土がみられ、水の影響を強く受けたものと考えられる。一方、第5層の青灰色土は洪水による堆積土と判定できる。

構造規模

①N-20°-W ②4.5m×4.4m ③50cm ④2.25m、2.1m、1.95m、2.25m ⑤上幅10cm、深さ5～10cm ⑥貯蔵穴70cm×70cm、深さ10cm ⑦カマド火床 幅65cm、奥行き75cm ⑧煙道 幅



第35図 第6号住居址出土遺物・その2 (1/3)

第6号住居址土層

- | | |
|----------------------------|----------------|
| ①黒褐色土 オレンジ色粘質土混合。酸化激しい。 | ⑥黒褐色土 酸化が激しい。 |
| ②黒褐色土 オレンジ色粘質土多量に混入。 | ⑧⑤に焼土粒を含む。 |
| ③黒褐色土 ①と同じ。粘性が強く、黒色粘質土が多い。 | ⑫焼土ブロック |
| ④青灰色土 | ⑭⑤と焼土ブロックとの混入。 |

第6号住居址カマド土層

- | | |
|---------------------|-------------|
| ①黒褐色粘質土 オレンジ色粘質土混入。 | ⑧明褐色粘質土 |
| ②①に焼土粒を含む。 | ⑨暗褐色土 (IX層) |
| ③黒褐色土 | ⑩焼土 (天井崩れ) |
| ④青灰色土 | ⑪暗褐色土 |
| ⑤④に焼土粒を含む。 | ⑫⑪に焼土粒を含む。 |
| ⑥②に炭化物を含む。 | ⑬灰層と⑪の混合。 |
| ⑦焼土と炭化物の混合 | |

15cm、長さ100cm

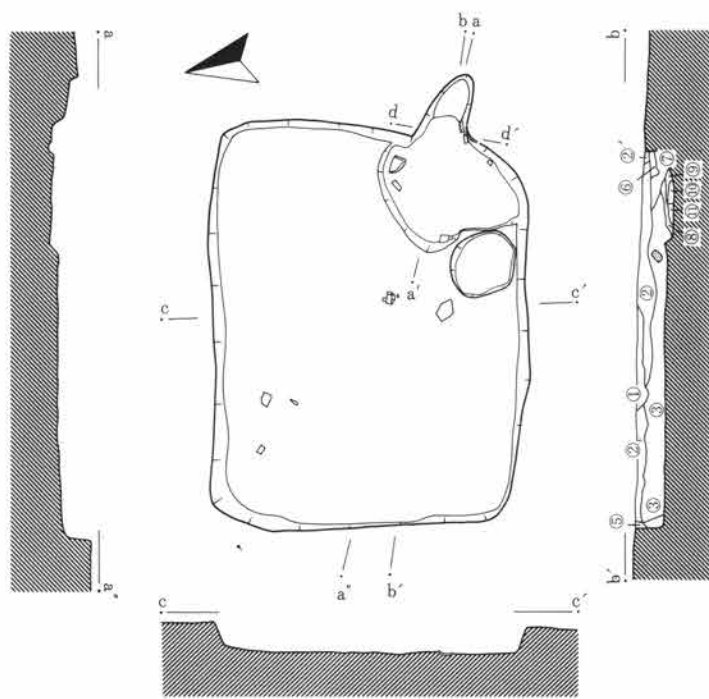
遺物

遺物は土師器が多く、須恵器は含まれていなかった。土師器の内、図34-1の球形胴カメ及び2の長胴カメはカマド前、第1柱穴寄りの床直上に出土した。口縁部外面に沈線をめぐらすもので、他の遺物より明らかに古い様相を示すものであり、カメB類の時期にあてられよう。他のカメはいずれもD類に属する。坏は破片が多いが、貯蔵穴及び南壁寄り出土の例は坏C-4類に属すると思われる。遺物の様相は、SA 5の内容に近いものと判定される。

(7) 第7号住居址 (第36~39図、図版10)

本住居址は1号住居址の北側に当たる。この住居址下には13号・14号住居址が検出できた。本

住居址は東西にやや長い方形のプランを示し、東南隅にカマドを造っている。遺構検出



第36図 第7号住居址 (1/60)



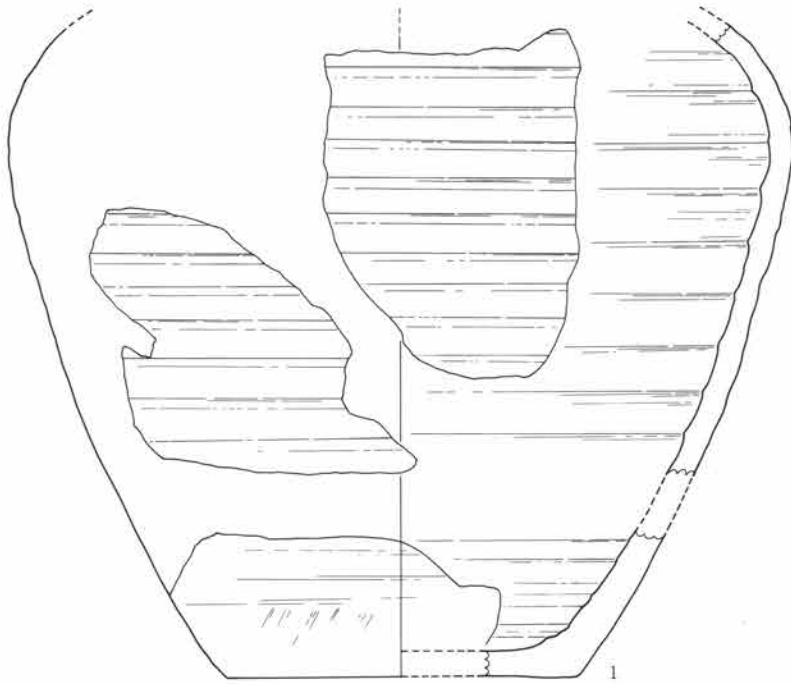
第37図 第7号住居址カマド (1/40)

第7号住居址土層

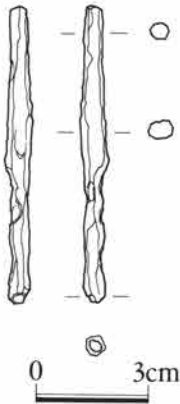
- ①褐色粘質土 B軽石を少し含む。
- ②灰褐色土 粘性強く、酸化が認められ、B軽石の多少の混入あり。
- ②'②よりも明るく明褐色粘質土。
- ③灰褐色土 粘性強く、酸化が激しい。
- ③'③より黒っぽい。
- ⑤VIII層
- ⑥茶褐色粘質土
- ⑦青灰色粘質土 ②に似る。鉄分を若干含む。
- ⑧②に炭化物を含む。
- ⑨⑧に似る。焼土粒・炭化物を含む。
- ⑩炭化材
- ⑪⑨より炭化物少ない。

第7号住居址カマド土層

- ①灰色土 褐色土を混入し粘性あり。固くしまる。やや黒味を帯びる。地山VI~VII層。
- ②灰色土 褐色土を混入し粘性あり。固くしまる。黒味少ない。
- ③灰
- ④③に灰色物を混入。



第38図 第7号住居址出土遺物・その1 (1/3)



第39図 第7号住居址出土遺物・その2 (1/2)

時に住居址全体的に削り取っており、15号住居址の状況よりみて、10~15cmほどは浅くなっていると考えられる。床面は基本土層第IX層の暗褐色土中に求めており、比較的固くしまっている。床面には、柱穴・周溝は無い。但し、円形の土壇が1基カマド前に確認できた。貯蔵穴のようなものか不明。カマドは住居内に灰原状の窪みをつくり、その先に小規模な煙道をつけている。カマドの立体構造を推定できるほどの資料は得られなかった。床面における遺物の出土も極めて少ない。

住居埋土については、上部堆積を欠くので不明確ではあるが、現状では放棄後、漸次埋没していったと理解できよう。埋土の①~③層土

中には、B軽石の混入が認められることに注意したい。15号住居址ではB軽石が最上層にレンズ状堆積し、下層には混入が認められないことを考えると、本住居址はB軽石降下時か、場合によ

てはB軽石降下時間をまたいで生活が営まれた場合も想定できよう。

構造規模

①N-15°-E ②3.3m×2.5m ③25cm程度 ④ナシ ⑤ナシ ⑥ナシ ⑦カマド 1m×1m、長さ35cm程

遺物

遺物は極めて少なく、第38図の如くである。灰釉を施す瓶の胴部破片及び台付碗の破片であった。

(8) 第8号住居址(第40~45図、図版10~11、26)

本住居址は、本住居址群にあってはやや小規模の住居址になるが、貯蔵穴が欠けることを除けば大型住居址を縮小した状況を示すものである。ほぼ正方形の平面形を示し、深い掘り込みである。カマドは東壁中央やや南寄りに築かれ、粘土で造ったカマド本体部分は住居内に入り、煙道のみが住居外へ造られている。壁周溝はカマドの両脇を欠くものの、ほぼ一周している。小屋組み支柱穴は4本検出できたが、いずれも床面の各四隅の壁に接して造られている。カマドは住居床面に正方形の火床を造り、住居址壁の1/4ほどの高さから煙道をほぼ水平に掘り抜いている。煙出し部は、ほぼ垂直に地表へ掘られている。煙道部天井及び火床天井は欠け落ちており、また遺構検出時に削り込んでいる。遺物は第40図で示すとおり、カマド前及び住居中央部へ押しつぶされる状況で出土している土器群は、本住居址のものとして推定される。なお、これらの遺物は初期の埋没土層に含まれるものだけである。本住居の埋没の状況は、下層の初期流入堆積層と、やや厚く堆積する後期堆積層とに大別できるようである。注意する点は、床直以外の土器片が、この上・下二層の中間に包含されること、第1層に洪水による灰色土が存在することである。

第8号住居址土層

- | | |
|----------------------------------|------------------------------|
| ①灰色土 | ④灰色土 地山IX層がブロック状に混入。 |
| ②暗褐色土 地山IX層と標準②層との混合、鉄分粒を含む。 | ⑤褐色土 |
| ③黒褐色土 標準②層を中心に堆積、地山IX層がブロック状に混入。 | ⑥灰 |
| | ⑦灰と地山II層混合 ⑧灰と地山II~XI層ブロック混入 |

第8号住居址カマド土層

- | | |
|--|--------------------------------------|
| ①灰白色土 鉄分粒を多量に含む。やや黄味あり。 | ⑥黒褐色土 地山のII層と思われる。 |
| ②暗褐色土 灰色土と暗褐色土 (IX~2層) を混入する。焼土粒を少量含む。 | ⑦灰と褐色土 (IX層) 焼土粒混入 (壁焼土あざき色)。 |
| ③灰色土 ②より灰が多い。 | ⑧焼土 炭化物・灰を混入。焼土はブロック状で、カマド天井部と考えられる。 |
| ④暗褐色土 地山のIX層と灰色土の混入。 | ⑨炭化物 |
| ⑤灰 | ⑩⑦に近い。焼土ブロックを含む。 |

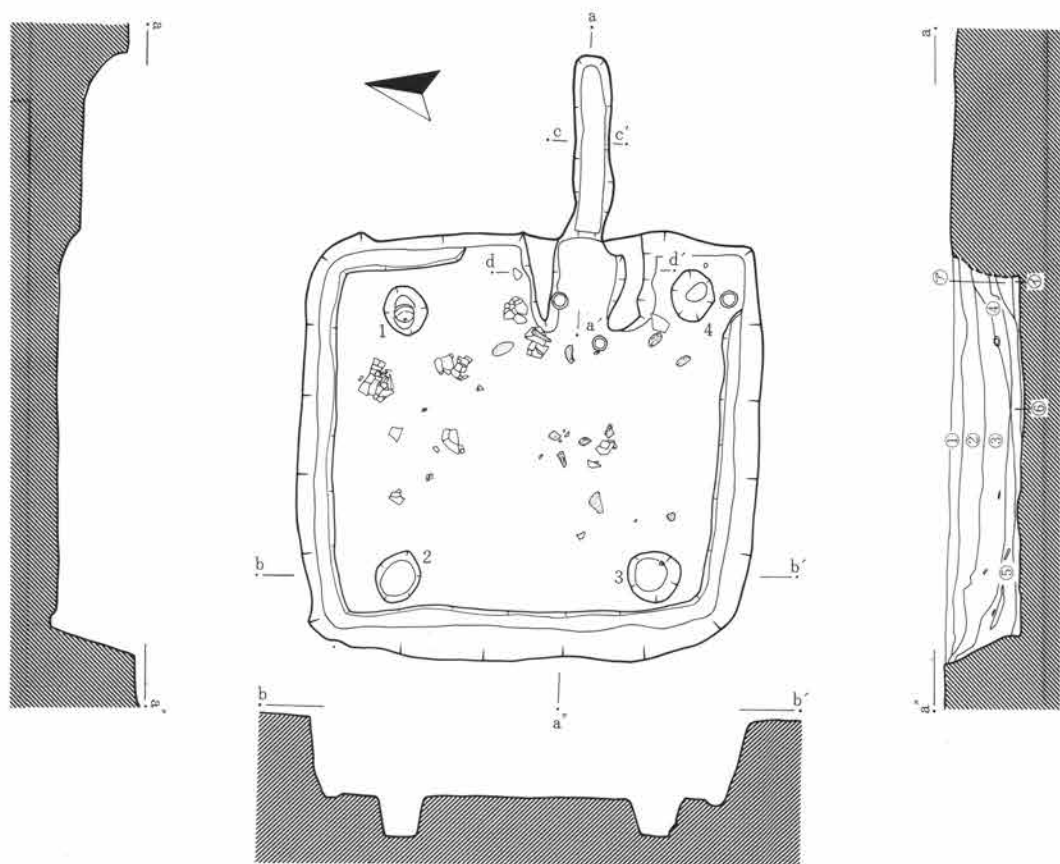
第8号住居址カマド煙道部土層

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| ①暗褐色土 | ③焼土 ブロック状、壁と天井の崩れ。 |
| ②淡褐色土 砂で黄色味あり、VIII層に近い。 | ④炭化物 焼土はごく少量ブロック状に含む。 |
| ブロック 褐色土・炭化物・焼土粒を多く含む。 | |

構造規模

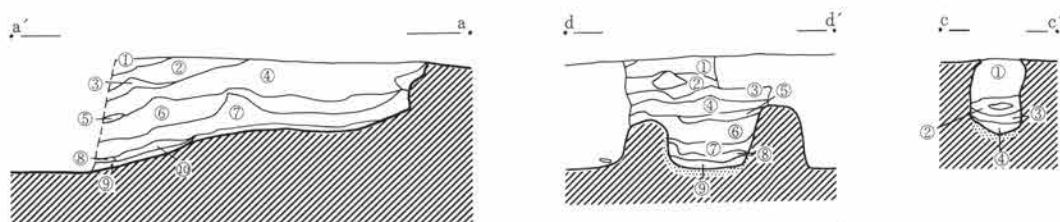
①N-10°-E ②3.5m×3.7m ③60cmほど ④2.10m、2.05m、2.30m、2.30m ⑤上幅10~13cm、深さ4~5cm ⑥ナシ ⑦カマド床 幅50cm、奥行き70cm、高さ55cmほど ⑧煙道幅20cm、長さ140cm

遺物



第40図 第8号住居址 (1/60)

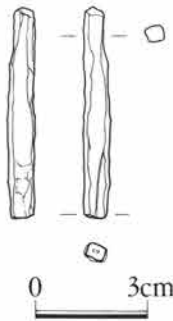
0 2m



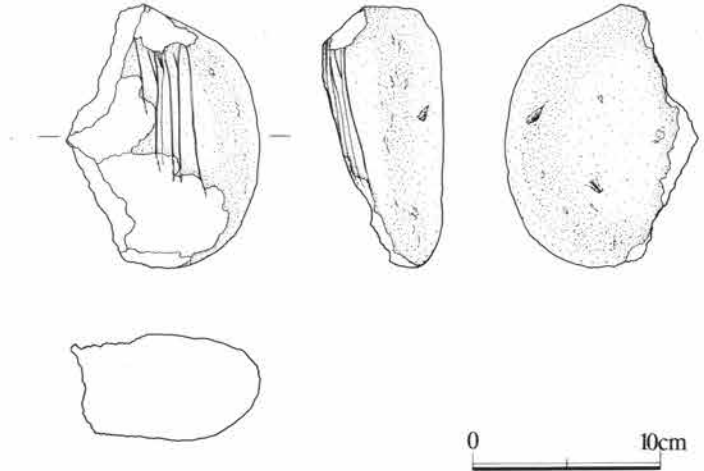
第41図 第8号住居址カマド (1/40)

0 1m

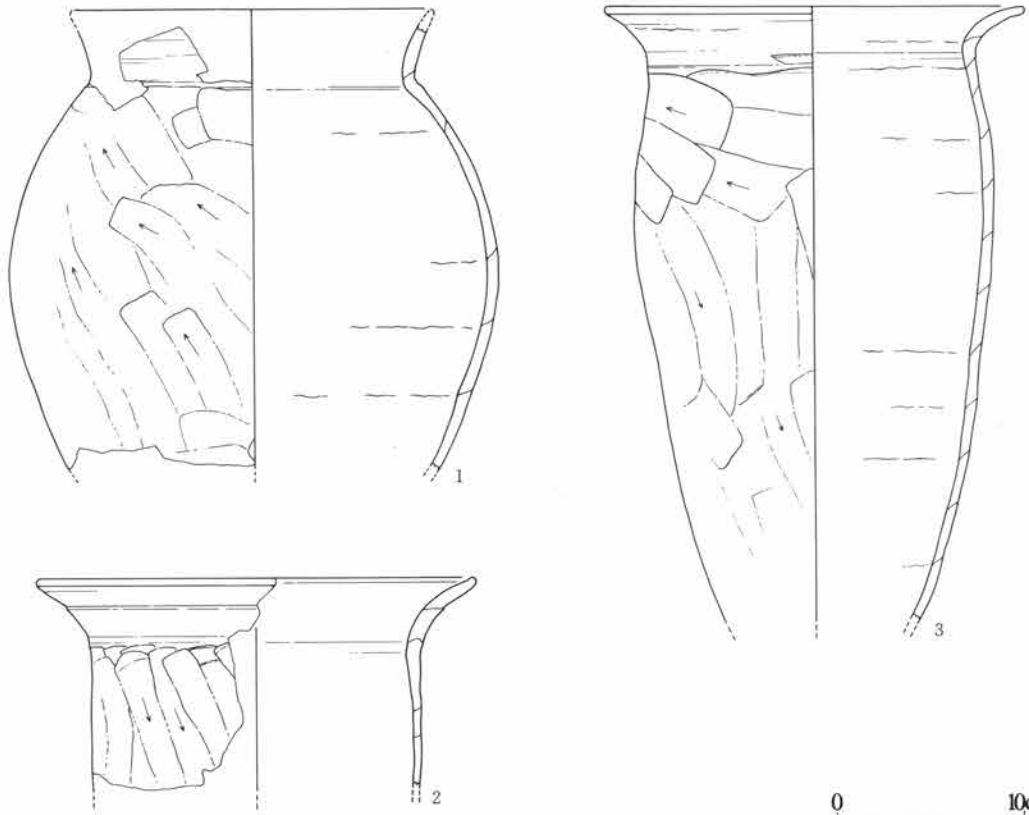
カマド脇・前の床直上に散布する遺物は第44・45図の如く、カメ（A類亜種系の丸胴1個体、D類長胴2個体）、坏（C類-4、3個体）、丸底鉢形のコシキ1個体、深鉢（コシキか）1個体が代表となろう。須恵器は検出されなかった。遺物の組み合わせ方や形状からみて、5号住居址



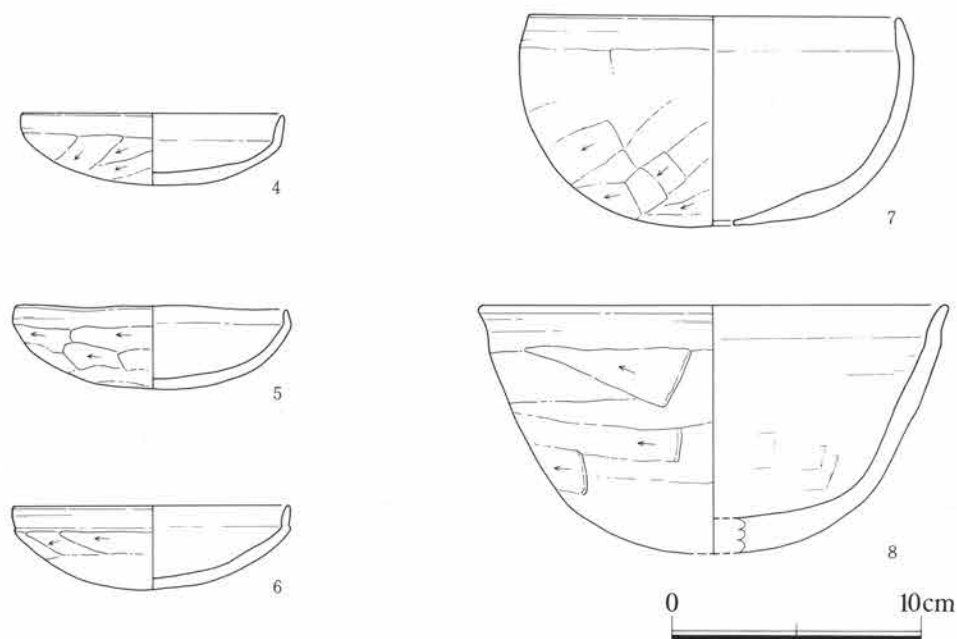
第42図 第8号住居址出土遺物・その1 (1/2)



第43図 第8号住居址出土遺物・その2 (1/4)



第44図 第8号住居址出土遺物・その3 (1/4)



第45図 第8号住居址出土遺物・その4 (1/3)

の遺物に近い時期と考えることができよう。

また、断面が正方形の鉄製品が1本検出された。その他、自然面に工作痕を残す石が1個出土している。

(9) 第9号住居址 (第46～49図、図版11～12、27)

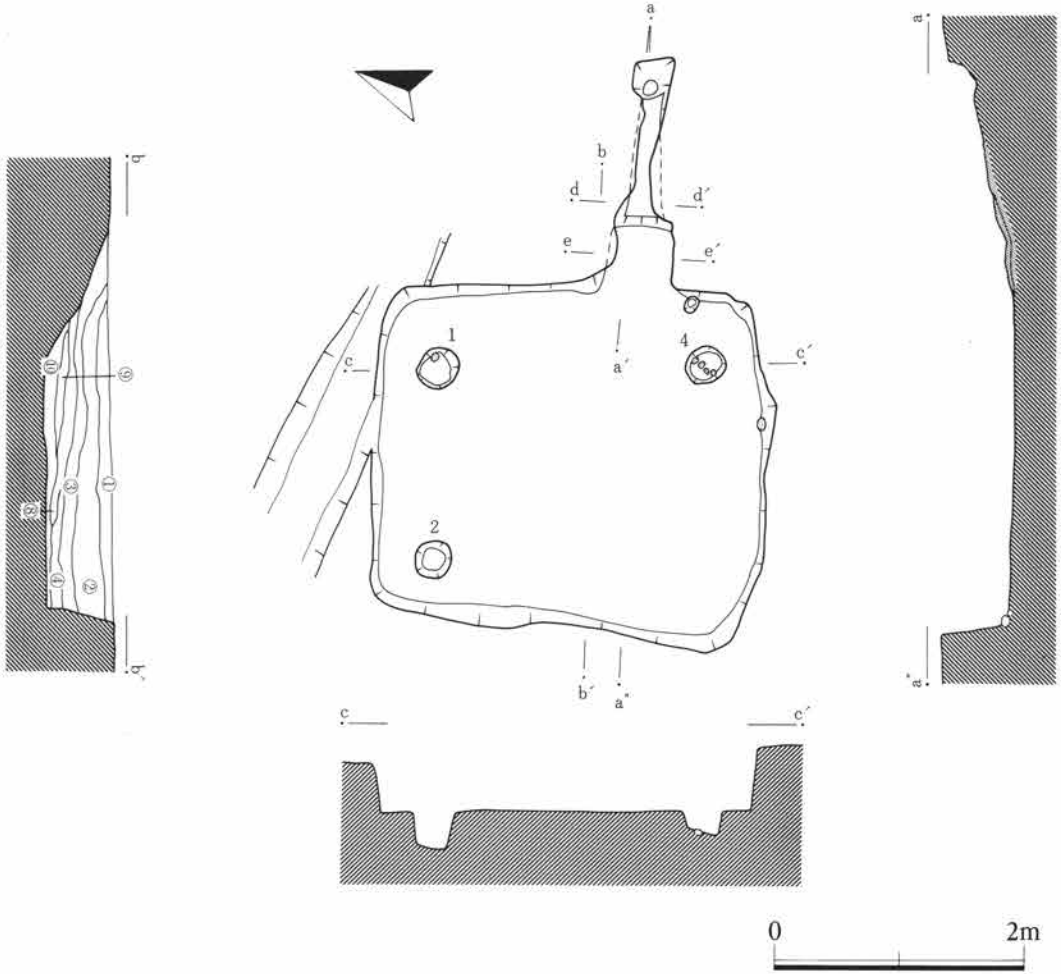
9号住居址は単独住居址である。1号溝が北壁の一部を削っている。ほぼ方形のプランをもつこの住居址は、他の住居同様に深く掘り込んであり、東壁南隅寄りにカマドを造る。6号住居址同様に住居外へ出すタイプである。住居址床面は、基本土層第X層中に作っており、小礫を多量に含む。3本の小屋組み支柱穴が検出されたが、他の施設は検出されなかった。カマドは、方形プランをもつが、床が漸次高くなり煙道に続いている。6号住居址ほどの丁寧な造り方ではない。煙道も煙出し部に向かって緩く上って作っている。出土遺物は第48図で示すように、南壁下に集中しているが、これは、本住居址放棄後、南壁外側より多量の土砂流入（人為的か）層が認められ、その床直上の堆積土中に混在している遺物である。従って、本住居址の遺物であるか疑わしい。住居を埋めた土は、初期の堆積土と後期の堆積土に大別できる。初期堆積は非常に厚く、遺物・炭化物・焼土を多量に含む。後期の埋土は、同種の土が数次にわたり堆積をなしている状況を見るなら、自然の流入堆積と考えられよう。また、他の住居址で認められる灰色土、B軽石は認められなかった。

構造規模

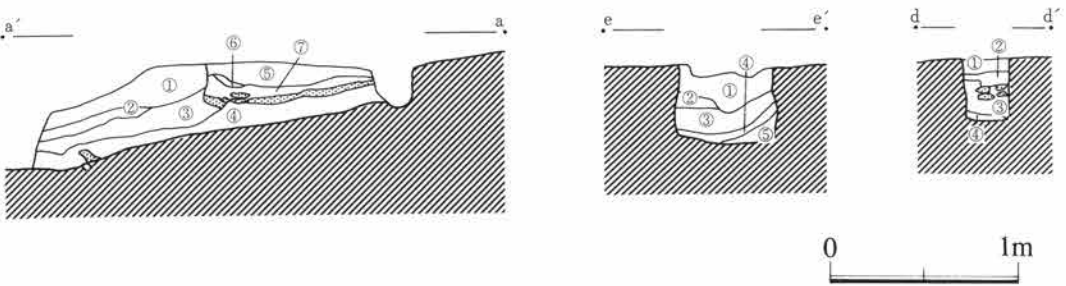
- ① N-17° -W ② 2.7m×3.1m ③ 50cm程 ④ 1-2 1.50m、4-1 2.10m ⑤ ナシ
 ⑥ ナシ ⑦ 幅50cm、奥行50cm、高さ45cmほど ⑧ 煙道 幅20cm、長さ130cm

遺物

南壁下に検出された土師器において復原可能な遺物は第49図に示したものである。坏はC類の



第46図 第9号住居址 (1/60)



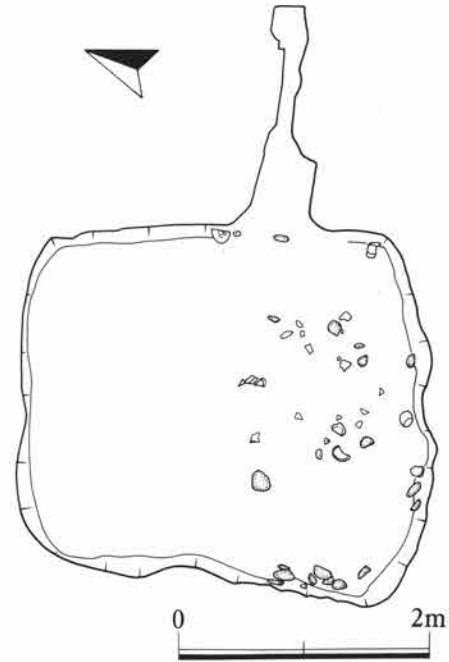
第47図 第9号住居址カマド (1/40)

第9号住居址土層

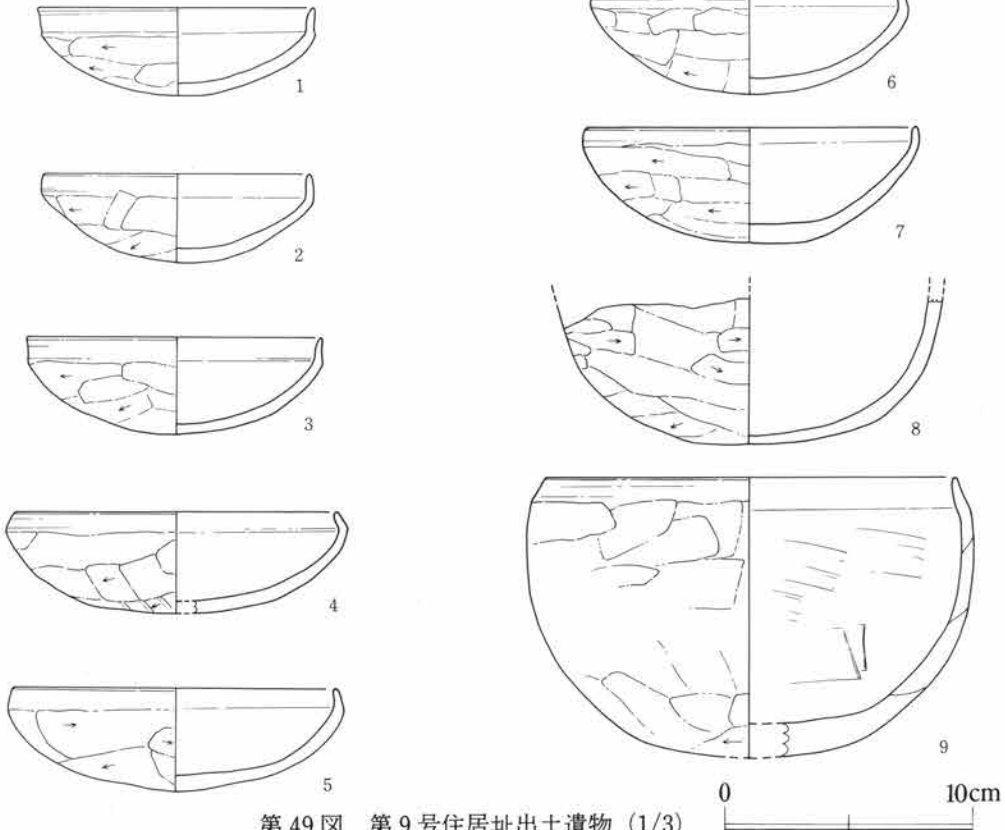
- ①褐色土 酸化による橙色を呈する。小砂礫を混入する、粘質土。
- ②褐色土 ①より砂礫が少ない。酸化により黄色味あり。
- ③茶褐色土 少量の砂及び小礫を含む。粘質土。
- ④褐色土 酸化により黄色味あり。砂礫の混入なし。粘質土。
- ⑧灰褐色土 焼土粒・炭化物を混入。カマド上部から北西部床に傾斜して堆積。
- ⑨褐色土 黄色味のある小砂礫の堆積層。
- ⑩暗褐色土 小砂礫を含む粘質土。

第9号住居址カマド土層

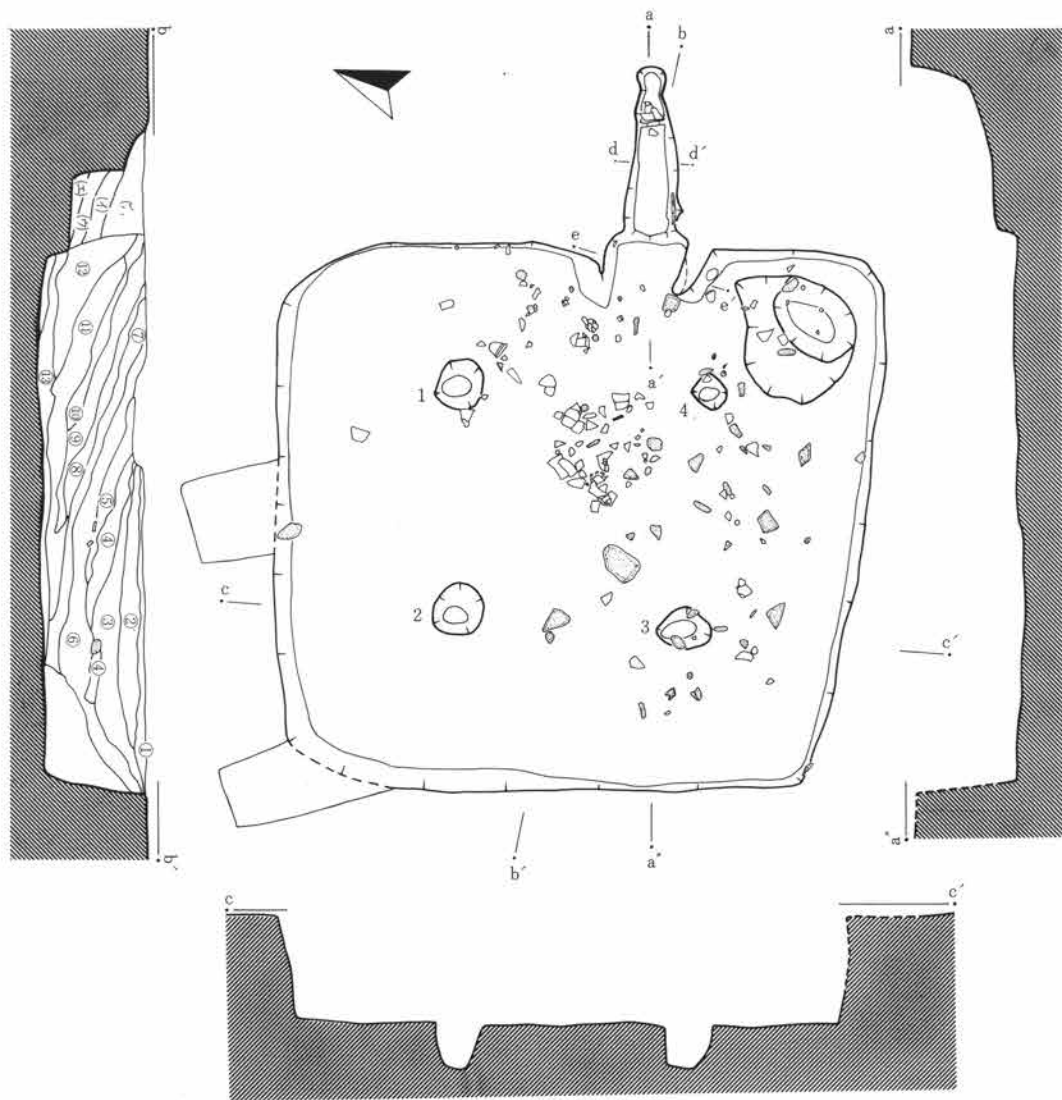
- ①灰褐色砂質土 炭火物・焼土粒を多量に含む。
- ②暗黄褐色砂質粘土層 少量の炭化物・焼土と多量のマンガン粒子を含む。
- ③黄褐色砂質粘土層 ②に類似するが、黄色味が強くマンガン粒子を含まない。
- ④黄灰色砂質粘土層 ③に類似するが、灰色味強く鉄分沈澱がみられる。
- ⑤黄褐色砂質粘土層 黄色味強く少量の炭化物・焼土粒子を含む。
- ⑥暗褐色砂質粘土層
- ⑦黄橙色砂質粘土層



第48図 第9号住居址遺物出土状態 (1/60)

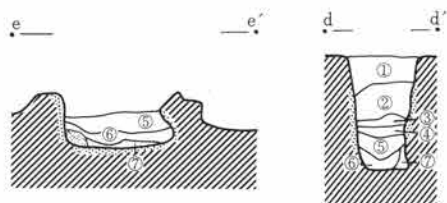
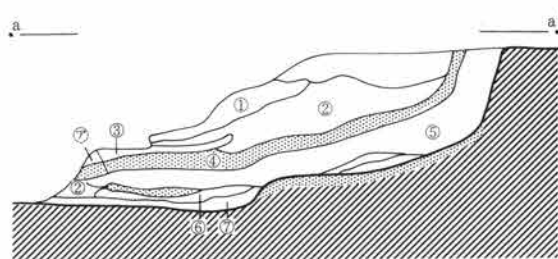


第49図 第9号住居址出土遺物 (1/3)



第50図 第10号住居址 (1/60)

0 2m



第51図 第10号住居址カマド (1/40)

0 1m

4と5が半分混合している。深鉢状土師器が2個体ある。遺物の状況は、8号住居址・6号住居址の遺物に共通性が認められる。

しかしながら、埋土状況が示すように、本住居址の時期判定の基準にはならない。

(10) 第10号・11号住居址 (第50～56図、図版12～13、27)

10号・11号住居址は検出時に二重の輪郭を示しており、北側に煙出し部が丸く検出できたが住居址であるか疑問視された。二重の輪郭に従ってセクションベルトを設置し、カマド部分の検出に努めた。結果、住居址が二重に存在する可能性が強くなり慎重に作業を進めたが新旧住居址の輪郭を区別することが極めて困難であった。

外郭の11号住居址が先行する住居であり、その内側に10号住居址が完全に入ってしまった。カマドも偶然であるのか重複して造っている。住居址床は、10号住居が11号住居床下まで掘り下げており、11号住居址のそれは極めて小面積が残ったにとどまる。従って、10号壁・11号壁等不明確な箇所も存在している。遺物は、10号住居址内出土遺物であり、11号住居址と直接的関係は薄いものであろうと考えられる。11号住居址の遺物はカマド、貯蔵穴出土のものに限って提示した。

第10号住居址土層 (b-b')

ア、黒褐色土 地山IX層を多量に混入。

イ、暗褐色土 地山X層の褐色土に黒色土が混入。

ウ、暗褐色土 灰色土をブロック状に含む。

エ、黒褐色土 地山XI層に腐植黒色土が混入。

①暗褐色土 粘性あるがしまっていない。

②黄褐色土 粘性強い。灰色土がブロック状に入る。

③灰色土

④暗褐色土 固くしまる。炭化物・焼土を少量含む。

⑤褐色土 固くしまる。炭化物・焼土を含まない。

⑥灰褐色土 粘質、遺物包含層、腐植土混合。

⑦褐色土 地山IX層の単純流入、マンガン粒著しい。

⑧灰黒褐色土 地山IX層をややブロック状に混入。

⑨地山IX層と腐植土との混合土。

⑩灰黒褐色土 地山IX層をブロック状に混入する。

⑪褐色土 地山のX層と腐植黒褐色土の混合。

⑫黒褐色土 粘性が強い。

⑬褐色土に灰を多量に含む。

第10号住居址カマド土層

a-a'

①灰褐色土 灰色土との混合。

②灰褐色土 炭化物・焼土粒を含む。

③灰色土 焼土と灰の混合。

④天井 焼土

⑤灰褐色土 焼土・灰を含まない。

⑥灰層

⑦褐色土

e-e'

⑤灰色土 灰が混入し、焼土・炭化物は含まない。

⑥灰色

⑦黒褐色土

d-d'

①天井

②灰褐色土

③褐色土 焼土と炭化物をやや含む。

④炭化物 最終の床。

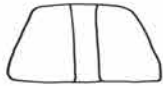
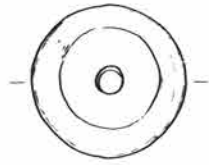
⑤灰と褐色土の混合 焼土をやや含む。

⑥灰 粘性が強い。炭化物・焼土を含む。

⑦砂質の黄褐色土

イ 第10号住居址

10号住居址は、東壁中央やや南寄りにカマドを設けた深い掘り方の方形プランを持つ遺構である。住居址床は基本土層第X層に求めている。床の東南隅には卵形の貯蔵穴が掘られていて周溝は検出できなかった。カマドは住居内と外に半分ほどに作られている。粘土を用いて袖を造り出して

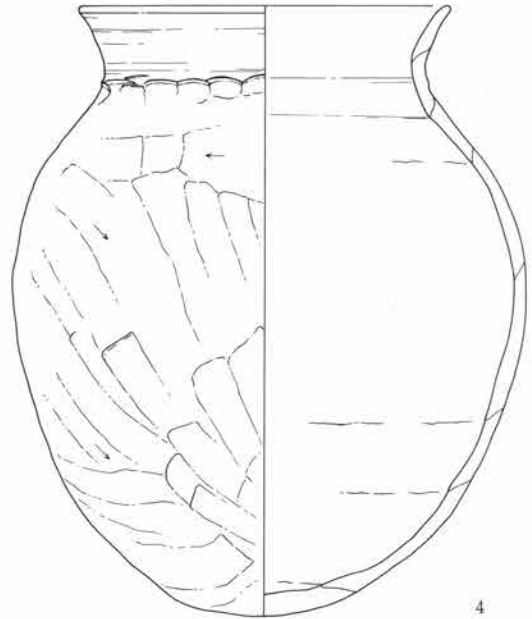
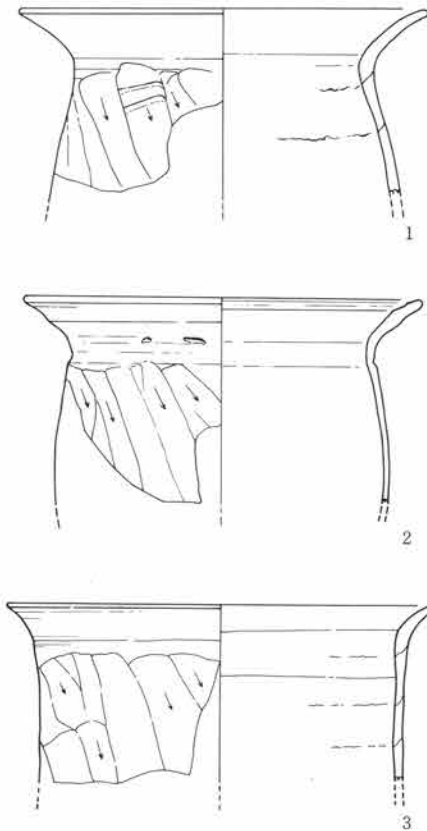


0 3cm

して方形の火床を持つ。煙道はカマド奥壁の近い所から掘り出し、緩く掘り上げている。煙出し部はほぼ垂直に掘られている。カマド、煙道ともに天井部は欠落していた。

第52図 第10号住居址出土遺物・その1 (1/2)

埋土の状況は、細かく土砂が堆積している状況を示しており、当住居放棄後は自然に埋没していったと考えられる。4~5層に遺物が混入しておりこの時期に土器類の投入があったと考えられる。また、灰黒褐色土(腐植質の異物を含む)と地山IX層の褐色土が3~4回互層をなしていることも注目される。他の住居にみられる灰色土は無い。遺物出土状況は、床に直接つくものは皆無である。いずれ



0 10cm

第53図 第10号住居址出土遺物・その2 (1/4)

も20cm～40cm程の高さにあり、初期流入土砂堆積層よりも高い位置を示している。

構造規模

①N-21° -W ②4.3m×4.6m ③70～90cm ④1.80m、1.80m、1.90m、2.00m ⑤ナシ ⑥75cm×55cm、深さ36cm ⑦幅55cm、奥行き50cm、高さ約70cm ⑧幅25cm、長さ130cm

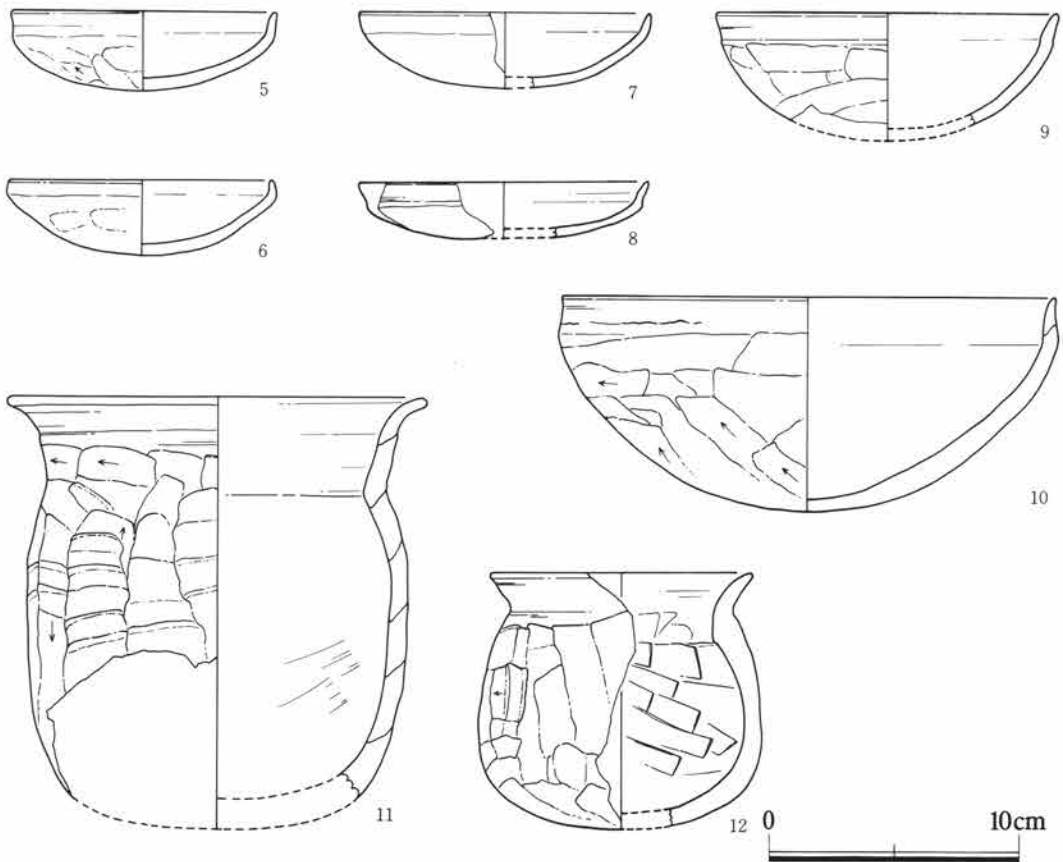
遺物

遺物は土師器破片がほとんどを占める。灰釉陶器、須恵器破片は皆無である。土師器甕はほぼ完形のA類亜種系1、D型3個体分破片である。坏は、C類4の器種が中心であるが破片が極めて多かった。また大型坏1個体、小型甕（B類・C類）2個体である。この他多量の土師器甕、坏破片を検出した。

これらの遺物は、土層の所で概略示したように、本住居に直接結びつくか否かの微妙なところである。

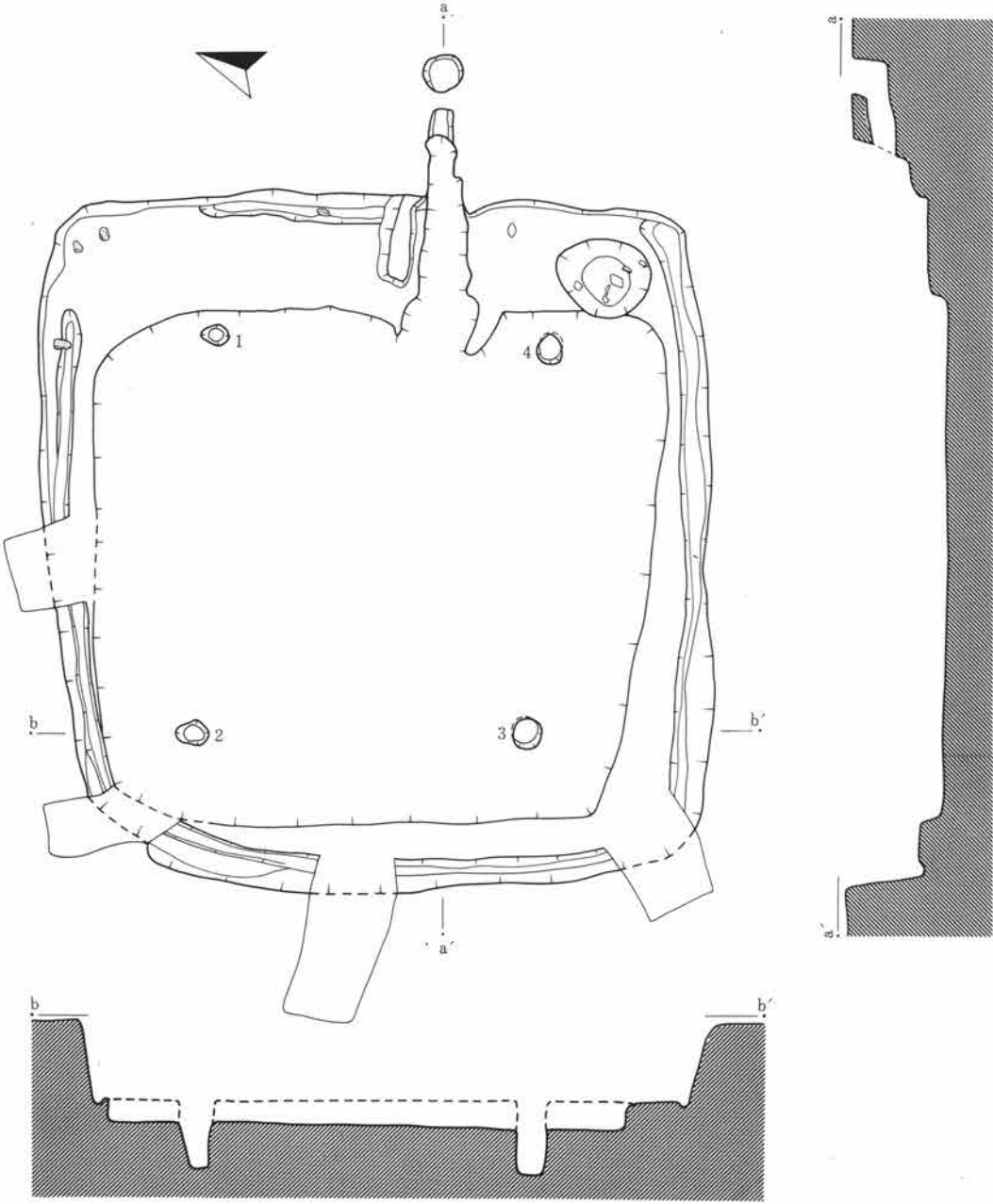
ロ 第11号住居址

図・写真でわかるように、11号住居址は10号住居址によって破壊され残る部分は極めて少なかった。貯蔵穴とカマド一部が残ることでその輪郭が判定できる程度である。10号住居壁から小トレ



第 54 図 第 10 号住居址出土遺物・その 3 (1/3)

ンチを延ばして壁の位置を確認したのだが、その検出は極めて困難であった。住居平面はほぼ方形プランで、東壁中央やや南にカマドをつける。床は10号住居より浅く造られる。壁周溝は、東北隅と、カマド右脇壁下以外は回っている。貯蔵穴は楕円形で深く掘り込んでいる。本住居址より出土する遺物は極めて少なく、貯蔵穴及びカマド左脇壁下部分に残っていた。小屋組みの主



第 55 図 第11号住居址 (1/60)

柱穴は床面に4本が確認でき、住居平面对角線上に設置されている。カマドは粘土カマド袖で左側70cmが住居内に残る。煙道部も1/2は破壊を受け不明。埋土の状況は不明であるが、一部残存土層をみると、比較的薄い腐植土の堆積が多いことよりみて、放棄後に自然埋没したように考えられる。

構造規模

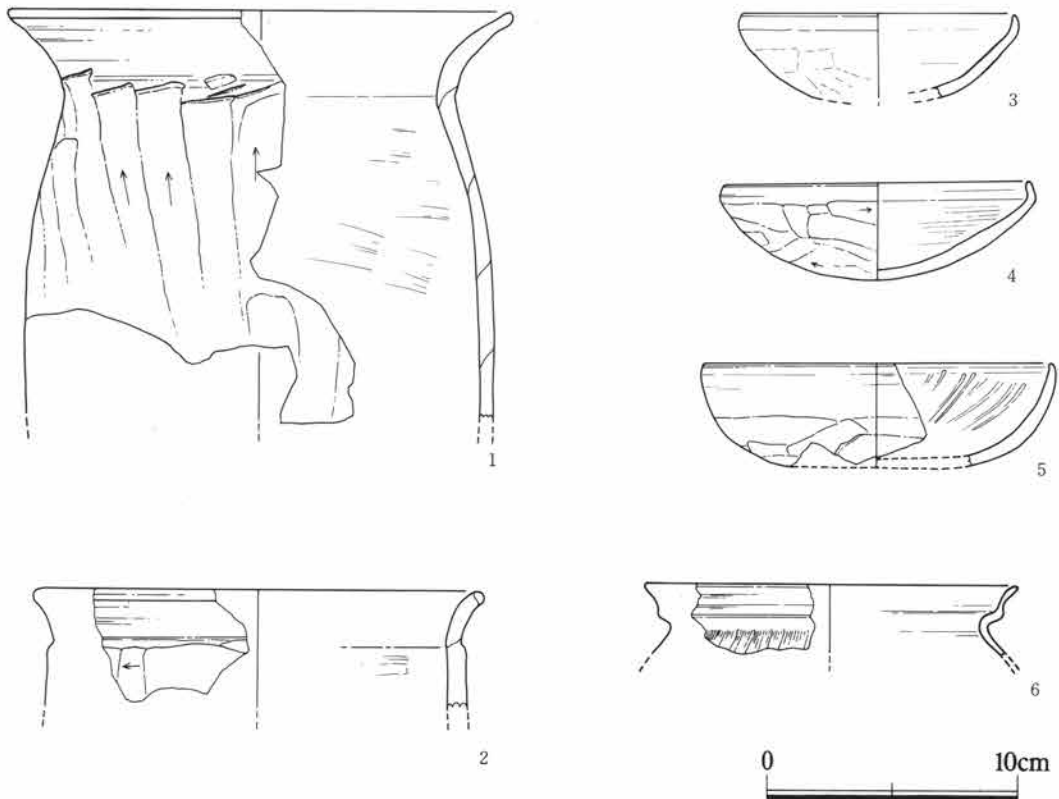
①N-12°-W ②5.9m×5.7m ③60cm程 ④3.40m、2.80m、3.30m、2.80m ⑤上幅15cm程度、深さ5cm程度 ⑥80cm×65cm、深さ75cm ⑦幅不明、奥行70cm、高さ不明 ⑧煙道長130cm

遺物

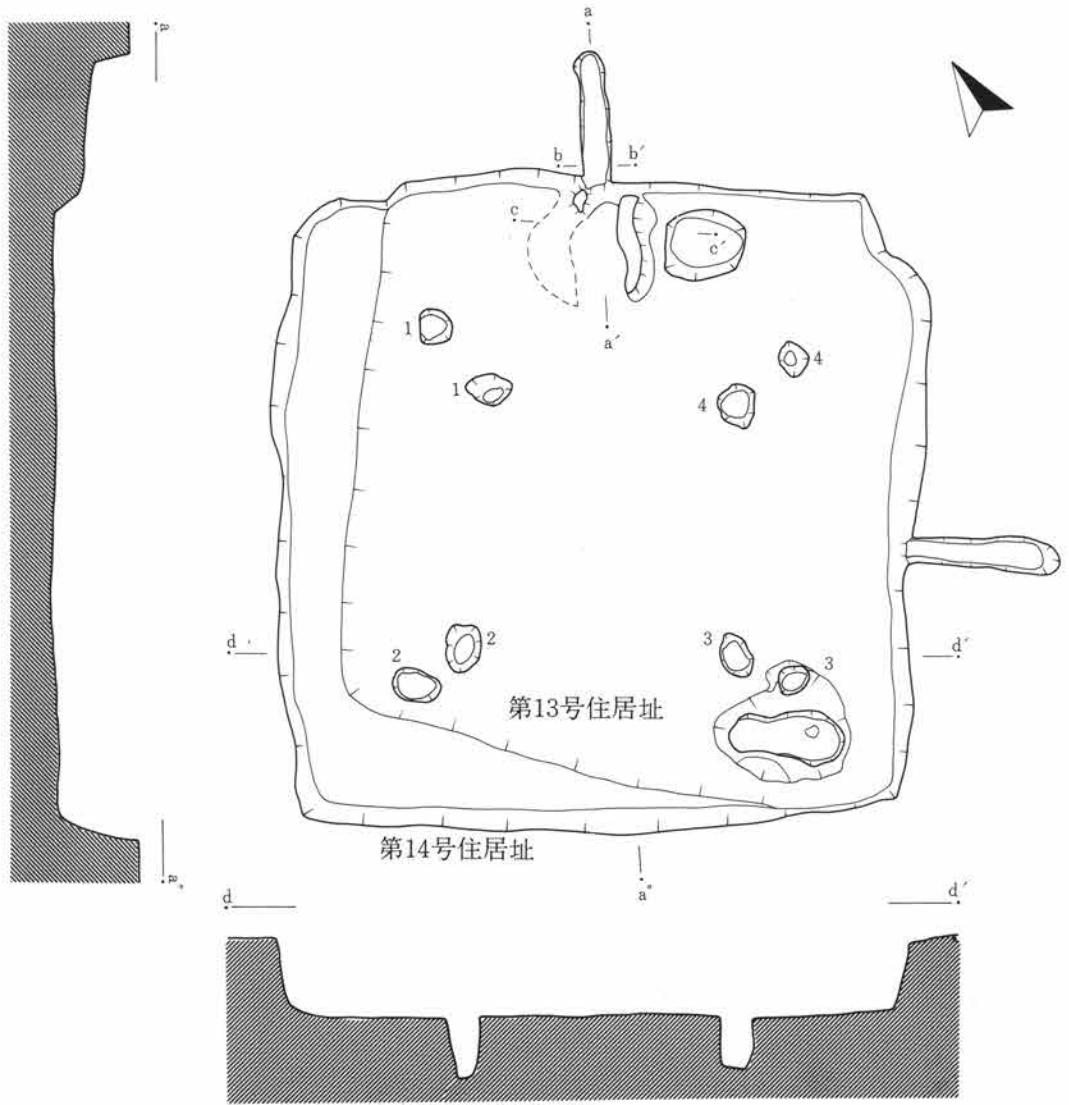
本住居の時期を決める遺物は、第56図の坏、及び1の甕破片である。坏は、貯蔵穴の上層に傾いて出土しているので、この住居址に直接結びつくか、この住居址が放棄されて極めて近い時期の遺物と考えられる。他の遺物は埋土中であって、6のS字甕口縁部は埋土最上部混入である。

(II) 第13号・14号住居址 (第57~64図、図版14~15、28~29)

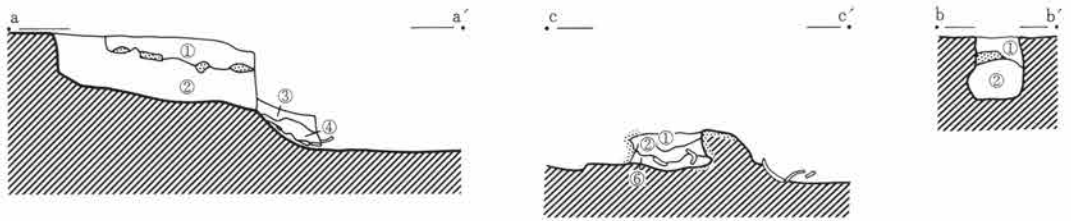
13・14号住居址は、極めて追求の困難な遺構であった。初めより北側と東南側に各々煙道と煙突



第56図 第11号住居址出土遺物 (1/3)



第 57 図 第13・14号住居址 (1/60)



第 58 図 第13号住居址カマド (1/40)



が検出され、2軒の住居址か、または、1軒に2ヶ所のカマドを有するものかいずれかであろうと推定されていた。遺構平面に多少のズレは認められるもののどちらかの判定が得られないので、やむを得ずセクションベルトを残し掘り下げることとした。しかし、埋土の上部からも遺物が出土しますますその判定を困難にした。結果は、2軒の住居址を同時に掘り下げたことになってしまった。

イ 第13号住居址

13号住居址は7号住居址の下に検出できた。他の住居址同様に極めて深く掘り込んである。カマドを北壁中央やや西寄りに造り付けた方形プランの住居址である。住居床は基本土層第X層に求めている。床面上には遺物が散乱していた。小屋組支柱穴は4本検出された。住居床面に比してやや小規模な柱の配置である。壁下周溝は検出できなかった。貯蔵穴はカマド右脇に接して作ってある。楕円形に近い長方形の浅いもので坏を入れていた。カマドは粘土で造られるが左袖は欠けている。カマドは住居床に作られ、中央には、高坏2個を重ね倒立させた支柱を置く。1号住居址も同様であった。煙道部は住居壁中位程に穴をうがち、緩やかに傾斜をつけ、煙突は垂直に掘り出している。

埋土状況は第60図で示すとおりで、極めて自然の内に埋没したと理解できよう。最下層は洪水による灰色粘質土が入っており注意したい。

構造規模

①N—40°—E ②4.5m×4.5m ③50cm ④2.00m、2.15m、2.00m、2.00m ⑤ナシ ⑥60cm×50cm 深さ15cm ⑦幅50cm 奥行き80cm 高さ不明 ⑧幅20cm、長さ100cm

遺物

甕類は3種に大別できる。甕A類(第62図10)、甕A類亜種(第62図9・11)、甕B類(第60図1・2・3、第61図5・7・8)。このうち和泉期の形態を残すと考えるものは、A類であって胴部が球形をなすことによる。A類亜種は口縁部外側に沈線を施文し、丸底で、最大径を胴上部にも

第13・14号住居址土層

⑦VII層と思われる
④⑦と黒褐色土との混合 } 7号住居址関係遺構
②褐色土に灰色土が混入 }

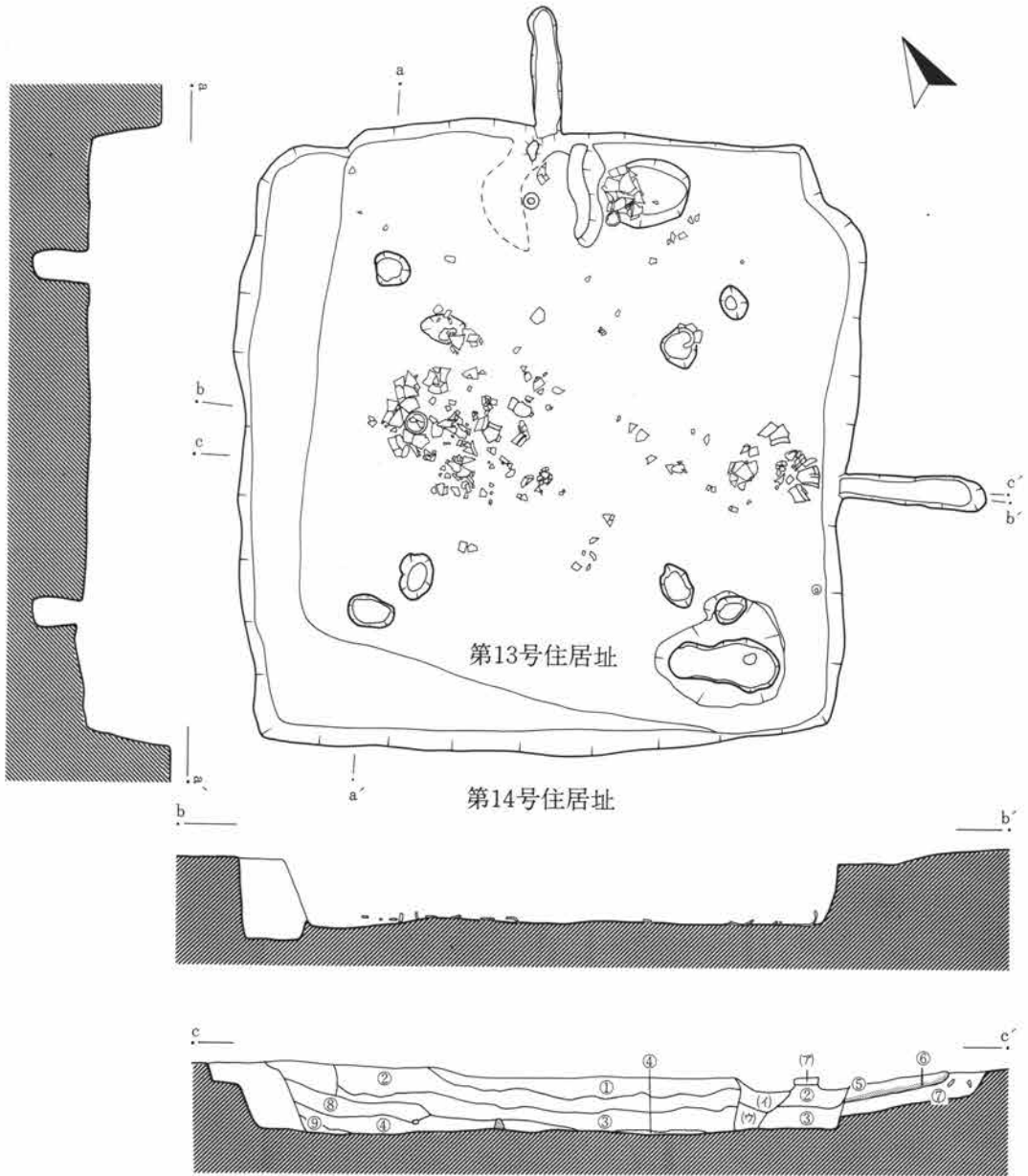
- ①黒褐色土 暗褐色土中にマンガン粒を含む。 ②暗茶褐色土 地山IX～X層、粘性強く炭化物・焼土を含む。遺物含む。
③暗褐色土 地山X層、粘性強くなり灰白色の水成粘質土混入。焼土多い。 ④水成灰白色粘質土
⑤煙道部天井。 ⑥焼けて固くしまっている。
⑦黒褐色土 細砂状、粘性ないがよくしまっている。 ⑧灰色粘質土 ④にやや褐色土混入。
⑨地山のIX層と黒褐色土の混合、黒味強い。

第13号住居址カマド土層

- ①褐色土 地山IX層(天井) ④灰 火床
②暗褐色粘質土 ③暗褐色土 灰と焼土ブロック混合。 ⑥灰褐色土 焼土・炭化物を含む。

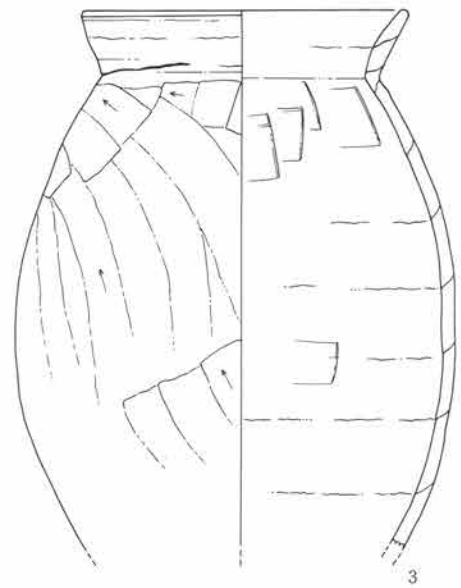
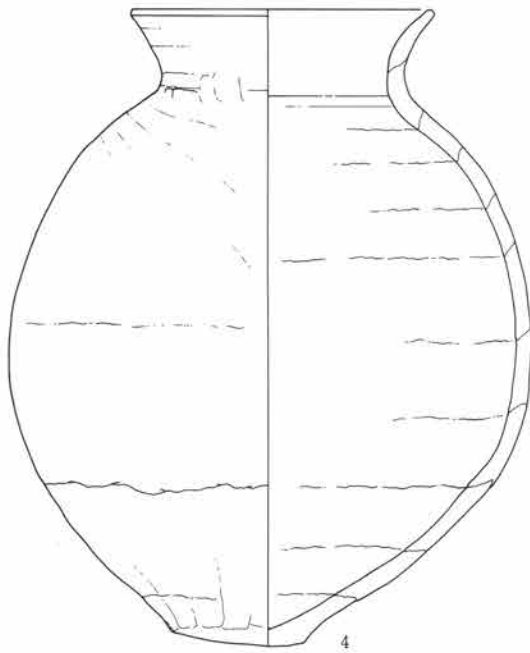
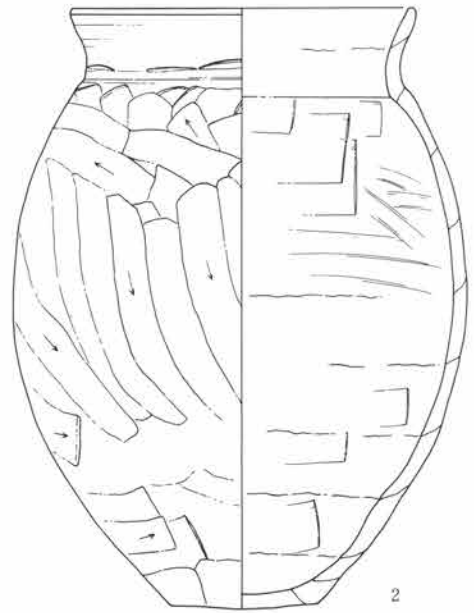
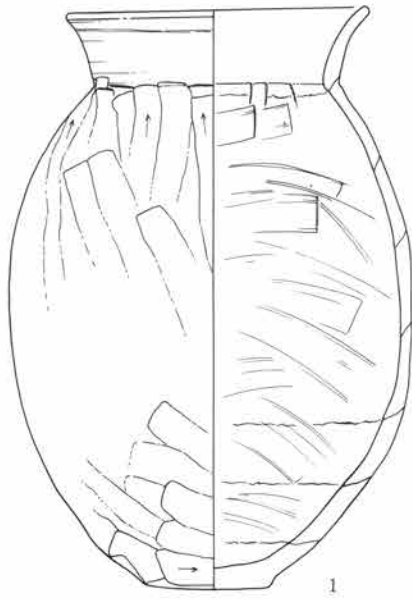
たせるもので壺形土器に近い形状のものである。この土器については後章で触れたい。

坏類は、和泉期の土器と、須恵器坏の身を模倣した土器の2種類に大別される。器内面にヘラ研磨痕がつく。また外面底部をヘラで削り整形する手法は、両類ともに共通している。和泉期に属する坏A類（第63図12・13）、B類（第63図14～20）と、須恵坏身の模倣の坏C類（第63図21・



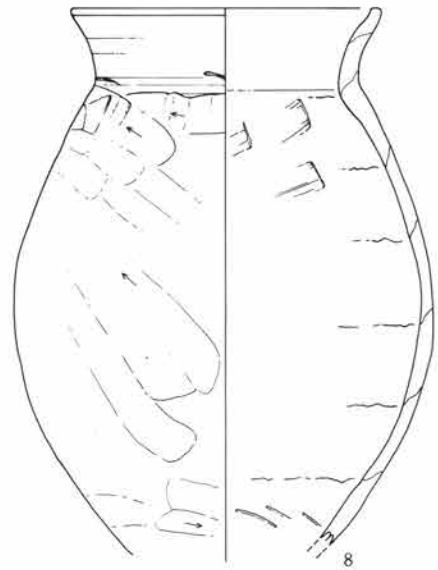
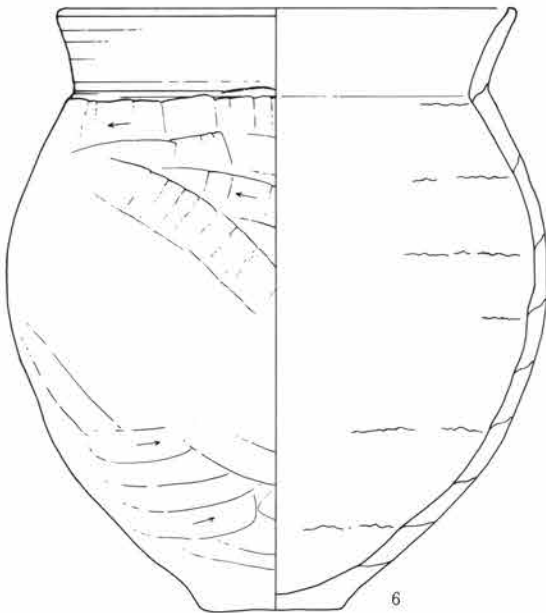
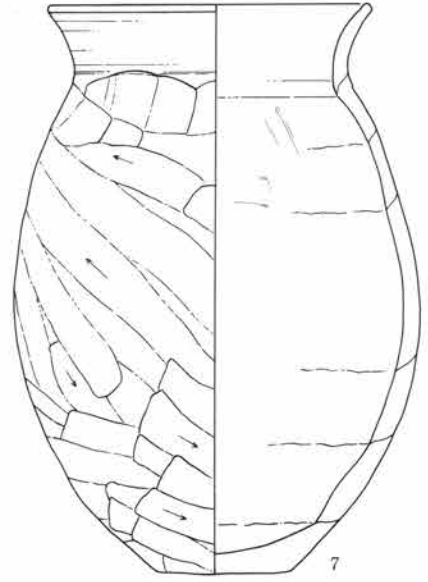
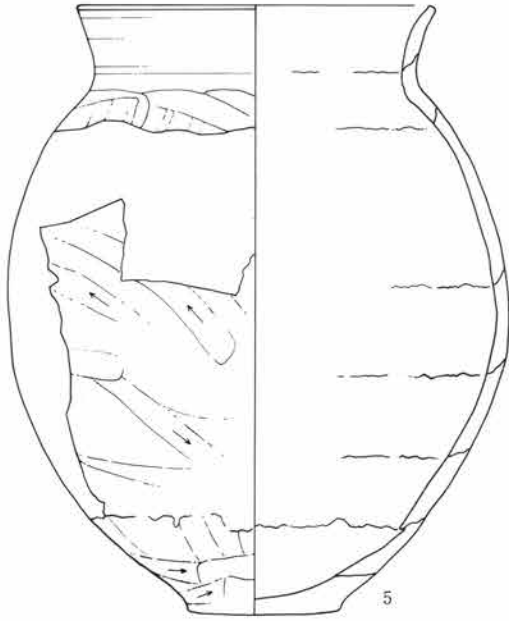
第 59 図 第 13・14号住居址遺物出土状態 (1/60)

0 2m



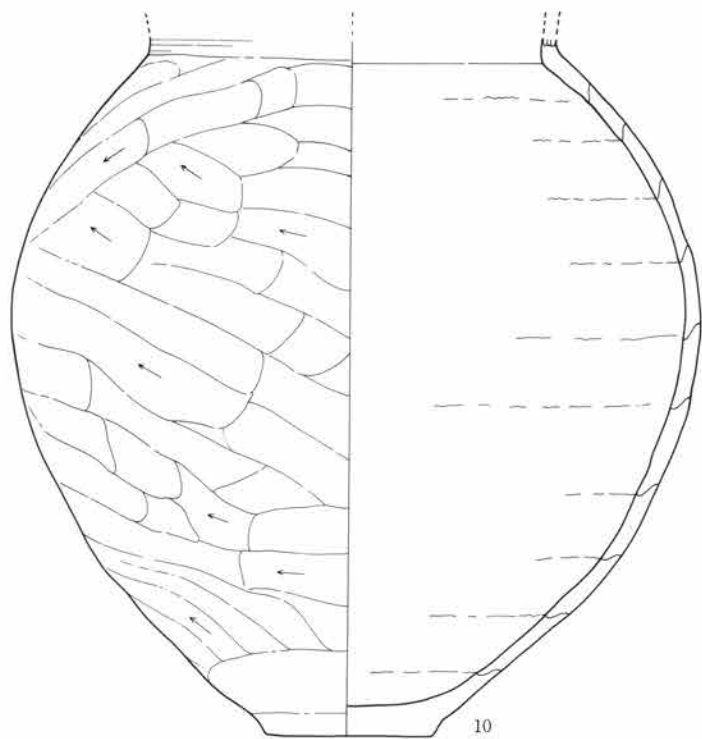
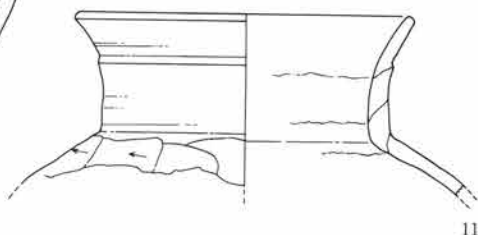
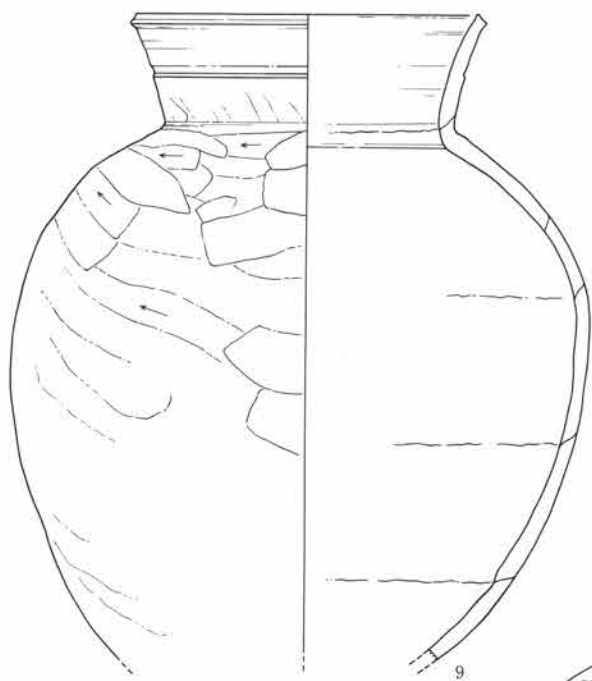
0 10cm

第 60 図 第 13・14 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)

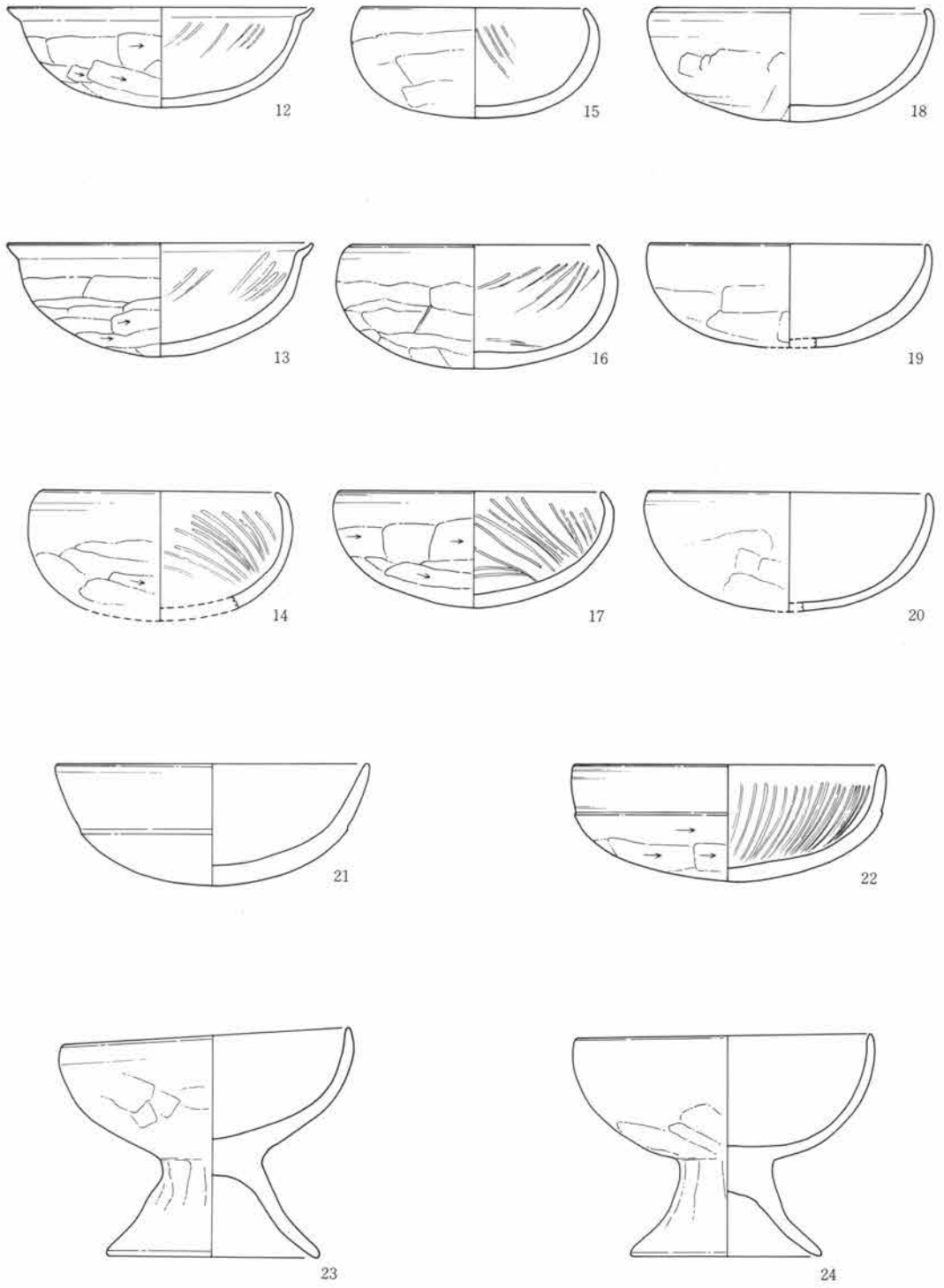


第 61 図 第 13・14 号住居址出土遺物・その 2 (1/4)





第 62 図 第13・14号住居址出土遺物・その3 (1/4)



第 63 図 第13・14号住居址出土遺物・その 4 (1/3)

22) である。高坏は、五領・和泉期の本来の高坏でないタイプである。

以上のように床に直接検出できた遺物だけを示したが、その組み合わせは、鬼高 I 型式後半の土器セットを考える上で良い例と言えよう。

ロ 第14号住居址

ほぼ正方形のプランをもち、東壁にカマドをもつ。床は13号住居址と同じか不明。壁周溝は検出できなかった。貯蔵穴はカマド右脇で長楕円形をし、極めて深い掘りこみである。上部にカメが倒れ出土した。埋土状況等不明。小屋組み支柱穴は4本検出できた。

構造規模

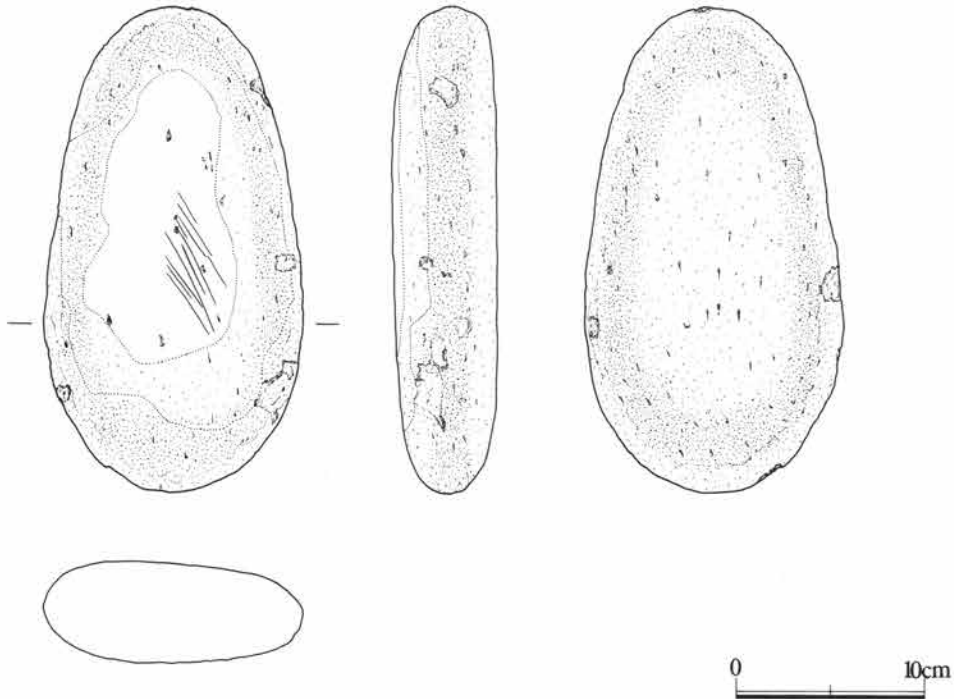
①N-58°-W ②5.0m×5.0m ③50cm ④2.58m、2.80m、2.95m、2.55m ⑤ナシ ⑥110cm×60cm、深さ75cm ⑦不明 ⑧不明

遺物

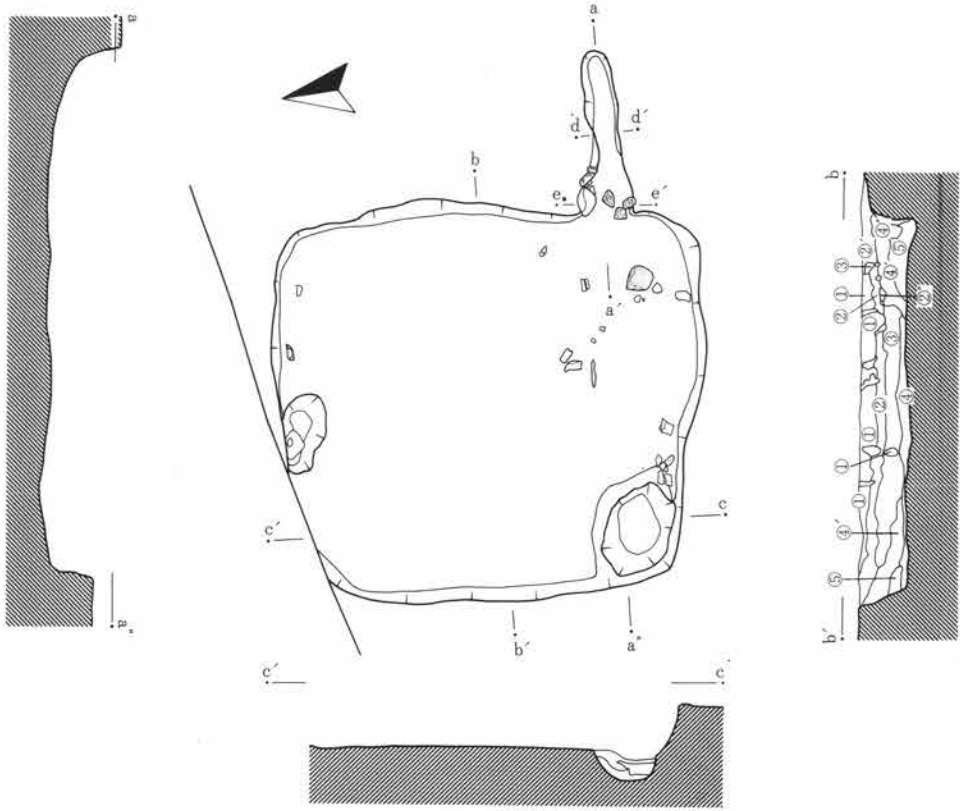
大型の甕形土器一例(第60図4)が14号住居址の遺物と判定できるものである。甕のA型に属するもので、壺形土器と長胴甕(B類)との中間的存在である。

(12) 第15号住居址(第65~68図、図版16~30)

15号住居址は検出された時点においてB軽石が円形に堆積する窪地状の遺構が推定された。しかし東側に煙道が発見されるに至りB軽石が住居址埋土上部を覆っているものと確定ができた。



第64図 第13・14号住居址出土遺物・その5 (1/4)



第 65 図 第15号住居址 (1/60)



第 66 図 第15号住居址カマド (1/40)

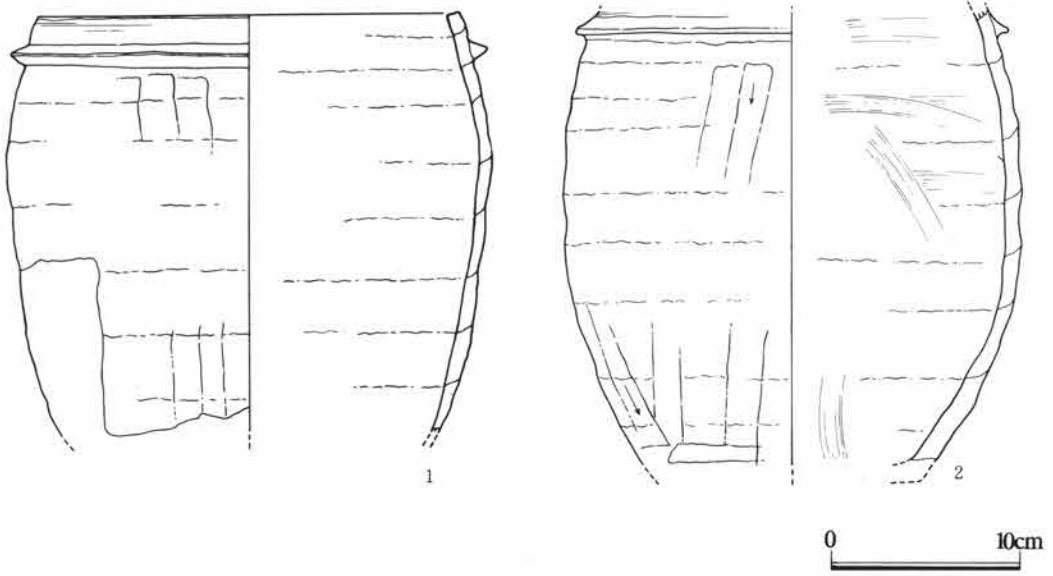


第15号住居址土層

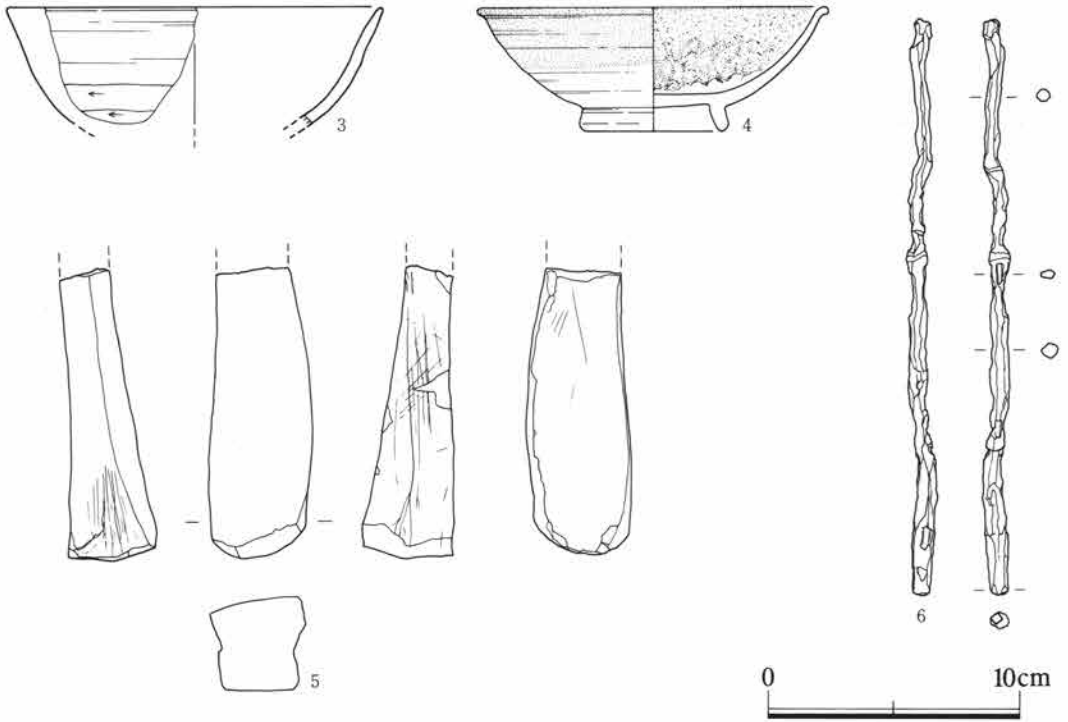
- ① B 軽石 ② 黒色粘質土 B 軽石を若干含む。 ②' 黒褐色土 B 軽石を若干含む。 ②'' ②と③の混合
- ③ 黄褐色粘質土 小礫を含む。 ④ 褐色粘質土 炭化物・焼土を多量に含む。
- ④' 暗褐色粘質土 焼土粒を若干含む。 ④'' ④'よりもやや暗い。
- ⑤ 暗褐色粘質土

第15号住居址カマド土層

- ① 黒色土 B 軽石を若干含む。 ①' ①に似る 焼土粒を含む。 ② 黒褐色粘質土 B 軽石をわずかに含む。
- ③ 褐色土 B 軽石をわずかに含む。 ④ 褐色土 焼土粒を若干含む。
- ④' ④よりもわずかに暗い。 ⑤ 暗褐色粘質土 焼土粒を含まない。



第 67 図 第15号住居址出土遺物・その1 (1/4)



第 68 図 第15号住居址出土遺物・その2 (1/3)

住居は、古い時期の住居に比べて浅いが、本来は、この深さに、15cm程上乘せしたものであることが煙突部精査で判明した。カマドは東壁の南すみに作り、火床部分が気持広げて作られ、焚口に石を置く。煙道は、火床からゆるやかに上がり煙突部で垂直となる。天井部は、検出時に削りすぎ破壊してしまった。床は基本土層IX層中につくり、固くしまっている。小屋組みの支柱穴は住居内に検出できなかった。住居外において柱穴の検出を試みたが発見されなかった。貯蔵穴らしい住居内土塚が西南すみに検出されたが遺物の伴出はない。遺物はカマド内部及びカマド前の床上に少量散在していた。

構造規模

①N—82°—W(磁北に近いと理解できよう) ②3.2m×3.5m ③36cm+15cm ④ナシ ⑤ナシ ⑥70cm×50cm、28cmほど ⑦幅40cm、奥行約40cm ⑧幅20cm、長さ約70cm

遺物

遺物は、羽釜破片がカマド内及びカマド前床面より検出された。また、灰釉陶器片(第68図4)及び白瓷破片(第68図3)も混在する。B軽石堆積状況を見ると、11世紀頃の資料となろう。

(3) 小 結

本遺跡における集落の状況については、狭小な域の調査であると同時に、土砂採取による破壊部分が多く、その全体的状況は判断できない。住居址群は、東西に細長く続く沖積地内微高地に造られており、縄文土器堆積時代以降は比較的安定した土地であることが判明した。一方、検出できた住居址は和泉後期から12世紀初頭にかけての各時代のものであるが、7世紀後半から8世紀初頭に集中する傾向がある。また、住居址を構成する要素(カマド、貯蔵穴等)をみると、明らかに時代による傾向が認められる。従ってこの住居址のタイプに遺物を組み合わせることによって、住居址の使用時期推定や遺物の時期推定をより安定した方向へ導くことが可能となろう。また、住居址埋土中に、洪水によると思われる灰色粘質土の堆積が幾例か認められ、住居址間の時期差判定の一基準ともなっていることも特筆できよう。また、第15号住居址と第7号住居址内埋土でのB軽石堆積状況と伴出遺物は、11世紀後半から12世紀初頭の状況を良く示す資料であることも付け加えたい。

また、住居址の小屋組支柱穴の設置方法についても、この遺跡に共通するものが認められこれについても触れておきたい。

イ、住居址の構成要素によるタイプ化

第3表で示すように、住居址の要素が整う時期は、横穴式古墳築造の時期に重なる。即ち本遺跡の第13号・14号住居址～第4号住居址の時期に当たる。この時期をすぎると、周溝、貯蔵穴そして小屋組支柱穴の順に欠落していくことがわかる。そして住居址の面積自体の縮少へと進んでいる。この変化は、他の遺跡においても普遍的な現象でもある。

また、カマドの形状及び取り付け位置の変化も、これに従うものであると理解できる。特に、

カマドが、住居内から外へ造り出される時期は、構成要素の欠落の開始時期と重なっている。同時に、この時期（II-3からII-6の時期）の住居址（第1号・8号・10号住居址）出土遺物を見ると、古墳時代を代表する組み合わせから、奈良時代を代表する須恵器と土師器の組み合わせの中間に当たるものである。

従って、住居址の形状を構造要素化し分類することによって、その住居址の属する概略の位置づけが可能となる。

第3表 竪穴式住居址タイプ別け表

類 型	構 成 要 素					備 考	
	カマド形状	位 置	柱 穴	貯蔵穴	周 溝		
I		炉		○	○		
II	1	カマド住居内	不規則	○	○	○	13・14住 6C前
	2	カマド住居内	北中央	○	○	○	4住 6C後
	3	カマド住居内	東中央	○	○	○	1・8住 7C中葉
	4	カマド半分	東やや南	○	○	○	
	5	カマド半分	東やや南	○	○	×	10住 7C後
	6	カマド住居外	東やや南	○	○×	×	小型化 6住
	7	カマド住居外	東壁すみ	×	○×	×	小型化 15住
	8	カマド住居外	東南すみ	×	○×	×	小型化 7住

ロ、住居平面と小屋組み柱穴の規格性について

古墳時代に属する竪穴住居址における柱穴・貯蔵穴のあり方が規格性の強いことは、すでに先学により指摘、研究されているところである（注）。本遺跡検出の住居址において、かような規格性が認められるとすればII-2タイプからII-6タイプに属する遺構においてである。この傾向を整理すれば概略次のごとくである。ここでは、住居址平面の対角線上に柱穴が乗ってくるものを対象とし、柱穴間の長さが住居平面の対角線長に対してどの程度の割合を占めるのかを基準にし整理した。

- ① 柱穴対角線長が50%程度を占め正方形プランでカマドを壁の中央部に設置するタイプ
住居址平面において、4本の柱穴の占める面積が小さく、柱と壁間に充分のゆとりが存在する。——第4号住居址、第1号住居址、第6号住居址。
- ② 柱穴が、住居の四隅に追いやられ、柱穴対角線長が70%程度を占める正方形プラン。カマドは壁中央近くに置かれる。
これは、①の平面形の柱穴間長を、縮少せず、住居壁位置を平行して内側へ移動した、①の縮少版とも言えるタイプと考えられる。——第5号住居址、第8号住居址。

この形状差は、各住居址の時期を考えると時代差を示すものではなく、住居址規模差によるものである。このことは、人間が居住する為に必要なスペースには住居の大小に関係なく基準的なものがあることを示すものであろう。従って、この時期以降で、プランが縮少期に入れば、4柱穴内空間を確保するために柱穴は、住居の壁寄りに設置せざるを得なくなり、かつ、住居平面对角線上に正確に設置され得なくなる。このことは同時に貯蔵穴の存在を構造上拒否することとなる。

この規格性の背景をどう考えるかは紙数上割愛せざるを得ないが、規格性の高い住居址が生活の場となった時期は、どうみても7世紀中葉以前である。従って、それを古墳造りの盛衰と合致させることは、住居址が縮少化していく7世紀後半にも規格性の高い截石切組積石室を出現させる現状をみると即断はゆるされない。が、自然石乱石積横穴式石室が群集墓として各地に形成されていく時期の村落と、截石切組積石室が限られた地区に少数出現する7世紀後半代の集落の置かれた社会は大いに異なるところであろうから、少なからず、大きな社会変化の内で住居址の規格も変化していると理解することは当を得ないことではなかろう。

蛇足ながら、規格性のみえる住居址の柱間長は、高麗尺によって設計されるとみても差しつかえないであろう。

注 欄 国男『古代の土木設計』ロッコウブックス、1983

2 掘立柱遺構

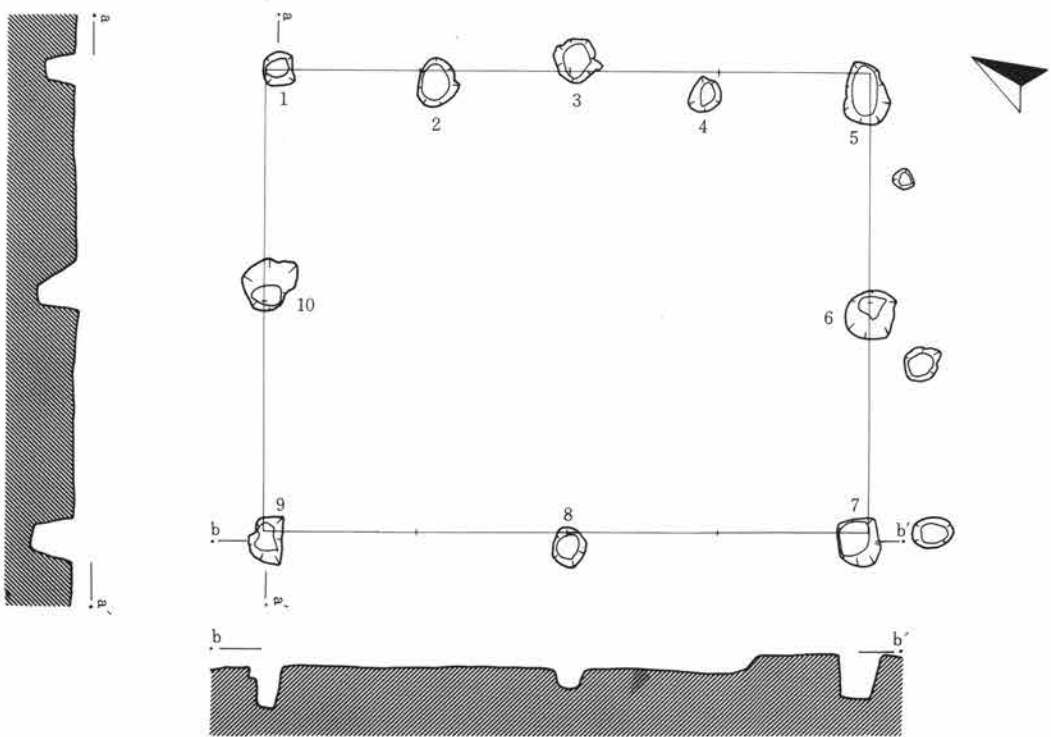
(1) 第1号掘立柱家屋 (第69図)

第1号掘立柱遺構は、2間×2間で棟方向が、N-29°-Wのやや長方形の家屋である。柱穴は、方形を呈するものが多い。柱穴埋土は、基本土層第X層土が中心となって混入しているが、検出時に上は相当カットしてしまっていると思われる。廂状の柱穴は検出されなかった。また、中央の部分にも柱穴は無い。6と7番の柱穴外に2本の柱穴があるが、当遺構との関係は不明。

当遺構の時期を推定する資料は極めて少ない。柱穴が方形掘りであること、柱間の長さが30cm近値1尺で設計されているので8世紀以降の時期に想定可能であろう。

第4表 第1号掘立柱家屋柱穴間の長さ一覧表

1-2	1.30m	5-6	1.70m	9-10	1.75m	棟(東)	4.75m
2-3	1.15m	6-7	1.85m	10-1	1.80m	(西)	4.75m
3-4	1.05m	7-8	2.30m			梁(南)	3.55m
4-5	1.25m	8-9	2.40m			(北)	3.70m



第69図 第1号掘立柱家屋 (1/60)

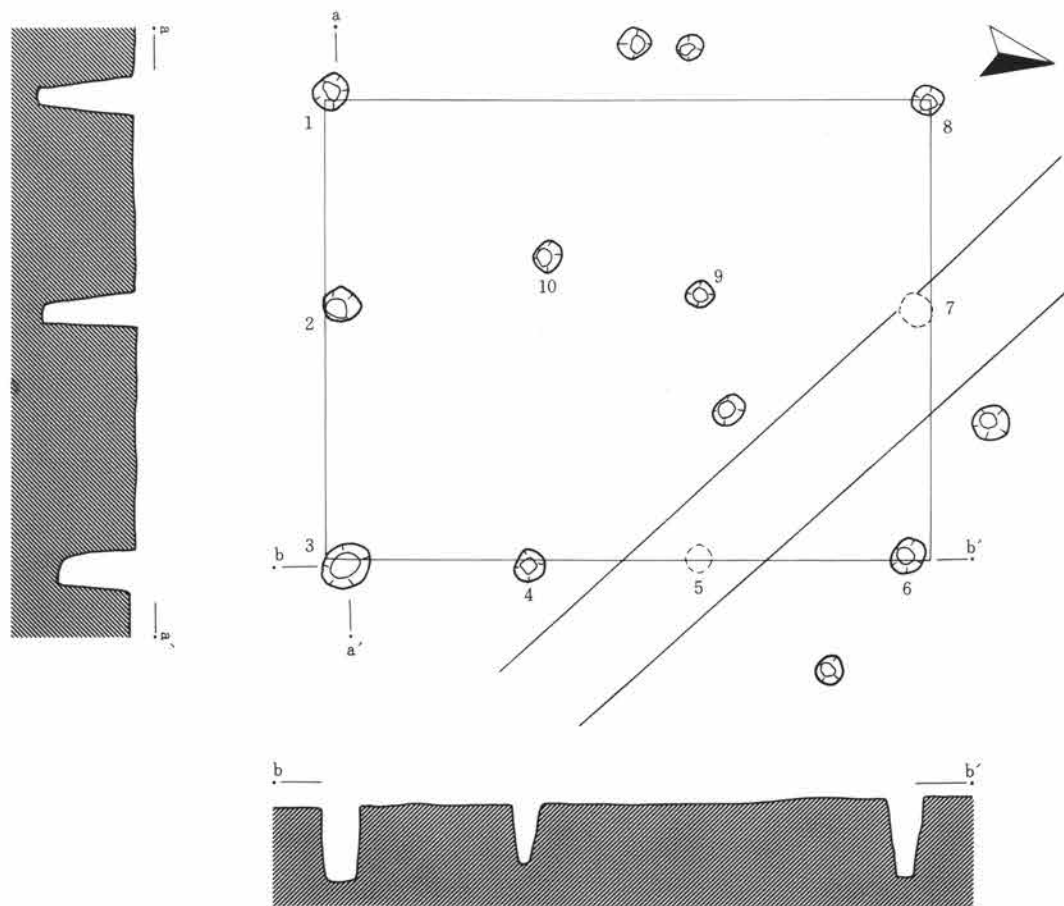
(2) 第2号掘立柱家屋 (第70図、図版17)

第1号住居址の南側に展開する柱穴群の内に位置する。柱穴は、丸味の強い掘り口を示し、極めて深い掘り方をしている。検出された柱穴の数が少なく、形状についての正確な値は求めにくい。総柱状の建物であろうか。棟方向はN-9°-W。

時期を決める手掛かりは皆無である。ただ、柱穴間の長さは、約30cm単位で割り切れるケースが多いので、第1号掘立同様の時期とみることが出来る。

第5表 第2号掘立柱家屋柱穴間の長さ一覧表

1-2	1.70m	4-6	3.00m	棟(東)	4.50m
2-3	2.05m	6-8	3.60m	(西)	4.80m
3-4	1.50m	8-1	4.80m	梁(南)	3.80m
				(北)	3.60m



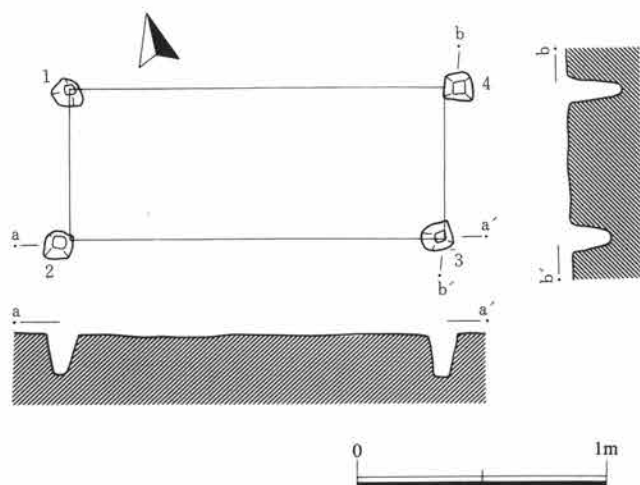
第70図 第2号掘立柱家屋 (1/60)



(3) 第3号掘立柱家屋 (第71図、図版18)

第3号掘立柱家屋は、第2号住居址の北西に位置する。検出時に、各柱穴は、青灰色土が埋めており相当降った時期のものであろうと推定される。棟方向はN-73°-Wで、1間×1間の建物で、長方形の平面形を示している。時期を決める手掛かりはない。各柱穴間の長さは以下のようなものである。

各柱穴間が約30cmで割り切れるもので、8世紀以降の時期のものであろう。



第6表 第3号掘立柱家屋

柱穴間の長さ一覧表

1-2	1.20m
2-3	3.00m
3-4	1.20m
4-1	3.10m

第71図 第3号掘立柱家屋 (1/60)

3 土 壇 (第72~74図、図版16~17、20)

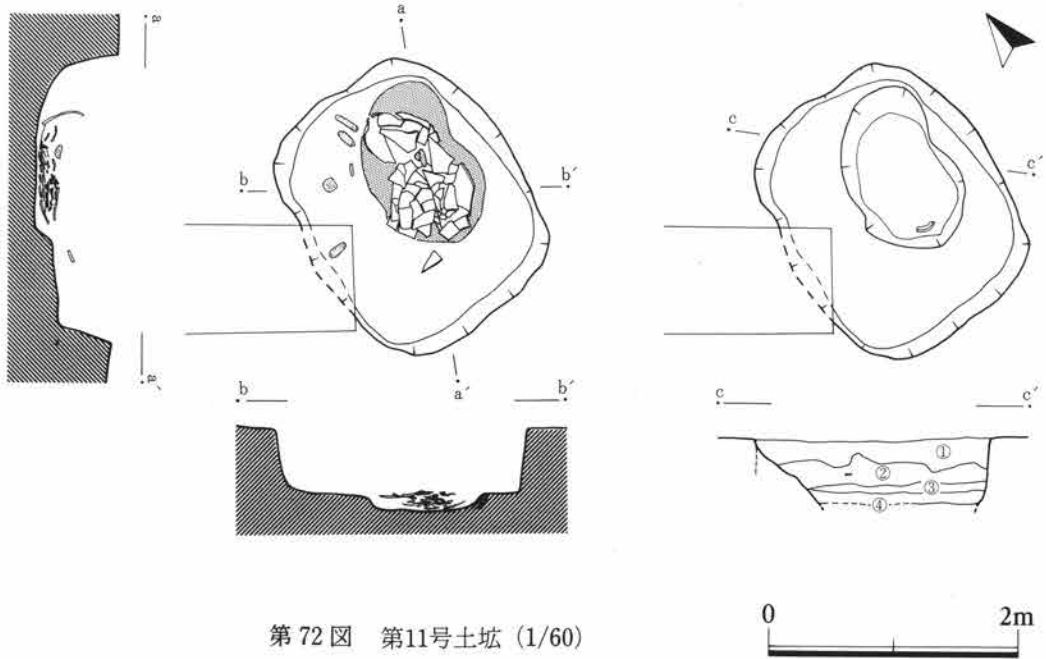
土壇は多数検出できたが、明らかに近世に属するもので小規模なものは割愛した。また、多くが時期や性格が不明である。従って、遺構図と一覧表で示した(第74図、第7表)。

第11号土壇 (第72~73図、図版16~17)

第11号土壇は、試掘時のC列トレンチの最東端でその一部をひっかけ発見された。当初は2基の土壇と推定されたが、土壇中に須恵器大甕が埋納される土壇であることが判明した。土壇は、磁北方向を長軸とした長方形の平底の土壇である。その底部をさらに長楕円に掘りくぼめて、大甕をすえている。大甕は、底部を北向きにし、安定さを増すために掘りくぼめたくぼみに胴部最大径位置から底部まですっぽりと納まっていた。埋土中には、大甕に添えた遺物の検出はなかった。また、大甕埋土中にも検出されなかった。大甕は、口縁部を欠く他は、大体が残り復原できた。口縁部は埋納時にすでに欠けていたと思われる。胴部は、最大径を上位に持たせ、底部は丸底風の造りで、全体的に器壁の凹凸が目立つ。器壁の内外は、青灰色で、中間はセピア色をする極めて硬い焼き上がりである。この器で特徴的なものは、口縁部の立ち上がり具合と、口唇部外側にシャープな稜線を持つこと、壁面をヘラなどによる調整をすること、器外面の叩きが縦方向

で平行の細かい文様、内面はスリ消し調整をおこなっている点といえる。須恵器の時期からみて、第13号・14号住居址と平行する時期の土壇と考えたい。

この土壇と須恵器大甕の状況を見ると、死体を納め埋めた土壇墓と推定されるものである。口縁部の欠け口の径は60cmあり、高さが94cmであって、その用途に充分合うものと思われる。



第 72 図 第 11号土壇 (1/60)

第11号土壇土層

- ①暗褐色土 (IX層土) 炭化物・土器片を混入。
- ②暗褐色土 炭化物・焼土を多量に混入。
- ③暗褐色土 ②より粘性が強い。
- ④黒褐色細砂土 炭化物を多く混入する。須恵器大甕の上部を覆う。

第 1 号土壇土層

- ①青灰色土に褐色土混入。

第 2 号土壇土層

- ①青灰色土 黒褐色小ブロックの砂質土が斑点状に含まれる。

第 9 号土壇土層

第14号土壇土層

- ①茶褐色砂質土と青灰色砂質土の混合。

第13号土壇土層

- ①暗褐色土 炭化物を含む。
- ②細砂質黒褐色粘質土 炭化物を多量に含む。
- ③褐色細砂粘質土 炭化物を少量含む。

第16号土壇土層

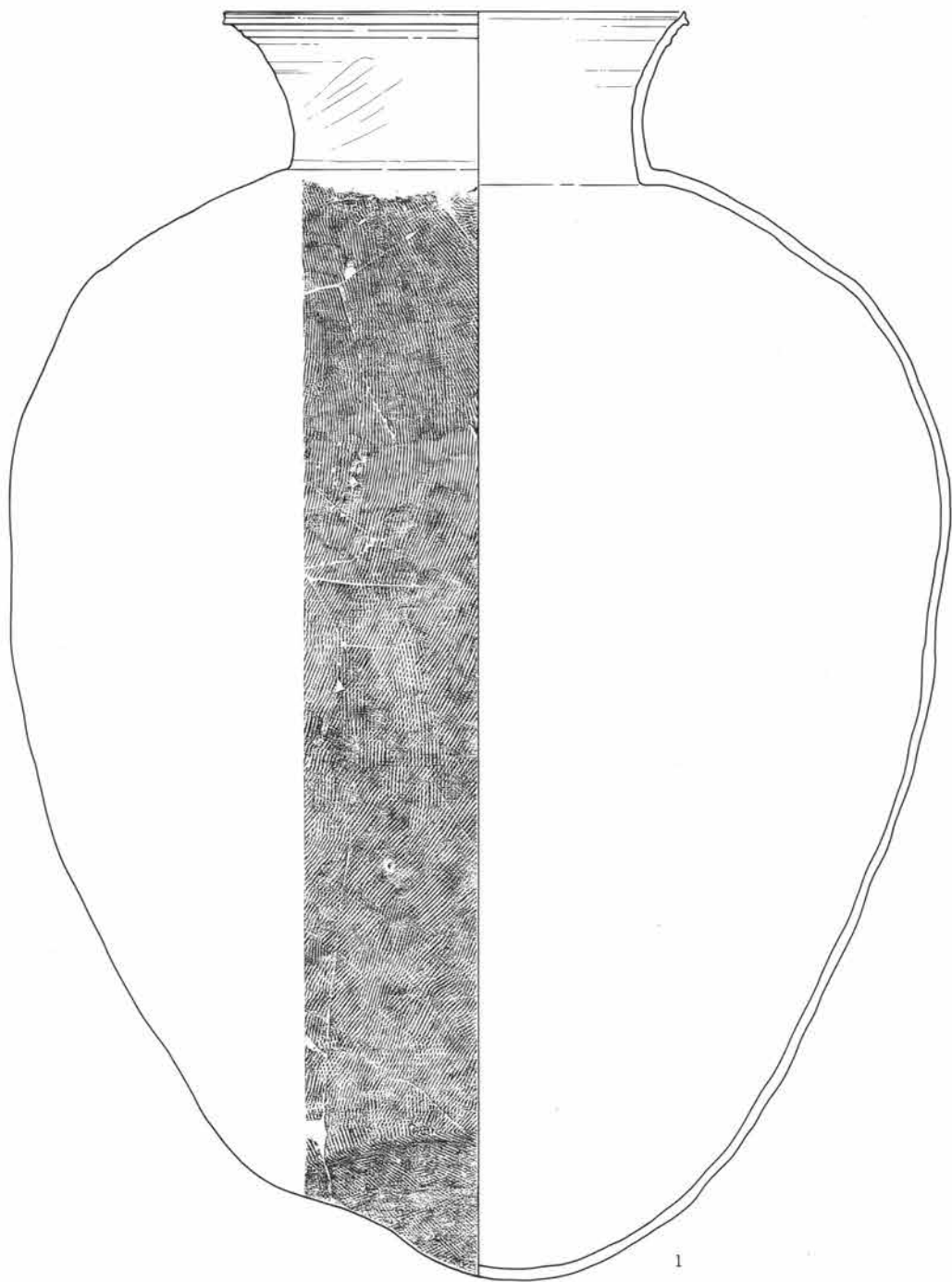
- ①暗褐色粘質砂質土。
- ①'①に似るが鉄分が少ない。
- ②暗褐色粘質砂。

第15号土壇土層

- ①茶褐色鉄分質土と黒色粘質土とが斑点状に混じる。
- ②黄褐色砂質土と①の混合。
- ③黄褐色砂質土。

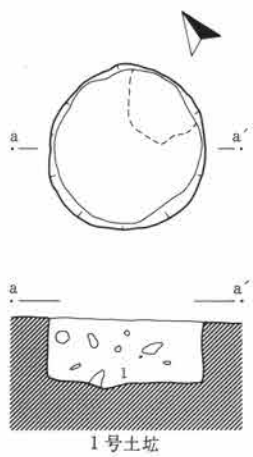
第17号土壇土層

- ①暗褐色粘質土。
- ①'①に砂質土混入。
- ①''①に似る。オレンジ色粘質土ブロックを含む。
- ②黒褐色粘質土。
- ③褐色粘質土。

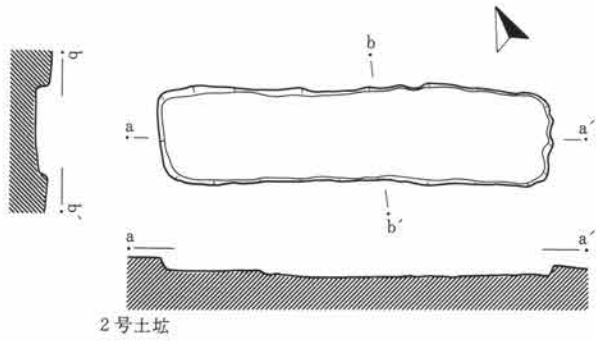


第 73 图 第11号土坛出土須惠器大甕 (1/6)

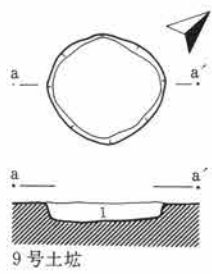




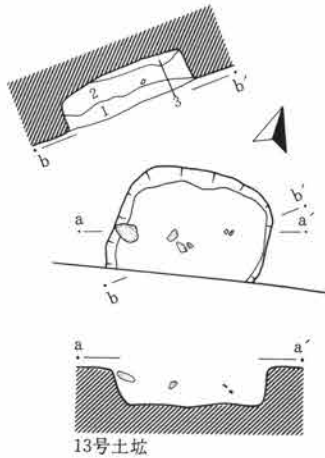
1号土坑



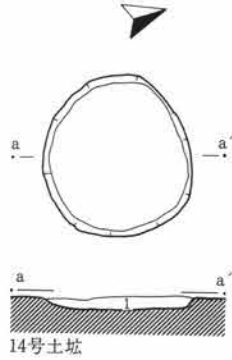
2号土坑



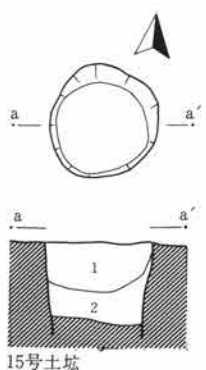
9号土坑



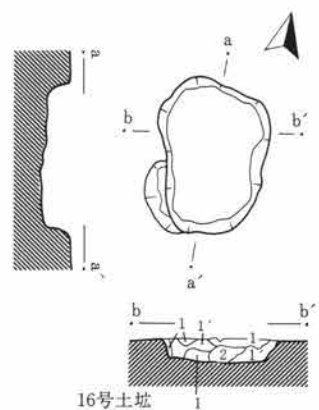
13号土坑



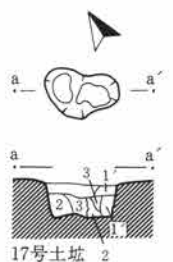
14号土坑



15号土坑



16号土坑



17号土坑

第74图 第1·2·9·13~17号土坑 (1/60)



4 水路址と耕作址〔畝状遺構〕(図版4・18)

本項で示す遺構群は、試掘トレンチA・B・Cにおいて、確認できた面即ち土師器破片を包含する層において遺構確認に入ったため、B軽石堆積層と、この層の中間にあった遺構面をカットしてしまった。従って、この遺構群は、第9号住居址廃絶後から、第7号住居址の時期、即ち9世紀代より12世紀初期までの時代に属するものであり、各々の遺構の下部のみ残って検出されたものである。いずれもB軽石が直接に溝底や畝間底まで堆積しているものはなかった。

(1) 水路址

水路址は、1区～3区において3本検出できた。第1号水路は東西に走る直線的水路である。第1号・第9号住居上を走る。検出面において上幅54cm～65cm、溝底幅25cm～45cm、深さ9.5cm～16cmの規模をもっている。走向はN-95°-Eであり、真北方向に直交する遺構である。この第1号水路に直交する状況で存在するのが第2号水路と第3号水路群である。

第2号水路は、上幅55cm～80cm、溝底幅30cm～50cm、深さ8cmほどの規模をもつ。

(2) 耕作址

耕作址は、1区～5・6区のいずれにも検出できた。しかし、前述の検出状況であるので、全体の状況は不明である。5・6区における畝状の遺構は、磁北方向へやや平行して走行する複数の溝によって検出できた。溝と溝の間の畝の幅は至って不規則であるが、ある程度の植物を植えられるだけの空間は持たせていると見ることができる。

1～3区における耕作址の検出は、第1号水路以北は、第1号水路に直交する状況で多数が検出されており、第1号水路以南は、第1号水路に平行する状況である。

(3) 小 結

以上の水路址と畝状遺構の状況を見ると、畝状の遺構が1～3区においては水路走行に左右されているようである。従って、この水路に土地区割の基準が存在したと仮説を立てるとすれば、沖積平野における条里制地割の存在を十分に推測されるものである。また、畝状遺構が検出される例は、水稻耕作低地より高い地形により多く見られるものであって(注1)、当地区が、沖積地内においても居住地区として利用できる微高地であったことを示すものであろう。

森遺跡周辺における地理的観察からの条里復原が藤岡市教育委員会によっておこなわれているが(注2)、第1号水路と第3号水路はこの内の坪境の水路に一致するものと思われる。また、同書による「小野地区水田址遺跡」の範囲は、土壌または遺跡立地からみても妥当性のあるところであろう。この条里は、現地形の農道、水路に一致するところが多い傾向がみとめられる(注3)。指標となるのは、前橋—長瀬県道と考えて良いであろう。東西は、本遺跡の北側の水路(上郷から流れる)にとるのが良いであろう。

注1 『日高遺跡発掘調査報告(Ⅲ)―B 軽石埋没水田址の調査―』高崎市教育委員会、1981

鳥羽遺跡 『月報 鳥羽遺跡』No.10、1980

東下井出遺跡 『年報―1―』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、1982

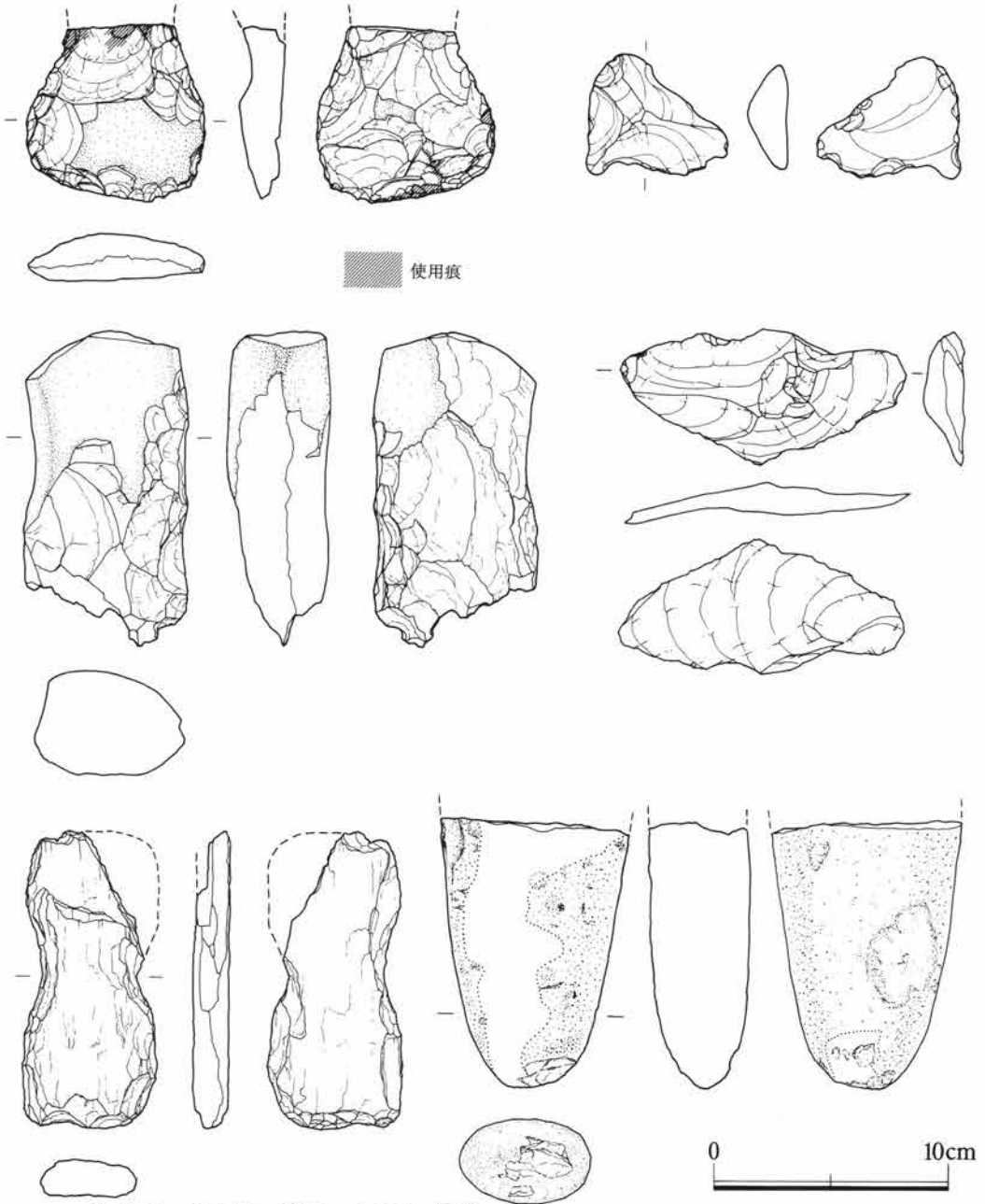
注2 『C 4 小野地区遺跡群発掘調査報告書』藤岡市教育委員会、1982

注3 条里地割が現地形に残るのは温井川の氾濫地よりやや遠いところである。藤岡市教育委員会の調査は氾濫地であって、条里地割りに従った水田ではないかもしれない。

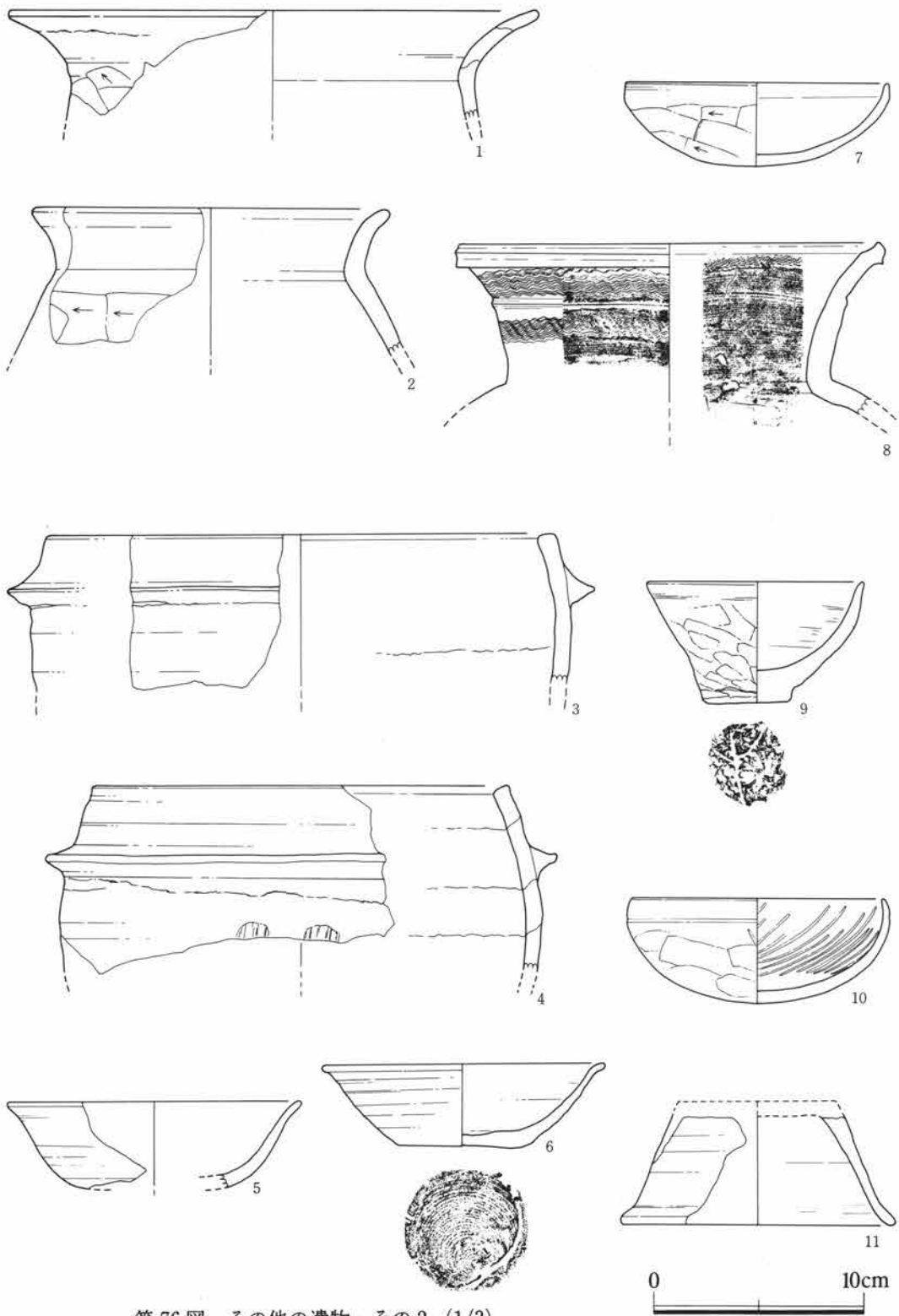
5 その他の遺物 (第75~77図、図版30)

(1) 石器

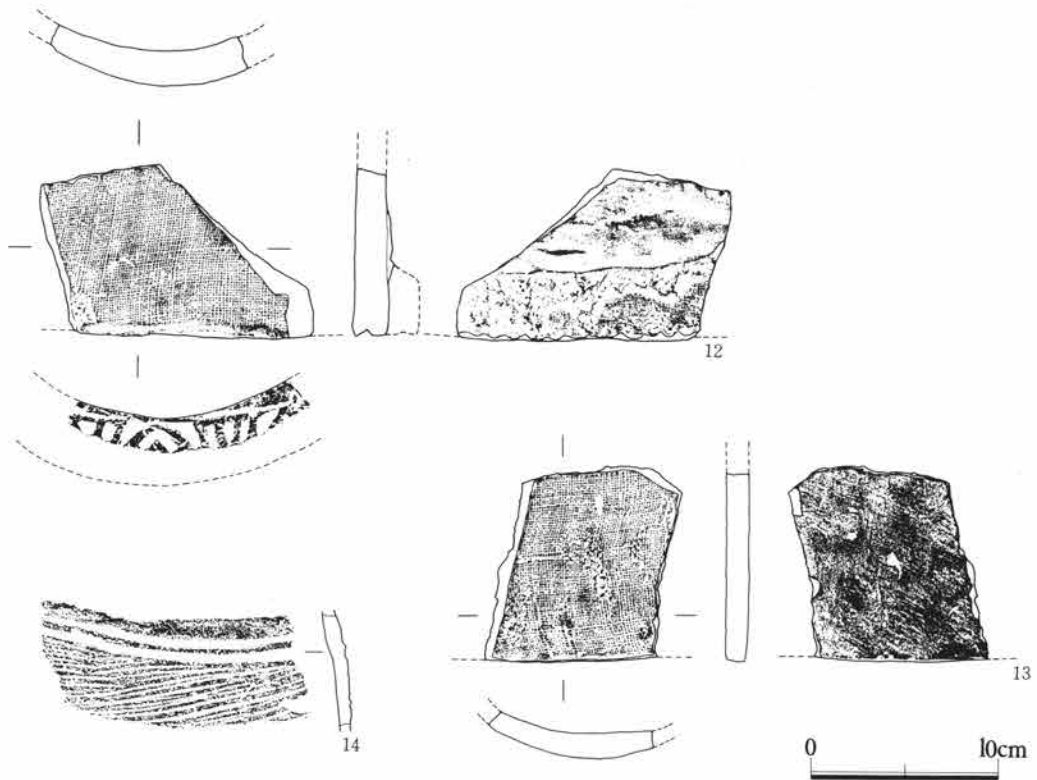
石器は基本土層X層中に縄文土器が存在し、中層において勝坂期の遺物を、上層には縄文後期の遺物を包含している。これは藤岡市教育委員会発掘の滝川遺跡と同様な性格を有するものであって、明確な遺構を伴うものではない。



第75図 その他の遺物・その1 (1/3)



第 76 図 その他の遺物・その 2 (1/3)



第77図 その他の遺物・その3 (1/4)

(2) 小 結

古墳が存在しないといわれる沖積地において、11号土塚の如き土塚墓の検出の意義は大きい。即ち、本土塚が作られた時期は群馬県において横穴式古墳の出現時期に当たる。そして、副葬品として須恵器が登場する時期でもある。前橋前二子古墳出土の特殊器台や高坏に比しても劣るものではない。従って、古墳の存在しない集落において、斯様な大甕を埋納容器として利用可能な家族があるとするならば、どう理解したらよいのであろうか。仮説を上げ、今後の研究成果を待ちたい。

- ① 烏川対岸の高崎市八幡原町所在の後期古墳と結びつく集落であって、墳墓の地を本貫の地に求めている。
- ② 藤岡市中栗須周辺古墳と結びつく集落であって、墳墓の地を本貫の地に求めている。
- ③ 社会的制約があって古墳をつくることは不可能であるが、須恵器生産地と交渉力のある族である。










③は少し無理だろうと思えてくる。②は、それだけの力のある地域ではないと考えられる。従って①に注目したいのである(注1)。

また、表採ながら軒平瓦に注目したい。県内の瓦を出土する遺跡において、斯様な例は見当らない。埼玉県において近い例が見い出せるので注意したい（注2）。

注1 倭名抄郷名録における「小野郷」の取り扱いについて、尾崎喜左雄博士は群馬郡小野郷と緑野郡小野郷が本来一地域とする説を立てている。須恵器の導入初期における状況を考えると①の地方との結びつきが強いと考えるのが良いのではなかろうか。

注2 『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県史編纂室、1982。

第7表 土壇一覧表

	形 状	規 模 cm	深 さ cm	底 の 形	出 土 遺 物	備 考
1	円 形	125×130	50		な し	6 区
2	長 方 形	315×70	11		土師破片少量	5 区 時期 近世?
9	円 形	95×90	13			
13	隅 丸 方 形	123×?	30			1 区 11・12号土壇南
14	円 形	120×130	9		な し	2 区 16号土壇 南 時期 不明
15	円 形	87×90	6.5+α			2 区 1号掘立 南
16	不 定 形	85×123	20		土師破片	2 区 9号住 南
17	不 整 楕 円 形 不 定 形	60×33	30		土師破片	2 区 9号住 南 規模 小さい
11	隅 丸 長 方 形	216×180 (130×80)	55 (67)			1 区 墓 壇

	甕				小型甕		甑		坏					碗形坏	高坏・碗	須恵器	住居址 平面模式図				
	A	B	C	D	A	B	A	B	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5								
4号住	+																				
5号住							+	+			+				+						
1号住・8号住						+															
6号住											+					+					
9号住				+																	

第78図 6世紀末から7世紀後半に至る土器編年図(縮尺不同)

D ま と め

烏川・鐺川・鮎川の形成したこの沖積地における古代人の足あととは意外に古いことが近年の発掘で判明し、弥生時代中期の遺物がこの低地で検出されたことは、旧来の地域観を大きく変えるものである。古墳のように顕著な遺跡が存在しない土地柄だけに、大いに反省する素材であった。当遺跡においても前述の如く、5世紀後半頃には人々が定住する地区になっており、その後絶え間無く人々の生活の場となっていた。特に6世紀末から7世紀後半の約100年の間に人口も増え、それなりの集落を営んでいたことは明らかである。また、8世紀に入ると、当遺跡の周囲の水田は、班田制の土地割りである条里地割が施行され、緑埜郡内の一郷・里に位置づけられることとなったのであろう。

以上の概略の歴史の流れを観察すると、幾つかの疑問点が出てくる。

- ① 5世紀後半頃にこの沖積地を開拓していった人々は、どのような氏族であったか。
- ② 6世紀～7世紀は古墳造りの時代であるのに、古墳が存在しない理由はなにか。
- ③ 須恵器大甕をどのように手に入れたのか。その供給先と道のルートはどれか。
- ④ 持統天皇朝以降の国一評（コオリ；郡）・里体制を整える中で、何郡に属し何郡と呼称したのであろうか。

⑤ 正倉院調布銘「緑埜郡小野郷」やそこに住む物部氏をどのように理解したらよいか——等々である。今後、新しい遺跡が発見されたり新しい研究がなされ、森遺跡を含んだこの沖積地の歴史が明らかにされんことを心待ちにするものである。

さて、森遺跡をまとめるに当たり、前述の疑問点を根幹にしつつ、幾つかの論攷を試みたいと思う。まずは、6世紀末から7世紀後半に集中する住居址から出土した遺物の分類である。これは東国が中央政治と直接、間接的に交渉を持ち複雑に変化していった時代であるから、東国文化を正確に理解するには、各地域の正確な基礎データ造りを必要とするからである。第2は、第13号住居址から出土した甕型Aの亜種と称する球形胴の土師器についての問題である。これは、この土器が旧来、壺形土器に属さしめられ、特に取り上げられなかったことについて、本稿では、東国に須恵器が導入される問題を踏まえて予察的に取り上げてみたい。第3には、「小野郷」を踏まえて、沖積平野開拓に関する覚え書きを示しておこうと思う。

以上の三つの短い論が、森遺跡を理解するためにどれ程役立つのかは疑問であるが、現時点で知り得ることとして取り上げたものである。

1 6世紀末から7世紀後半頃までの土器分類について（第78図）

森遺跡から発見された住居址は大概17軒であった。この内、完掘・未完掘を含め、この時期に属するものが11軒である。また、5号住居址や4号住居址の如く、その住居址で生活していた土

器群がそのままの形で残ること、そして、各々の住居址が極めて良好な状況で残存しておりかつ、土器の形態変化と住居址の構造内容の変化とが一致するであろうことが推測されることにおいて土器編年を試みた。

第Ⅰ期 (第23～26図、第4号住居址出土遺物)

第Ⅰ期は、甕形態と坏形態に特色をもつ。即ち坏で代表されるように、鬼高式Ⅰ～Ⅱを通して用いられる蓋付の須恵器坏の身の模倣形の土師器が盛行されることである。また甕は、長胴化が進み、胴部の丸味が欠いていく時期であり、口縁部径が胴部径をしのいでいく過程の時期でもある。この4号住居址の資料は、この時期でも終末に近いものであろう。

第Ⅱ期 (第29～31図、第5号住居址出土遺物)

土師器と伴出した須恵器にこの時期の設定資料を求めている。即ち、蓋付須恵器坏(資料⑧)において、身も蓋も本来の意味を失ない、つまみが付かなければ判定しにくい状況下の組み合わせを持つ資料である。この資料を挟み、古い要素を持つ平瓶と、明らかにつまみをもつ蓋が存在する組み合わせの小型の坏身(資料⑨)が存在していることである。東海地方の須恵器編年からみても(注1)7世紀前半の中頃に比定できる時期を示す資料である。第4号住居址資料が、榛名山二ツ岳爆発による降灰(FP)時期の土器群(注2)に係る部分が認められることも考えると、第Ⅱ期が、この時期とするのに大きな誤りはないであろう。

また土師器坏は、第Ⅰ期と全く異なる形状を示している。鬼高Ⅱにおいて踏襲されていた受け部の立ち上り、受け部を外へ張り出させる形態を全く失っている。坏に関する限り、Ⅰ期とⅡ期の間にもう一形式の時期が十分に推定できる。

第Ⅲ期 (第8・9図、第1号住居址、第44・45図、第8号住居址)

甕の形状に第1の視点がある。即ち、第Ⅱ期で口縁部を強く外反させる傾向が定着し、口唇部内側に沈線を廻らせるのが特徴である。また胴は全く垂直になっている。坏の口縁部は、ますます小規模となり、前代より内傾させる器種の混入が目立ってくるようだ。そして、本遺跡において、この時期に住居東壁にカマドが移動していることに特色を持つ。

第Ⅳ期 (第34・35図、第6号住居址出土遺物)

カメ類は第Ⅲ期の形状を踏襲するものであるが、坏の組み合わせの内に、C-1の退化した型のC-2型を含まなくなっている特色をもつ。そして、第Ⅴ期に設定した第9号住居址以降は伴出しないと推定される。また、深い身の坏(ここでは碗形坏と呼称した)が普遍的に伴出し始めていることも上げられよう。そして、東壁カマドが住居外へ押し出されてしまうことと重なっている。

第Ⅴ期 (第49図、第9号住居址出土遺物)

遺物出土量が少なく、この時期を設定し得るのかやや不安定である。坏においてみると、C-2型は当然含まれないのであるが、口縁部の内傾が第Ⅳ期より強くなり、坏全体に占める割合も高いようである。そしてカマドは、東壁を南へ移動開始している。

以上のように、鬼高Ⅱ型式と奈良時代の土器型式との間に存在する遺物は、大概第Ⅱ～Ⅴ期の4型式に分類できそうである。第5号住居址の時期を7世紀第Ⅱ四半期頃に当てるとすると、70年～90年程の間に編入されるであろう(注3)。また、この時期を大きくつかむとすれば、カメ口唇部に沈線を持たないこと、坏のC-2タイプが混在すること、カマドが北から東へ移るという状況をもつ前半期と、筒形胴で口唇部に沈線をつけること、坏C-2が混入せず、C-5が主流となること、カマドが東南すみ方向へ移動し、火床が正方形から崩れ出すことを特色とする後半期とに識別可能であろう。この鬼高Ⅲ型式また、終末期古墳時代の土器とも呼ぶべきこの土器群の成立原因は何であったのであろうか。

土器の形態変化が即社会の変化であるとするのは問題があろうが、第Ⅱ期が開始される時期は巨石巨室横穴式古墳の退化時期に相当しており、土器を生産する集団と土器の供給を受ける(注文する)集団に大きい変化があったことは否めないであろう。

2 口縁部外面に沈線を施す球形、丸底土器についての予察

森遺跡第13号住居址出土遺物で、標題の如き土器が2個体分検出されている(第62図1と3)。この土器について以下の点を検討するならば、この土器が、須恵器大甕の形態を取り込んだ土師器、即ち甕形土器であることについて検討に値することを理解いただろう。

- ①器形全体の特色——胴上半に最大径をうけ、口縁部との接合部が鋭く折れ曲ること。口唇部外側に稜線を造り出していること。また、口縁部外面の沈線は3の資料のように段状になっている場合もある。
- ②第13号住居址は、鬼高Ⅰ型式の後半に属するもので、土師器における壺形土器の盛期から遠いこと。大型壺で口唇部に装飾性を持たせる方法は五領期か和泉期の古い段階に遡ってしまう。
- ③口縁部外面の施文が、複合口縁の稜線の退化したものと考えると、3の資料は段のあり方が逆になってしまう。
- ④この時期に大型土器が出現するならば、本遺跡山土の須恵器大甕に示せる大甕の出現による影響以外考えられない。
- ⑤本市周辺の同時期の遺構からも出土例があること。
- ⑥森遺跡においては、和泉期後半の第2号住居址には認められないこと。第13号住居址より新しい住居址においては、退化した型(横穴式石室古墳の副葬品として各所で出土している小型甕)で続いて残っていること。

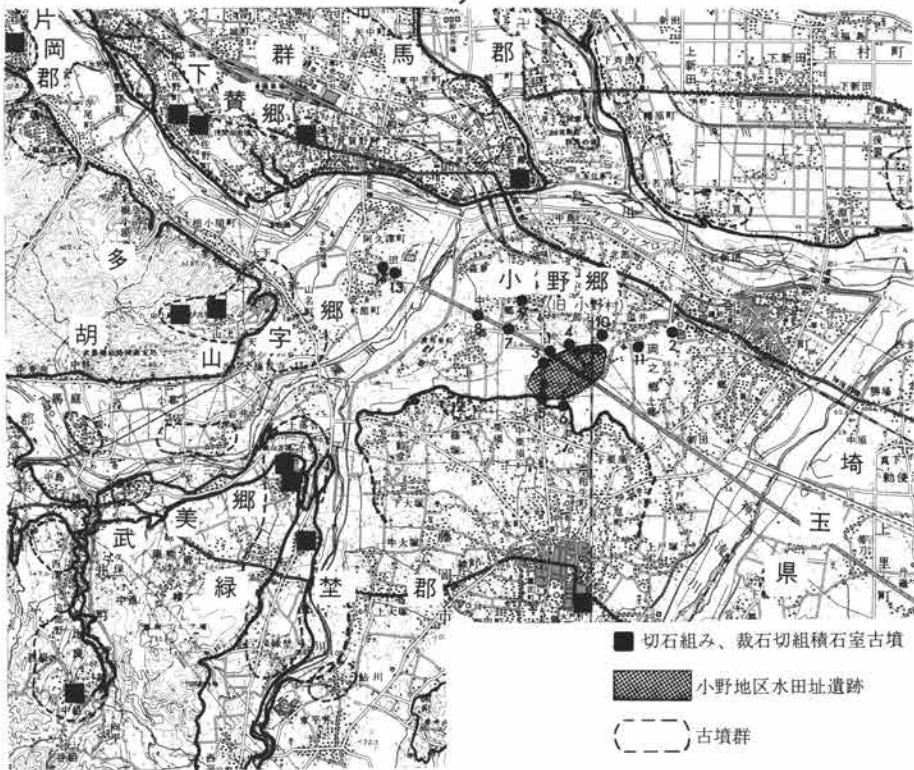
以上の状況をみるに、壺形土器に属させる理由は無く、模倣されたものが須恵器大甕であるとすれば甕に属させるべきであろう。本報告においては、この土器を、球形胴の土師器甕の亜種とし「甕A-亜種」と称しておく。今後、稿を改めて詳細にわたり論じるつもりである。

3 森遺跡をめぐる7～8世紀社会の概観

森遺跡、温井遺跡、中遺跡の立地するこの沖積地は、主に鑄川・鮎川から流出する土砂の堆積の上に成立することは、烏川の折曲状況で判断のつくことであろう。また、本遺跡と同様な立地条件の遺跡は、鑄川の対岸高崎市阿久津町田端遺跡、木部町寺東遺跡である。

この沖積地に展開した五遺跡を取り囲む遺跡の状況は、第79図の如くである。古墳群と集落群が切れ間なく存在している。特に伝統ある文化圏は、北の対岸にある八幡原遺跡群や綿貫遺跡群である。次は、七興山古墳を北限とする緑埜屯倉を構成する文化圏、及び下佐野古墳群を中心とする佐野屯倉の文化圏と言える。いずれも4世紀代からの遺跡である。

一方、森遺跡や温井遺跡が示すように、人々が生活の場を沖積地に求めるのは意外に古いことが判明しているにもかかわらず古墳を構築していない。



第79図 旧郡郷と遺跡分布 (1/10万)

- | | | |
|---------|----------|-----------|
| 1 森遺跡 | 6 谷遺跡 | 11 岡ノ台遺跡 |
| 2 温井遺跡 | 7 中I遺跡 | 12 篠塚B古墳群 |
| 3 滝川遺跡 | 8 中II遺跡 | 13 寺東遺跡 |
| 4 森沖遺跡 | 9 中沖遺跡 | 14 田端遺跡 |
| 5 神明北遺跡 | 10 下川前遺跡 | |

このことは、沖積地を居住地とした人々が、ここを足場に周辺の高台に展開していったということは考えられないのであって、事実はこの逆と見なさなければならない。従って、この沖積地は本来的に上記の伝統ある文化圏の強い影響下に開発され、その統治下にあったと考えざるを得ない。そこで、次の文献を注意せねばならない。

①「上野国緑野郡小野郷戸主額田部君馬稻調布壺端<sup>長四丈二尺
広二尺四寸</sup>」 正倉院蔵

松島順正「正倉院宝物銘文集成」

②「上野国緑野郡小野郷戸主物部鳥麻呂戸中男作物鹿腊代雜 」

「平城宮木簡 二」奈良国立文化財研究所、1975

物部氏については、国分寺文字瓦に「山字物部」が散見できること。多胡郡に辛科明神に従って物部明神、穂積明神がみえ、金井沢碑においても物部氏が見い出せる。また山ノ上碑文で長利僧の祖たる新川臣についても物部祖神と深い係わりが見い出せる可能性もあり(注4)、碓氷川と鏡川に挟まれた甘楽郡、多胡郡の山岳地帯に物部氏の居住する広い区域が存在していたことを示している。また、額田部は、甘楽郡内に額田部郷が存在している。

奈良時代の小野郷に物部や額田部氏が居住する事実は、この沖積地開発にあたって山岳地帯に居住していた物部の一族や、額田部(君)の一族が深い係わりを持っていた事実を示すものである。またこの物部氏が国分寺建立に寄与したり、国司の一員となっているものが存在したりする事実を重ねるならば、この沖積地の開発や経営が上野国司の強い影響下におこなわれていたことを推測するのに充分である。

また上野国条里地割が奈良時代中葉頃には完成するであろうことが定説化しつつある現在において、物部氏が係わったであろう小野郷に条里地割が施行される時期も、この時期よりあまり降りる可能性は少ないであろう。すると森遺跡において1号水路が条里地割の水路であることを考えるならば、本遺跡は条里制地割施行時には廃絶していたことになる。

この様に、8世紀以降の状況はつかめるものの、森遺跡が最盛期を迎える6世紀末から7世紀終末頃までの住居址群に、物部氏や額田部氏を重ねることは少し危険である。従って、今後、綿貫・八幡原遺跡群や、緑野屯倉との関係を点検していかねばならないであろう。その中であって、群馬郡小野郷と緑野郡小野郷との関係を説いた尾崎説(注5)に深い関心を持たざるを得ない。

森遺跡を中心に、藤岡市北部の沖積地開発について考古資料を基に多少触れることができたのであるが、今だ不十分である。いずれ機会をみて稿を改めたいと考えている。

- 注1 「須恵器—古代陶質土器—の編年」1979 静岡県考古学会
中村 浩「須恵器生産の諸段階—地方窯成立に関する一試考—」考古学雑誌 67巻1号、1981.6
『愛知県古窯跡群分布調査報告（III）』1983 愛知県教育委員会
- 注2 考古学ジャーナル「特集火山堆積物と遺跡Ⅰ—関東地方北西部」石川、井上、梅沢、松本他
- 注3 井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」群馬県史研究第8号
『平城宮発掘報告VII』奈良国立文化財研究所、1976
巽 淳一郎「平城宮における焼物容器—八・九世紀の宮廷で使用された焼物の特質—」月刊文化財 1983.3
『日本考古学研究所集報Ⅳ・Ⅴ』日本考古学研究所
「奈良・平安時代土器の諸問題」神奈川考古同人会
- 注4 「新川臣」の語句について。埼玉県稲荷山出土鉄剣銘、上宮法皇帝説等における系譜書き方法について検討するに、単に地名と即断はゆるされない。当地名が物部氏の根拠地である点を考えれば、物部祖神である健新川命・大新川命に注意をしたい。稿を改めたい。
- 注5 尾崎喜左雄『上野三碑の研究』、1980

第8表 第1号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	1/3	口径 18.3	球形胴。 最大径胴中央部。	胴上半——左上方向のヘラ削り。輪積痕。	暗褐色 砂粒 焼成良	
2	甕	2/3	口径 21.4	口径を最大径とする。 円筒形。	右下方向のヘラ削り。 内面ナデ。 輪積痕。	褐色 砂粒 焼成良	
4	甕	2/3以上	現高 22.5 口径 19.7 胴径 16.0	口径を最大径とする。 胴は底に向けて急激に すばまる。	底部へ向けヘラ削り。頸部は 荒く削り残す。 内面ナデ、輪積痕。	赤褐色 砂粒 焼成良	
5	坏	1/3 残	口径 10.9 器高 2.8	底部平底ふう。 口縁部内傾。	口縁部ナデ。 胴横ヘラ削り。	褐色 砂粒 焼成良	
6	坏	2/3 残	口径 11.2 器高 2.6	低い立ち上がり。稜を 残す。稜内側の凹み著 しい。	立ち上がり工具横ナデ。 底部不規則なヘラ削り。 内面 ナデ。	赤褐色 砂粒 焼成良	
7	坏	1/3	口径 12.8 器高 3.9	深底型。口縁部を幅広 くとする。やや平底ふう。	外面ナデ整形後ヘラ削り。口 縁部は手づくね気味。 内面ナデ平滑。	褐色 砂粒 焼成良	
8	坏	完形	口径 11.5 器高 3.9	口縁は外反。胴削り残 して稜を成す。丸底。	外面はナデ整形後ヘラ削り。 内面はナデ。	橙色。 砂粒 焼成良好	カマド左袖出土
9	坏	完形	口径 13.0 器高 4.1	深底型。口縁部を幅広 くとする。丸底。	外面ナデ整形後ヘラ削り。 内面ナデ整形後研磨を加え る。	褐色 砂粒 焼成良	P20 貯蔵穴付 近
10	深底 坏	1/3	口径 16.5 器高 —	碗状胴部。狭い口縁部 を持つ。 丸底であろう。	外面ナデ整形後ヘラ削り。 口縁部下は削り残して稜をつ くる。内面ナデ後研磨する。	淡赤褐色 砂粒 焼成良	
14	高坏	完形	口径 10.2 器高 5.4 脚径 8.5	坏部有段。高さの1/2。 脚はスソを反り上げる ように造る。	手づくね。坏ヘラナデ。 坏下～脚はヘラ削り。 内面ナデ。器壁が厚い。	赤褐色 砂粒 焼成良	脚一部欠く カマド内
15	高坏	完形	口径 9.5 器高 4.8 脚径 8.2	坏部に反りがみえる。 歪みが多い。	手づくね。脚と接合する部分 にヘラ、指による圧痕。 内面ナデ。器壁が厚い。	赤褐色 砂粒 焼成良	坏部一部欠く カマド内
16	高坏	完形	口径 9.6 器高 4.8 脚径 8.5	坏部は直線的に開く。 スソが反る。	接合部のヘラ圧痕が多い。口 縁部にヘラ横ナデ痕。 内面ナデ。	赤褐色 砂粒 焼成良	坏部一部を欠く

第 9 表 第 2 号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	完形	器高 30.5 最大径 25.5 口径 19.2	丸味のある胴。低い口縁。平底。口縁部やや外湾。	胴上は横、左上方向のヘラ削り。胴下は右下へヘラ削り。底はヘラ削り。輪積痕。	橙色 石粒混入 焼成良	輪積幅 3~4 cm
2	壺	完形	器高 30.2 最大径 24.5 口径 18.0	丸味のある胴。低い口縁。平底。口縁外湾気味。	胴上は横、左上方向のヘラ削り。胴中位は斜め削り、下部は縦、斜に不規則。輪積痕。	橙色 石粒混入 焼成良	輪積幅 1.5~2.5 cm
3	壺	完形	器高 30.9 最大径 22.8 口径 19.6	頸幅広い。長胴化。口縁高く大きく開く。平底で狭小。	胴部外面は、頸部より底に向かってヘラ削り。底ヘラ削り。輪積痕。	橙色 石粒混入 焼成良	輪積幅 3~3.8 cm
4	壺	完形	器高 29.0 最大径 23.5 口径 16.2	丸味のある胴。低い口縁。丸底。	胴上は右下また上に向かってヘラ削り。下半は底に向かって不規則ヘラ削り。輪積痕。	橙色 石粒混入 焼成良	輪積幅 1.5~2.5 cm
5	壺	底部欠	現高 26.0 最大径 22.8 口径 16.3	丸味のある胴。口縁やや開く。	胴上は頸に向かって不規則なヘラ削り。下半は底に向けヘラ削り。輪積痕。	橙色 石粒混入 焼成良	輪積幅 1.5~2.5 cm
6	小型壺	完形	器高 23.1 最大径 20.3 口径 16.0	球形に近い。広口。低い口縁。平底。	胴上・下半とも下方へヘラ削り。底部ヘラ削り。輪積痕。	橙色 石粒混入 焼成良	輪積幅 1.5~2.5 cm
7	小型丸底壺	完形	器高 12.9 最大径 14.7 口径 14.4	広口丸底の坩型。口縁はやや開き気味。口唇部やや肥厚。	胴上半は頸に向かいヘラ削り。下半は底ヘラ削り。輪積痕。	橙色 石粒混入 焼成良	輪積幅 1.5~2.2 cm
8	小型丸底壺	完形	器高 11.1 最大径 14.2 口径 12.3	低い口縁で直立。球形胴。丸底。	外面ヘラナデ。内面平滑。下半に放射状ヘラ研磨痕。	橙色 砂粒 焼成良	外面ヘラ削り成形
9	小型壺	完形	器高 10.5 最大径 10.6 口径 8.7	小さく外反する口縁。底が大きく鉢に近い。	外面成形手法不明。内面平滑。	赤褐色 砂粒 焼成良	
10	小型鉢	%	器高 11.0 最大径 12.3 口径 10.2	極めて小規模の口縁。平底で大きい。	外面はヘラ成形後ヘラ調整。底は荒い削り。	橙色 砂粒 焼成良	
11	小型瓶	%	器高 16.4 最大径 15.0 口径 13.3	口径やや大。球形胴。底径5.9cm 1孔、孔径2cm。	外面は斜めヘラ削り、ヘラ研磨。内面ナデ。孔は焼成後穿孔。輪積痕。	橙色 砂粒 焼成良	輪積幅2.5cm

第 10 表 第 4 号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	長胴壺	ほぼ完形	器高 33.3 口径 20.2	口縁最大径、大きく外反。円筒形。平底。	外面は頸部より底に向け垂直なヘラ削り。内面ヘラナデ。輪積痕。	橙色 石粒混入 焼成良	木葉底

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	長胴壺	完形	器高 33.1 最大径 18.2 口径 18.2	口径大きくゆるく外反。丸底肥厚。下半を細くする。	頸に向かいヘラ削。底部は厚く削り残す。内面ヘラ横ナデ。輪積痕。	橙色 砂粒 焼成良	
3	長胴壺	完形	器高 30.5 口径 19.0	口縁弱い反り。円筒形。口径最大径。平底。	頸に向かいヘラ削。内面ナデ。輪積痕。	橙色 焼成良	
4	小型壺	完形	器高 21.0 口径 17.2	口径と胴部最大径が等しい。丸味を持つ。平底。	胴上半は頸へ向けヘラ削。下半不明。底部ヘラ削。輪積痕。	橙色 砂粒 焼成良	胴下半の輪積部分でひび割れ
5	大型甌	上半欠	現最大径 20.4 底径 8.0	一孔。変形甌。	外面丁寧なヘラ削。孔ヘラ削仕上げ。内面横ナデ後縦ヘラ研磨。輪積痕。	赤褐色 砂粒 焼成良	硬い仕上がり
6	小型短頸壺	完形	器高 15.0 口径 13.1 底径 6.2	直立する口縁。丸味を持つ。平底。	胴は右下方向へヘラ削。底付近は横へ削る。内面横ナデ。輪積痕。	橙色 石粒混入 焼成良	木葉底
7	小型壺	完形	器高 13.3 最大径 14.6 口径 14.0	口縁部は幅広く直立気味。胴は底部に向かって小さくする。平底。	胴は斜方向のヘラ削。底付近は横へ削る。内面横ナデ。	橙色 石粒混入 焼成良	
8	小型甌	完形	器高 11.4 口径 12.9 底径 6.3	鉢形。焼成後穿孔。筒形。小規模な口縁部をつける。平底。	外面は底部より口縁に向けヘラ削。底付近は横削。内面削り成形後ナデ。手づくね風。	橙色 石粒混入 焼成良	木葉底 全体的に磨滅
9	小型甌	完形	器高 11.5 口径 18.7 底径 5.0	鉢形。焼成前穿孔。口縁部を外反させ底に向かって狭くする。平底。	外面は底に向かってヘラ削。底付近は横削。内面ヘラ横削後ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	木葉底
11	高坏	脚部のみ		筒形でスソを小さく開かせる。	輪積痕残す。外面下方向のヘラ研磨痕。スソは横ナデ。	橙色 石粒混入 焼成良	
12	坏	完形	器高 4.4 口径 13.2	立上がり垂直。受け部あり。中段に沈線1本。	立上りナデ。体部外面横方向ヘラ削。内面ヘラ研磨。	橙色 胎土細土 焼成良	
13	坏	完形	器高 4.2 口径 13.7	立上がり垂直。受け部あり。中段に2本の沈線が認められる。	立上りナデ。体部外面ヘラ削。内面ヘラ研磨。	橙色 砂粒 焼成良	
15	坏	完形	器高 4.2 口径 12.2	立上がりが開き薄い体部。受け部口縁中段に段差をつける。	立上がりは上下2段にヘラ工具でわかる。受け部は削り残し。体部丁寧な仕上げ。	橙色 砂粒 焼成良	
16	坏	完形	器高 3.9 口径 11.8	立上がりが開き薄い体部。中位に段。全体に歪む。	立上がりは上下2段にヘラ工具でわかる。受け部削り残し。内面ナデ。体部ヘラ削。	橙色 砂粒 焼成良	
17	坏	完形	器高 4.3 口径 11.9	高く外傾する立上がり上位に段。下位に線で区割。受け部。平底風。	立上がり外面はヘラ工具で3段に受け部削り残し。体部ヘラ削。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
18	坏	完形	器高 4.7 口径 12.9	高く外反する立上がり。中位に段をもつ。内面に稜線をつける。	立上がり外面はヘラ工具で2段に区割。受け部は削残し。体部ヘラ削り。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
19	坏	完形	器高 4.6 口径 13.8	高く外反する立上がり。受け部少ない。中段に段差をもつ。	立上がり外面はヘラ工具で2段に区割。受け部ヘラ削残し。体部ヘラ削り。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
20	坏	完形	器高 4.6 口径 12.4	高く外反する立上。受け部丸味をもつ。中位に段をもつ。	立上外面はヘラ工具で2段に区割。受け部と立上の境不鮮明。体部ヘラ削り。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
21	坏	完形	器高 4.5 口径 13.2	高く外反する立上がり。受け部削り残し。段差不明確。	立上がり外面はヘラ工具で2段に区割。体部ヘラ削り。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
22	坏	完形	器高 4.7 口径 12.9	高く外反する立上がり。内外に中段を持つ。受け部小さい。	立上がり外面はヘラ工具で2段に区割。体部ヘラ削り。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
23	坏	完形	器高 5.2 口径 13.2	高く外反する立上がり。外面中段に沈線。受け部不鮮明。	立上がり外面はヘラ工具で2段に区割。体部ヘラ削り。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
24	坏	完形	器高 4.7 口径 12.6	立上がり口唇外反。受け部丸。体部深い。中段不鮮明。	立上がり外中央をヘラ工具横ナデ1段。体部ヘラ削り。	橙色 砂粒 焼成良	
25	坏	完形	器高 4.6 口径 11.9	立上がり口唇部外反。受け部丸。体部深め。	立上がり外面はヘラ工具横ナデ1段。体部ヘラ削り。受け部不明瞭。内面ヘラ研磨あり。	橙色 砂粒 焼成良	
26	坏	完形	器高 4.6 口径 12.3	高く外反する立上がり。中段稜不鮮明。体部浅い。受け部削り出し。	立上がり外面はヘラ工具横ナデ1段。体部ヘラ削残さず。	橙色 砂粒 焼成良	
27	坏	完形	器高 4.7 口径 12.7	高く外反する立上がり。受け部丸味をもち不鮮明。体部深い。	立上がり外面ヘラ工具横ナデ。体部はヘラ削り不鮮明。内面ヘラ研磨あり。	橙色 細砂粒多い 焼成良	
28	坏	完形	器高 4.9 口径 12.2	高く外反する立上がり。深い体部。受け部不鮮明。	立上がり外面ヘラ工具横ナデ。体部はヘラ削り。体部内面ヘラ研磨痕。	橙色 砂粒 焼成良	
29	坏	完形	器高 4.6 口径 11.5	外反の弱い立上がり。受け部不鮮明。浅い体部。	立上がり外面ヘラ工具横ナデ。体部ヘラ削り。内面はナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
30	坏	完形	器高 4.2 口径 11.9	大きく外反する立上がり。受け部不鮮明。浅い体部。	立上がり外面ヘラ工具横ナデ。体部横ヘラ削り。	橙色 砂粒 焼成良	
31	坏	完形	器高 4.5 口径 12.6	大きく外反する立上がり。内面に段を有さない。浅い体部。受部無。	内面横ナデ仕上げ。立上がり外面ヘラ成形後横ナデ。体部ヘラ削り。	橙色 砂粒 焼成良	

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
32	坏	完形	器高 4.1 口径 11.7	受け部無し。浅い体部。立上がり上部が内湾する。内面段ない。	立上がり内外ナデ。体部外面ヘラ削。	橙色 砂粒 焼成良	
33	坏	完形	器高 4.2 口径 12.2	受け部無し。浅い体部。立上がり上部内湾。	立上がり内外ナデ調整。体部外面ヘラ削。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
34	坏	完形	器高 3.8 口径 11.7	受け部無し。浅い体部。立上がり上部内湾。	立上がり内外ナデ調整。体部外面ヘラ削。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
35	坏	完形	器高 4.8 口径 13.0	体部に容器の視点が移る(体部肥大)。立上部口縁化。平底。	立上内外ナデ調整。体部は坏として独立させる。外面ヘラ削。	橙色 砂粒 焼成良	
36	大型坏	3/4	器高 6.3 口径 15.8	高い立上がりは4段に区割。浅い体部で受け部ほぼ無し。	立上がりはヘラ工具で4段にナデて区割。体部外ヘラ削。内面横ナデ。ヘラ研磨。	暗褐色 砂粒 焼成良	

第11表 第5号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	完形	器高 31.9 口径 32.0 底径 5.0	口径の大きい開いた口縁。球形胴。平底。口縁中位にやや稜あり。	胴上半は横方向ヘラ削の後斜ヘラ削。	橙色 荒い砂粒混入 焼成良	A型カメ
2	長胴壺	完形	器高 35.6 口径 22.2 底径 4.8	口縁を平に外反。最大径は口径。胴はやや丸味。平底。	胴上半は頸部に向けヘラ削。頸部に当たりあり。下半は底に向けて削る。内面平滑。	橙色 砂粒 焼成良	下部、胴上部変色
4	長胴壺	下半欠	口径 22.7 胴径 17.5	円筒形。口縁部は大きく開く。口唇部やや肥厚。	口縁外面の接合面は未調整。頸部は右下、垂直に交互に削る。内面ヘラ研磨。輪積痕。	橙色 砂粒 焼成良	
5	坏	完形	器高 2.9 口径 10.9	低い立上がりでやや内傾。受け部無し。体部は丸味を欠く。	立上がりナデ。受け部付近は横ヘラ削。底は回転させヘラ削。内面平滑化。	赤褐色 砂粒 焼成良	P21
6	坏	完形	器高 3.0 口径 10.8	口縁部内湾。丸底状。	口縁部横ナデ。体部外面ヘラ削。内面ナデ平滑化。	橙色 砂粒 焼成良	P5
7	坏	完形	器高 3.2 口径 10.7	口縁部内湾。丸底状体部。	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削。内面ナデ平滑化。	橙色 砂粒 焼成良	P78
8	坏	完形	器高 3.1 口径 11.2	薄い口縁部内傾丸底状体部。	口縁横ナデ。体部外面横方向ヘラ削。底部は不規則削り。内面は平滑化。	暗褐色 砂粒 焼成良	P2

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
9	坏	%	器高 3.3 口径 10.7	内傾する口縁部は丸味を帯びる。丸底。	口縁部ナデ。体部外面へら削り。内面平滑化。	橙色 砂粒 焼成良	P 4
10	坏	完形	器高 3.6 口径 10.9	口縁部内湾。底部深く丸底。内面口縁に段を持たない。	口縁部横ナデ。体部上半を横へら削り。底は不規則削り。内面平滑化	橙色 砂粒 焼成良	P 7
11	坏	完形	器高 3.7 口径 9.8	口縁部内湾。丸底。内面口縁の段は少ない。	口縁部横ナデ。体部へら削りであるが磨減。内面ナデ平滑化。	赤褐色 砂粒 焼成良	P 3
12	坏	残	器高 4.5 口径 11.6	口縁部内湾。鉄鉢型の深く尖った底部をなす。	口縁部横ナデ。体部外面は不規則な削り方。内面ナデ平滑化。	橙色 砂粒 焼成良	P75
13	小型 広口 甕	1/2	器高 8.4 口径 13.5	口縁部は直立。深い小型丸底。	口縁部横ナデ。体部外面は不規則なへら削り。内面はへら工具で横方向ナデ仕上げ。	褐色 砂粒 焼成良	P40
14	小型 広口 甕	完形	器高 7.6 最大径 10.9 口径 9.2	口縁部は直立。片口状。葉壺状の球形胴。丸底。	口縁部横ナデ。回転のへら削り後体部外面へら削り。内面へら工具で横方向研磨。	褐色 砂粒 焼成良	P 6
16	須恵器 坏身	完形	器高 2.7 口径 9.4	厚手。平底。口縁部は垂直に立つ。	外面はロクロ成形後回転へら削り。内面ロクロナデ。	灰白色 砂粒少し混入	P10 宝珠付蓋と組む身か
17	蓋付 坏蓋	完形	器高 3.0 口径 11.3	カエリを付けない。口縁部をやや開く。	外部壁面は回転ロクロ削り。底部は不規則なへら削りをする。	灰白色 胎土に黒斑を混入 焼成	P 9 蓋と身の判定困難
18	蓋付 坏身	完形	器高 3.2 口径 9.1 受部径 11.3	受け部と立上がりはY字型。立上がりが少し頭を出す。平底状。	内外面とも回転ロクロのまま回転へらおこし。	灰色 砂粒混 焼成良	P 8 蓋と身区別難
19	須恵器 平瓶	口縁欠	胴高 10.8 最大径 16.4 底径 5.0	口縁を端につける。小さい平底をつける。沈線等を施文しない。	二区分でロクロ造りし、後接合。底部は回転へら削り。	灰色 焼成良 砂粒 胎土に黒斑を混入	P 1 口縁部は無い

第12表 第6号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	底部欠	器高 29.7 最大径 26.6 口径 21.9	幅のある外反する口縁部。中位に段。球形胴。口唇内に沈線。	口縁はへら工具でナデ。胴上部右下方向のへら削り。内面へら状工具横ナデ。	暗褐色 砂粒 焼成良	P 9
2	長 胴 甕	下半欠	口径 19.1	比較的幅広い口縁。やや球形胴。	輪積痕を全体に残す。口縁へら調整。胴外面右下方向にへら削り。	暗褐色 石粒混 焼成良	P 5

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	長胴壺	下半欠	口径 20.4 胴最大径17.7	口縁を大きく外反。口唇内側に沈線。やや丸味をもつ。	胴上部は口縁に向かってヘラ削り。また右下へも。内面はヘラナデ。輪積。	暗橙色 砂粒 焼成良	P11
4	長胴壺	口縁部少量	口径 23.5	口縁部を大きく外反。円筒形。	口縁部横ナデ。胴外面右下ヘラ削り。	橙色 砂粒 焼成良	P30
5	長胴壺	中央下欠	口径 20.4 最大径 17.7	円筒形胴。口縁部外反強い。口唇内側沈線。	口縁部横ナデ。胴外面右下方ヘラ削り。内面ヘラ工具調整。	橙色 砂粒 焼成良	P7
6	坏	1/2 残	口径 11.0	口縁短く内湾。丸底。	口縁部は横ナデ。体部はロクロ成形後横方向ヘラ削り。底部は不規則。内面ナデ平滑。	橙色 砂粒 焼成良	
7	坏	1/4 残	口径 12.0	直立口縁はやや内傾。尖った底？ 口縁内側折目。	口縁部横ナデ。体部の上部は横、下部は底中央から外へ削る。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	
8	坏	ほぼ完形	器高 3.5 口径 12.5	口縁を内傾。浅いが丸底状体部。口縁内側に折目。	口縁部横ナデ。体部外面上半は横方向ヘラ削り。底は不鮮明。内面ナデ。	赤褐色 砂粒 焼成良	P14 碗状
9	坏	1/2 残	器高 4.4 口径 13.3	低い口縁が内湾する。体部は丸味を示し丸底。口縁内面に折目。	口縁部横ナデ。体部外面横方向ヘラ削り。内面指によるナデで平滑にする。	暗橙色 砂粒 焼成良	P3 碗状
10	坏	1/2 残	器高 4.4 口径 14.0	低く内湾する口縁。体部は丸く丸底。	口縁部横ナデ。体部ヘラ削り不規則。内面ナデ。	暗褐色 砂粒 焼成良	碗状
11	坏	1/2 残	器高 5.0 口径 13.9	口縁部は不明確で碗状をなす。	口縁部横ナデ。体部は不規則な削り。内面ヘラで平滑化。	暗褐色 砂・石粒混入 焼成良	P12 碗状
12	小型壺	底欠	器高 12.0 最大径 18.4 口径 18.0	垂直で口唇部外反する口縁。体部は丸味があるが底は平底状。	手づくね風。口縁部コの字状。体外面上半は横方向、中下部は不規則。内面ヘラナデ。	赤褐色 砂粒 焼成良	P2
13	小型壺	1/2 残	口径 13.2	開いた低い口縁。肩を造る、球形胴。	口縁頸部横ナデ。体部上半は横ヘラ削り、下半は下方向ヘラ削り。内面ヘラ工具ナデ。	灰褐色 砂粒 焼成良	P13 カマド内

第13表 第7号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	須恵器 瓶子	底部及び胴の一部	底径 14.0	肩の張りが強く、肩に最大径を持つ。	ロクロ成形。外面ヘラ調整。	二次焼けて赤褐色	P1 P5

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	高台付埴	底部のみ		丸味のある坏部に、ハの字状に開いた高台をつける。	ロクロ成形。付高台。糸切底。	灰褐色 焼成良	

第14表 第8号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	1/2 残	胴最大径26.0	球形胴。低く外反する口縁。	口縁部頸部横ナデ。胴は丁寧なヘラ削り。内面ナデ。輪積痕。	赤褐色 砂粒 焼成良	P30
2	長胴甕	口縁部と胴上部	口径 23.4	大きく外反する口縁。口唇部に沈線。外面に輪積痕。円筒胴。	口縁部ヘラ工具で横ナデで外反させる。胴外面は下へヘラ削り。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	P29
3	長胴甕	底部欠	胴径 19.1 口径 22.3 現高 32.3	大きく外反する口縁。胴は丸味をもつ。	口縁部横ナデ調整。胴上半は頸部に向かい、下半は底に向かいヘラ削り。内面はナデ。	明褐色 砂粒 焼成良	P34 火を受け荒れている
4	坏	完形	器高 2.9 口径 10.6	低い立上がり。受け部無し。浅い体部。内側折れ目。	口縁部は横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面はナデ仕上げ。	橙色 砂粒 焼成良	P19
5	坏	完形	器高 3.2 口径 11.0	低い立上がりが内傾。受け部無し。深い丸底。	口縁部横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面はナデ。	橙色 砂粒 焼成良	P20
6	坏	完形	器高 3.3 口径 11.2	低い立上を持つが受け部不鮮明。底部は深く丸底状。内側折れ目。	立上外ヘラ工具横ナデ。体部横ヘラ削り。受け部削り残し。内面ナデ仕上げ。	橙色 砂粒 焼成良	P45
7	甕	完形	器高 8.3 口径 15.0	低い口縁を持つ丸型の体部。底部に1孔。	口縁部横ナデ。体部ヘラ削り。火を受けて不明。	暗褐色 砂粒 焼成良	P21 内面に付着物
8	鉢(甕)	1/2 残	器高 9.8 口径 18.8	外反する小さい口縁。鉢型体部。丸底。	口縁部横ナデ。体部は横向きヘラ削り。内面ナデ仕上げ。	暗褐色 砂粒 焼成良	P15・23・24・ 25・35 底部欠

第15表 第9号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏	ほぼ完形	器高 3.9 口径 11.9	低い立上がり外反。受け部を削り残す。やや深い体部。	立上がり横ナデ。体部上半は横方向ヘラ削り。内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	P1

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	坏	½ 残	器高 3.5 口径 10.8	立上がり直立。受け部欠落。尖底気味。	立上がりは横ナデ。体部は横方向にへら削り。内面はナデ仕上げ。	橙色 砂粒 焼成良	P 17
3	坏	½ 残	器高 3.9 口径 11.9	立上がり直立。受け部やや残。深めの丸底。内面折れ目。	立上がりは横ナデ。体部外面の上部は横方向へら削り。底部は伏せてへら削り。	橙色 砂粒 焼成良	P 15
4	坏	½ 残	器高 4.1 口径 12.9	立上がり強く内傾。内外面に稜をなす。深い体部。やや平底気味。	立上がり横ナデ。体部へら削り。日陰干後削りこむ。	橙色 砂粒 焼成良	P 8
5	坏	½ 残	器高 4.1 口径 13.0	低い立上がり内傾。丸味が強くなる。深め丸底。	立上がり横ナデ。体部横方向へら削り。	赤褐色 砂粒 焼成良	P 9
6	坏	完形	器高 4.3 口径 12.4	低い立上がり内傾。受け部丸味。内側に折れ目。深めの丸底。	立上がり横ナデ。体部外面は横方向の削り。内面ナデ仕上げ平滑。	橙色 砂粒 焼成良	P 16
7	坏	½ 残	器高 4.6 口径 13.3	低い立上がりやや内傾。深い丸底の体部。	口縁部横ナデ。体部は横方向へへら削り。	橙色 砂粒 焼成良	P 2
9	深鉢	½ 残	器高 11.2 口径 16.4	低い口縁部やや内傾。球形体部。丸底。口縁内側に段差。	口縁部横ナデ。体部外面は上半横ケズリ、中位は縦へら削り。底部不規則。内面へらナデ。	暗褐色 焼成良	P 19

第 16 表 第10号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	長 胴壺	口縁部と胴上部のみ		口縁部が大きく開、丸味を残す胴。	口縁部横ナデ仕上げ。胴外面は右下方向へら削り。内面へらナデ？	橙色 細砂 焼成良	
2	長 胴壺	口縁部と胴上部のみ		口縁を大きく開、口唇内側に沈線。外面に接合面を残す。丸味残す。	口縁部は厚手で大きい。接合面未調整。胴外面右下方向のへら削り。	褐色 砂粒 焼成良	
3	長 胴壺	口縁部と胴上部のみ		低く開かない口縁。円筒形胴。	口縁部は横ナデ。胴外面は右下方向の削り。内面平滑化する。輪積痕。	橙色 砂粒 焼成良	
5	坏	ほぼ完形	器高 3.15 口径 10.6	立上りを平底風の体部。受け部認められず。	口縁部ロクロ回転ナデ。外面へら削り。	橙色 砂粒 焼成良	P 36

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
6	坏	1/4 残	器高 3.0 口径 10.6	低い口縁部立上がりで内傾。浅いやや尖った底部。	口縁部横ナデ。体部へら削りだが磨滅。内面は丁寧なナデ仕上げ。	橙色 砂粒 焼成良	P 4
7	坏 (鉢)	1/4 残	器高 5.1 口径 13.7	立上がりは低く外反。体部はやや深く鉢形状	口縁外面はへら工具で横ナデ。体外面横方向へら削り。内面ナデ仕上げ。	暗褐色 砂粒少し混入 焼成良	P15・P54
10	鉢	1/2 残	器高 8.5 口径 19.8	立上はやや外反。受け部は欠く。深く底が尖り気味。内側折れ目。	立上横ナデ。体部上半は横方向。底はやや不規則なへら削り。内面ナデ仕上げ。	橙色 砂粒 焼成良	P25・P29・P98・P104
11	小型 甕	1/2 残	器高 17.2 胴最大径15.2 口径 16.6	口縁部ややコの字状。接合面に段を残す。胴は円筒形。丸底か。	口縁部横ナデ。一部に横方向へら削。胴外面は垂直方向へのへら削。内面はナデ仕上。	暗褐色 砂粒 焼成良	P 8・P34・P39・P40
12	小型 甕	1/4 残	器高 10.2 胴最大径11.2 口径 10.5	外反する口縁。胴は下位に最大径を持つ。平底気味。	口縁部横ナデ。胴外面は縦方向へら削り。内面はへら工具で横方向調整。	暗褐色 砂粒 焼成良	P26

第17表 第11号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	長 胴 甕	胴上部と口 縁部の一部	口径 20.1	大きく開く口縁。丸味を残す胴。最大径は口径にある。	口縁横ナデ。胴上半は胴中央から頸に向け垂直のへら削り。	暗褐色 砂粒 焼成良	P13
2	長 胴 甕	口縁部のみ		低い口縁で直立。円筒形胴。	口縁部横ナデ。胴上部は横方向へら削り。		覆土中参考
3	坏	1/4	口径 10.8	低い口縁を内湾させ丸味をもつ。やや深めの体部。	口縁部横ナデ。体部外面へら削り——不鮮明。	橙色 砂粒 焼成良好	
4	坏	完 形	器高 3.8 口径 12.2	立上がり内傾。体部は尖底気味につくる。内側折れ目。やや深め。	立上がり横ナデ。体部外面は横方向へら削り。内面ナデ仕上げ。	橙色 砂粒 焼成良	
5	坏 (埴)	1/4 強	口径 14.0	口縁部を欠く。平底。埴状。	外面はへら削り部を底となす。内面へら研磨痕(暗文)。	橙色 砂粒 焼成良	覆土中参考 平城宮跡 分類A
6	甕	口縁部のみ		S字口縁台付甕			覇土中参考

第18表 第13・14号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	完形	器高 30.6 胴最大径21.5 口径 16.1	くの字状外反。丸味強い胴。平底。	口縁横ナデ。胴上半は口縁に向けてヘラ削、中下半は底方向へ削、底部は不規則削。	橙色 砂粒 焼成良	P70・P73・P74・P91・P93等
2	長胴甕	完形	器高 31.8 胴最大径24.0 口径 18.3	低く外反の弱い口縁。胴最大径を下に持つ。頸径が広い。平底。	口縁横ナデ。胴上半は頸に向かい、中位は底に向けヘラ削、底付近は横方向。内ヘラナデ。	橙色 石粒混入 焼成良	P50・P56・P21・P60・P150・P156
3	長胴甕	底部欠	器高 (28.0) 胴最大径23.8 口径 17.9	頸部の広く外反の小さい口縁部。球形胴最大径は下位。	口縁内外ナデ。胴外面中上半は頸に向けヘラ削。内面ヘラ工具による調整。輪積痕。	橙色 砂粒 焼成良	P91・P93一括 P84・P54
4	長胴甕	完形	器高 33.5 胴最大径28.0 口径 16.2	頸部が小さいくの字状外反する口縁。球形胴。最大径下位。平底。	口縁横ナデ。胴外面ヘラ削り後ヘラ研磨。内面輪積痕。ヘラ工具ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	P6・P7・P22・P33・P34
5	長胴甕	1/2 残	器高 32.6 胴最大径27.2 口径 19.5	頸部大で外反弱い口縁。球形胴。最大径中位。小さい平底。	口縁内外ナデ。胴部上・中位は頸に向かいヘラ削、下半は底に向かいヘラ削。内面ヘラ。	橙色 砂粒 焼成良	P93・P135 P92・P164
6	甕	完形	器高 31.7 胴最大径28.8 口径 24.5	広口甕。胴下半は狭い。小さい平底。口縁はくの字状に外反。	口縁内外横ナデ。胴上半横方向ヘラ削、中位は斜、下半は不規則なヘラ削。内ヘラ調整	橙色 砂粒 焼成良	P8・P22・P37・P44・P45・P46・P49他
7	長胴甕	完形	器高 30.1 胴最大径21.5 口径 17.3	頸広く外反する口縁。丸味を残すが長胴化。平底。	口縁内外横ナデ。胴上半横ヘラ削、中下位は斜ヘラ削。底ヘラ削。内面ヘラ工具調整。	橙色 砂粒 焼成良	P17・P51・P55・P56・P103・P104
8	長胴甕	底部欠	器高 (31.0) 胴最大径22.5 口径 16.4	頸径高く高い口縁。長胴化。丸味残す。	口縁部内外ナデ。胴上半は頸に向かいヘラ削、下半は横等不規則削。内面ヘラ工具調整。	橙色 砂粒 焼成良	貯蔵穴内出土 P8・P85・P86・P86 P48・P51・P57
9	甕	底部欠	器高 (34.0) 胴最大径30.1 口径 19.0	口縁はゆるく外反。中段に沈線。球形胴で最大径は上位。	口縁部ナデ。口唇部ナデ。口唇部つまみ。胴外面横方向ヘラ削。内面はナデ仕上げ。輪積痕。	暗褐色 石粒混入 焼成良	P11・P14・P16・P45・P49等
10	甕	口縁部欠	器高 (36.0) 胴最大径37.0	頸の広い口縁。球形胴で最大径を上位につける。平底。	胴外面上半は左下方向にヘラ削り。内面ナデ仕上げ。	橙色 砂粒 焼成良	P134一括
11	甕	口縁部のみ		口縁部を胴部に垂直に接合し、口唇部が外反。中位に段をつける。	口縁部横ナデ。胴上半横方向ヘラ削り。	橙色 砂粒 焼成良	P134
12	坏	完形	器高 4.5 口径 13.8	鍋底状の体部と小さい外反する口縁。	外面はヘラ削りで底部をなす。内面ヘラ研磨痕(放射状)。	橙色 砂粒 焼成良	P5・P33・P32
13	坏	1/2 残	器高 5.1 口径 13.9	鍋底状の体部と小さい外反する口縁。	外面はヘラ削りで底部をなす。内面ヘラ研磨痕(放射状)。	橙色 砂粒 焼成良	P51

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
14	坏	1/2 残	器高 5.9 口径 10.8	丸底。球形。口縁内湾。	回転ナデ後、外面ヘラ削りで底を造り、内面ヘラ研磨痕(放射状)を残す。	橙色 砂粒 焼成良	P20
15	坏	1/2 残	器高 4.9 口径 10.2	丸底。球形。口縁内湾。	回転ナデ調整。体外面ヘラ削りで底部をつくる。内面はヘラ研磨痕(放射状)一部つけ。	橙色 砂粒 焼成良	P64
16	坏	完形	器高 5.6 口径 11.3	丸底。球形。口縁内湾。 口唇部うすい。	回転ナデ調整。体外面ヘラ削りで底部をつくる。内面はヘラ研磨痕(放射状)一部つけ。	橙色 砂粒 焼成良	P21
17	坏	完形	器高 5.2 口径 11.7	丸底。球形。口縁内湾。 口縁部を少し作る。	回転ナデ調整。体外面ヘラ削りで底部をつくる。内面はヘラ研磨痕(放射状)一部つけ。	橙色 砂粒 焼成良	P28
18	坏	完形	器高 5.1 口径 12.5	口縁部の内湾度がやや少ない。	回転ナデ調整。体外面ヘラ削りで底部をつくる。内面はヘラ研磨痕(放射状)一部つけ。	橙色 砂粒 焼成良	貯蔵穴内出土
19	坏	1/2 残	器高 4.6 口径 12.2	口縁部の内湾度がやや少ない。	回転ナデ調整。体外面ヘラ削りで底部をつくる。内面はヘラ研磨痕(放射状)一部つけ。	橙色 砂粒 焼成良	P124
20	坏	完形	器高 5.4 口径 12.7	口唇部の内湾度がやや少ない。	回転ナデ調整。体外面ヘラ削りで底部をつくる。内面はヘラ研磨痕(放射状)一部つけ。	橙色 砂粒 焼成良	P22
21	坏	1/2 残	器高 5.4 口径 14.0	鍋底状をなし、上半分に立上がり部分を作り、境に段を造る。	回転ナデで調整し、立上がりは横ナデ仕上げ。体部は削りか不明。内面研磨。	橙色 砂粒 焼成良	P35
22	坏	1/2 残	器高 5.2 口径 13.9 (受け部径)13.9	立上がり部を直立させ、体部との間に段でつけ受け部とする。	口縁部横ナデ。体部下半から底は横方向ヘラ削り、内面放射状研磨痕。	橙色 砂粒 焼成良	P113
23	高坏	完形	器高 9.9 口径 13.0 脚径 9.6	坏に脚付。坏は旧型で口縁部小さい。	坏内外面研磨し平滑化する。口唇部等一部ナデ、脚外面削り、内面横ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	P33・P20
24	高坏	完形	器高 9.8 口径 13.5 脚径 8.6	坏に脚付。坏は旧型で口縁部小さい。口唇部をつくらない。	坏内外面研磨し平滑化する。口唇部等一部ナデ、脚外面削り、内面ナデ。	橙色 砂粒 焼成良	P20

第19表 第15号住居址出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	羽釜	底部欠	口径 22.4 罎径 25.3	断面三角形の罎。上半に最大径を持たせる。罎と口唇部幅狭い。	輪積み。罎は貼付。外面を縦方向にヘラ削りを加える。内面ナデ仕上げ。	褐色 小石 焼成良	

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	羽釜	底部・口縁部欠	罎径 23.0	断面三角の罎(下向き)。最大径を中位に。	輪積み。罎は貼付。外面を縦方向にヘラ削りを加える。内面ナデ仕上げ。	明赤褐色 石粒 焼成良好	
3	灰釉陶器碗	一部			ロクロヘラ成形。	灰白色 焼成良好	白瓷
4	灰釉陶器碗	ほぼ完形	器高 4.9 口径 14.1 底径 5.4	口縁部に比し底部小さい。	ロクロ、外面ヘラ当て。付け高台。底部糸切。口唇部は外反。内面・外面灰釉。	灰色 砂粒 良好	ドブづけ重ね焼

第20表 第11号土坑出土遺物観察表

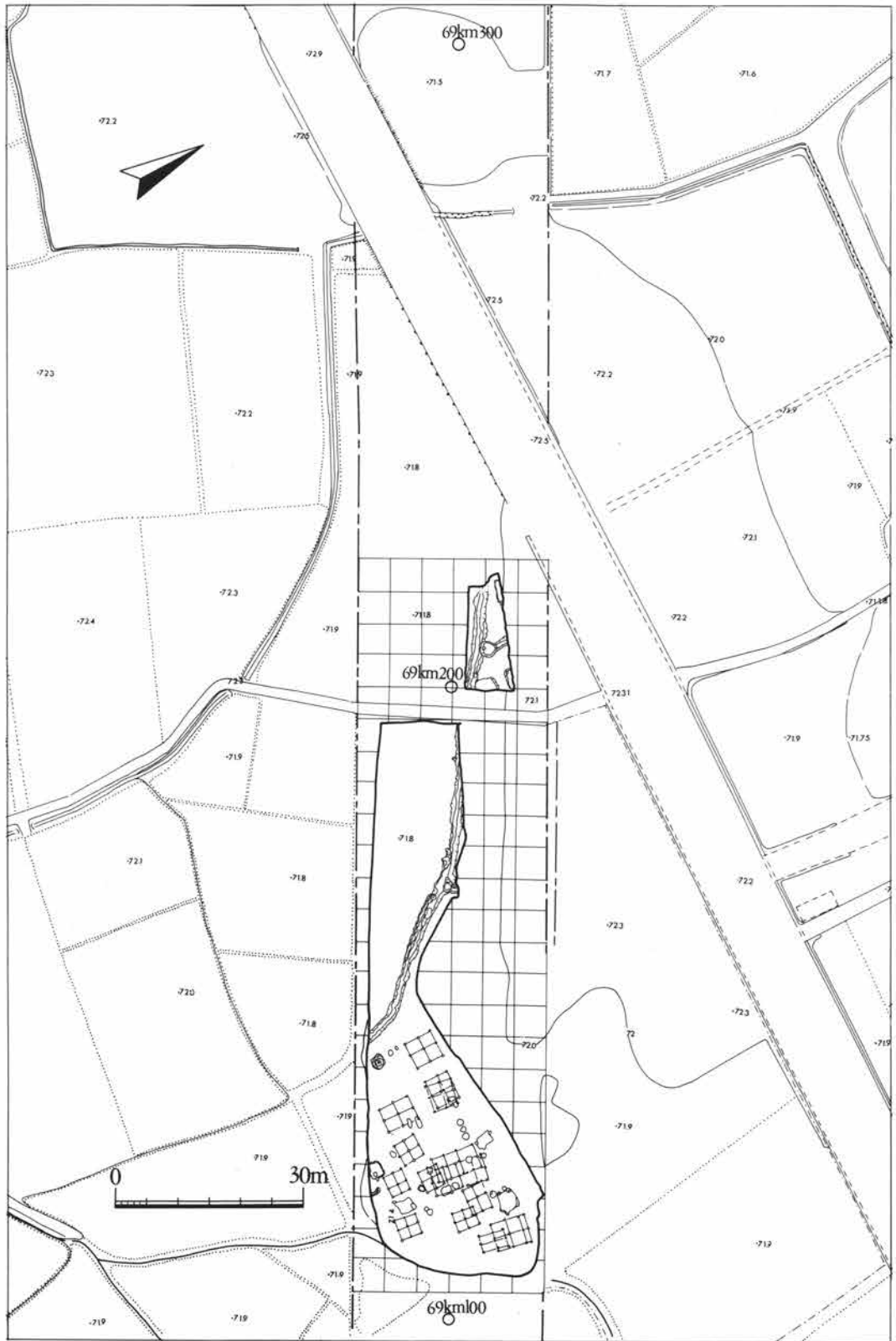
番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	大型甕	口縁欠	器高 (94.0) 最大径 83.0 肩破損径60.0	細長い胴。最大径を肩に持つ。底部は丸。頸は小さい。口縁部は胴に垂直につけゆるく外反。口唇部に稜を造る。	口唇部はつまみで稜をつくり、下に凸帯状の盛り上がりをも2条まわす。外面は斜にヘラ研磨。内面は回転ヘラ調整。胴外面は平行の細い叩き目で底まで打つ。内面は叩き目をすり消す。	器表は青灰色、器壁中心部はセピア色 焼成良、固い	口縁はごく一部を残し他は無い

第21表 その他の遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	長胴甕	口縁部の一部		口縁外側に接合面を未調整で残す。			表採
2	長胴甕	口縁部の一部		コの字状口縁	胴横削り。 内面ナデ平滑。	橙色 砂粒 焼成良好	表採
3	羽釜	口縁一部残		断面三角の罎を口縁部からつける。	胴外面ヘラ削り。内面ナデ仕上げ。	灰褐色 砂粒 焼成良好	表採
4	羽釜	口縁一部残		茶釜状胴。断面三角の罎。	輪積。外面ヘラ横削り。内面ナデ。	灰褐色 砂粒 焼成不良	表採
5	須恵器坏	一部残				灰白色 砂粒 焼成良好	表採

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
6	須恵器 坏	完形	口径 13.5 器高 3.9	糸切底。 口唇部外反する。		灰色 砂粒 焼成良好	表採
7	坏	完形	口径 12.4 器高 3.9	口縁部が直立。浅い体部。		にぶい橙色 砂粒 焼成良好	表採
8	須恵器 小型 壺	口縁部の一部		口唇部外側段状の稜、 内面に凹みあり。外面 は二段の波状文あり。			土師壺の口縁に 類似する段あり
9	小型 坏	完形	口型 10.3 器高 5.7 底径 4.2	手づくね状。底に木葉 痕をつける。	外面はへら研磨仕上げ。	橙色 砂粒 焼成良好	13住覆土
10	坏	完形	口径 11.8 器高 4.9	立上がり部分が比較的 狭く区割する。沈線を 施す。	体部下はへら削り。内面ナデ の後へら研磨（放射状）。	橙色 砂粒 良好	表採
11	須恵器 不明	1/3 残	口径 13.0	台か脚であろう。ハの 字状に開き、先を折り 曲げる。	回転へら調整。	灰色 砂粒 還元	表採
12	布目瓦	1/3 残		軒平瓦。三角文と同じ 円の圏文を施す。	貼付で半分欠落。押文は端が 三角形になり、終末の瓦と思 われる。	灰色 砂粒少量 良好	埼玉県入間郡高 岡庵寺で同種の 軒平瓦出土

IV 中 I 遺 跡



第 80 図 中 I 遺跡グリッド設定図 (1/1000)

IV 中 I 遺 跡

A 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査区は大宮起点から 69 km100m～69km340m (中 I 遺跡)、及び69km500m～70km140m (中 II 遺跡)である。幅は本線敷部分12m、両側道部分14mの計26mである。路線は、ほぼ東西方向に走る。

調査基準杭は路線センター杭(20mピッチ)を利用し、69km100mを基準として、100mを1区として、5mグリッドを設けた。杭の東方向をX軸としてA～Eと呼称し、西方向を1～10とした。

両遺跡は分布調査の結果、試掘調査がその主体であった。中 I 遺跡において、部分的にグリッドを調査した。その結果、B軽石層の堆積が確認され、重機によってB軽石層の削平作業及び遺構検出を実施した。

また中 II 遺跡は 2 m幅のトレンチ方法による遺跡確認作業を実施し、土器の散布地、及び西側端に遺跡の存在を知ることができた。

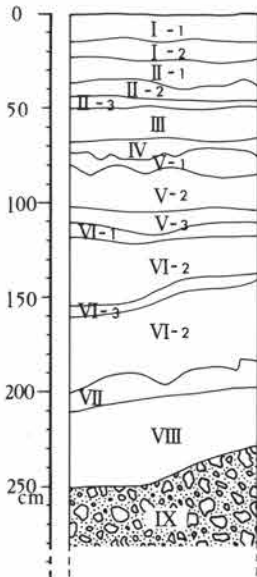
なお、中 I 遺跡は大半瓦用粘土採集の為、攪乱されていた。

2 調査の経過

昭和52年4月11日(月)	器材の搬入、グリッド設定、桑抜き。
12日(火)	グリッド調査開始。
15日(金)	鉄分沈澱層を確認。この面で掘り下げを止める。
18日(月)	調査区南端から、鉄分沈澱層(第III層)まで重機により削平。
20日(水)	柱穴状遺構の調査開始。
21日(木)	実測用水糸張り。
22日(金)	掘立柱遺構実測開始。
5月7日(土)	第1号掘立柱遺構エレベーション。
11日(水)	第9号掘立柱遺構まで確認。
13日(金)	第10・11・12・13号掘立柱遺構まで確認。
18日(水)	第1号井戸址確認。
20日(金)	各遺構写真撮影開始。
27日(金)	住居址調査開始。
6月8日(水)	第1号住居址より写真撮影開始。
20日(月)	中 II 遺跡、基準杭打ち開始。

- | | |
|---------|----------------------------------|
| 25日(土) | 中I遺跡、全景写真撮影、調査終了。 |
| 28日(火) | 中II遺跡1区調査開始。 |
| 7月6日(水) | 7区で火葬墓確認。 |
| 8日(金) | 重機により1区削平。 |
| 13日(水) | 7区一溝状遺構、若干のピットを確認。重機によるトレンチ調査終了。 |
| 14日(木) | 遺構調査開始。中I地区埋戻し終了。 |
| 20日(水) | 掘立柱遺構・溝状遺構の平面図などを作成。 |
| 22日(金) | 7区上層全景写真撮影。 |
| 29日(金) | 7区一部下層調査開始。 |
| 8月1日(月) | 7区第3号溝状遺構検出。 |
| 11日(木) | 7区第3号溝状遺構写真撮影。 |
| 12日(金) | 中II遺跡調査終了。室内作業。 |
| 19日(金) | 器材の搬出。 |

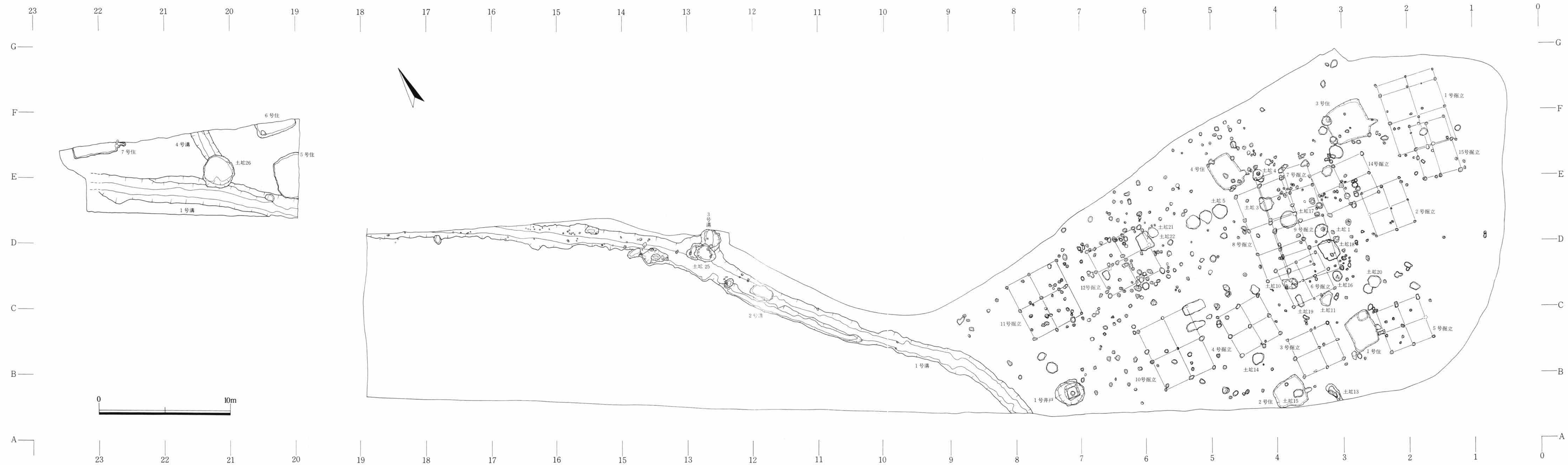
B 遺跡の概要 (中I・中II遺跡)



第81図 基本土層 (1/40)

中I遺跡及び中II遺跡は前述のように沖積地に立地し、現在の地表面は標高70m程に存在する。微高地には畑地、あるいは桑畑があり、低地は水田が形成されている。本遺跡は上越新幹線関係埋蔵文化財分布調査の結果、参考地として記録され、試掘調査の結果によって、本調査を実施するという条件があった。中I遺跡はグリッド調査の結果、全面発掘調査、中II遺跡はトレンチ調査から遺構確認箇所を拡張して調査を実施した。その結果、中I遺跡は浅間火山噴出物-B軽石-を介在として下層に住居址群、上層に掘立柱遺構群を確認した。また、中II遺跡では調査区西端に掘立柱遺構及び溝状遺構中の多数の土器片の出土を確認できた。

以上の結果、中I遺跡では下層に住居址7軒、上層に掘立柱遺構15棟(図上による)、他に配石土壇1基、土壇26基、井戸址1基、溝状遺構2本であった。中II遺跡は、掘立柱遺構2棟、墓址2基、溝状遺構3本であった。



第82图 中I 遺跡遺構配置図 (1/160)

基本土層

中I、及び中II遺跡は立地と歴史的環境の中で記述したように、温井川（旧鑓川河川、あるいは烏川河川）によって形成された沖積地上に立地する。粘土採掘断面からも、最下層を形成する礫層は、高低はあるものの、基本的な土層は大差がない。そこでI・II遺跡の中間的位置にあるII遺跡1区の土層を基本土層として、上層から記述する。

- I-1 現耕作土、A軽石を混入。
- I-2 旧水田耕作土、A軽石混入。
- II-1 旧耕作土、A軽石混入。
- II-2 旧水田耕作土、灰褐色粘質土、A軽石を混入しない。
- II-3 鉄分沈澱層、II-2の床土。
- III 灰褐色粘質土、B軽石を含む。
- IV B軽石層、鉄分の沈着がある。
- V-1 灰褐色粘質土。上面はやや黒色。
- V-2 灰褐色粘質土、旧水田耕作土。下部に従い鉄分の沈澱が見られる。
- V-3 鉄分沈澱層。V-2の床土。
- VI-1 細砂層、V-3プラスVI-2。マンガンは見られず、鉄分の沈澱が見られる。
- VI-2 灰褐色細砂層、上面に斑点状のマンガン層をもつ。下部に従い細かい砂利を含む。
- VI-3 VI-2と同質。黒色が強い。
- VII 褐色粘質土層、灰色粘質土がブロック状に入る。なおブロックのまわりに鉄分の付着が見られる。
- VIII 黒褐色粘質土、VII層と同様のブロック。
- IX 礫層、河原石及び砂利。

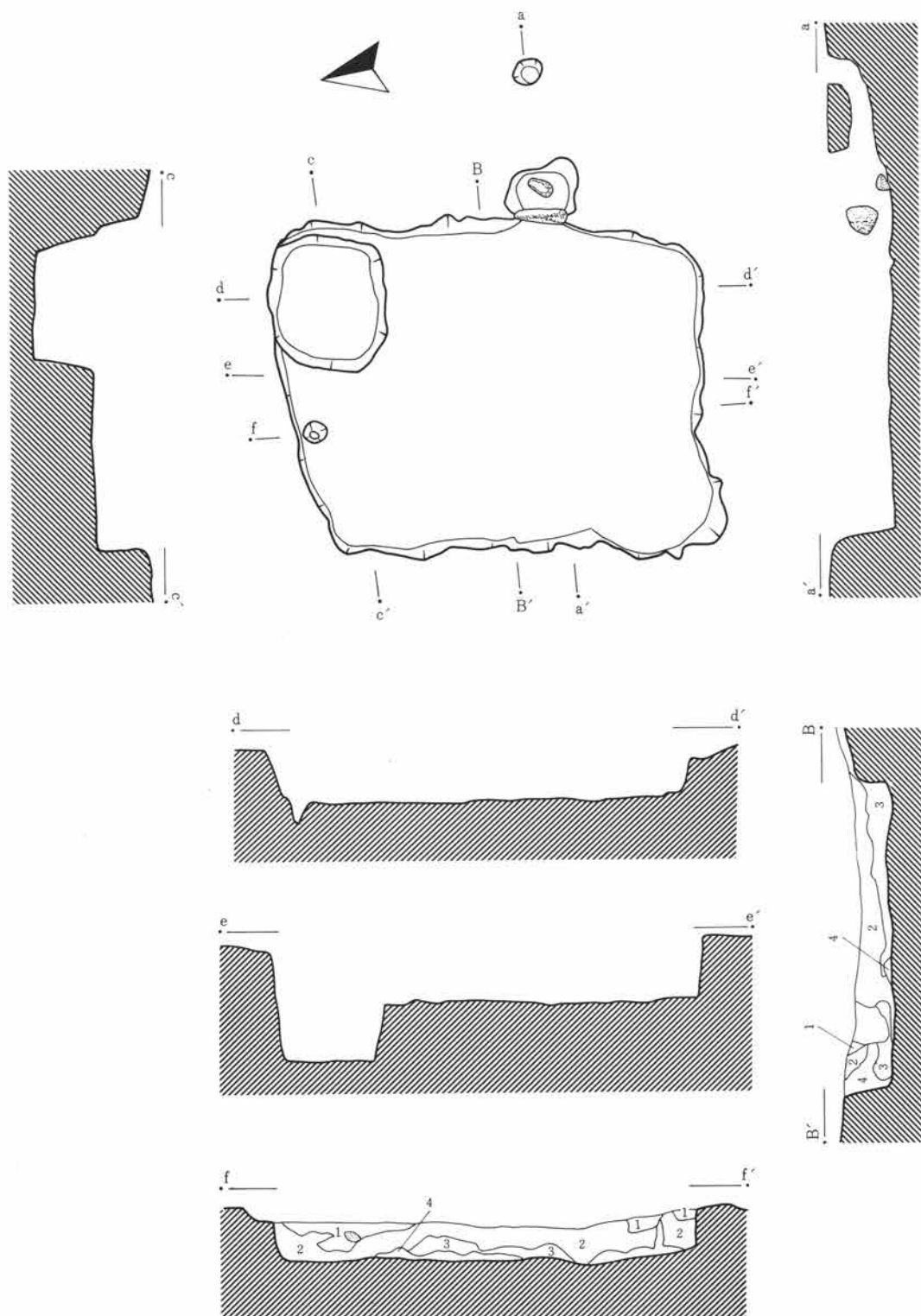
C 遺構と遺物

1 住居址

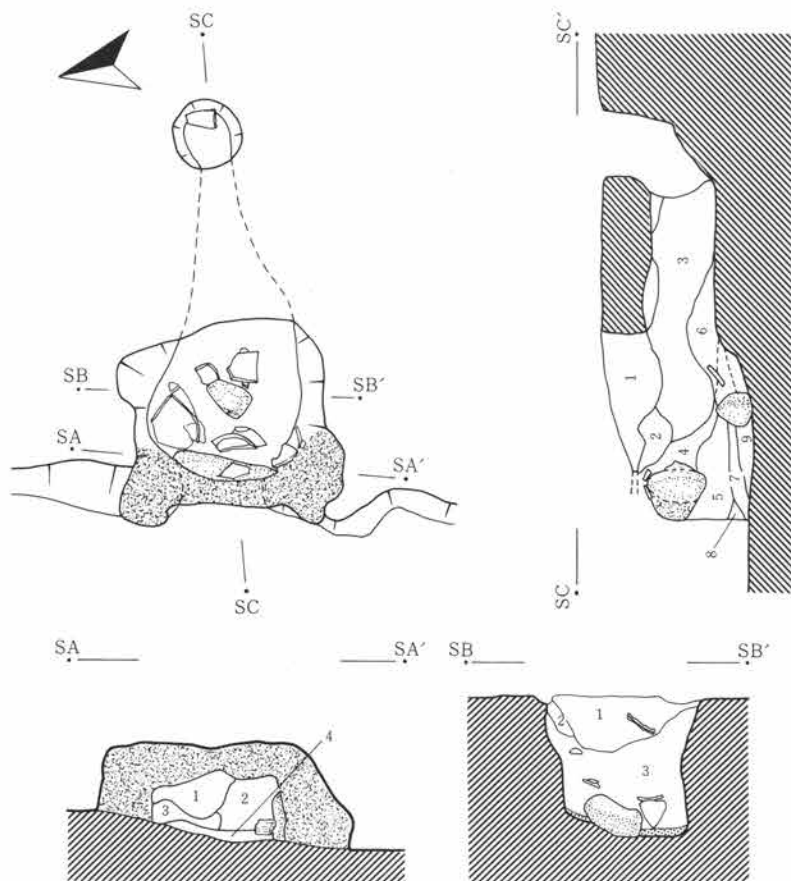
(1) 第1号住居址（第83～86図、図版35～36、54）

本住居址は東西辺2.03m×南北辺2.62mの規模をもち、検出面からの壁高（以下壁高と略称する）38cmである。方位はE-77°-Sである。床面及び壁面は後述のように火災の影響により、部分的に堅固な状況であった。カマドは東壁南寄りに、河原石を使用して鳥居状に組み、さらに粘質土で巻く方法で設置している。燃焼部は床面よりわずかに凹部をもち、煙道部は高まって、煙出しは直立する。平面形は半円形を呈し、煙出し部はやや北寄りに位置している。

貯蔵穴はカマドの左側、すなわち北東コーナーにあり、東西辺90cm×南北辺69cm、深さ37cmの



第 83 図 第 1 号住居址 (1/40)



第 84 図 第 1 号住居址カマド (1/20)

0 0.5m

第 1 号住居址土層(SA-SA')(SB-SB')

- | | |
|----------------------------------|---------------------------|
| ① 黄褐色粘質土 炭化物・焼土粒子ごく少量 | ③ 黄褐色土 ①に類似するが炭化物と焼土がやや多い |
| ② 褐色土 炭化物・焼土多量に含む。軽石も混じる。小砂利も混じる | ④ 赤褐色土 焼土が主体、炭化物が多く混じる |

第 1 号住居址カマド土層

(SB-SB')

- ① 黄色粘土 少量の炭化物
- ② 焼土 炭化物を多く含む
- ③ 焼土 炭化物、灰の混合土層

(SA-SA')

- ① 黄色粘土 少量の炭化物
- ② 焼土 灰、炭化物の混合土層
- ③ 焼土
- ④ 灰と思われる灰黒色土

(SC-SC')

- | | |
|---------------------|---------------------|
| ① 黄色粘土 少量の炭化物、焼土を含む | ⑥ 褐色粘土層 炭化物をあまり含まない |
| ② ①に似るが茶褐色粘土を多く含む | ⑦ 灰の層 |
| ③ 焼土 炭化物、灰の混合土層 | ⑧ 焼土 |
| ④ 特に焼土の多い層 | ⑨ ⑥と同じだが灰を含む |
| ⑤ ①に同じ | |

規模をもつ。

本住居址は平面プランの確認作業において、赤紫色に変色した方形の平面プランが認められた。調査進行の段階に、床面直上に藁状炭化物もしくは茅状炭化物が確認され、その上面あるいは下面に棒状炭化物が存在した。この結果、この住居址は火災家屋の可能性が考えられる。

出土遺物は第86図1のカマド内出土を主体とする羽釜、同図2の土師質の坏（灯明皿系）及び同図3の須恵質の坏、同図4の砥石、同図5の鉄製品である刀子がある。なお、この他に高台付碗が出土したが、心ないマニアによって盗まれて、行方不明である。

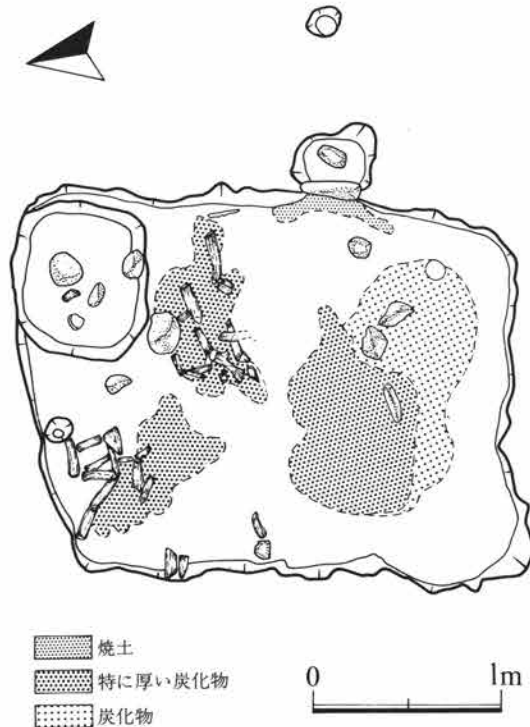
第86図1の羽釜は土師質である。器高26.8cm、口径25.7cm、胴部最大径28.5cm、底径8cmを計る。口縁部は内傾し、厚さは0.6cmの鏝のナデは丁寧で、先端はやや肉厚で丸味を有する。胴部最大径は鏝の付根にある。胎土は砂粒・石粒を多量に含む。焼成は良好で淡褐色である。輪積みの痕跡を明瞭に残し、胴部は上から下へのヘラ削り、口縁・鏝・内面はナデである。

2は土師質の皿で、完形品である。器高は1.9cm、口径は9.2cm、底径は4.8cmである。底部から内湾ぎみに外傾する。胎土は砂粒を含む。色調は橙色で、酸化焼成である。成形は右回転のロクロを使用し、回転糸切底をもつ。

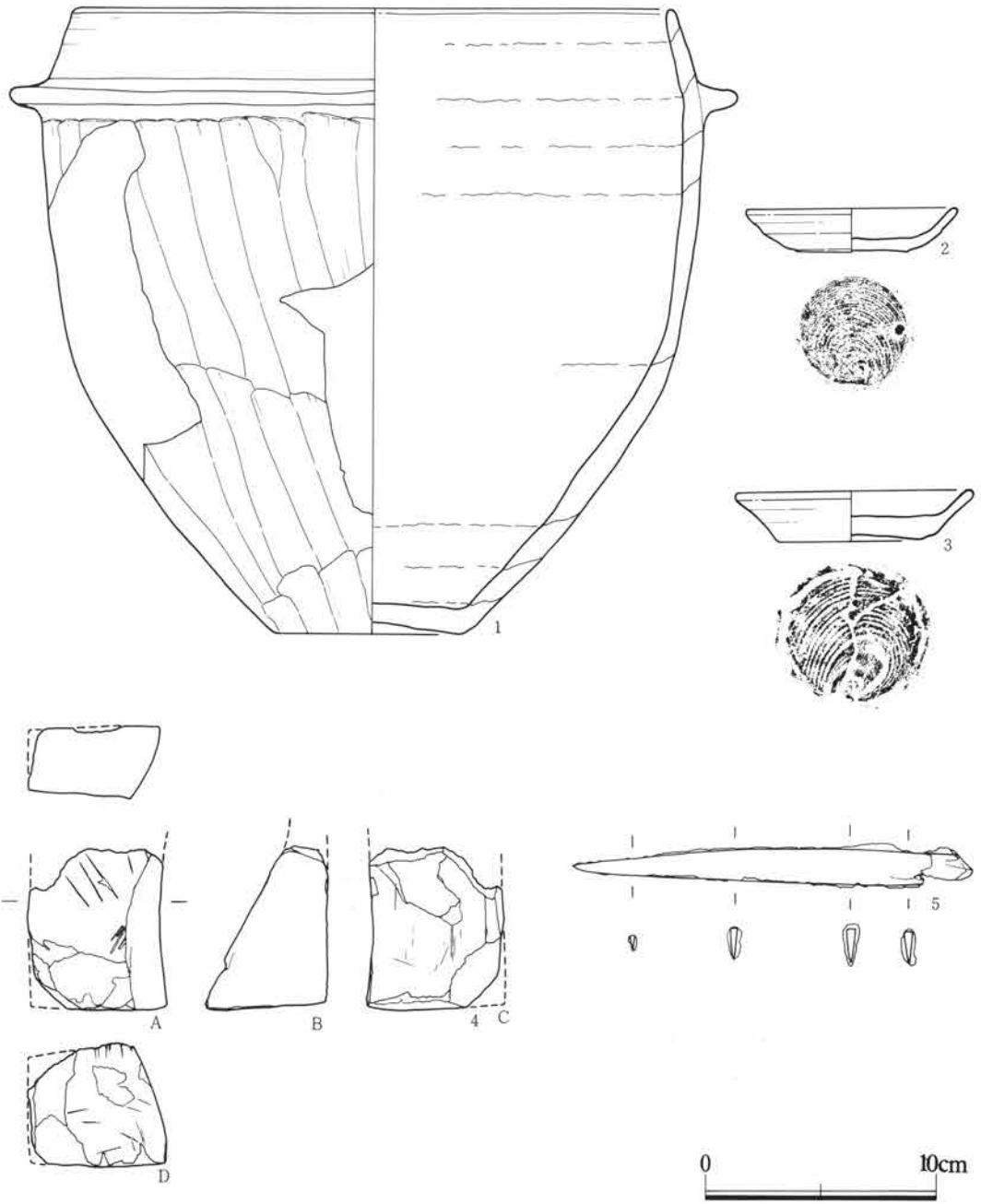
3は須恵質の皿である。器高2.1cm、口径13.5cm、底径6.3cmを計り、広い底部を有する。底部から外反しながら、口縁部下でやや反り気味になり、口唇部は丸味を有する。胎土は砂粒を少々含有する。還元焼成であるが軟質で、色調は灰色である。左回転のロクロ成形で、回転糸切底である。

4は現存最大長、A面で7.7cm、最大幅、C面5.5cmである。石材は流紋岩である。A面下部は剥落している。研磨部表面に数条の条痕が認められる。また縦方向に擦痕が観察できる。B面は良く使用されたようで滑かである。弓状に湾曲する表面をもつ。C面は上部の一部に剥落がみられる。B面より使用されていない。縦方向の擦痕が観察できる。D面は底面にあたるが使用されている。やはり縦方向に同様の痕跡が認められる。

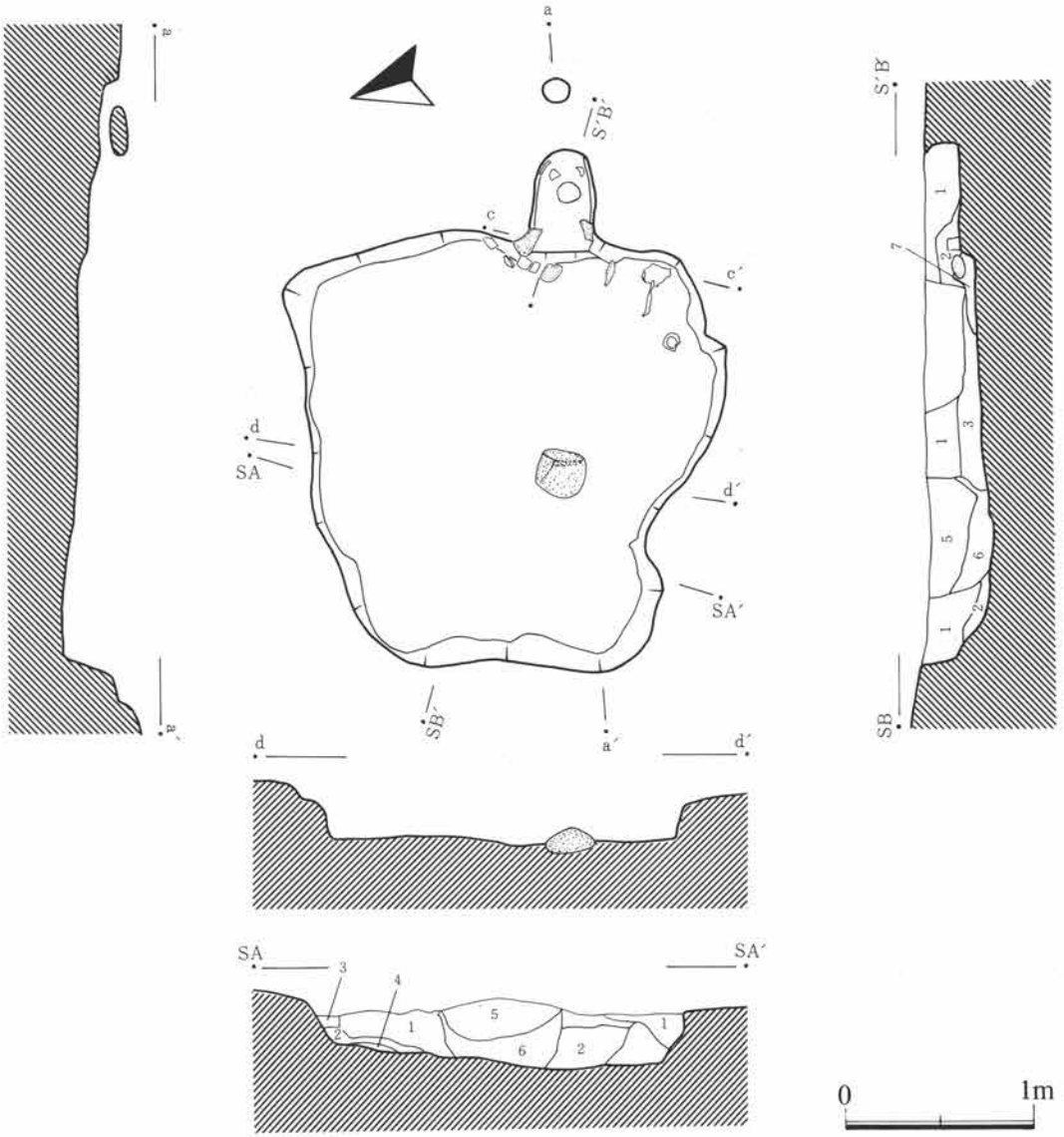
5はほぼ完形の刀子である。刃渡の長さ13.4cm、茎の長さ2.2cm、身幅は基部で1.9cm、背の厚さ0.5cmを計る。刃部は先端から3~5.5cmの部分がかもっとも磨滅している。柄の付根から1.7cmは刃部が形成されていない。この部分の上部は凹状を示す。



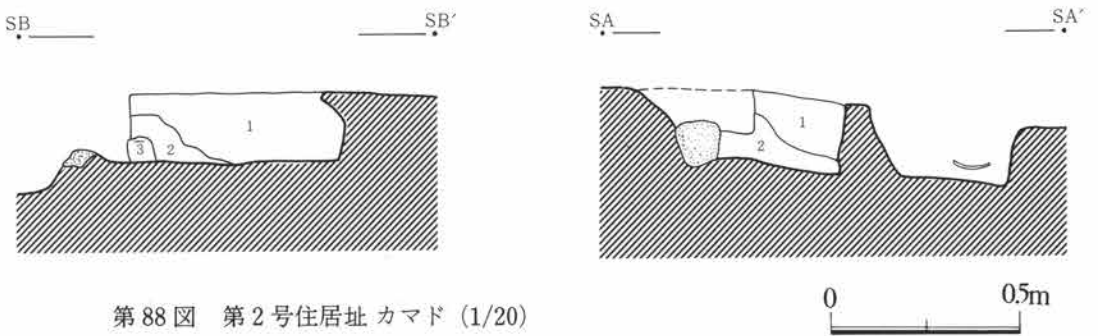
第85図 第1号住居址遺物出土状況 (1/40)



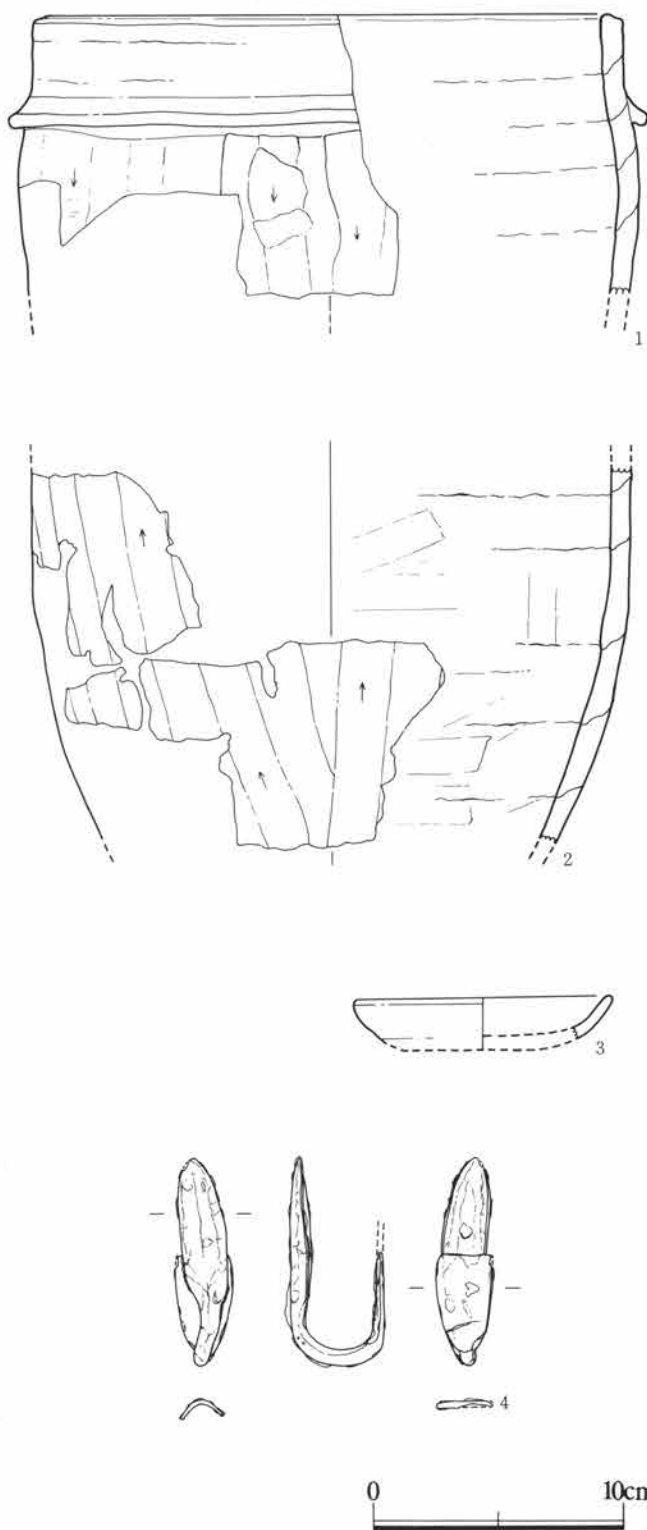
第 86 図 第 1 号住居址出土遺物 (1/3)



第87図 第2号住居址 (1/40)



第88図 第2号住居址 カマド (1/20)



第 89 図 第 2 号住居址出土遺物 (1/3)

(2) 第 2 号住居址

(第 87～89 図、図版 37、54)

本住居址は東西辺 2.25m × 南北辺 2.22m、壁高 45cm の規模である。方位は E-15°-S である。カマドは東壁中央南寄りに設置され、焚口部は壁の位置にあり、左焚口部に袖石が残存している。燃烧部は床面より一段と高く、平面形は南北に長い半楕円形で、煙出し部はやや北寄りに位置している。床面は明瞭ではない。柱穴は確認されなかった。貯蔵穴も認められない。住居址中央南寄りに、床面に埋め込んだ状態で、幅 26cm の河原石が残存していた。上面が平坦ではなく、使用の痕跡もないが、目的をもって設置されたものであろう。

本住居址を含めて、覆土と地山の粘質土が同様な色調であるため、壁・床面などの確認は困難であった。この結果、不定形状の住居址となった。

出土遺物には、羽釜破片、坏(皿)状破片、鉄製品がある。

第 89 図 1 は土師質羽釜である。破片であるため、器高・口径など不明であるが、推定口径は 22.4cm、推定胴部径は 24.8cm ほどと思われる。鑊の幅は狭く、下向きに取り付けられている。口縁部は直立し、口唇部は内側が高くなっている。胴部最大径は鑊の下部にある。胎土は石粒を多く含み、焼成

は良好で、色調は褐色である。輪積みの痕跡が明瞭に残り、胴部は上→下へのヘラ削り、口縁部・鏝・内面はナデである。

2も羽釜の胴部破片である。石粒を多量に含有する。焼成は良好で、色調は褐色。輪積み痕が明瞭であり、下→上方向のヘラ削りで整形している。

3は土師質の坏で、推定器高2cm、推定口径11.4cmであり、灯明皿様の土器である。胎土は粗い砂粒を多量に含む。色調は焼きむらがあり、褐色部分と黒褐色部分とがある。

4は鉄製品である。一端は長楕円形状の平面を有し、鈍く尖る。この部分は円形状の断面をもつ茎につながる。この茎は「コ」の字状の形状を有し、長さ6.1cm、最大幅1.8cm、その先に「ちよな」状の部分が付く。長さ3.7cm、最大幅2.1cm。刃部は腐食して不明である。

第2号住居址土層(SA-SA')(SB-SB')

- | | |
|---------------------------|-----------------------------------|
| ① 黄色粘土 炭化物を含む層、やや軽石を含む | ⑤ ①層によく似る、小砂利が目立つ、①よりやや黒味をおび焼土を含む |
| ② 灰色粘土 マンガン粒子を含む、炭化物少ない | ⑥ ⑤層よりやや砂質が多くなる、焼土も含む |
| ③ 黄色粘土 地山の可能性大 | ⑦ 炭化物、焼土を多量に含む、黒褐色土 |
| ④ 黒褐色土 粘土質、軽石、マンガン、小砂利を含む | |

第2号住居址カマド土層(SA-SA')(SB-SB')

- ① 黒褐色土層 炭化物、軽石、焼土粒子を含む。小砂礫もみられる
- ② ①よりも焼土を多量に含む層 炭化物も多い、黄色土のブロックを含む
- ③ カマドの粘土

第3号住居址土層(SA-SA')(SB-SB')

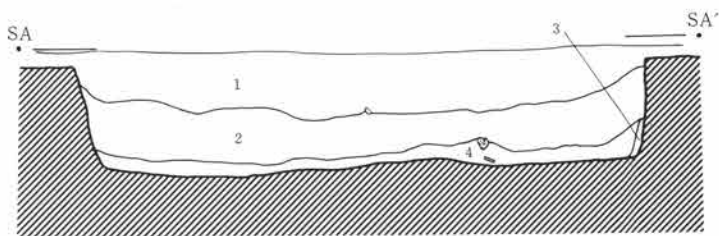
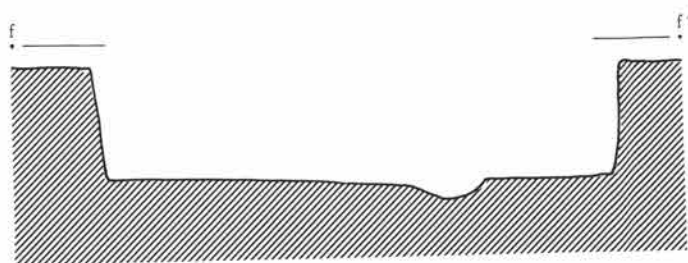
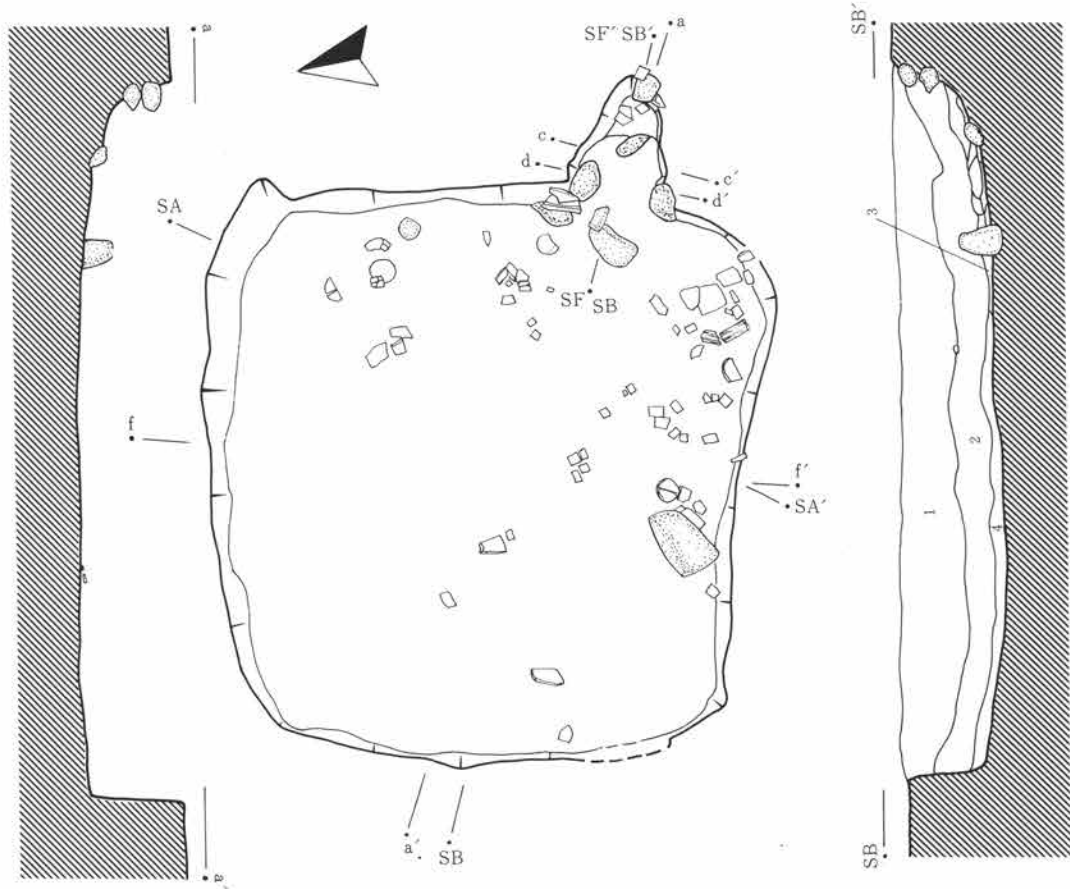
- | | |
|---|--|
| ① 黄褐色土 軽石、砂礫、炭化物を含む。焼土粒子も若干含む。全体的に粘質土である。 | ③ 炭化物と焼土が多量に含まれる層 |
| ② ①に類似するが黄色粘土及び灰色土ブロックが多量に混入している。炭化物、焼土は①よりも多量に含まれるが軽石は少なくなる。 | ④ 黄褐色土、焼土、炭化物の大きなものが見られる。小砂礫や灰色土も見られ全体的に砂質である。 |

第3号住居址カマド土層(SD-SD')

- | | |
|--|---|
| ① 黄褐色土、軽石、砂礫及び微細の炭化物、焼土を含む。住居セクションの①に該当する。 | ② ①に似るが黄色粘土ブロック、灰色粘土ブロックが多く混入している。炭化物、焼土は①よりも多い、住居セクションの②に該当する。 |
| ③ ②に似るが、灰を含むため灰褐色を呈する。 | |

(SE-SE')(SF-SF')

- | | |
|---|--|
| ① 住居セクションの①に該当 | ⑥ 黒褐色土。焼土粒子、炭化物、軽石、小砂礫などが含まれる。黄色粘土のブロックも含む |
| ② 住居セクションの②に該当 | ⑦ ④に類似するが焼土と炭化物がより多く含まれる。 |
| ④ ②とほぼ同程度の土質であるが炭化物の多い点で区別できる。②よりも色調が暗い | ⑧ 焼土ブロックと炭化物の混合層、黄色粘土の混入が見られる。 |
| ⑤ ②に類似するが焼土ブロックが多量に含まれる。 | ⑨ ⑥に類似するが炭化物と焼土をより多く含む。 |
| | ⑩ 黄色粘土層。灰色土の混入も見られる。 |

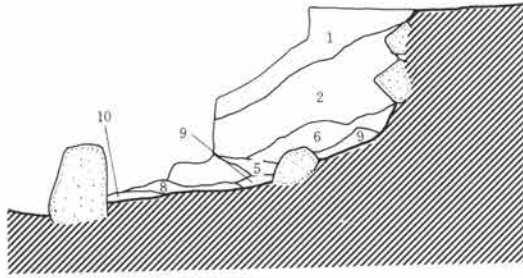


第90图 第3号住居址 (1/40)

SF

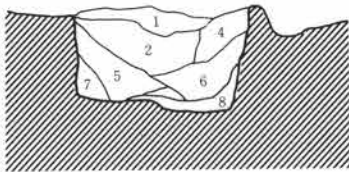
SF'

(3) 第3号住居址(第90~93図、図版38・39、55~57)



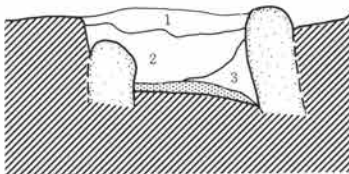
SE

SE'



SD

SD'



0 0.5m

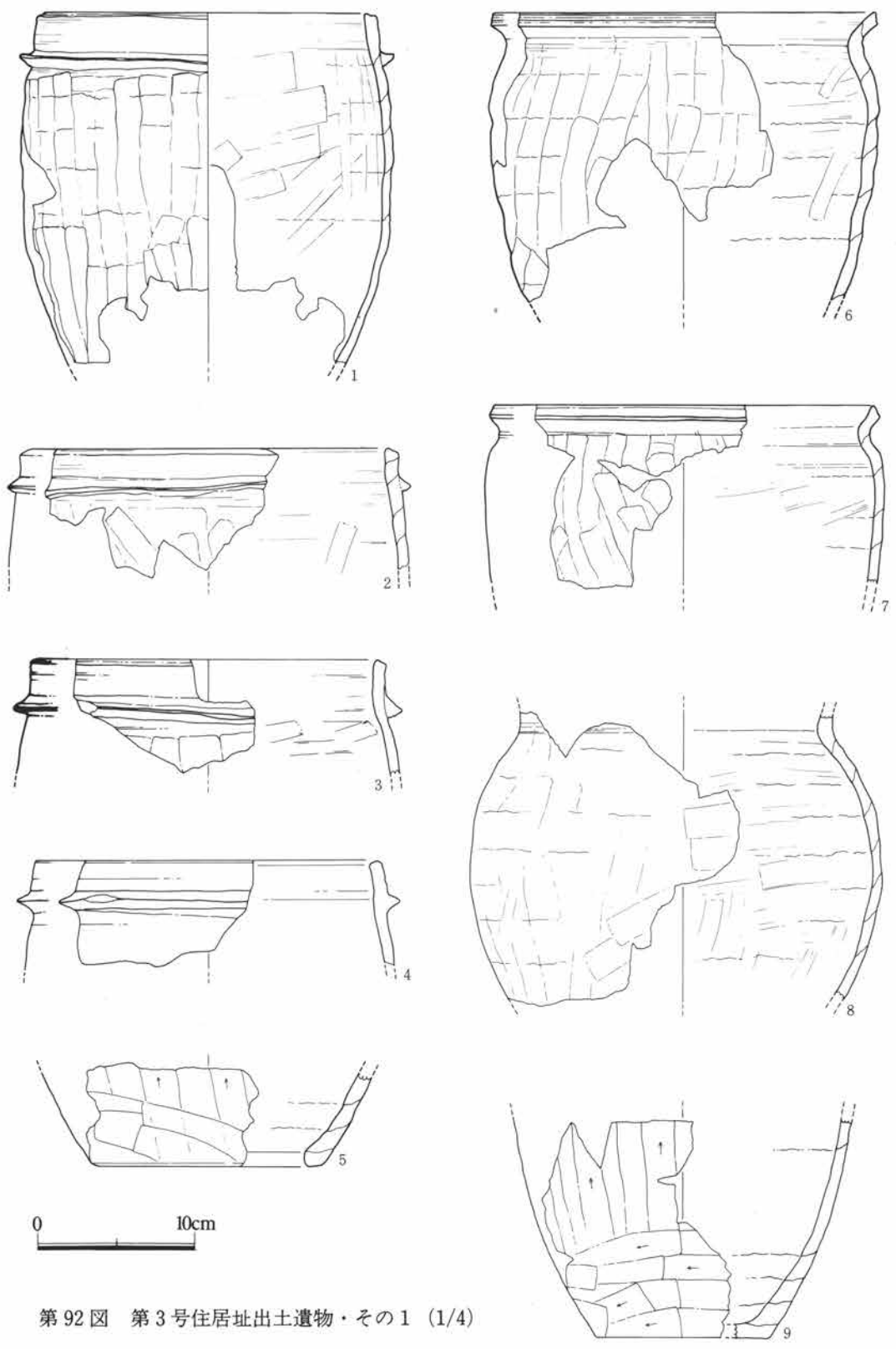
本住居址は東西辺3.07m×2.77mのほぼ方形状で、壁高54cmの規模をもつ。方位はE-14°-Sである。カマドは東壁南寄りに設置されている。焚口部は東壁位置にあり、同位置に河原石を袖部に設置している。カマドの平面形は半楕円形に近似し、燃烧部から煙道部にかけて緩傾斜面を形成し、直角的に立ち上がる。カマドの方向は東壁に対してやや南向きの方向をもつ。柱穴及び貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物は本遺跡の住居址の中で最も多い。本住居址出土の遺物は第22表のとおりである。

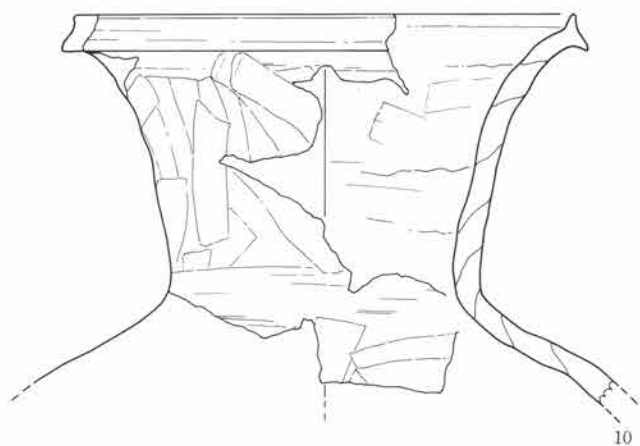
第91図 第3号住居址カマド(1/20)

第22表 第3号住居址出土遺物観察表

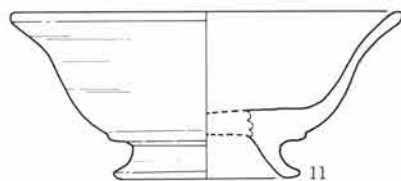
番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
1	羽釜	(21.6)			(23.7)		口縁部はやや短かめ(2.3)で口唇部は中くぼみの四角。鋳部は小さく、先端部に向ってうすくなり、上向きである。胴部最大径は上半にあり、底部に向ってやや長胴形。粘土帯(2.7~3.5)接合痕により凹凸がある。石粒を含有し、赤褐色で、焼成は良好である。輪積みの手法で、口縁部・鋳部及び内面はナデ、胴部外面の下半にたて方向のヘラ削り。



第92図 第3号住居址出土遺物・その1 (1/4)



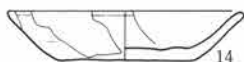
10



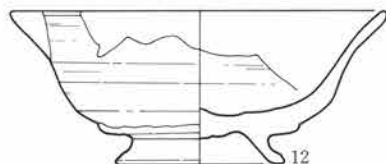
11



13



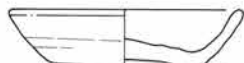
14



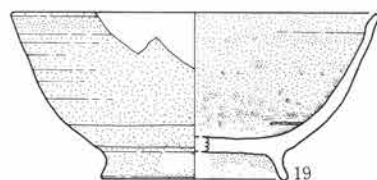
12



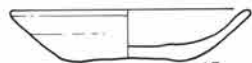
15



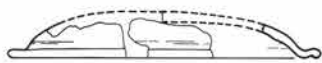
16



19



17



18



第93図 第3号住居址出土遺物・その2 (1/3)

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
2	羽釜	(24.0)					1よりも口縁部は短かく、やや外反する。内側口唇部より、外側口唇部が短い。石粒・砂粒を含有し、褐色で焼成は良好である。輪積みを使用し、口縁部・口唇部はていねいな横ナデである。
3	羽釜	(22.8)					口縁部はほぼ直立する。罎部は羽釜2より厚く、やや下向き。口唇部内側から外側に傾斜をもつ。石粒を含む。色調は破片であるが、外面黒褐色である。口縁部・罎部・内面はナデ、胴部にたて方向に上→下にヘラ削り。
4	羽釜	(22.0)					口縁部内傾。内側口唇部が外側同部より高い。やや丸みをもつ。石粒を含む。色調は橙。口縁部・罎部及び内面ナデ。罎はていねいに取り付けている。
5	瓶					14.8	本住居址群遺物の中で一片である。小片で詳細は不明。石粒を多く含み、暗赤褐色である。輪積みの痕跡がみられ、胴部はたて方向、底部は横方向のヘラ削り、内面はナデ整形である。
6	甕	(24.4)			(25.0)		口縁部は短かく、外反。胴部最大径は上半にある。石粒・砂粒を含む。色調はにぶい褐色。輪積みの痕跡がみられ、口縁部はていねいなナデ、胴部はかるいヘラ削り、内面はナデ。
7	甕	(24.4)					6と同様の器形であるが、口縁部内側はやや内湾する。石粒を含有し、外面は灰褐色、内面は褐色である。輪積みで、内面・口縁部はナデ、胴部外面はヘラ削り。
8	甕			(24.0)	(30.0)		頸部は広く、胴部は丸味をもつ。石粒を多量に含有する。他の器種の胎土との差異は認められない。外面赤褐色で内面は黒灰色である。輪積みの手法で、内面はナデ、外面は風化がはげしく整形は不鮮明である。いわゆる土釜か。
9	甕					(10.8)	底部は平底、長胴形の器形と考えられる。石粒を多量に含有し、色調はにぶい褐色で、外器面にススの付着らしきものが認められる。輪積み。底部はヘラ削り、胴部たて方向、下→上にヘラ削り、底部付近よこ方向にヘラ削り。

番号	器種	口 経	器 高	頸部径	胴 部 最大径	底 径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
10	甕	(20.0)		12.5			土師質の大型の甕である。その器形は須恵器のもので、頸部径は小さく、口縁部は長く、口唇部に近くなるほど外反が強くなる。胴部最大径はかなり大きいと推定される。砂粒・石粒を含み、口縁部付近は明橙、その他は灰赤褐色を呈す。輪積みの幅は約2cm、口唇部はていねいなナデ・ヘラナデ・ヘラ研磨をもちいている。
11	高台付 碗	15.6	6.6			(7.4)	須恵質。胴下半部は丸味をもち、口縁部に向って大きく外反する。高台は大きく、端部は反り返える。砂粒を少量含有し、石英を含む。灰黄褐色の色調をもち、焼成は軟質である。ロクロ成形、貼り付高台である。
12	高台付 碗	(15.1)	6.1			6.3	須恵質。胴下半で丸味を有し、11と同様の器形をもつ。口縁部はやや立ち上がる。砂粒を含み、灰黄褐色の色調。焼成は軟質である。ロクロ成形後、貼り付高台。
13	坏	(9.8)	2.0			(4.7)	底径は小さく、底部から口唇部までそのまま外反する。灯明皿状である。砂粒を含み、色調は橙。ロクロ成形、右回転、回転糸切底。
14	坏	(9.4)	(1.9)			(5.3)	13と同型・同質のものである。砂粒を含み、淡褐色の色調をもつ。ロクロ成形、右回転、回転糸切底。
15	坏	9.2	2.0			4.8	13・14と同型・同質のものである。体部中位に継ぎ目状の凹部が認められる。色調は橙。ロクロ成形、右回転、回転糸切り底。
16	坏	9.4	2.3			5.6	やはり、灯明皿状の器形をもつ。底部はやや広く、内底に高まりを見せる。体部はやや内湾し、口唇部を形成する。砂粒を含み、灰黄褐色。ロクロ成形、左回転、回転糸切り底。
17	坏	9.6	2.0			4.6	器形は13・14・16と同型・同質である。手法は15に類似する。色調は橙。ロクロ成形、右回転、回転糸切り底。
18	蓋	(12.5)					土師質の蓋で、天井部はなだらかな丸味をもつ。身受け部は明確に作られている。砂粒を含み、色調は赤褐色。内面と口縁部はナデ、天井部はヘラ削り。

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
19	高台付 埴	15.0	6.6			7.4	灰釉陶器。体部は下半部に丸味をもち、口縁部に向ってやや外反しながら立ち上がる。器体下半から上半に向って薄くなり、口縁部内側でやや厚くなる。胎土はきめ細かい陶土で、灰白色を呈し、焼成は良好である。ロクロ成形、右回転、底部は回転ヘラ削り後付け高台。内・外面薄く灰釉がかけられている。

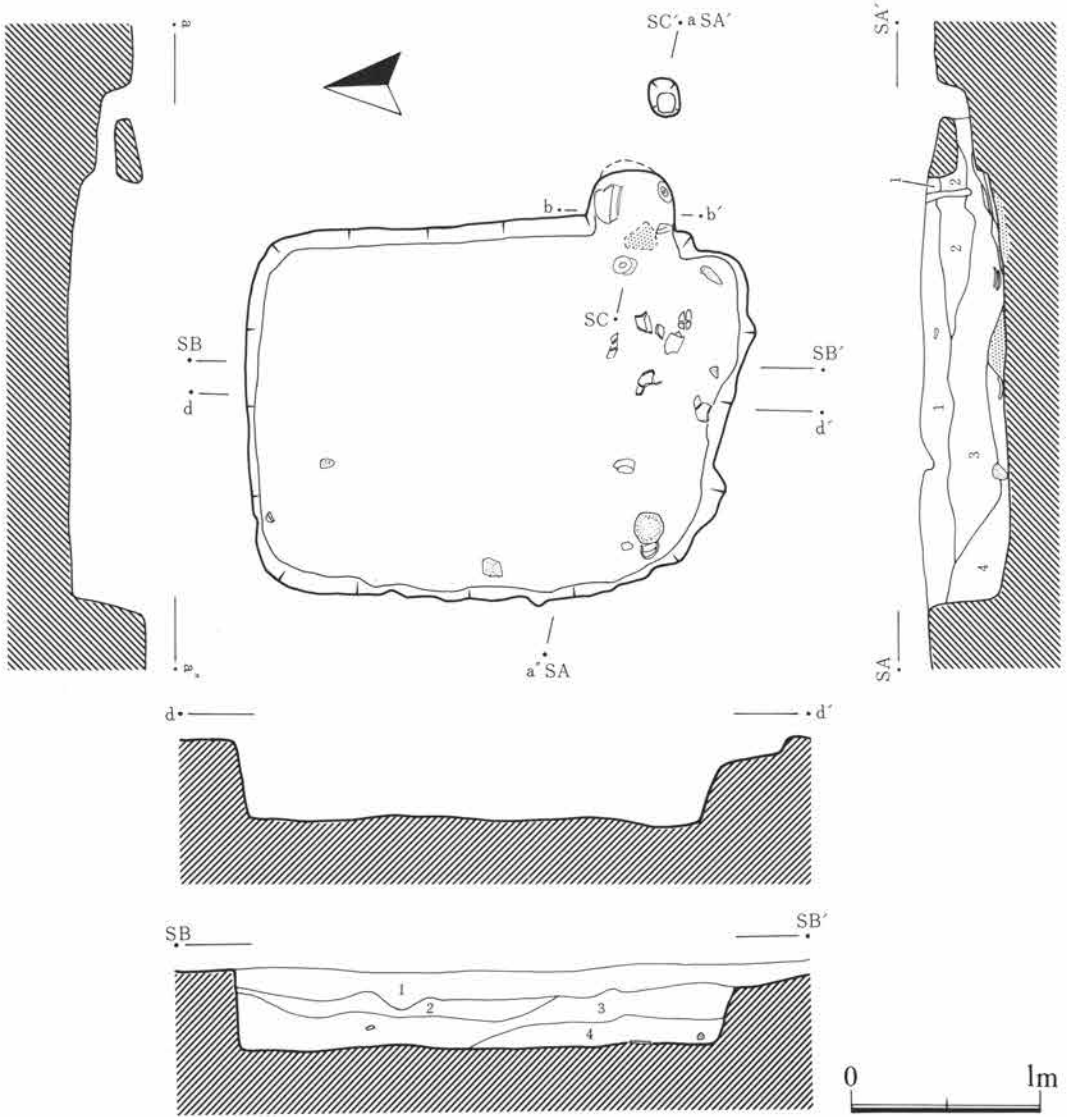
(4) 第4号住居址 (第94~97図、図版40、56・57)

本住居址は東西辺2.00m×南北辺2.58mの規模をもつ南北に長い長方形状を呈し、壁高は約35cmである。方位はN-90°-E(真東)。カマドは東壁南寄りに設置されている。平面形は半円形状で、焚口部から燃焼部は緩傾斜をもち、煙道部入口で直角に立ち上がって水平を保ち、煙出し部へ向う。煙出し部はやや南寄りに位置する。住居の床面は水平で、柱穴及び貯蔵穴は存在しない。

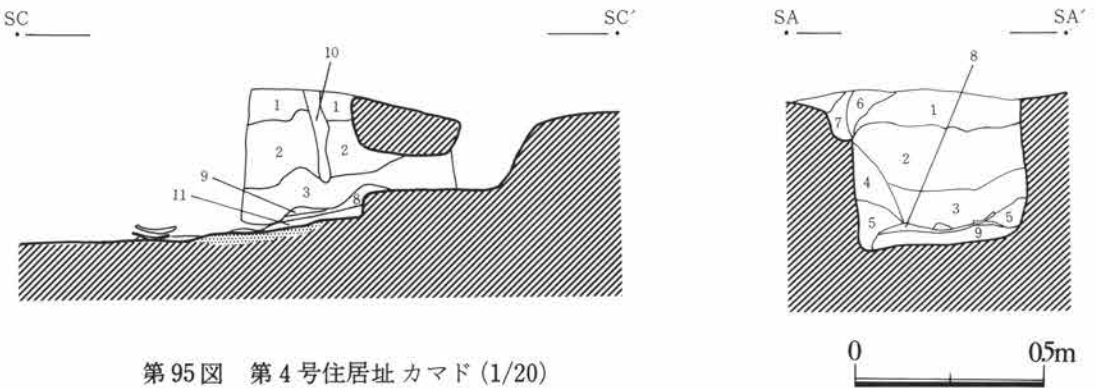
出土品はカマド付近を中心とした住居址内南寄りに分布した。本住居址の出土品は第23表のとおりである。

第23表 第4号住居址出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
1	羽釜	(21.5)			(25.6)		土師質。口縁部は大きく内湾し、口唇部は中くぼみの四角、鐙は小さい。胴部最大径は鐙部下に位置する。粘土帯(1.7~2.7cm)の接合痕により、かなり凹凸あり。石粒を含有、赤褐色の色調で、焼成は良好。輪積み、口縁部・鐙部及び内面ナデ。
2	羽釜	(23.0)			(25.2)		口縁部は1よりも内湾が弱い。口唇部は四角形、鐙は太めである。胴部最大径は鐙部直下にある。粘土帯(1.7~2.7cm)の接合痕により凹凸が大きい。不規則なヘラ削りによって調整されている。石粒(石英粒も含む)を含有。色調は橙、焼成は良。輪積み。口縁部・鐙・内面ナデ。



第94図 第4号住居址 (1/40)



第95図 第4号住居址 カマド (1/20)

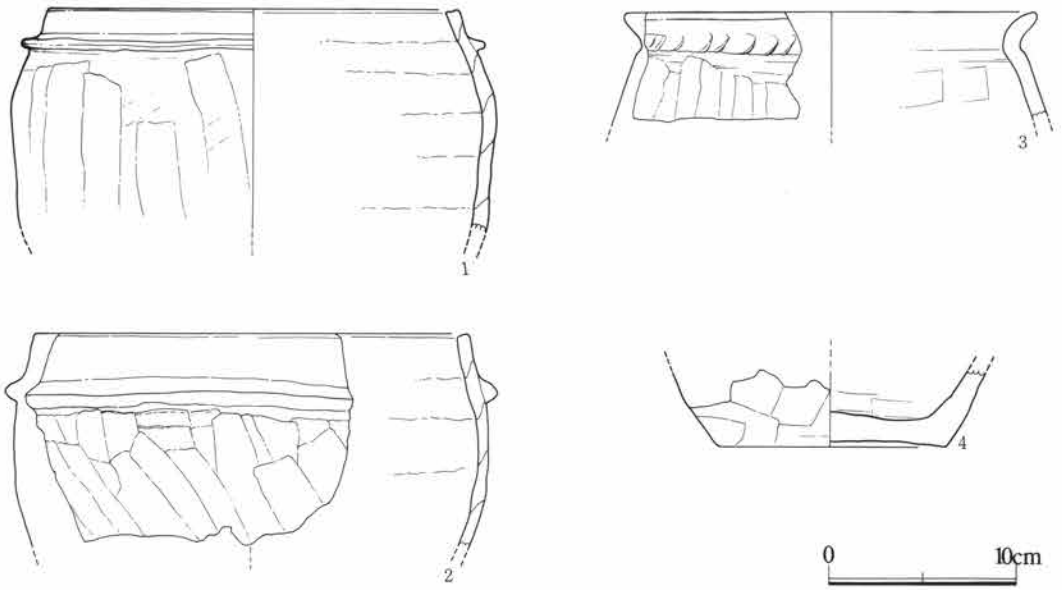
第4号住居址土層 (SA-SA') (SB-SB')

- ① 褐色土層 やや褐色味(茶)の強い土層で軽石、第IV層ブロックを含む。灰黄色の細砂ブロックの含有は少量である。
- ② 褐色土層 ①に比して褐色味(茶)が弱く、軽石第IV層ブロックを含む。灰黄色の細砂ブロックの含有量は①よりも多い。
- ③ 褐色土層①②層と含有物はほとんど変化がないが軽石の量が少ない。灰黄色細砂ブロックの量はさらに多くなる。
- ④ 本層も上層と③層と含有物に変化はないが軽石はほとんど含まず第IV層の大型ブロック及び灰黄色、細砂の大型ブロックになる。焼土、炭化物を若干含有する。

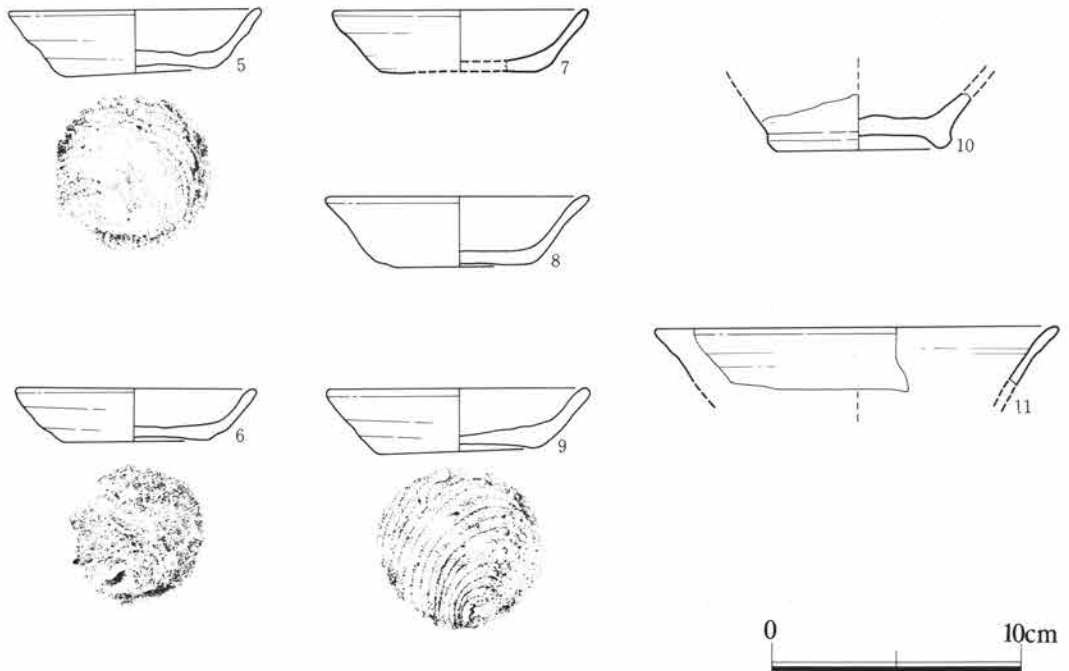
第4号住居址カマド土層 (SA-SA') (SC-SC')

- ① 黄褐色土層 炭化物・焼土などはごく微細、軽石を含む。
- ② 黄褐色土層 ①よりも黄色粘土ブロックを多く含む。
- ③ 黄褐色土に炭化物を含みやや灰色をおびる。
- ④ 黄褐色土に暗褐色粘土が混じる土層。
- ⑤ 炭化物・焼土・灰を多く含む灰褐色土。
- ⑥ 焼土の混じる暗褐色土(壁の落ちたものか?)
- ⑦ 黄褐色土と灰色粘土の混合土層
- ⑧ 灰の層
- ⑨ 焼土ブロック、灰の層
- ⑩ 黒色、軽石を多く含む(下の根によるものか?)
- ⑪ 焼土、炭化物、灰の層

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
3	甕	(21.5)					第3号住居址出土の甕類と異なり、丸味をもった口縁部及び口唇部をもつ。口縁部から胴部の接点は段状の整形がなされている。胎土は砂粒を含む。色調は淡褐色、小片であるが全体がすすけている。輪積み。口縁部と胴部の接点はへらあたり痕が強く残されている。口縁部・内面はナデ。
4	甕					(12.2)	土師質。全体的な特徴としては3に類似する。同一個体の可能性あり。色調は淡褐色、内外面にすすけている。輪積み。内面ナデ。
5	坏	10.1	2.6			6.3	底径はやや小さく、体部はロクロによる稜を明瞭に残し、外反する器形をもつ。内底はやや高まりをもつ。砂粒を含み、淡褐色の色調である。一部がすすけている。ロクロ成形、右回転、回転糸徹底。
6	坏	10.1	2.6			6.3	底径はやや小さく、体部はロクロによる稜を明瞭に残し、外反する器形である。内底は平坦である。砂粒を含み、淡褐色の色調。ロクロ成形、右回転、回転糸徹底。
7	坏	(10.2)	2.5			(6.3)	6よりやや大きめの器形であるが全体的な特徴は同じである。胎土・色調も同様。ロクロ成形。
8	坏	10.6	3.8			6.2	底径は小さく、体部中位から反り返るように外反する。内底、外底とも平坦である。砂粒を含有。色調は褐色で、全体にすすけている。ロクロ成形。



第 96 図 第 4 号住居址出土遺物・その 1 (1/4)



第 97 図 第 4 号住居址出土遺物・その 2 (1/3)

番号	器種	口 経	器 高	頸部径	胴 部 最大径	底 径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
9	坏	10.6	2.5			6.4	6及び7に類似する。内底及び外底は凹レンズ状になる。底部からの立ち上り部は器肉が厚い。砂粒を含有、淡褐色の色調。ロクロ成形、右回転、回転糸切底。
10	高台付 碗					7.3	高台部のみ破片で詳細は不明。砂粒(石英粒も含む)を含有、風化が進んでいる。色調は淡褐色。貼付け高台、ロクロ成形。
11	碗	(16.0)					口縁部を残す小片。器肉の薄い器形で口唇部は厚みをもって、外反する。石粒を含有、褐色の色調。

(5) 第5号住居址(第98・99図、図版41・42、57)

第5号住居址及び第6号・7号住居址は前述の4軒の住居址とは立地を異にする。先の説明のように、後述の三住居址はB軽石の堆積が確認されない微高地上に位置する。

本住居址の南側部分は農道下にあり、その詳細は明らかに出来なかった。調査部分の南北辺は3.83mを計る。壁高は約36cmである。方位は不明。出土遺物等からカマドの位置は東壁と推定できる。

出土遺物は覆土中からの第99図1～3の高台付碗がある。

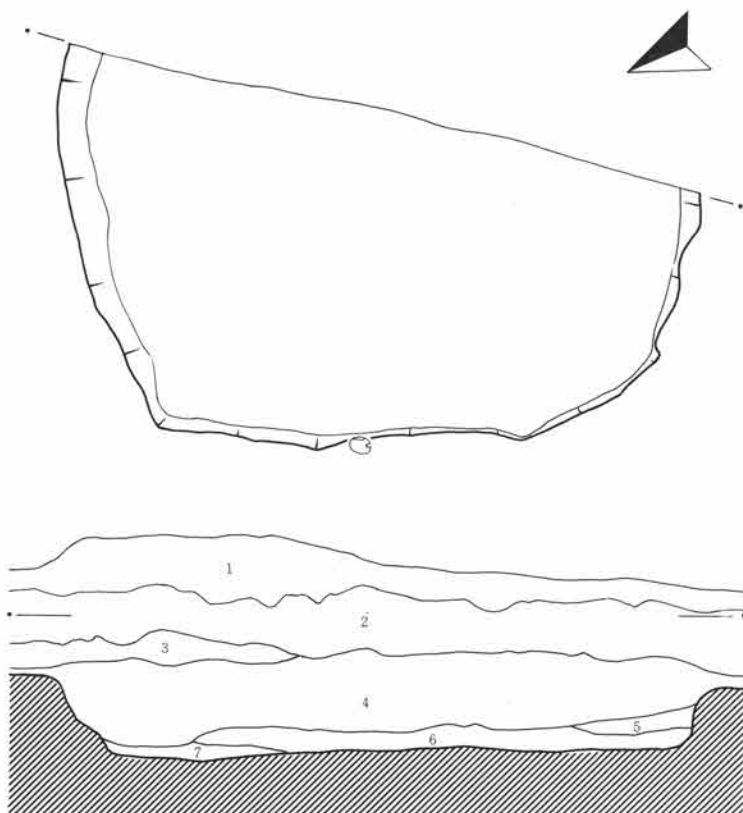
1は須恵質の高台付碗である。底部よりやや内湾気味に立ち上り、口唇部は丸味をもって外反する。砂粒を含有、色調は灰白色であるが、軟質である。ロクロ成形、左回転、回転糸切底。体部成形後、貼り付け高台。

2は須恵質の高台付碗である。1に比べ、底部からの立ち上がりやや直線的に口唇部に向かう。口縁部付近で凹状になり口唇部を形成する。砂粒・石粒を含有し淡褐色の色調。ロクロ成形、右回転、回転糸切底。体部成形後、貼り付け高台。

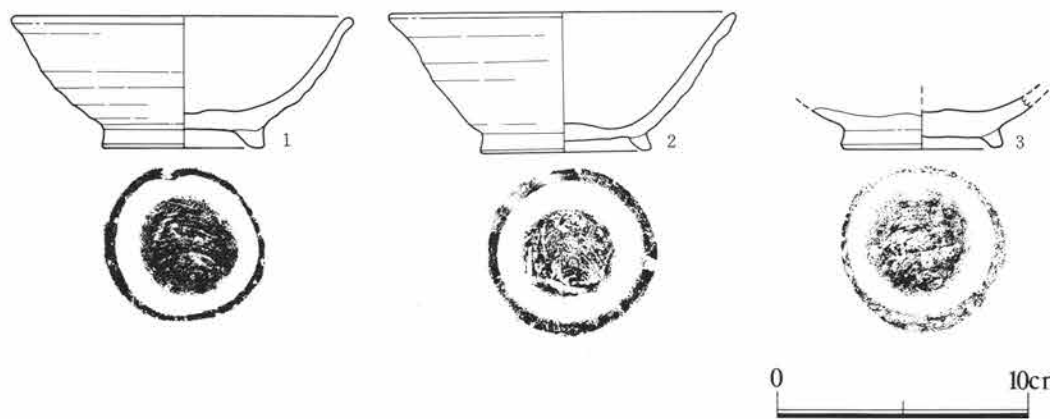
3は須恵質の高台付碗である。高台部及び底部のみの破片で詳細は不明。底径は6.3cm、砂粒・石粒を含み、淡褐色の色調。ロクロ成形、回転糸切底後、貼り付け高台。

第5号住居址土層

- | | | |
|--------------------------|----------|-------------------|
| ① 耕作土層 A軽石を含む | ⑤ 褐色粘質土層 | ④層と同様であるが粒子が細かい。 |
| ② 1号溝に注記 | ⑥ // | ④層と同様であるが水分を多く含む。 |
| ③ 褐色粘質土層 黄色を呈す。石細粒の砂を含む。 | ⑦ // | ⑥層に灰色の細粒子の粘質土を含む。 |
| ④ // | | |
- 焼土小ブロック・炭化物・第V層(チョコレート色)ブロックを含む。



第98図 第5号住居址 (1/40)



第99図 第5号住居址出土遺物 (1/3)

(6) 第6号住居址 (第100・101図、図版41・42、57・58)

本住居址は、南西コーナー付近のみが調査区内であった。住居址の規模、方位は南壁を軸とするとE-17°-Sである。調査区範囲内における壁高は約49cmである。壁面の立ち上がりは、前述の各々住居址よりも緩傾斜である。

次に出土遺物について概述する。

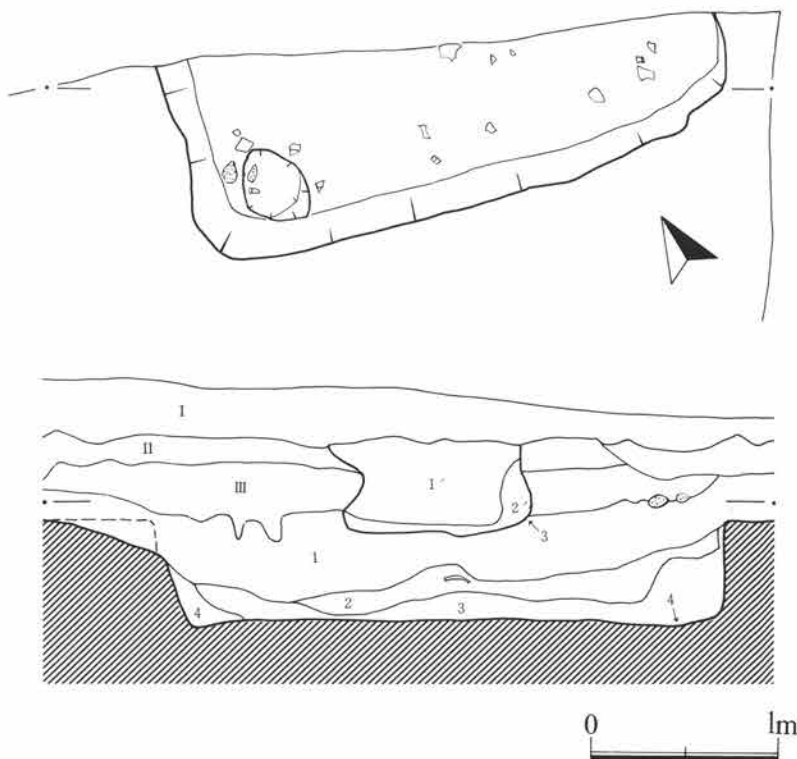
第101図1は、器高3.5cm、口径13.0cm、底径9.0cmの須恵器の坏である。底部が大きく、底辺に対して約60°で体部が外反する。口唇部は丸味をもつ。内底中央部の器肉は薄くなる。砂粒を含み、色調は褐色である。ロクロ成形、体部・口縁部及び内面はナデ。

2は器高3.4cm、口径12.6cm、底径5.6cmの須恵質の坏である。若干内底が盛り上がる。器体の立ち上がりは1と同様である。石粒・砂粒を含有。灰褐色の色調で、ロクロ成形、右回転糸切底である。

4は砥石である。石材は流紋岩。大型の砥石で欠損しているが、最大長11.7cm、最大幅8cm、最小幅は5.8cm(欠損部を除く)、A面は側面で欠損部が多い。残存部は滑かで、よく使用されている。B面は上部に5本の条痕が観察できる。表面の状況はA面と同様である。C面は側面で最も滑かである。縦方向に1条の条痕が認められるが、節理面の可能性がある。D面もA・B面同

第6号住居址土層

- I 耕作土 A 軽石を含む。
- II 耕作土 5号住居址、③層に同じ。
- III // 4号溝、5号住居址、③層に同じ。
- ① 褐色土層 粘質性を持ち、炭化物・焼土を含む。
- ② // ①と同様の性質をもつがIII層ブロックを含む。
- ③ // ①と同様であるがやや水分の量が多い。
- ④ // 基盤のチョコレート色の粘質土の流れ込み。
- ①' 炭化物・焼土を多量に含む。A軽石を含む。
- ②' 灰褐色粘質土 炭化物を含み、A軽石を含む。
- ①'②'は土坑。



第100図 第6号住居址 (1/40)

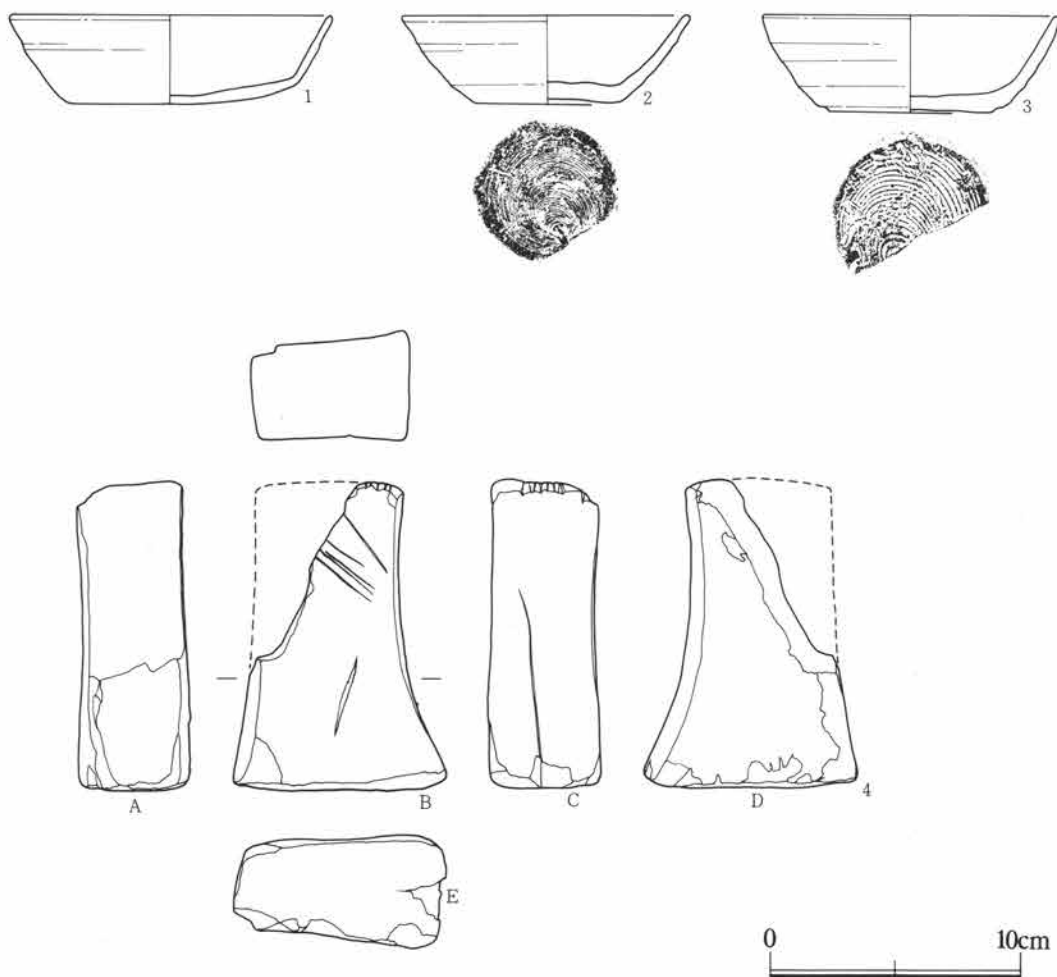
様の状況で、中央部右側から下部右側に短い条痕状が認められるが、自然面の凹部が残っている
ものであろう。E面は底部で小さな凹部があり、使用度の少ない状況を示すものであろう。

(7) 第7号住居址 (第102・103図、図版41・42、58)

本住居址はそのほとんどが調査区外に存在するものである。調査の結果、南壁周辺部とカマド
の一部のみを検出した。

南壁の長さは3.2mを測り、壁高は14cmであった。南壁を軸とした方位はE-29°-Sである。
カマドは東壁南寄り、ほぼ東南コーナーに近い部分に設置されている。長楕円形状を呈し、焚口
部に石組が崩れた状態で残存した。

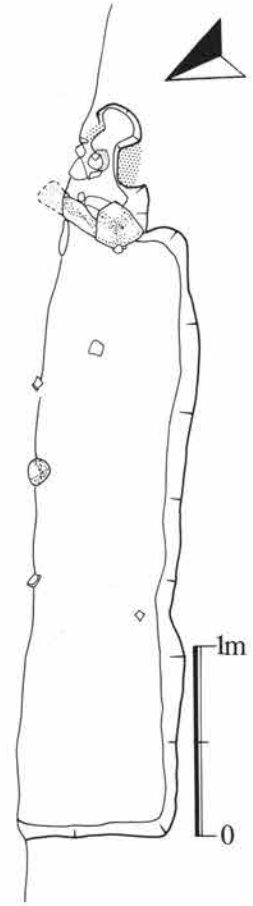
出土遺物はカマド内に集中した。カマド内から1の羽釜、焚口部から2の埴、周辺部から3・



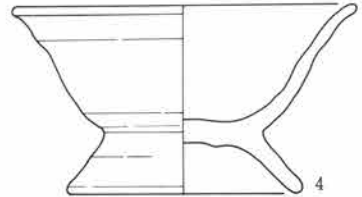
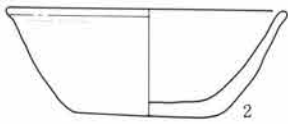
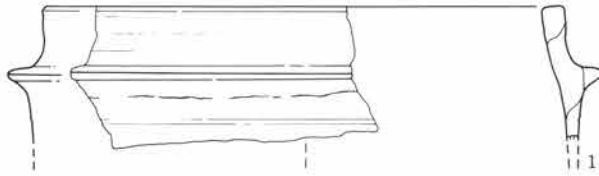
第101図 第6号住居址出土遺物 (1/3)

4の高台付碗が出土した(第103図)。

1は土師器の羽釜で口縁部は内湾し、口唇部は直線的である。粘土帯は1.7cm~2.3cmで、接合痕が明瞭である。石粒を含有して外面淡橙色で、内面の一部に黒褐色の色調をもつ。焼成はやや良好で、輪積み手法。口縁部・鋳部・内面はナデ。



第102図 第7号住居址 (1/40)



第103図 第7号住居址出土遺物 (1/3)

2 掘立柱遺構

前述の住居址検出面は鉄分沈澱層の削平によって確認されたものである。これから記述する掘立柱遺構はこの鉄分沈澱層を検出面としている。本遺構は第1号溝を限界として、それより南側には存在しない。また東南側は柱穴が希薄であり、遺構分布範囲が限定される。柱穴状ピット(以下柱穴)の覆土は浅間火山噴出物—B軽石—を多量に含み、下層に確認された住居址群にはB軽石は存在しない。すなわち、この掘立柱遺構群はB軽石を掘り込んで構築されたもので、B軽石降下時以後に建築されたものである。B軽石降下年代が天仁元年(1108年)とすれば、これよりも新しい時期である。

柱穴総数は約800個あり、重複関係もあってその組み合わせに苦労したが、第1号掘立柱遺構の組み合わせを確信し、これを基準として、他の掘立柱遺構の組み合わせに腐心した。特に中央部は柱穴の数が集中し、建て替えが多く行なわれたと思われる。

- i) 方位は東柱列線を基準とした。
- ii) 規模は外側柱の二点間の計測値である。
- iii) 柱間は真心である。

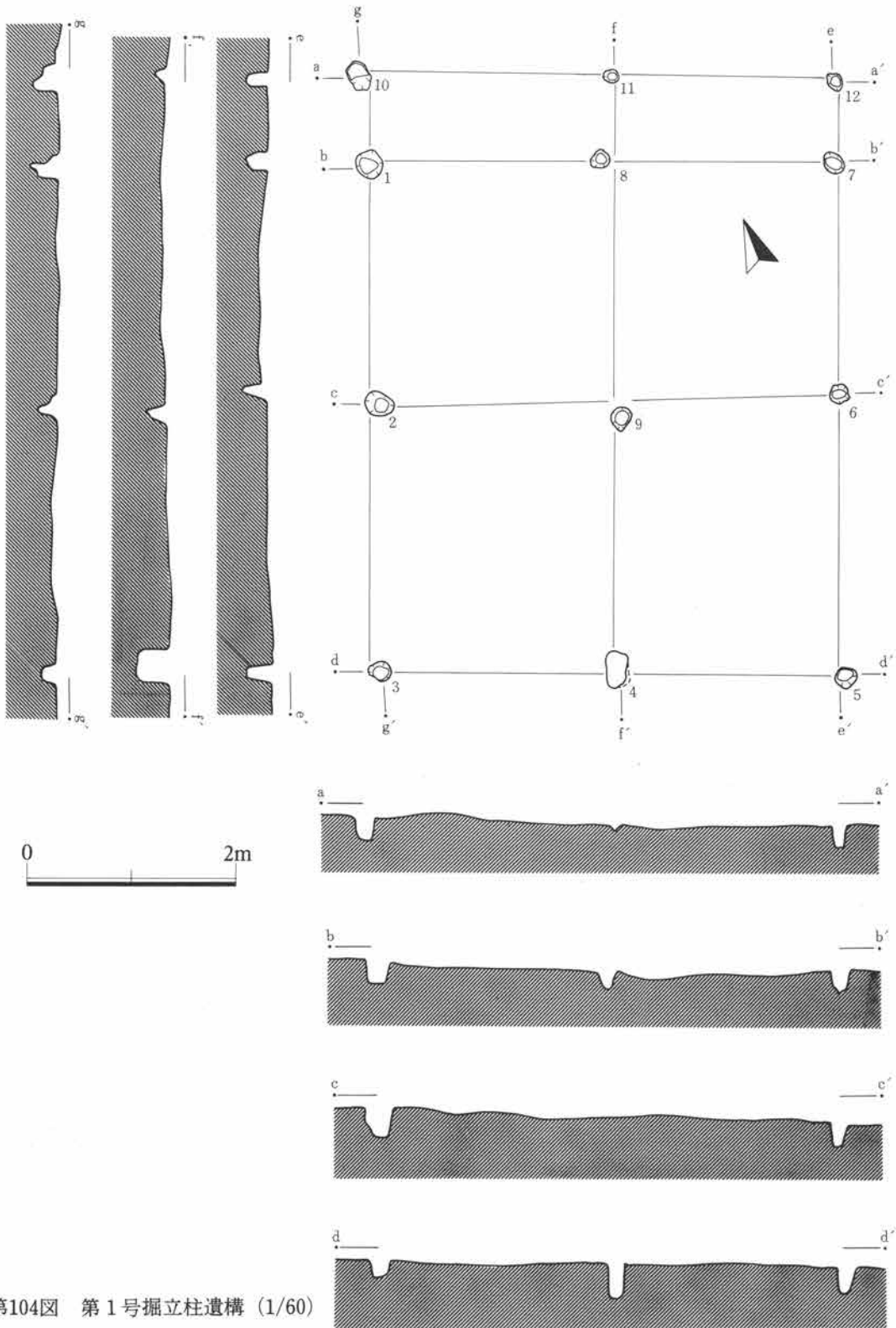
(1) 第1号掘立柱遺構(第104図、図版43)

- a 方位 N—20°—E
- b 間数 2間×2間 総柱
- c 規模 東西3.02m×南北3.21m
- d 平面形 方形。庇を考えると南北に長い。
- e 柱間 ①—② 2.24m ②—③ 2.54m ③—④ 2.22m ④—⑤ 2.20m
⑤—⑥ 2.66m ⑥—⑦ 2.18m ⑦—⑧ 2.20m ⑧—① 2.20m
- f 柱穴の径・深さは一定しない。これは本遺跡の掘立柱遺構(以下、掘立と略称)に共通するもので、これらの遺構群の性格を表わすものかも知れない。

本遺構は東西中央柱列の南側が若干広い面積をもつ。北側に張り出す庇状の柱穴は約50cmの位置にある。柱穴列は中央列がともに乱れる。

(2) 第2号掘立柱遺構(第105図、図版43・44)

- a 方位 N—22°—E
- b 間数 2間×2間 総柱
- c 規模 東西4.25m×南北3.19m
- d 平面形 東西軸の長い長方形
- e 柱間 ①—③ 3.40m ③—④ 1.67m ④—⑤ 1.52m ⑤—⑥ 1.72m



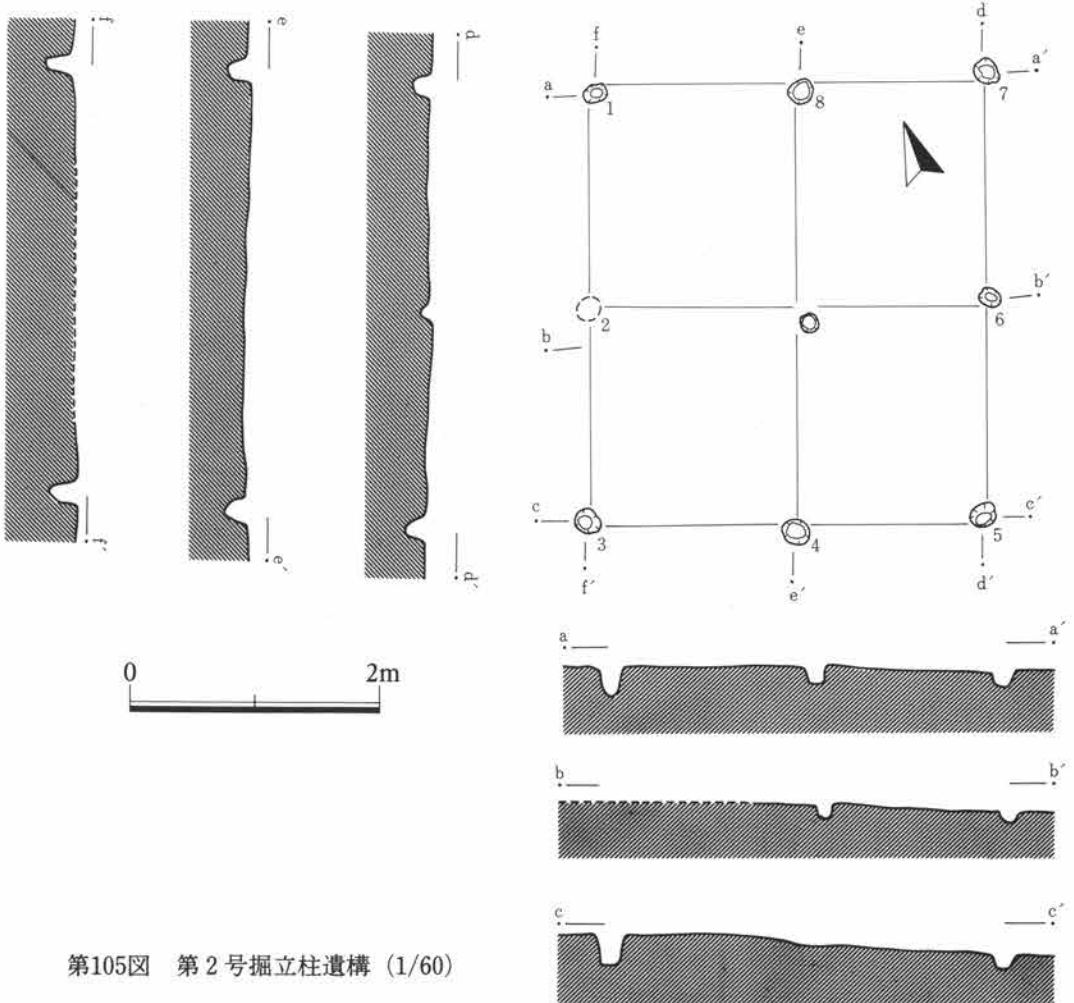
第104図 第1号掘立柱遺構 (1/60)

⑥—⑦ 1.82m ⑦—⑧ 1.51m ⑧—① 1.77m

f 本掘立は第14号掘立と重複関係にある。方向は第1号掘立とほぼ同じである。第14号掘立内の柱穴数と比較すると少ない。真心を通る柱穴は少なく、多少のずれを生じている。西辺中央柱穴は確認されなかった。

(3) 第3号掘立柱遺構 (第106図、図版43・44・46)

- a 方位 N—14°—E
- b 間数 2間×2間 総柱
- c 規模 東西3.29m×南北3.04m
- d 平面形 若干東西に長軸をもつ長方形
- e 柱間 ①—② 1.50m ②—③ 1.57m ③—④ 1.90m ④—⑤ 1.43m
 ⑤—⑥ 1.58m ⑥—⑦ 1.49m ⑦—⑧ 1.44m ⑧—① 1.90m

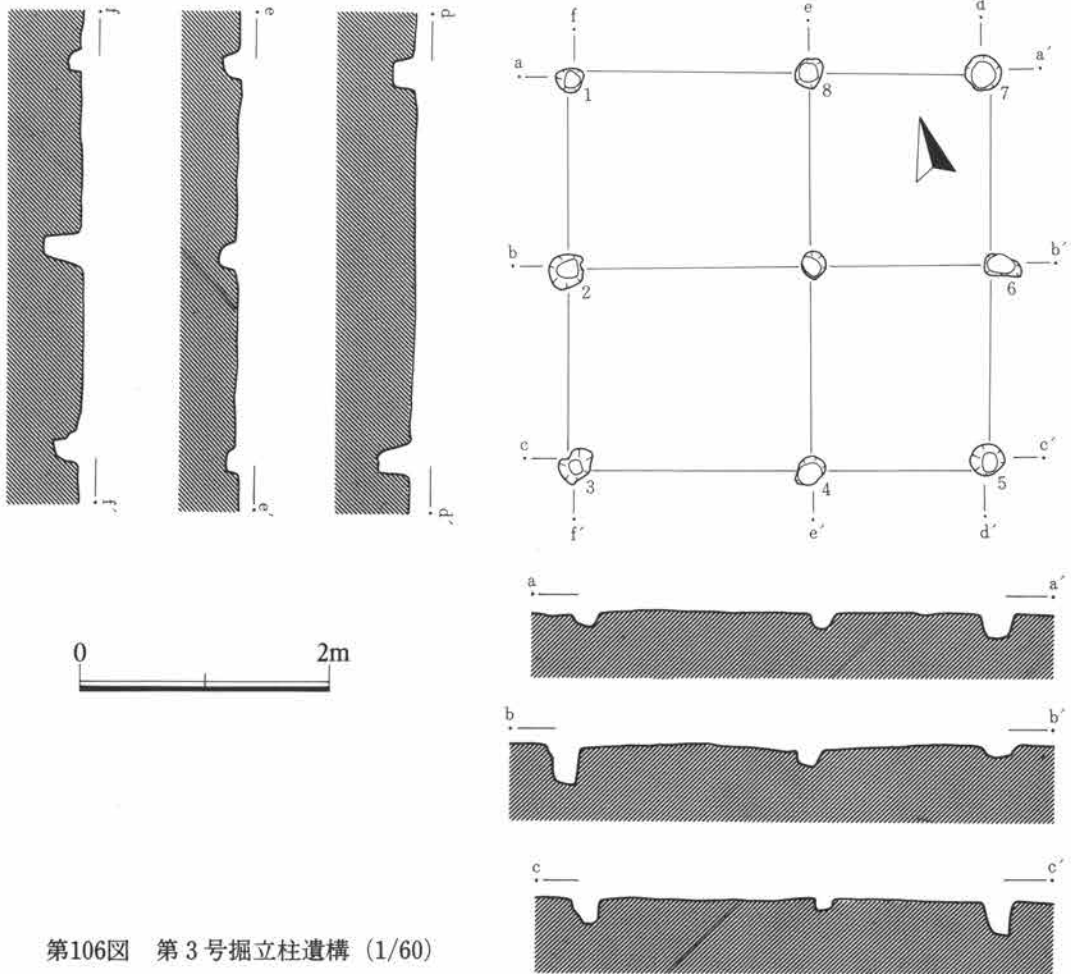


第105図 第2号掘立柱遺構 (1/60)

f 本掘立は第5号掘立とともに南端に位置し、組み合わせが明瞭である。柱穴の形状は円形と方形が混在する。深さは一定しない。本掘立はこの掘立群中、最小のものであり、後述の第6号掘立と同様、下層住居址と同じ規模である。南北中央柱穴列を基準とすると東側柱列幅が狭くなる。

(4) 第4号掘立柱遺構 (第107図、図版43~47)

- a 方位 N-15°-E
- b 間数 2間×2間 総柱
- c 規模 東西3.48m×南北3.50m
- d 平面形 方形
- e 柱間 ①-② 1.88m ②-③ 1.74m ③-④ 1.80m ④-⑤ 1.67m
⑤-⑥ 1.52m ⑥-⑦ 1.36m ⑦-⑧ 1.20m ⑧-① 1.80m



第106図 第3号掘立柱遺構 (1/60)

f 本掘立は第3号・5号掘立と同様に組み合わせが明瞭なものである。柱穴は概略方形状である。深さは比較的深度をもつ。また、各柱穴にすべて直線で通り安定した掘立である。南北中央列を基準にすると若干東側柱列幅が狭い。

(5) 第5号掘立柱遺構 (第108図、図版44・45)

a 方位 N-20°-E

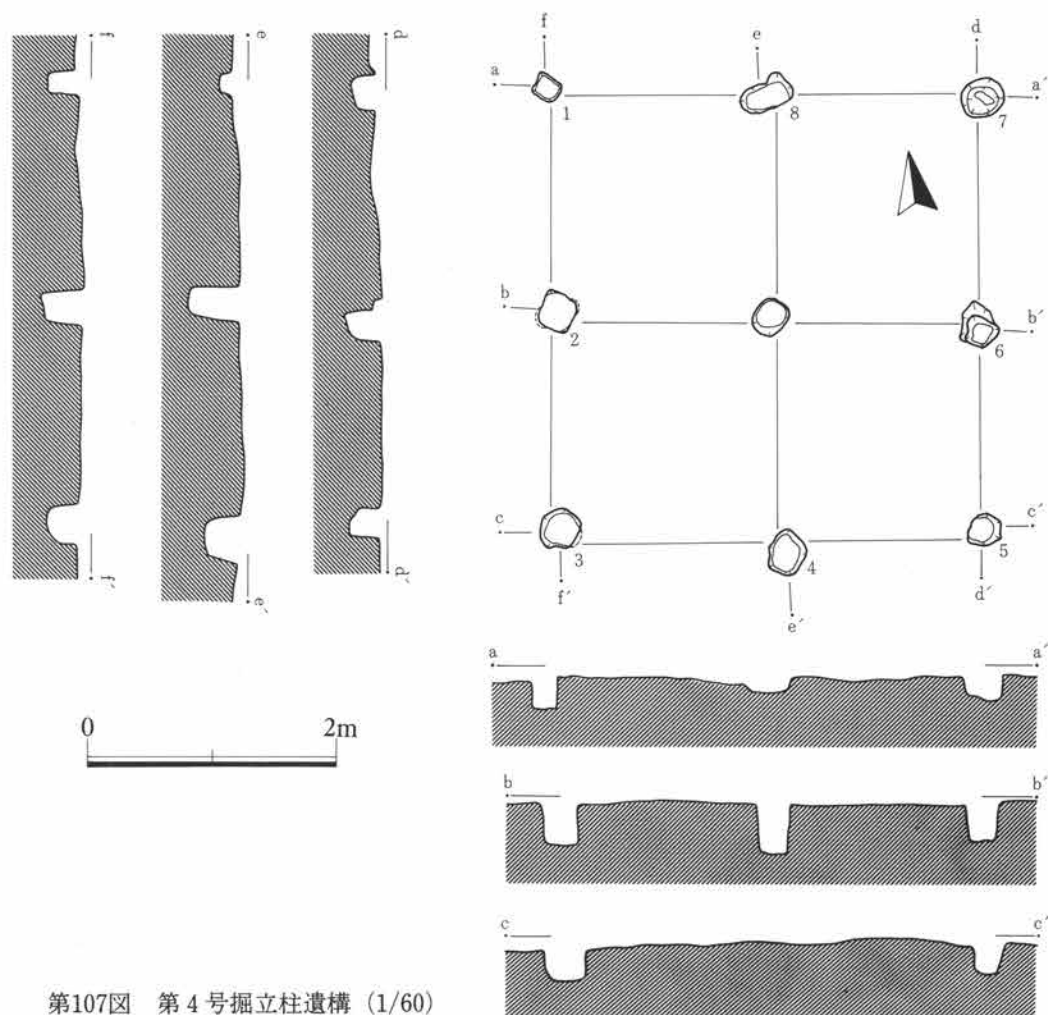
b 間数 2間×2間 総柱

c 規模 東西3.37m×南北3.34m

d 平面形 方形

e 柱間 ①—② 1.70m ②—③ 1.66m ③—④ 1.74m ④—⑤ 1.61m
⑤—⑦ 3.20m ⑦—⑧ 1.73m ⑧—① 1.65m

f 本掘立は東南端に位置し、前述の第2号掘立とはほぼ同方位をもつ。また、柱穴の重複・密

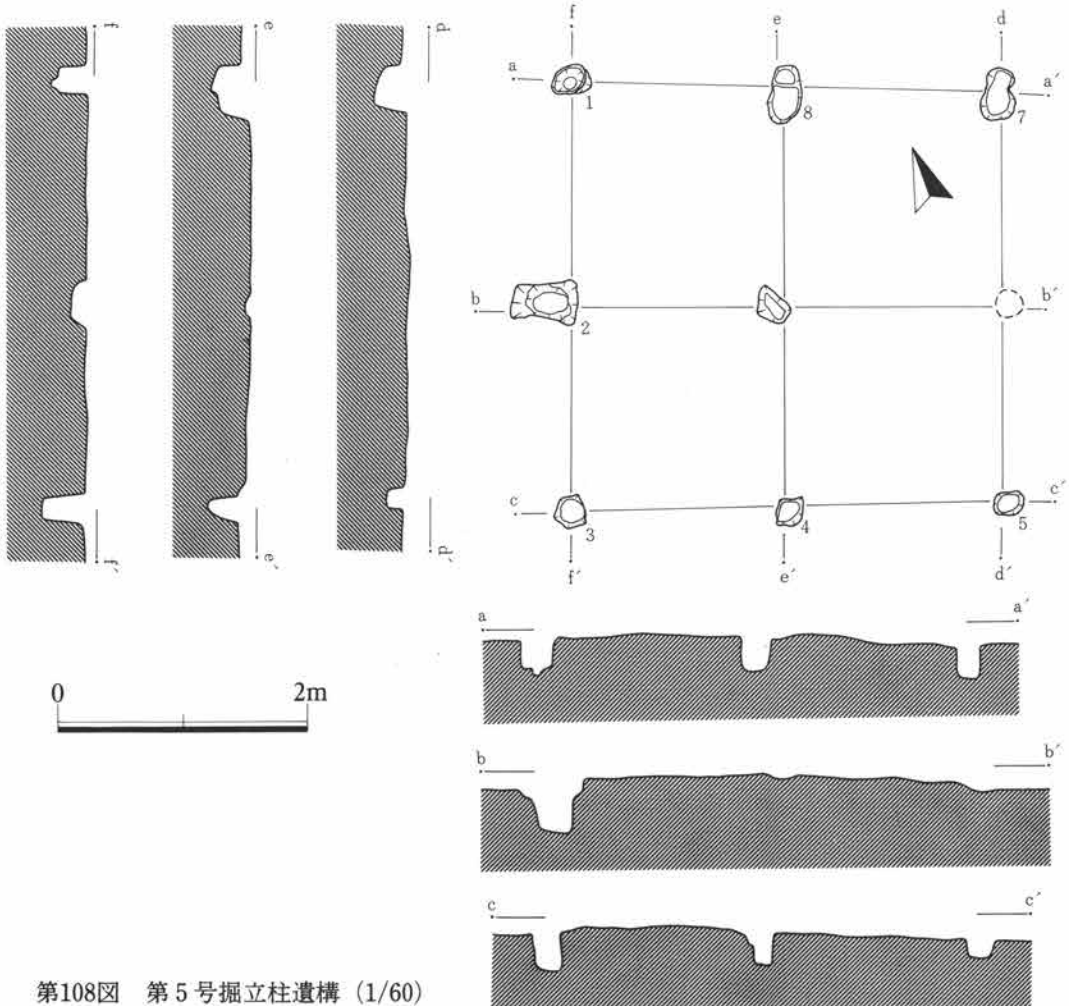


第107図 第4号掘立柱遺構 (1/60)

集はなく、単純な状況にあるため、「2間×2間・総柱」という本遺跡の掘立柱遺構の存在を明確にしたものである。

(6) 第6号掘立柱遺構 (第109図、図版43・44、46・47)

- a 方位 N-14°-E
- b 間数 2間×2間 総柱
- c 規模 東西3.46m×南北3.09m
- d 平面形 東西に長軸をもつ長方形
- e 柱間 ①-② 1.52m ②-③ 1.57m ③-④ 1.67m ④-⑤ 1.82m
⑤-⑥ 1.53m ⑥-⑦ 1.58m ⑦-⑧ 1.69m ⑧-① 1.66m
- f 本掘立は第8号・9号掘立と、南側部において重複するものである。本掘立の柱穴は平面形状・深さとも、既述の掘立よりも一定している。下層の住居址群と同様な大きさを示す。



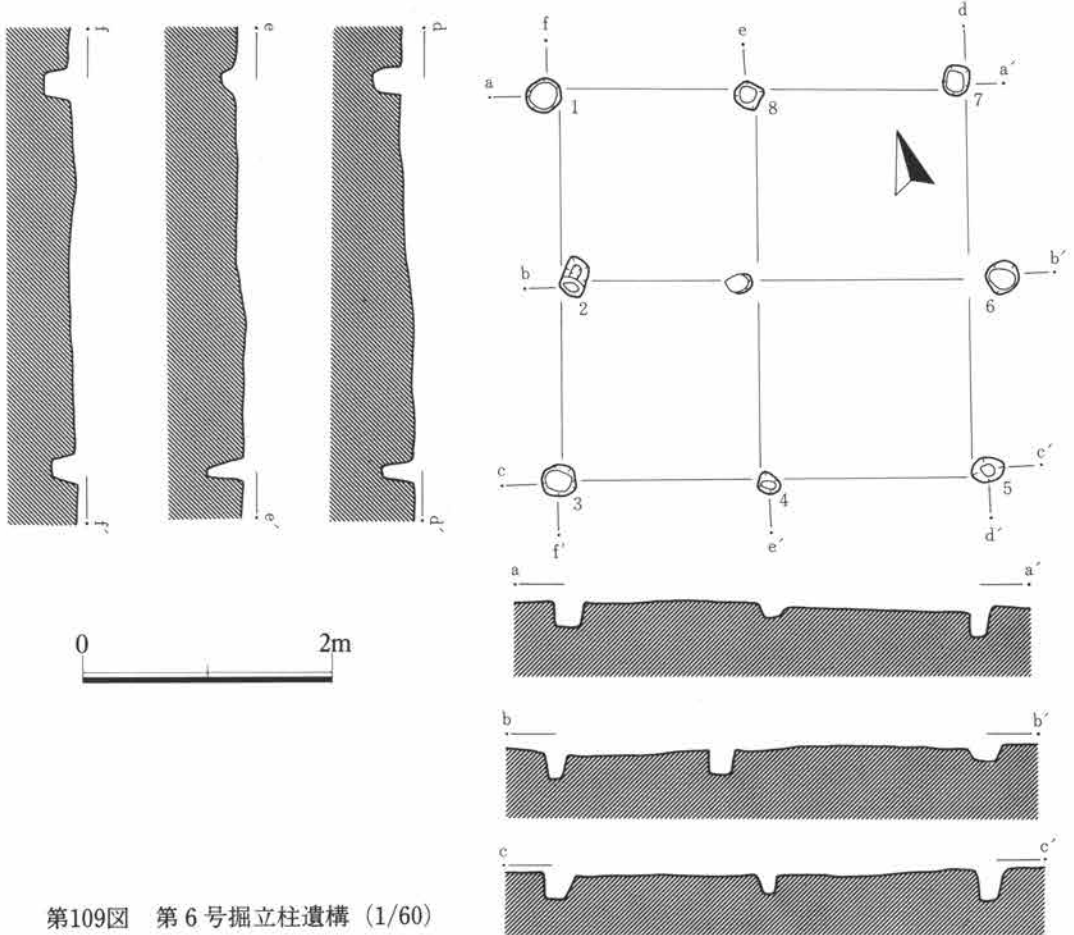
第108図 第5号掘立柱遺構 (1/60)

(7) 第7号掘立柱遺構 (第110図、図版46・47)

- a 方位 N-23°-E
- b 間数 2間×2間 総柱
- c 規模 東西3.98m×南北3.42m
- d 平面形 若干東西軸が長い長方形
- e 柱間 ①—② 1.18m ②—③ 1.56m ③—④ 1.91m ④—⑤ 1.98m
 ⑤—⑥ 1.15m ⑥—⑦ 1.80m ⑦—⑧ 1.27m ⑧—① 2.22m
- f 本掘立は柱穴の数が最も多い地点で、組み合わせに腐心した。作図は現地でも実施したが、縮小図面上で線作せざるを得なかった。中央柱穴を図面上通したが、方位が若干ずれる。柱穴の平面形状・深さは不規則である。

(8) 第8号掘立柱遺構 (第111図、図版44、46・47)

- a 方位 N-20°-E



第109図 第6号掘立柱遺構 (1/60)

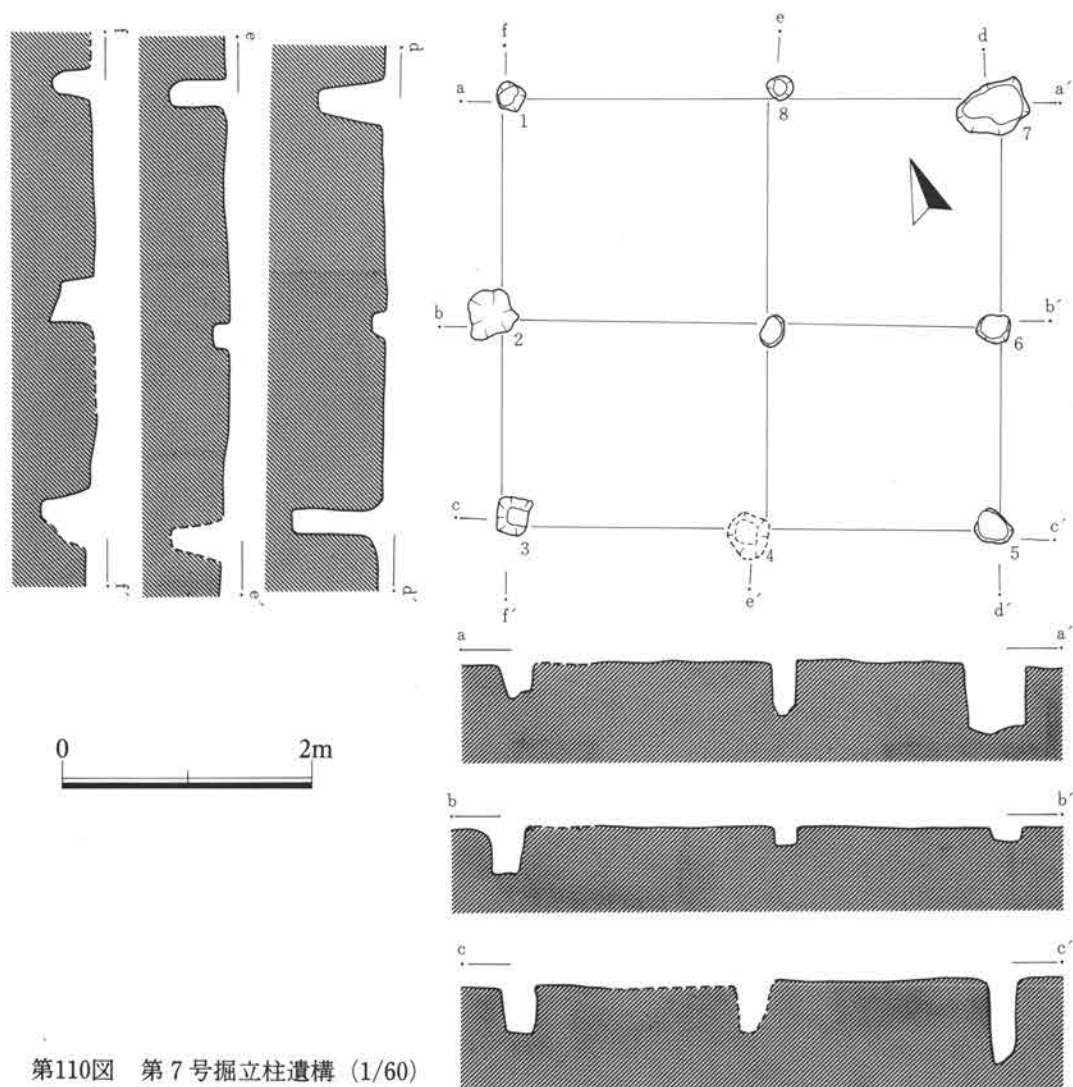
b 間数 2間×3間 総柱

c 規模 東西3.88m×南北6.90m

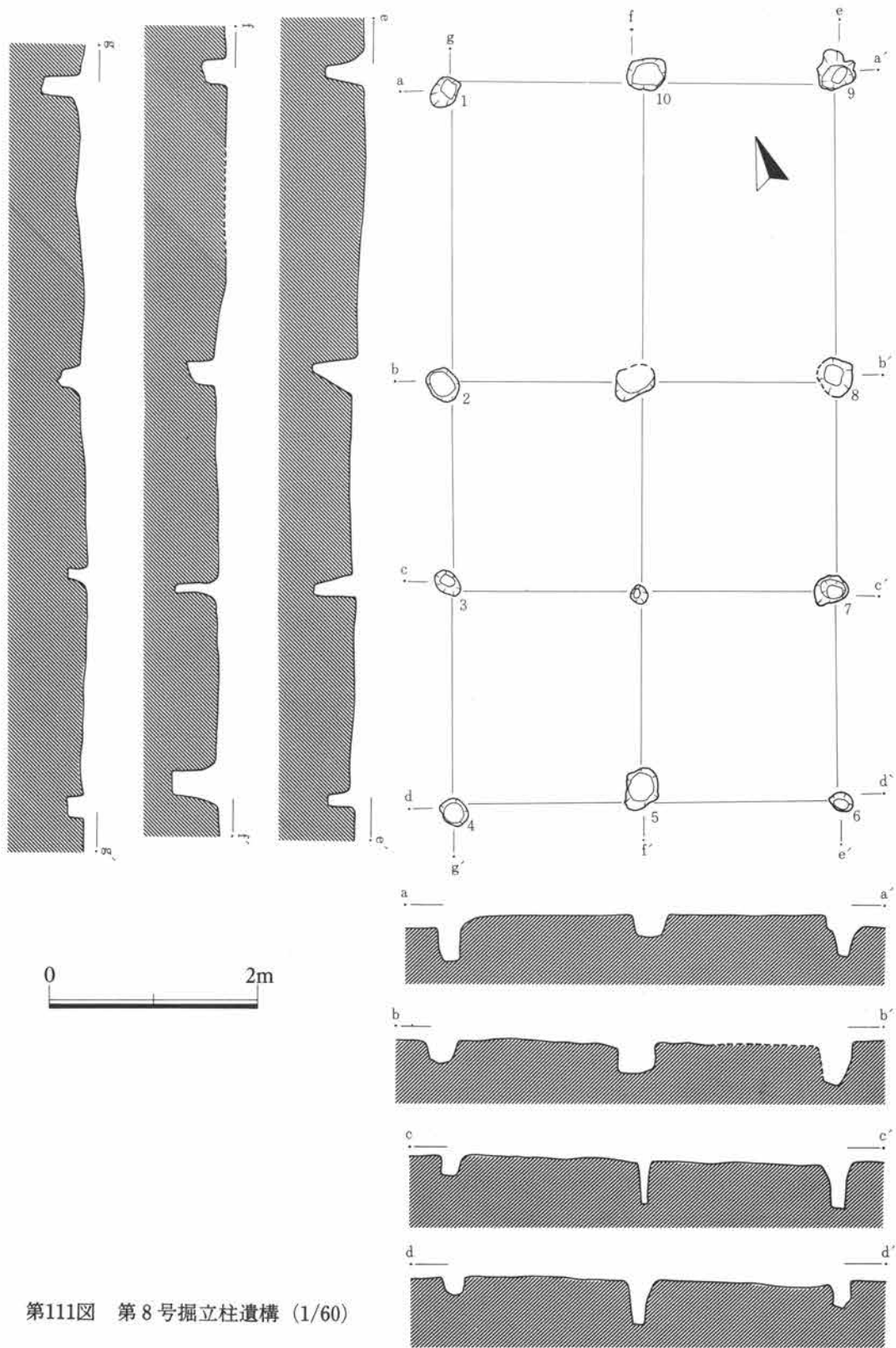
d 平面形 南北に長軸をもつ長方形

e 柱間 ①—② 2.80m ②—③ 1.80m ③—④ 2.22m ④—⑤ 1.83m
⑤—⑥ 1.98m ⑥—⑦ 2.07m ⑦—⑧ 2.04m ⑧—⑨ 2.88m
⑨—⑩ 1.80m ⑩—⑪ 2.00m

f 本遺構は、第7号掘立と重複する関係にある。発掘調査の段階で、南半部は別棟に処理した。しかしながら、整理過程において、同一掘立の可能性が生じ、ここでは第8号掘立として、一棟分の処理をした。柱穴は円形状であるが、不規則で深さも一定しない。間数は2間×3間であるが、北側辺に庇が付く可能性も残されている。また、南側辺にも二柱穴が並列し



第110図 第7号掘立柱遺構 (1/60)

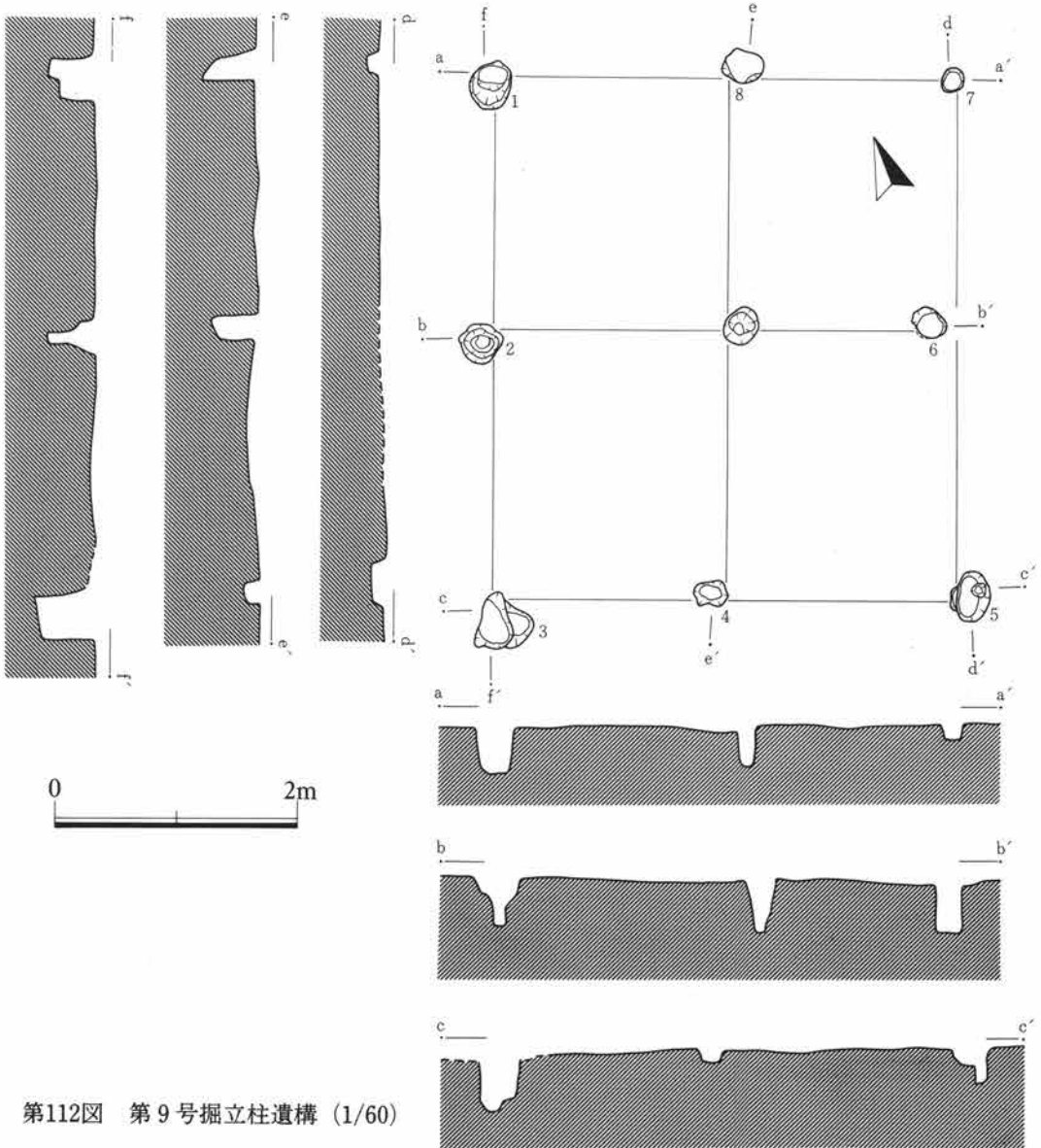


第111図 第8号掘立柱遺構 (1/60)

ている。これは第7号掘立の北側柱列の一部を含むものであるが、今後の検討にしたい。第1号掘立に1間分増加する形になる。方向は同一方向である。

(9) 第9号掘立柱遺構 (第112図)

- a 方位 N-23°-E
- b 間数 2間×2間 総柱
- c 規模 東西4.40m×南北4.45m
- d 平面形 ほぼ方形



第112図 第9号掘立柱遺構 (1/60)

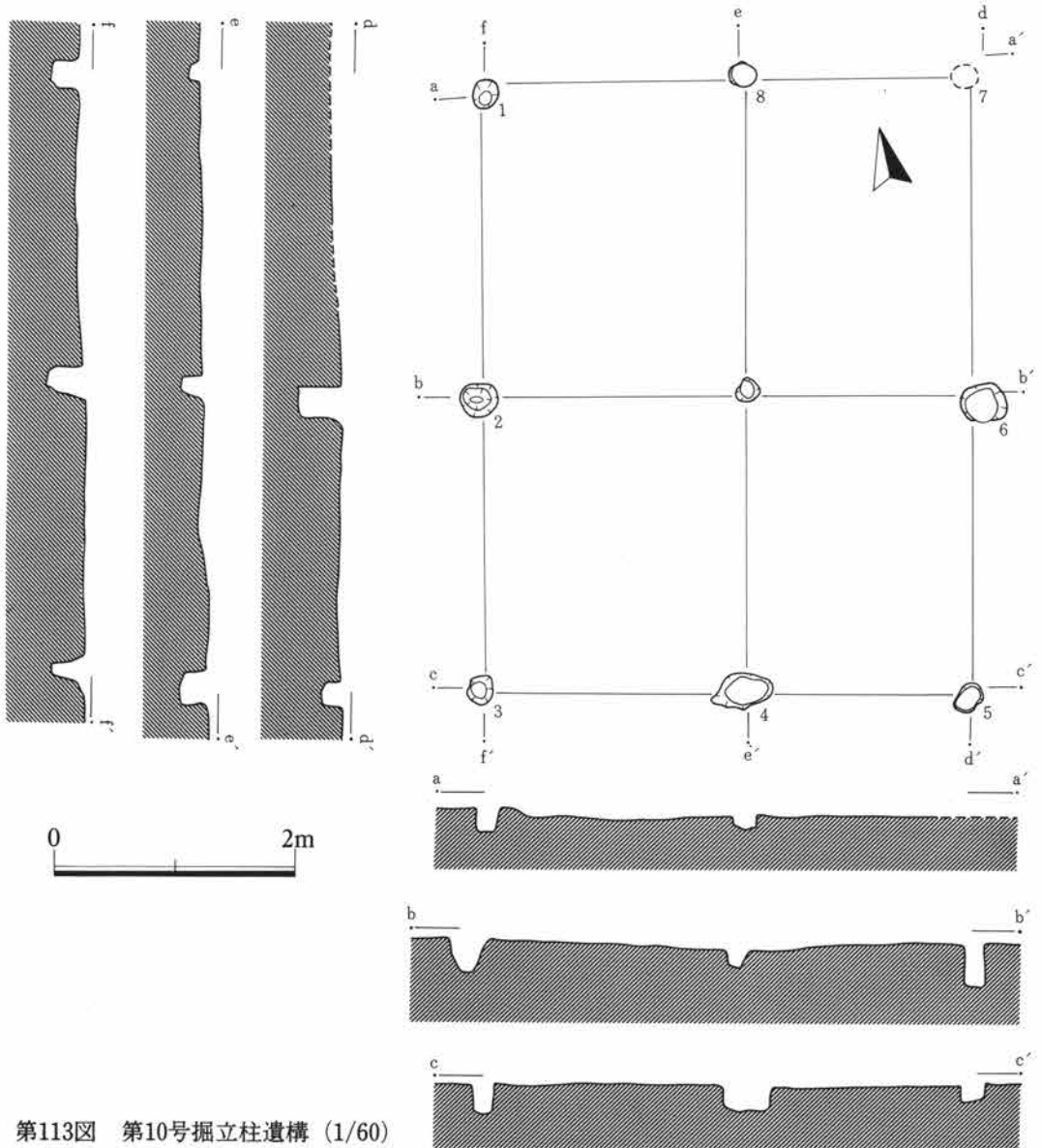
e 柱間 ①—② 2.21m ②—③ 2.32m ③—④ 1.30m ④—⑤ 2.22m
 ⑤—⑥ 2.20m ⑥—⑦ 2.80m ⑦—⑧ 1.78m ⑧—① 2.08m

f 本掘立は北側で第7号掘立と近接し、第8号掘立の南東部が重複する。柱穴の形状は円形状で二段掘りも4本認められる。径及び深さは一定しない。

(10) 第10号掘立柱遺構 (第113図、図版46・47)

a 方位 N-12°-E

b 間数 2間×2間 総柱



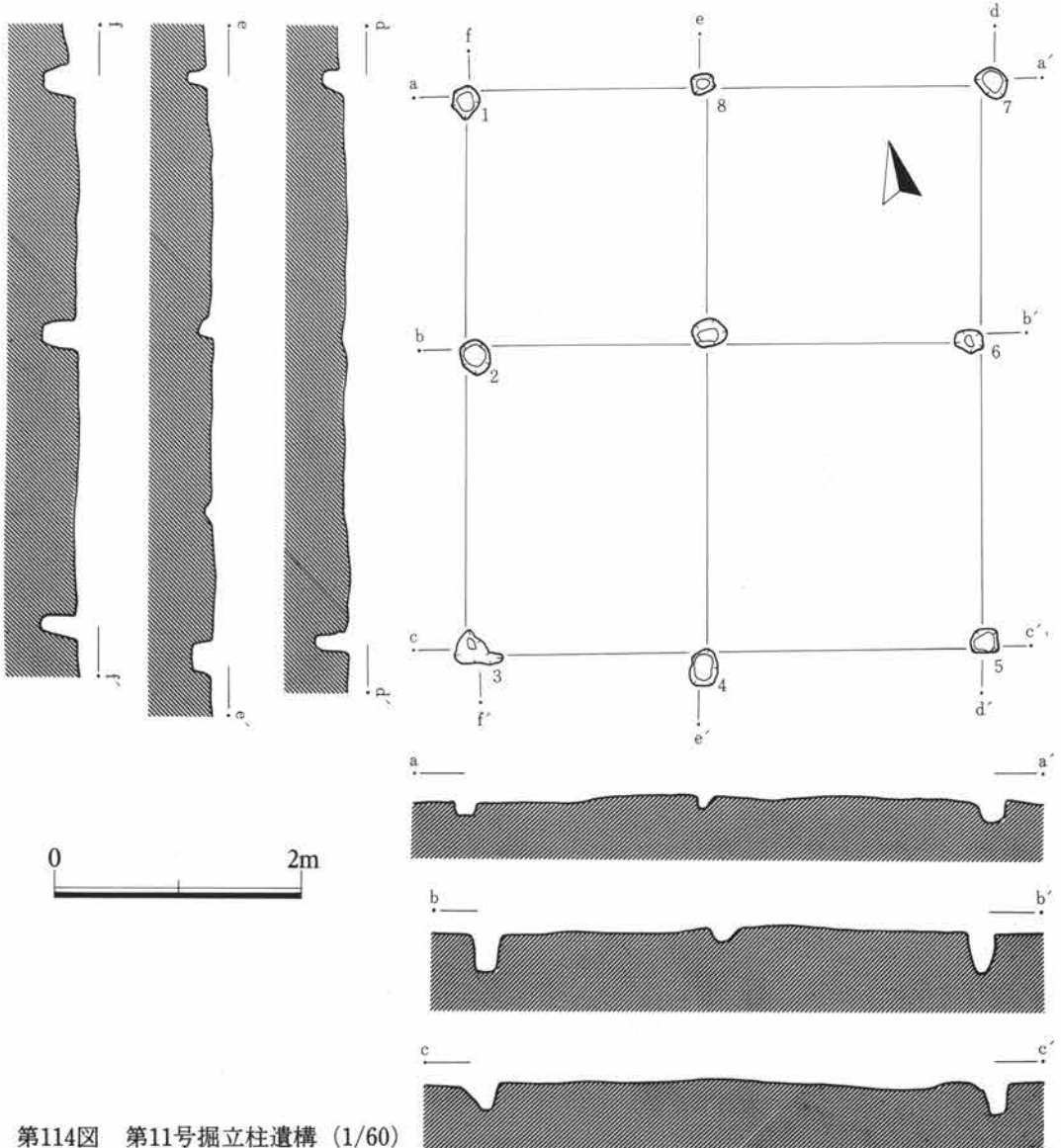
第113図 第10号掘立柱遺構 (1/60)

c 規模 東西4.17m×南北4.94m

d 平面形 南北に長軸をもつ長方形

e 柱間 ①—② 2.52m ②—③ 2.38m ③—④ 2.23m ④—⑤ 1.89m
⑤—⑥ 2.47m ⑧—① 2.12m

f 本掘立は第4号掘立の西側に位置し、第4号・3号掘立と同じく、柱穴の組み合わせが明瞭であった。北東コーナーの柱穴は確認されなかった。柱穴は円形状を基準としているが、径及び深さは一定しない。南北中央列を基準にすると東側柱列が狭く、また東西中央柱列を基準とすると南側柱列幅が若干狭い。



第114図 第11号掘立柱遺構 (1/60)

(II) 第11号掘立柱遺構 (第114図、図版47)

a 方位 N-13°-E

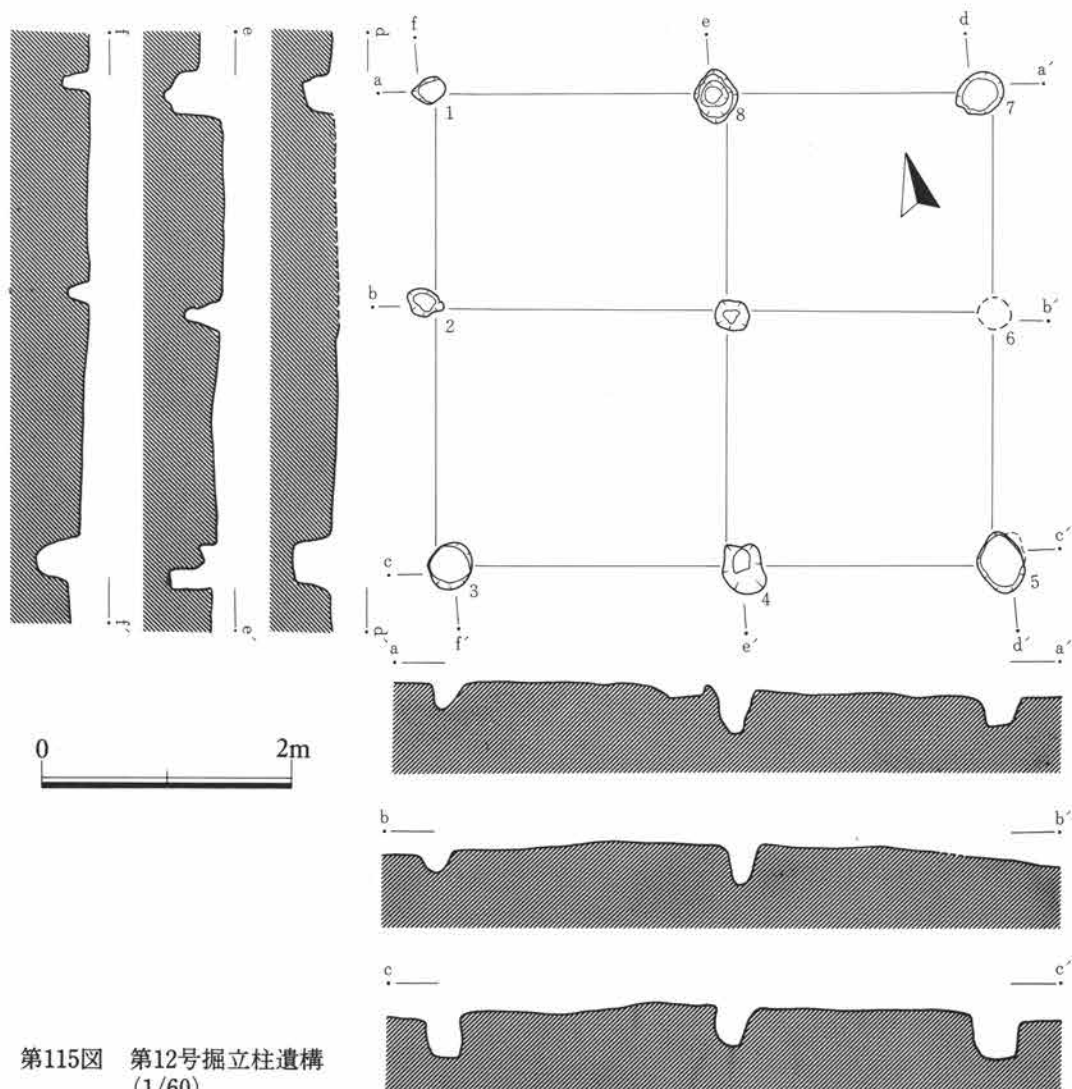
b 間数 2間×2間 総柱

c 規模 東西4.29m×南北4.40m

d 平面形 南北に長軸をもつ長方形

e 柱間 ①—② 2.02m ②—③ 2.38m ③—④ 1.80m ④—⑤ 2.35m
 ⑤—⑥ 2.43m ⑥—⑦ 2.07m ⑦—⑧ 2.39m ⑧—① 1.92m

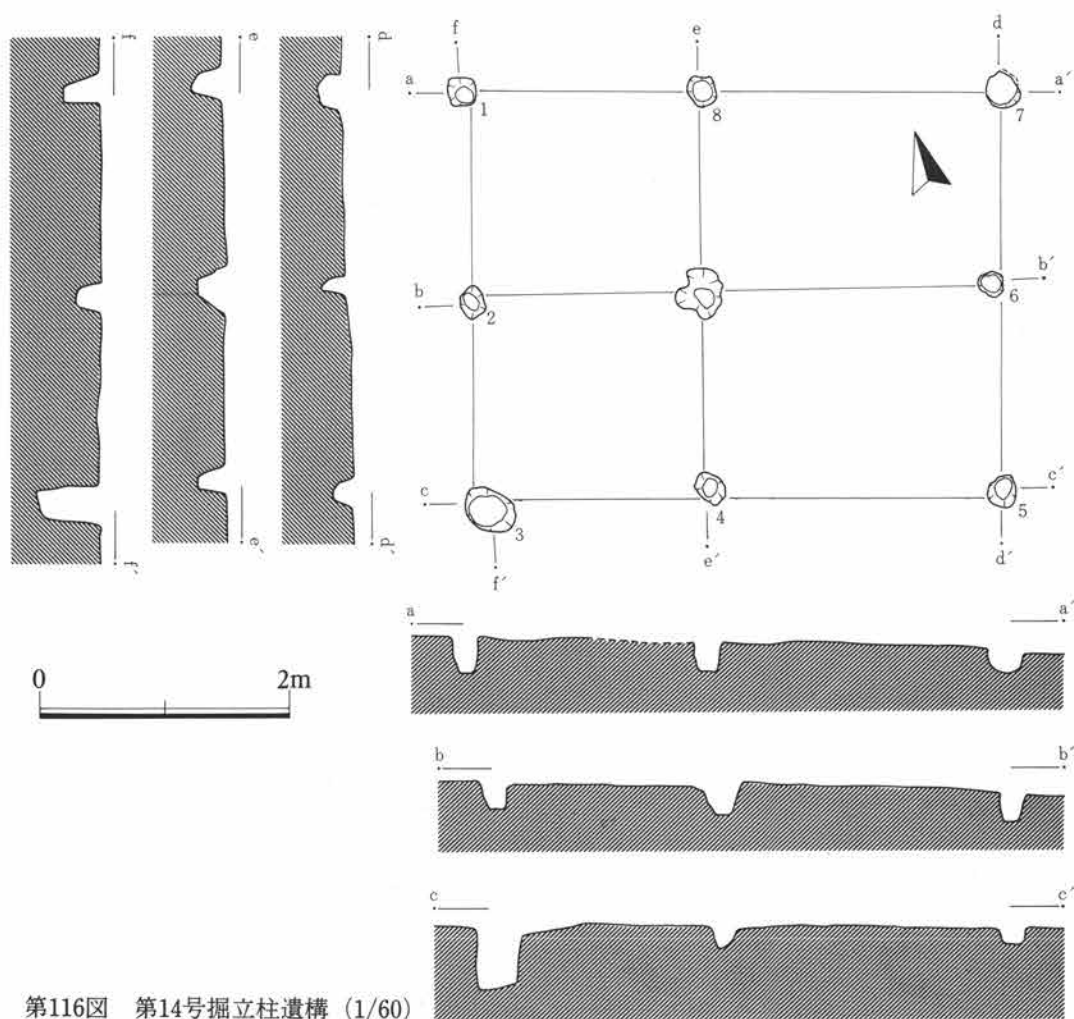
f 本掘立は第12号掘立の西側に位置する。この掘立内に柱穴がかなり多数存在する。柱穴の形状は円形を基調、深さは比較的浅い。南北中央柱列を基準とすると、本掘立は第14号掘立と同プランをもつ。



第115図 第12号掘立柱遺構
(1/60)

(12) 第12号掘立柱遺構 (第115図、図版47)

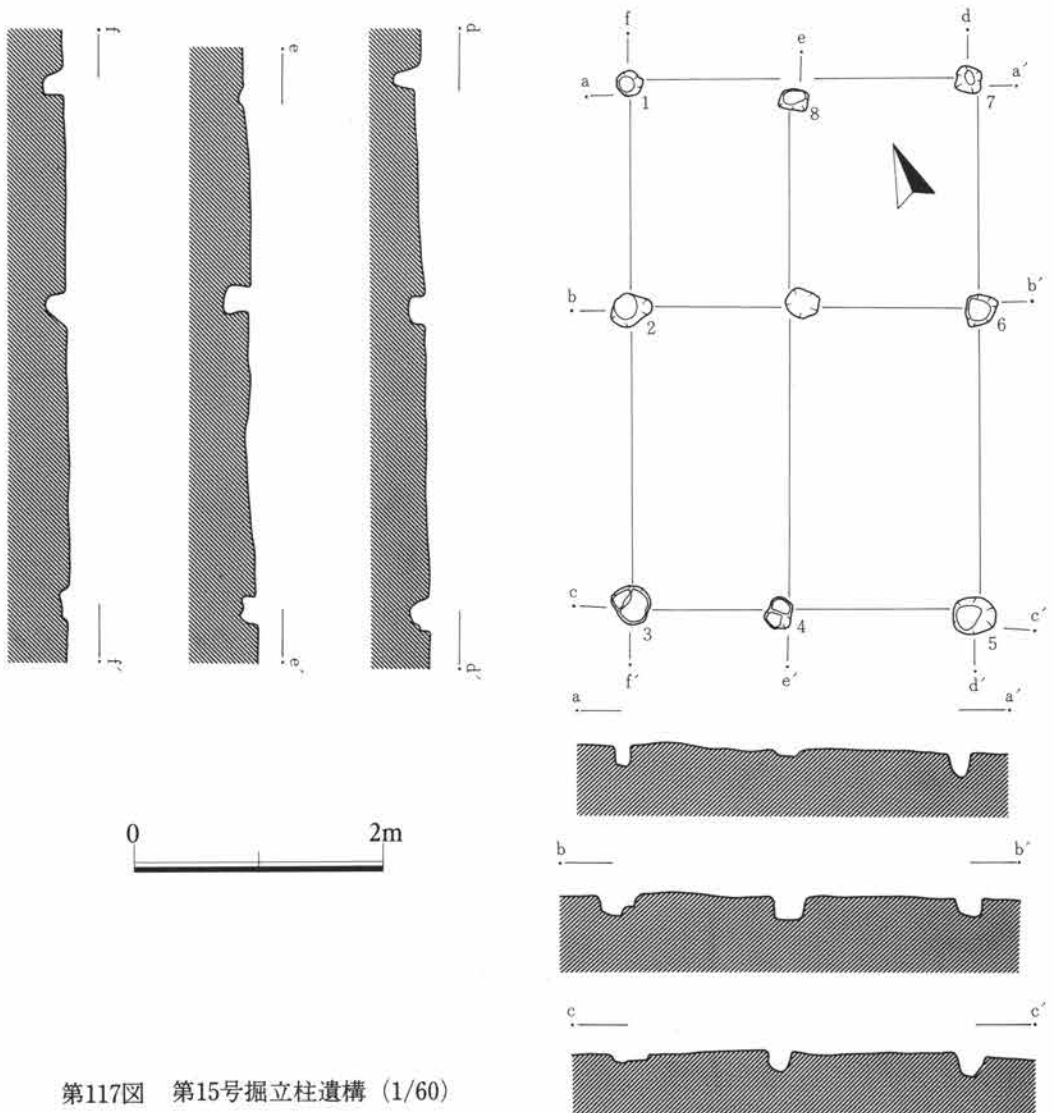
- a 方位 N-15°-E
- b 間数 2間×2間 総柱
- c 規模 東西4.41m×南北3.39m
- d 平面形 方形
- e 柱間 ①—② 1.69m ②—③ 2.12m ③—④ 2.34m ④—⑤ 2.07m
⑤—⑦ 3.72m ⑦—⑧ 2.17m ⑧—① 2.27m
- f 本掘立の位置する地点にも柱穴が多く、組み合わせに熟考を要した。その結果、第12号掘立がプラン化されたものである。柱穴は不整円形が多く、深さも一定しない。南北中央柱穴列を基準にするとわずかに東側柱列幅が狭い。



第116図 第14号掘立柱遺構 (1/60)

(13) 14号掘立柱遺構 (第116図、図版46・47)

- a 方位 N-16°-E
- b 間数 2間×2間 総柱
- c 規模 東西4.25m×南北3.23m
- d 平面形 東西軸の長い長方形、南北柱列を基準にすると西側が狭い。
- e 柱間 ①—② 1.66m ②—③ 1.60m ③—④ 1.89m ④—⑤ 2.35m
⑤—⑥ 1.62m ⑥—⑦ 1.57m ⑦—⑧ 2.46m ⑧—① 1.94m
- f No.7柱穴は2段掘り状の柱穴である。西側の間隔は狭く、南北は同間隔である。



第117図 第15号掘立柱遺構 (1/60)

(14) 第15号掘立柱遺構 (第117図、図版43)

a 方位 N-20°-E

b 間数 2間×2間 総柱

c 規模 東西2.86m×南北3.23m

d 平面形 方形

e 柱間 ①—② 1.40m ②—③ 1.83m ③—④ 1.42m ④—⑤ 1.30m

⑤—⑥ 1.79m ⑥—⑦ 2.36m ⑦—⑧ 1.28m ⑧—① 1.58m

f 本掘立柱遺構は第1号掘立と重複するものである。方位はほぼ同方向をもつ。南北中央柱穴列と東辺柱穴を基準とすると西側は狭く、また、東西中央柱穴と南辺柱列を基準とすると南側は広い。従って西側柱列が狭く、不自然とも考えられる。第1号掘立と第15号掘立を組み合わせる可能性も残されている。すなわち、3間×2間・総柱、北側に庇をもつ掘立柱遺構である。他の柱穴は補修柱穴または補助柱穴とも考えられる。

3 井戸址 (第118・119図、図版48・58)

第1号井戸址 (第118・119図、図版48、58)

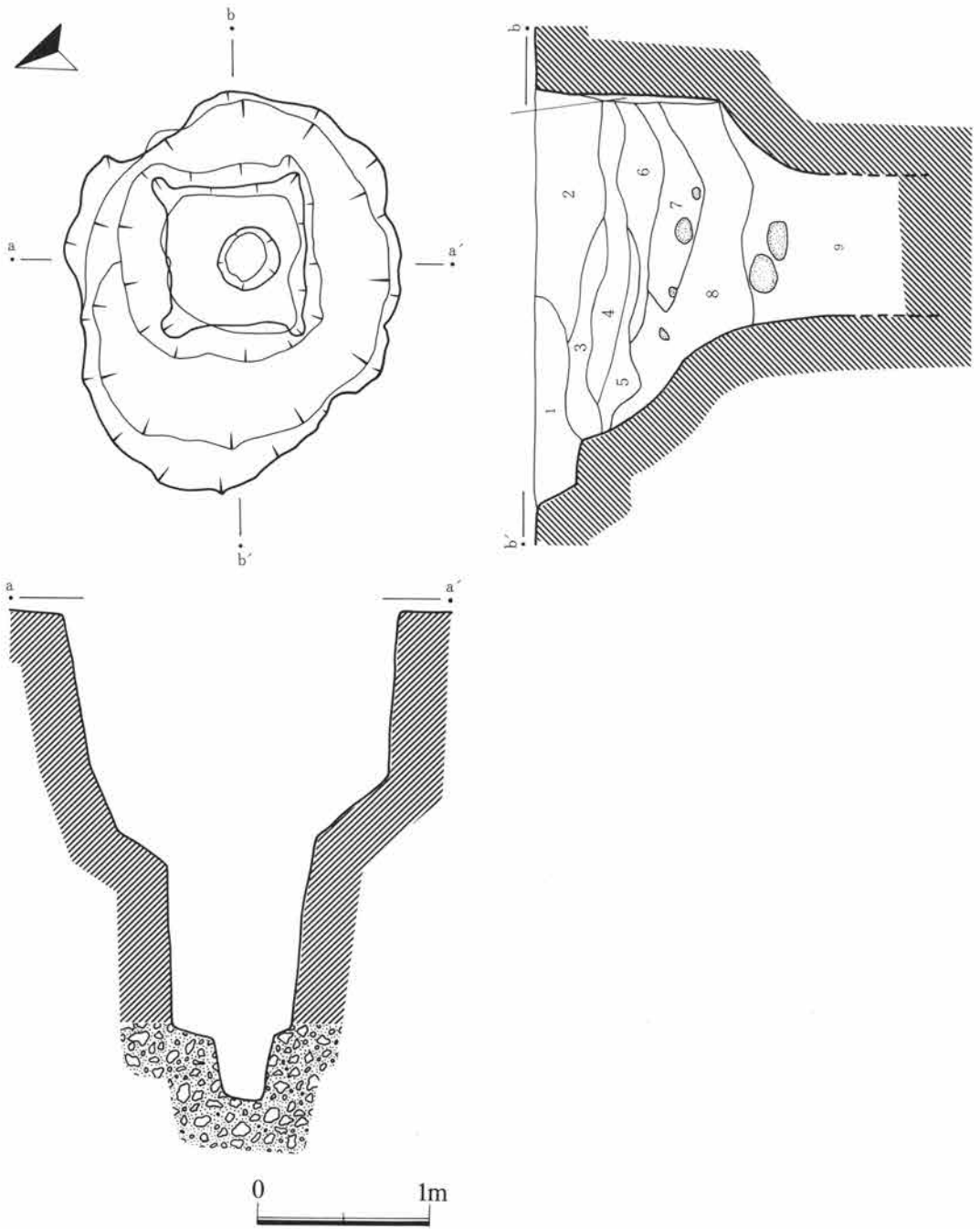
本井戸址は第1号溝に近接する位置にある。検出面での形は、ほぼ円形状のプランであったが、調査の過程で、内部は方形に掘り込まれたものであることが判明した。東西1.9m×南北2.2mの円形状の平面プランで、深さ1.2m付近で方形の掘り込みになる。東西84cm×南北81cmほどの方形である。さらに検出面から2.32mほどで、礫層になる。この礫層中央南寄りを、直径約38cm、深さ約44cmの円形状に更に掘り込んでいる。現在は湧水をみない。

本井戸の方形の掘り込み部の壁全面に竹状の圧痕が残されていた。また四隅には半径12cmの丸太状のものを立てたと考えられる凹部が確認された。これは壁面の崩壊を防止する目的で、竹状のものを縦に並べ、棒状の柱を利用し横木で竹状のものを押えたものと考えられる。竹状のものとしたのは部分的に節と考えられる圧痕が観察できたためである。なお、本井戸址は当時、方形の掘り込みをもつもので、上部の円形状は崩壊によるものと考えられる。

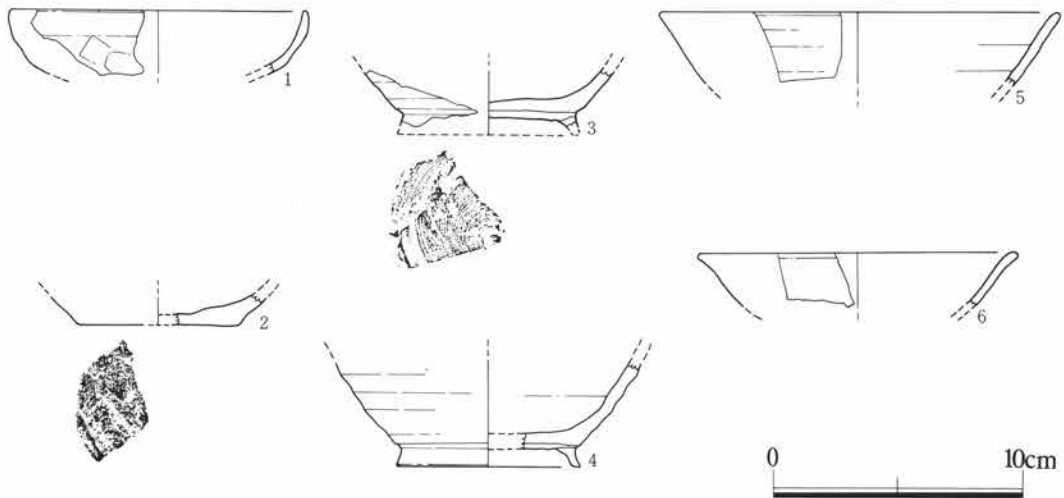
底面部からの出土遺物はなかった。

第24表 第1号井戸址出土遺物観察表

番号	器種	口経	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
1	坏	(12.0)					土師器口縁部が若干内湾する。砂粒を含む。色調は橙で焼成良好。口縁部、内面ナデ、体部ヘラ削り。



第118図 第1号井戸址 (1/40)



第119図 第1号井戸址出土遺物 (1/3)

第1号井戸址土層

- | | |
|---|---|
| ① 褐色土層 第IV層ブロックを多量に混入する。B軽石混り。 | ⑥ 褐色土層 ③と同じ |
| ② 褐色土層 ①と同様であるがブロックが小さく少ない。B軽石混り。 | ⑦ 褐色土層 第IV層ブロック(大)を含む。河原石、砂利を含む。B軽石を含む。 |
| ③ 褐色土層 ①と同様であるがやや粘質をもつ。 | ⑧ 褐色土層 ⑦と同様であるが、河原石及び砂利を含まない。 |
| ④ 褐色土層 ②と同様であるが第IV層ブロックがさらに少なく、第III層が多い。炭化物が多い。 | ⑨ 褐色土層 ⑦に比較して第IV層ブロック量が少なく暗褐色を呈す。 |
| ⑤ 褐色土層 ④と同様であるがさらに第IV層ブロックが少ない。 | ⑩ 黄褐色土層 細砂の土層で各層に入るブロックと同じ。 |

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
2	埵					(6.5)	須恵質。底部平底。砂粒を含有。焼成はやや軟質、内外面黒色の色調。ロクロ成形、右回転、回転糸切底。表面をいぶす。
3	高台付埵					(7.3)	須恵質。砂粒を含む。灰色の色調。ロクロ成形、右回転、回転糸切底、貼付け高台。 ※2度の糸切痕をもつ。最初の糸切で底部が薄すぎ、粘土を貼って、更に糸切を行なった。
4	高台付埵					(7.4)	須恵質。砂粒を含有。色調は灰色。ロクロ成形、回転糸切底、貼付高台。
5	高台付埵	(16.0)					体部はやや直線的に外傾し、口縁部若干のふくらみをもつ。色調は灰色。ロクロ成形。

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
6	高台付 壺	(12.8)					須恵質。体部は5より若干ふくらみをもって外傾し、口縁部は外反する。砂粒・石粒を含有。色調は灰色。ロクロ成形。

4 土 壇 (第120～124図、図版49～52、58)

土壇は大型のもの1基、石敷のもの1基、他の25基は小型の土壇である。一覧表に記述する。

第22号土壇 (第121、124図、図版51、58)

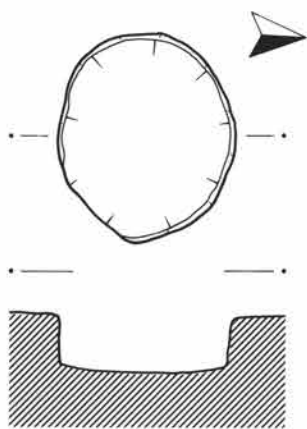
大甕の口縁部破片が出土した。常滑焼の陶器である。口径は推定50cm、頸部径も推定50cm、胴部最大径はかなり大きく、安定した形と考えられる。肩部から頸部にかけて内傾し、口縁部は短かく、大きく外反する。口唇部は二段につくられている。砂粒を含有。胎土色は灰色、内面は暗赤褐色、外面も暗赤褐色(部分的に黄色)の釉がかかる。輪積み手法で粘土帯は幅約2.5cmである。

第25号土壇 (第122～123図、図版51)

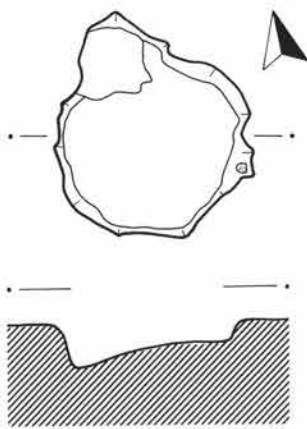
本土壇は第1号溝のほぼ中央部、第3号溝と交わる部分に位置する。長軸2m、短軸1.24m、深さ74cmで、底部には拳大から人頭大の河原石を敷き詰めている。この石を取り上げた底面の壁下に小ピットが不規則に並ぶ。本土壇の目的は不明である。出土遺物として、一点鉄製品が出土した。現存長3.4cm、断面厚み0.3cm、両端は欠損している。形状は不明であるが、環状の鉄製品が考えられる。用途は不明。

第26号土壇 (第122図、図版52)

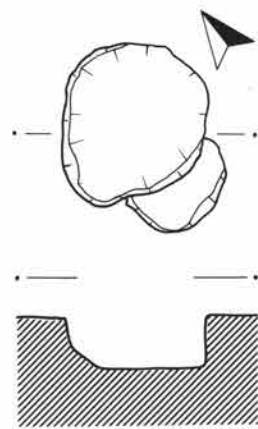
調査区北側に位置する大型の土壇。本土壇も第25号土壇同様に第4号溝と交わる位置に存在する。直径2.5m内外、底部は不定形で径2m前後を測る。2本の溝との関係は同質の覆土で不明である。出土遺物はない。



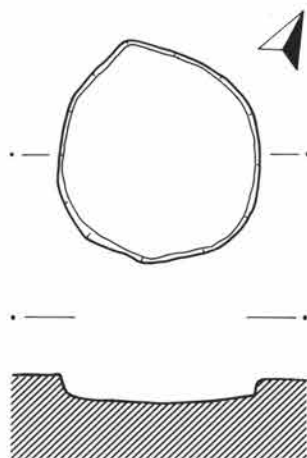
1号土坛



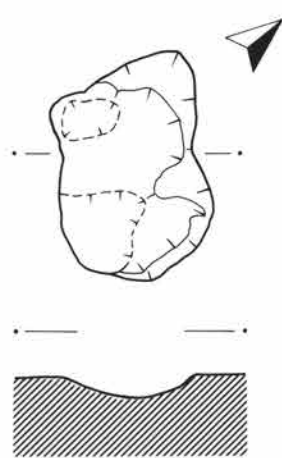
3号土坛



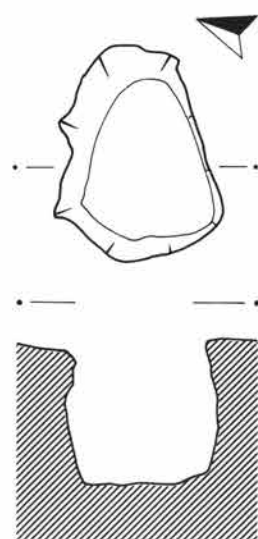
4号土坛



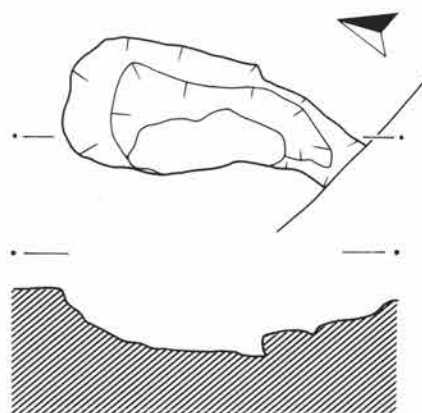
5号土坛



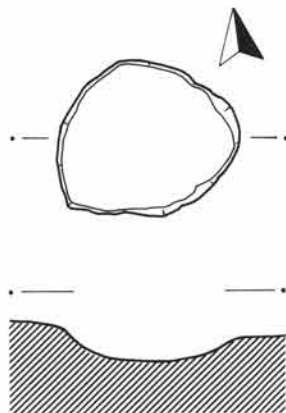
10号土坛



11号土坛



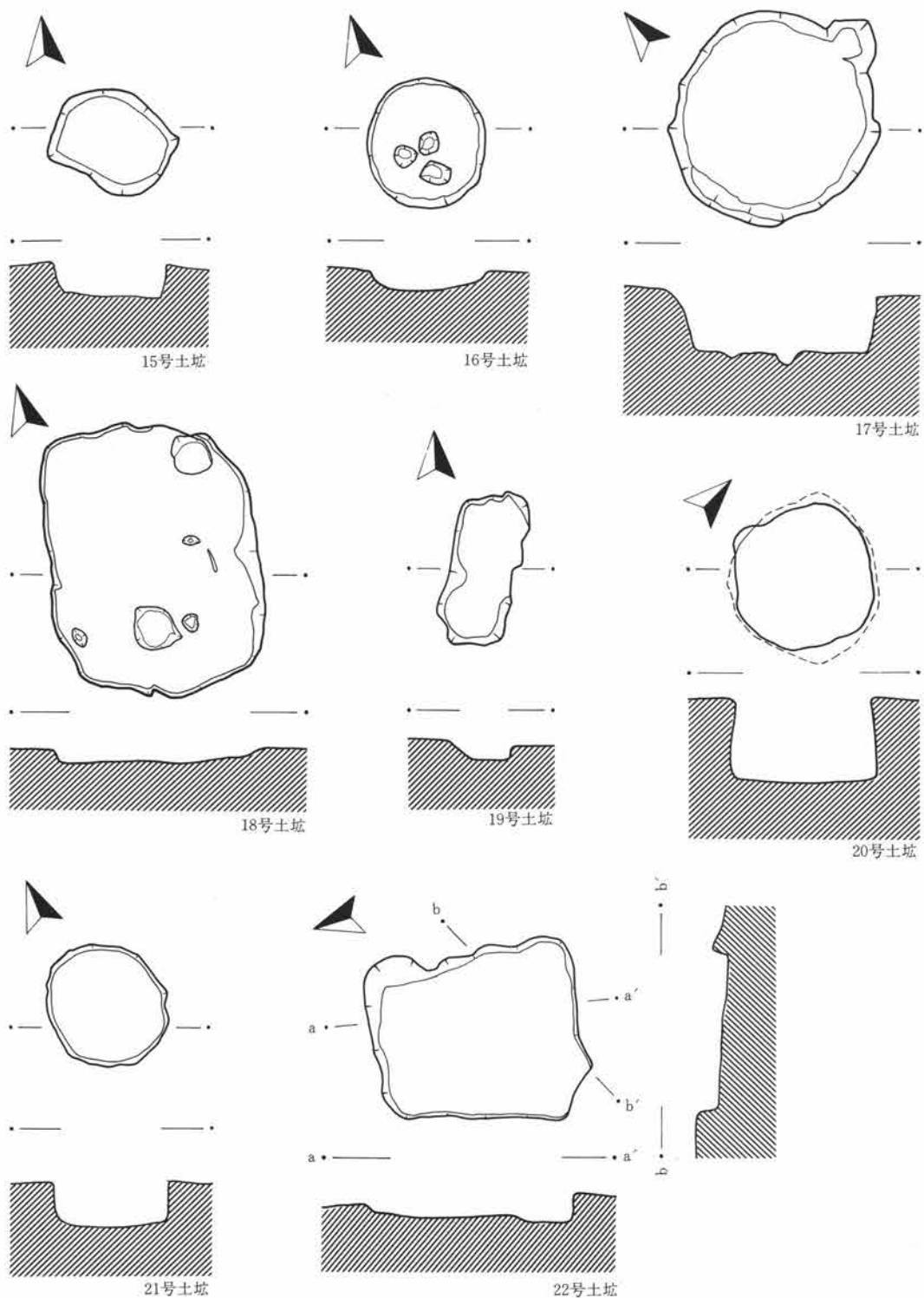
13号土坛



14号土坛

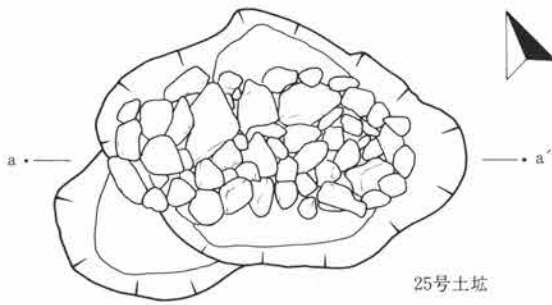
第120图 第1~14号土坛 (1/40)



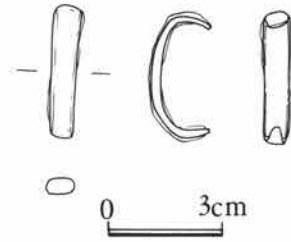
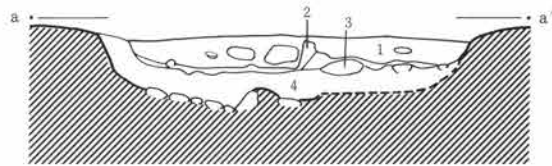
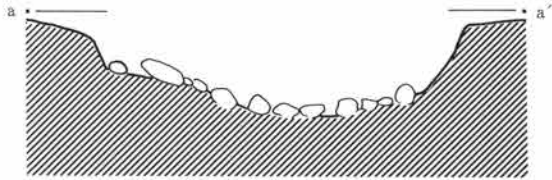


第121图 第15~22号土坑 (1/40)





25号土坑



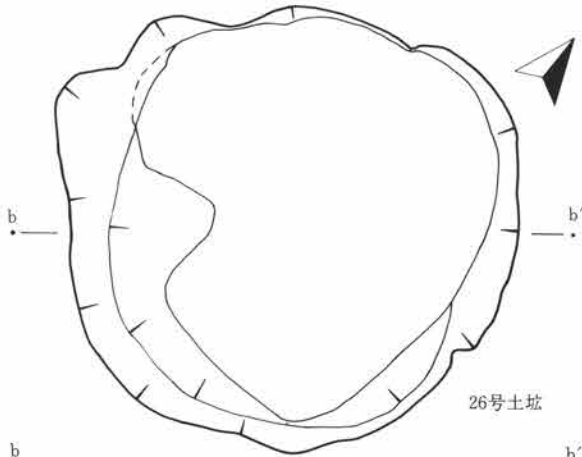
第123図 第25号土坑出土鉄製品 (1/2)

第25号土坑土層

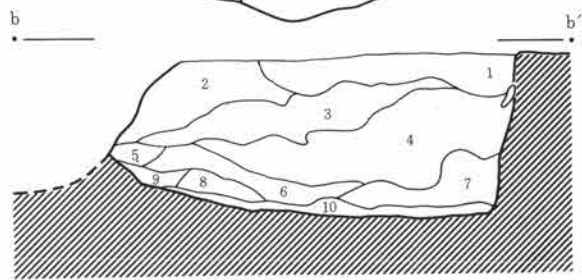
- ① 黒褐色土層 灰色土及び鉄分粒子を多量に含む。軽石も多量に含む。炭火物も少量含む。
- ② 黒色土層 粘質性に富んでおり水成堆積と見られる灰色土粒子が含まれる。鉄分粒子も多量に含まれる。
- ③ ①に類似する土層であるが①よりも色調が暗く、灰色土も少なめとなる。
- ④ ③とほぼ類似するが、細砂が多量に含まれる。

第26号土坑土層

- ① 黒褐色土 軽石が多量に含まれる。炭化物をも含む砂っぽい土層。
- ② ①に似るが粘着性がある色調が明るい。
- ③ 軽石、炭化物を微量含む灰色土、砂混じりの粘土層。
- ④ 黒色土層 きわめて砂質土が多く炭化物、軽石はやや多めである。褐色の粘土ブロックを含む。
- ⑤ 灰色土層 鉄分を含む灰色土。しまりのある硬い土。軽石も含む。
- ⑥ 灰色土層 ④に似るが褐色粘土ブロック・灰色土ブロックが多い。
- ⑦ 褐色粘土層 炭化物・赤色粒子がみられる。軽石はほとんど含まれていない。
- ⑧ 褐色粘土に灰色土と黒褐色土を含む。
- ⑨ ⑥に似るが砂質が少なく粘着性が強い。軽石が入る。
- ⑩ 灰色土と褐色土の粘土層。





















26号土坑

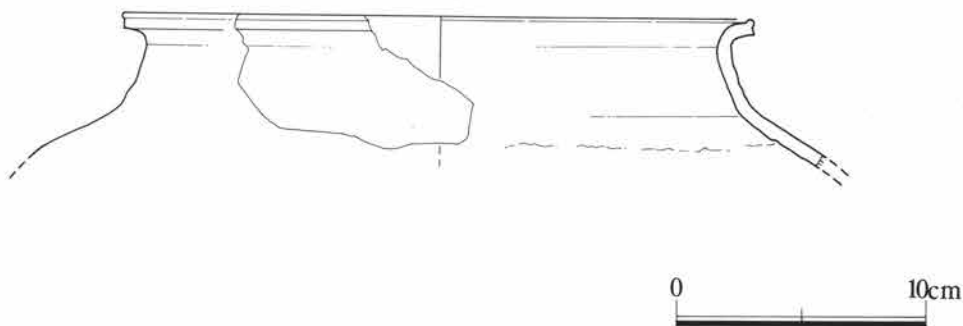


第122図 第25・26号土坑 (1/40)

第25表 土坑一覽表

土坑 No.	形 状	規 模 cm	深 さ cm	底 の 形	出 土 遺 物	備 考
1	円 形	106×95	29			
3	円 形 (やや不定形)	107(×125)	20最深 10			
4	円 形	直径 80	28			
5	円 形	直径 112	15			
10	不 定 形	110×80	12			
11	不 定 形	110×80	75			
13	不 定 形	150×70	30			
14	不 定 形	100×85	17			
15	不 整 楕 円 形	74×56	20			

土 址 No.	形 状	規 模 cm	深 さ cm	底 の 形	出 土 遺 物	備 考
16	円 形	78×74 (直径76)	14			
17	円 形	直径 130	40			
18	隅 丸 長 方 形	170×130	8			
19	不 整 隅 丸 長 方 形	90×45	10			
20	円 形	直径 95	52			
21	円 形	直径 75	30			
22	やや不整 隅丸長方形	127×100	10			
25	不 整 楕 円 形	200×130	48			
26	円 形	直径 235	86			



第124図 第22号土坑出土遺物 (1/3)

5 溝 (第125～132図、図版34、41、52・53、58・59)

本遺跡からは4本の溝が確認された。第1号溝は調査区を北西方向から蛇行しながら南東方向に走り、調査区中央部付近で南に流路を変えて、調査区外へ出る。1区北側の調査区は残存状態がよい。第2号溝は第1号溝内に短い流路をもつ。第3・4号溝はそれぞれ、東方向、北方向から「T」字形に交わる溝である。

(1) 第1号溝 (第125～129図、図版34、41、52・53、58)

本溝は北側調査区では、上幅1.5m～2m、底幅平均70cm、深さ66cmを測る。北壁は逆「く」の字状を呈す。南側調査区では上幅1.2m～1.6m、底幅40cm～80cm、深さ22cm～60cmである。北側と南側とでは様相を異にするが、ほぼ同一方向に走ることから、同じ溝と断定した。

出土遺物は甕と考えられる底部、皿、鉢、瓦、鉄製品などがある。

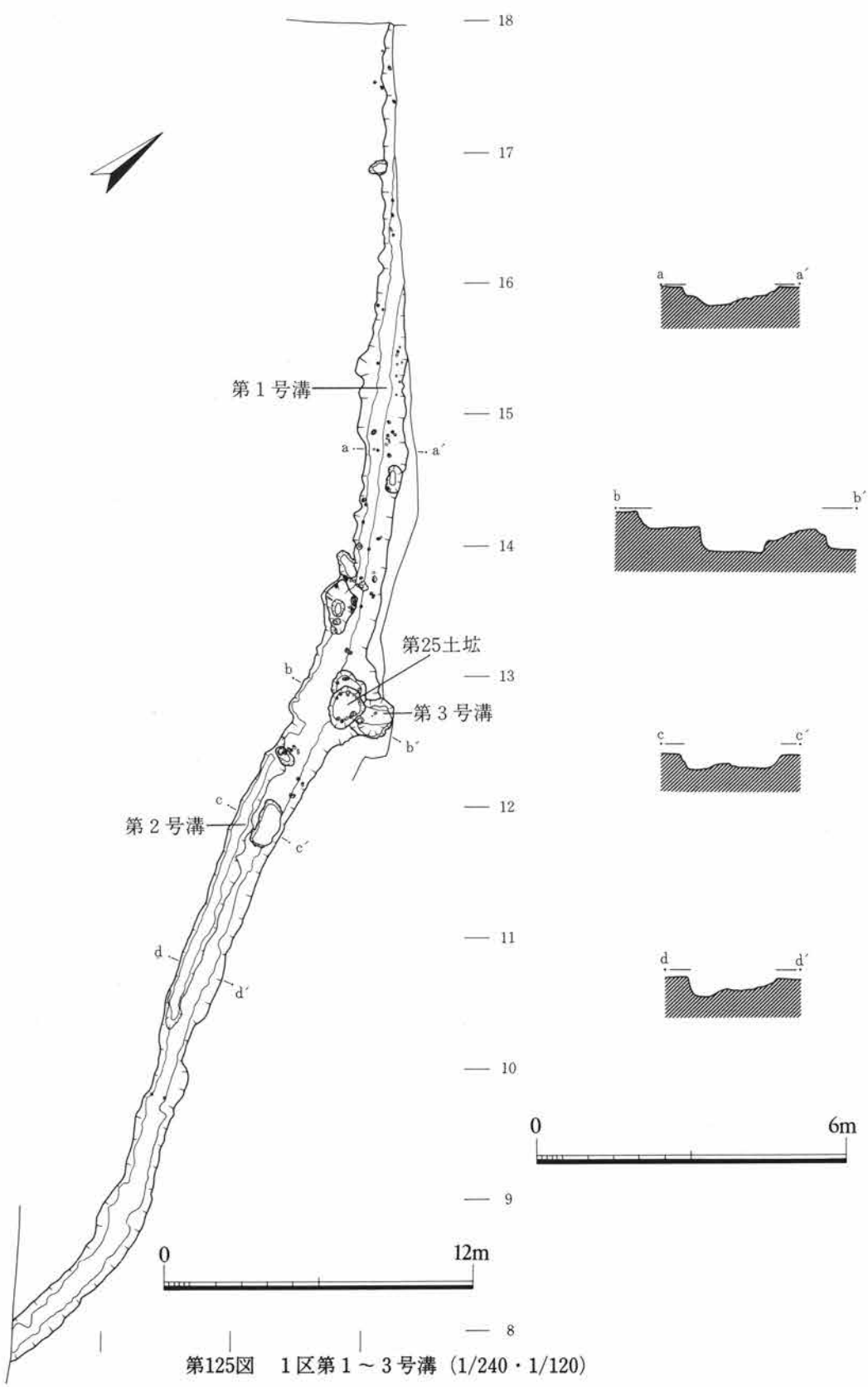
第127図1は須恵質の甕と考えられる底部である。大型で厚手、底径12cm、底部は糸切りの平底である。砂粒を含有し、色調は灰色で、成形はロクロである。

2は、須恵質の皿(灯明皿?)である。器高1.6cm、口径7.3cm、底径4.8cmで底は厚く、内底中央は若干凹む。砂粒・石粒を含み色調は黒灰色を呈する。左回転、ロクロ成形、回転糸切底。

第128図3は須恵質の鉢で、推定口径38.8cm。口縁部に向って大きく広がる鉢形で、片口をもつ。内面口縁部付近に印花(4.5cm間隔)を施す。軟質な焼成で、色調は灰色。

4は陶器の鉢で、推定口径38cm、口唇部に鋭い角をもつ。砂粒を含有し、にぶい赤褐色の色調である。輪積みとロクロを併用し、口唇部と内面上部に暗赤褐色の釉が少しかかる。

6は刃部左側を欠損する大型の打製石斧で、撥型に分類できる。石材は輝石安山岩。長さ15.7cm、最大幅10.3cmで下部にある。断面は2.0cmを測る。扶入部幅は6.7cm、A面は丹念に調整が行なわれている。B面は中央部に自然面を残している。扶入部周辺には磨耗の痕跡はなく、残存刃部にも認められない。ただし、よく使用されたと思われ、小さな打痕で若干平坦である。



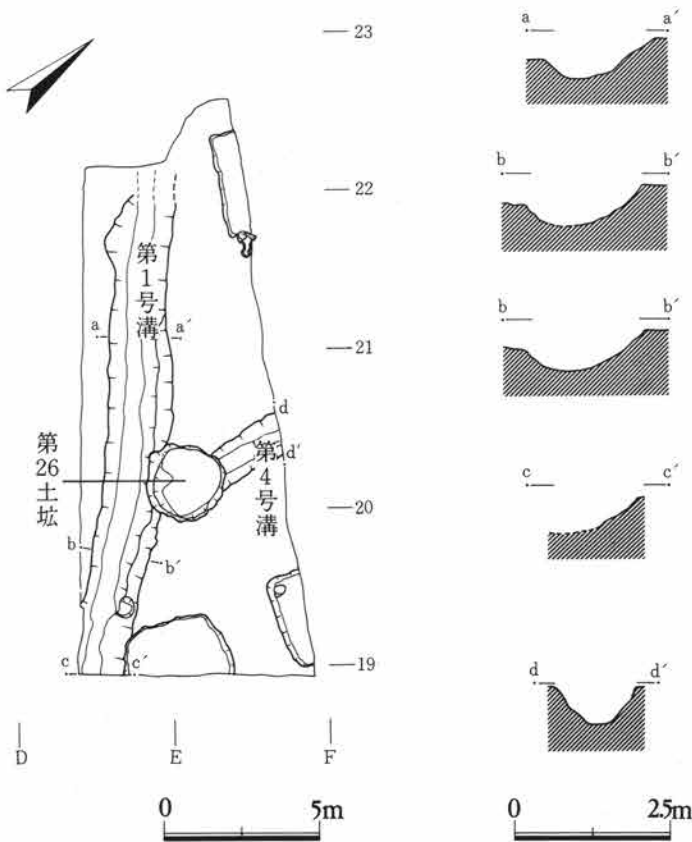
第125图 1区第1~3号沟 (1/240 · 1/120)

第129図7は鉄製品である。欠損している為、形状は不明である。現存長3.7cm。尖った部分を先端と考えると上部ほど太くなり、断面形状は不明。上部は「く」の字状に曲り、方形状を有する。中は空洞である。

第128図5は布目瓦で、現存する縦の長さは11.3cm、幅は10cm、厚さ1.3cmの平瓦である。胎土には小粒の石英が含まれる。また、1個ではあるが、米粒大の穴がB面にある。A面は右側に布目、左側に叩き痕がみられ一部に布目痕が認められるが、布目痕を叩き痕が潰していることから布目後、叩いているものである。A面はかなりの凹凸がみられ、桶巻きの手法と考えられる。B面は平坦ではあるが、なだらかな凹凸がある。かなり雑な作りの瓦である。B面右側辺上半部は、鋭角の切断面をもつ。A面の1ヶ所の凹部に粘土を貼付け、ヘラ状工具を使用し、修理した痕跡が認められる。焼成は若干あまく、色調は灰白色で、ザラザラする。胎土の一部に薄アズキ色の部分がある。胎土は全体的に「モグサ」状に近い。

(2) 第2号溝 (第125、130・131図)

本溝は第1号溝内にある。長さ12.7m、上幅80cm、底幅50cm、深さ36.5cmの規模をもつ。



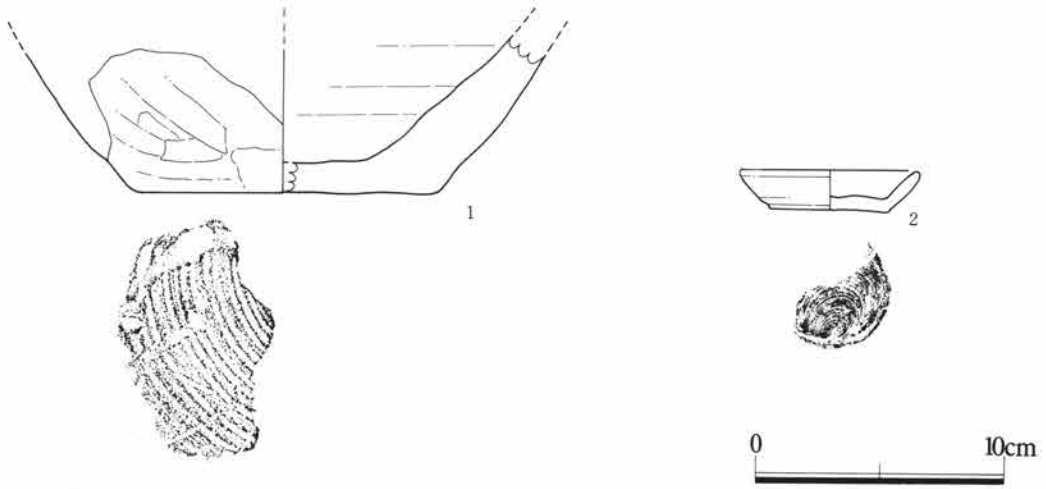
第126図 2区第1・4号溝 (1/240・1/120)

出土遺物は埴、鉄製品などである。

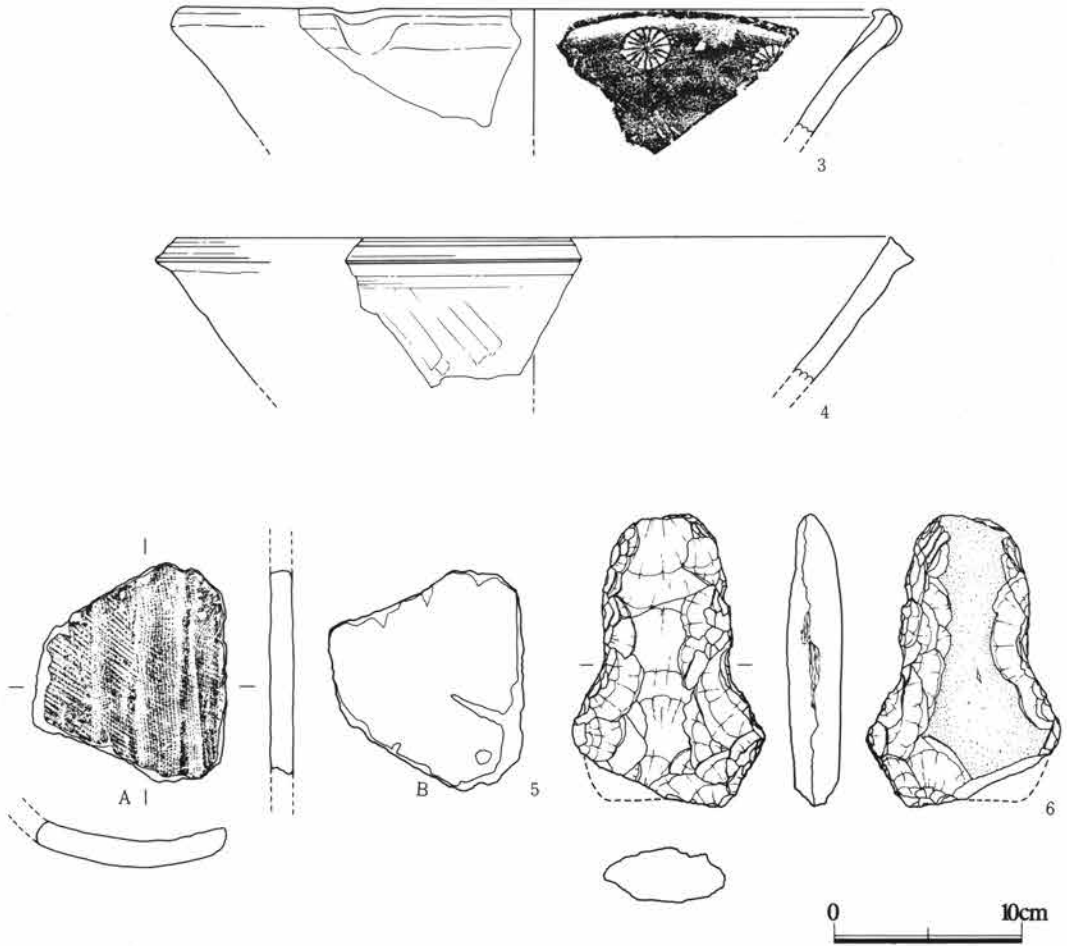
第130図1は須恵質の埴である。器高3.6cm、推定口径12cm、推定底径5.9cmで、体部はあまり丸味を持たず、直線的に口縁部に向う。口縁部はやや外反し、平底である。砂粒を含み、色調は灰色を呈する。ロクロ成形、回転糸切底。

2は底部のみの須恵質の埴である。底径6.5cmを測り、外底は中央に向かって凹む。砂粒・石粒を含有し、色調は灰色である。右回転、ロクロ成形、回転糸切底。

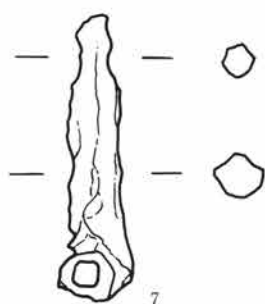
第131図3は柳葉形の鉄製品で先端部は刀子状になる。やや一辺がふくらみをもち、その部分には刃部を形成して



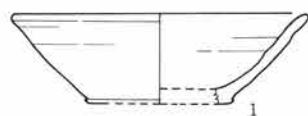
第127図 第1号溝出土遺物・その1 (1/3)



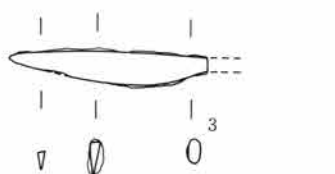
第128図 第1号溝出土遺物・その2 (1/4)



第129図 第1号溝出土遺物・
その3 (1/1)



第130図 第2号溝出土遺物・
その1 (1/3)



第131図 第2号溝出土遺物・
その2 (1/2)

いないが、先端部は両辺とも刃部をもつ。現存長5.3cm、刃渡1cm、茎部は0.6cmである。

4は現存長2.6cm、幅0.6cm、端幅0.5cm、0.7cmで両端が欠損する。断面は楕円形で、上下端がやや尖る。中は空洞である。

(3) 第3号溝 (第125図)

第1号溝のほぼ中央部に東方向から同溝に土塚を介在して、「T」字形に交わるのが第3号溝であるが、極く小範囲の調査で詳細は不明である。上幅1.5m、底幅0.5m、深さ29cmである。二段掘り状の溝である。

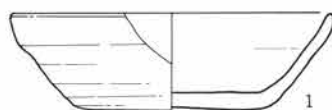
(4) 第4号溝 (第126、132図、図版59)

本溝も第3号溝と同様に小範囲の溝である。上幅1.10m、底幅0.40~0.53m、深さ56~57cmである。

出土遺物は碗、高台付碗の二点である。

第132図1は須恵質の碗である。器高3.8cm、推定口径12.9cm、推定底径6cm、底部は平底である。体部は直線的に外傾し、口縁部付近でやや厚みをもち口縁部はわずかに内湾する。砂粒を含有し、黄灰色の色調を呈する。右回転、ロクロ成形、回転糸切底。

2は須恵質の高台付碗で、器高5.5cm、口径14.8cm、底径7.4cmを計る。



第132図 第4号溝出土遺物 (1/3)

体部下半にわずかにふくらみをもって外傾し、口縁部は外反する。砂粒を含有し、黄灰色の色調を呈する。右回転、ロクロ成形、回転糸切底で、糸切後に高台を付ける。

6 その他の遺物

(1) 鉄製品

第134図20は、現存長5.8cm、最大幅1.7cm、背幅は0.3cm、全体の形状から刀子の刃端部であろう。腐食が激しい。

21は方形の形状を有し、3.2cm×3.7cm、厚さ0.3cmの偏平な鉄製品である。現状では一端が弧状を呈すが、欠損している状況が認められる。断面は軽い弓状である。

22は刃部と茎の区分が明瞭ではない。刃渡は15.7cm、茎は7.0cm、身幅は1.6cm(最大)、背の厚さは0.6cmである。刃部は約2.3cm～5.7cmの部分が磨滅している。また先端から約12.5cmの部分から若干、細身になる。茎部端から5.5cm部分から幅が狭くなる。あるいはこの部分から茎とも考えられる。

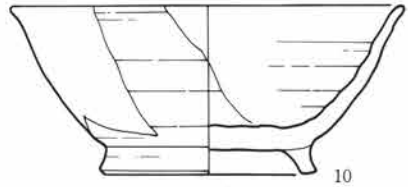
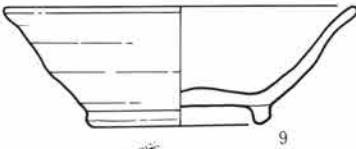
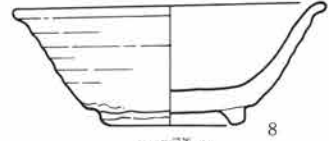
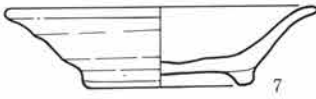
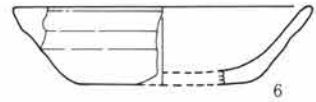
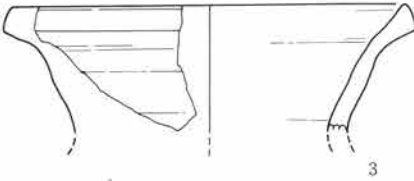
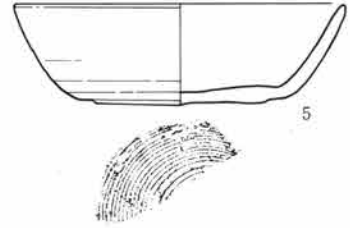
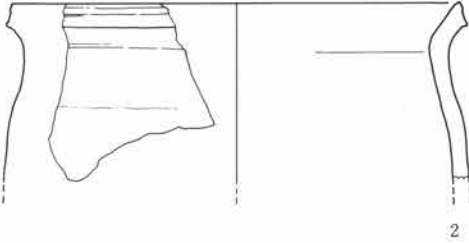
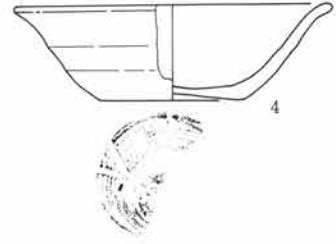
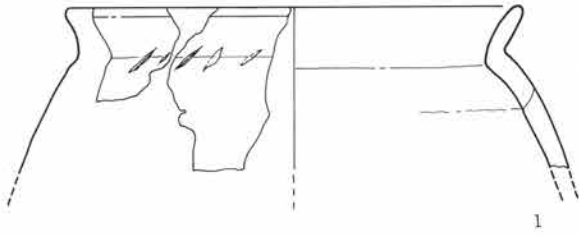
(2) 石製品

第134図19は1区B-6グリッドIII層出土の砥石である。石材は流紋岩。図上部は欠損、最大長9.3cm、下端幅は3.3cmである。幅は最大3.3cm、最小1.2cm、欠損部を除いて全面使用されている。A面は側面で、若干斜目方向に9条内外の条痕が認められる。B面は腐植物状のものが付着し、不明瞭である。C面も下端に同様な付着が見られる。D面はもつともよく使用され滑かである。E面は底面で左上部の一部のみで使用が観察できる。他は小さな凹凸が面を覆っている。

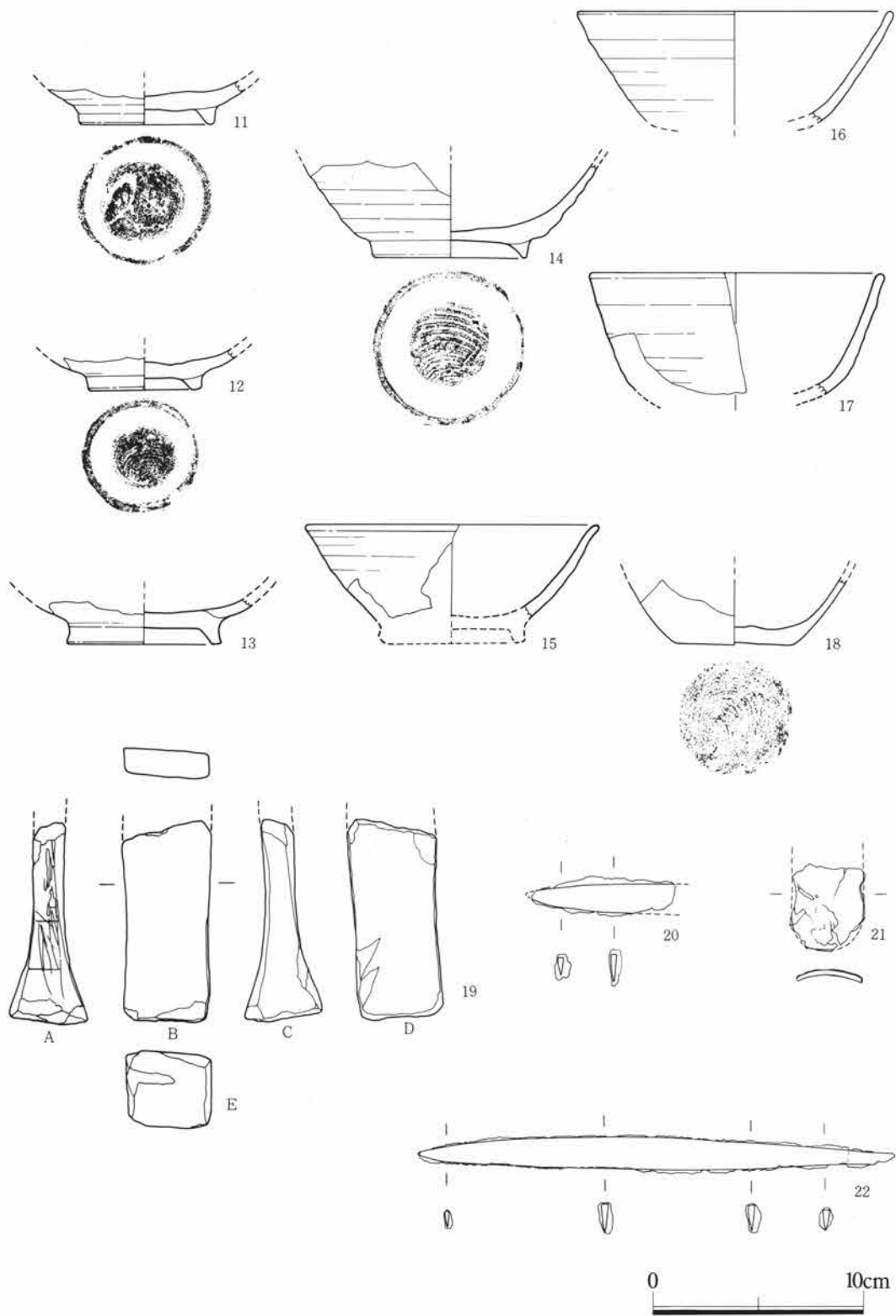
第136図10は表採した砥石である。図上部を欠損する現存最大長5.8cm、最大幅3.9cm、最小幅2.6cm、断面方形を呈す。A面は側面で、左下部を欠損する。B面はよく使用されており滑かである。左下部に腐植物が付着、D面は若干ザラザラ状で上部と下部が滑かである。E面はザラザラ状である。

第26表 各層出土遺物観察表

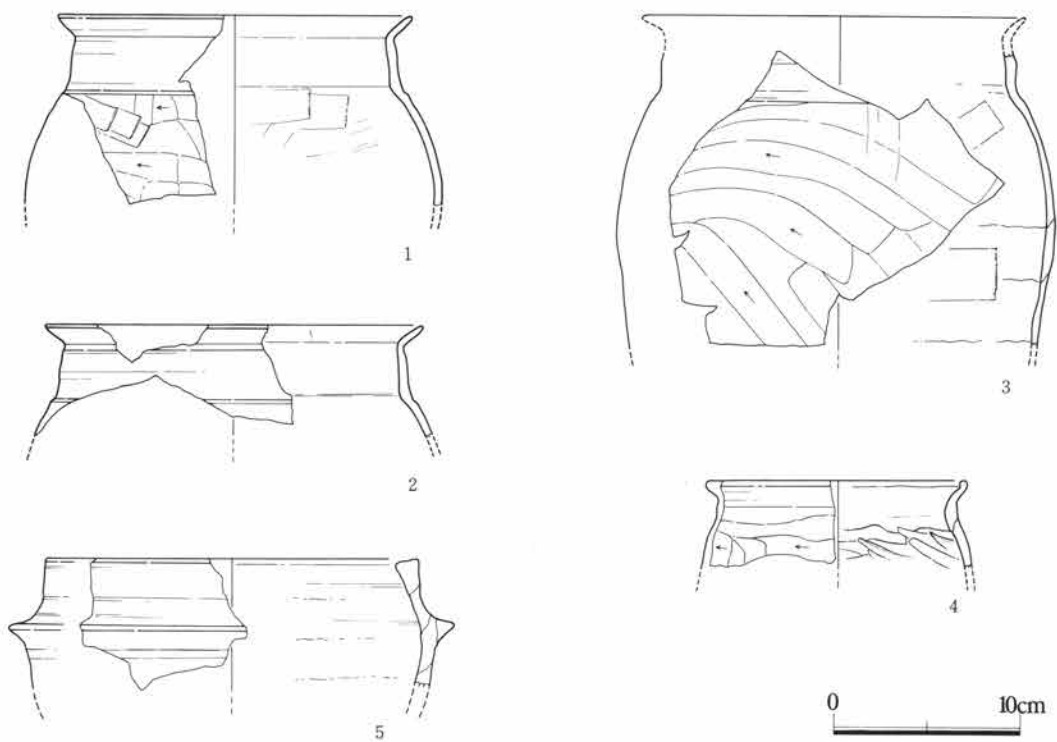
番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
1	甕	(18.0)		(17.0)			土師器。口縁部短く、「く」の字状に外反。砂粒・石粒含有し、焼成良好。色調はにぶい橙。輪積み、頸部にヘラ当り痕(IV層)。
2	甕	(17.9)		(17.0)			土師器。口縁部短く、外反。口唇部二段で、鋭角を形成する。整形痕は風化で不明。砂粒・石粒含有し、焼成良好。色調橙。輪積み、口縁・口唇部は丁寧にナデ。



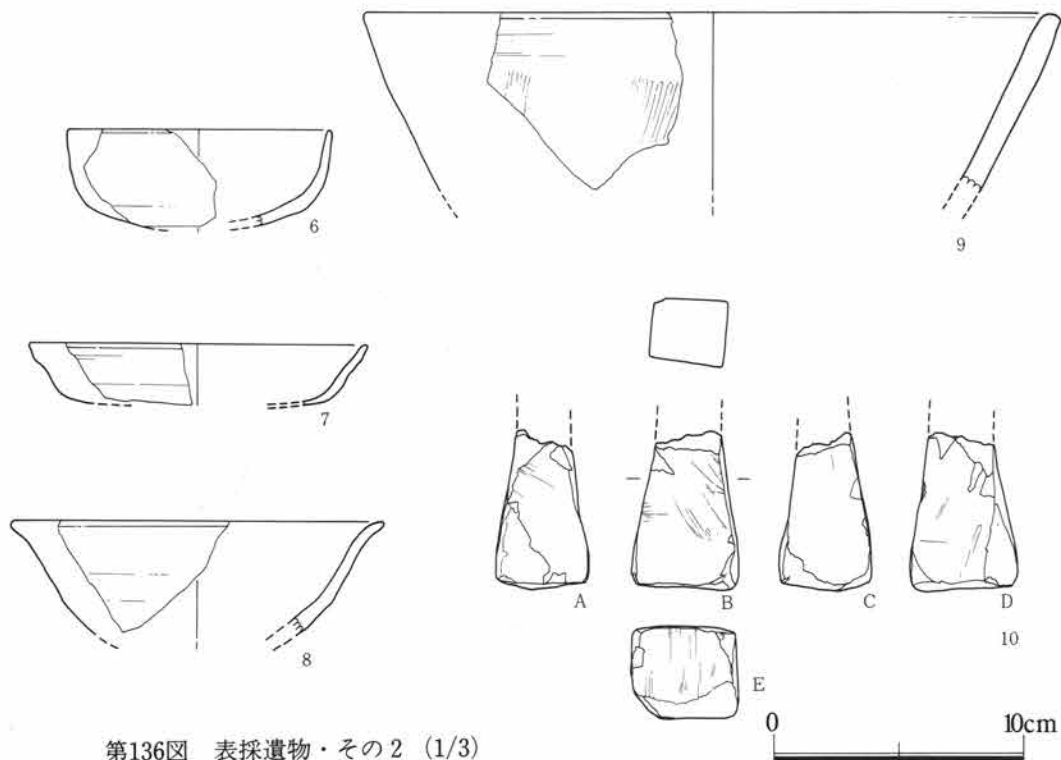
第133図 各層出土遺物・その1 (1/3)



第134図 各層出土遺物・その2 (1/3)



第135図 表採遺物・その1 (1/4)



第136図 表採遺物・その2 (1/3)

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
3	甕	(15.8)		(11.0)			須恵器。頸部は若干のふくらみをもち、口縁部は外反する。口縁部内側は凹状になり、口唇部は角張る。
4	坏	(13.5)	3.7			5.5	須恵質。底中央部が盛り上がり、立ち上り部は厚手。直線的に外傾し、口縁部で器肉は厚くなり、外反する。砂粒を含有し、色調は白灰色。ロクロ右回転、回転糸切り、(Ⅲ層)。
5	坏	(13.5)	3.7			(6.5)	底径は広く、体部はわずかにふくらみ気味に外傾し、口縁部は、わずかに直立する方向に造られている。砂粒を含有し、黄灰色の色調。ロクロ成形、回転糸切底、(Ⅱ層)。
6	坏	(12.0)	3.0			(6.8)	須恵質。底部からの立ち上り付近の器肉は厚く、体部中央で薄くなり、口縁部で再び厚くなる。砂粒を含有し、にぶい褐色の色調。ロクロ成形、(Ⅲ層)。
7	高台付 埴	12.5	3.1			6.7	須恵質。高台は低く、体部の外傾は大きく、口縁部で、さらに外反する。器高は低い。砂粒を含有し、にぶい橙の色調。ロクロ成形、右回転。貼付高台。(Ⅱ層)。
8	高台付 埴	12.5	4.7			5.7	須恵質。底径は小さく、高台も低い。体部は下半部にふくらみをもち、体部中央は直線的に外傾し、口縁部で鋭角的に外反する。砂粒を含有し、色調は黒灰色。ロクロ成形、右回転。回転糸切後、貼付高台。
9	高台付 埴	14.2	4.7			7.3	須恵質。体部下半はややふくらみ気味に立ち上る。口縁部付近で凹状の器形になり、口縁部に続く。従って口縁部は外反する。口唇部は丸味をもつ。砂粒を含有し、色調は灰白色。右回転、ロクロ成形。回転糸切後、貼付高台、(Ⅲ層)。
10	高台付 埴	(15.7)	6.7			(8.1)	須恵質。体部下半からややふくらみ気味に、口縁部付近まで立ち上り、口縁部は外反する。高台は外傾する。全体的に大型のしっかりした埴である。砂粒を含み、色調は暗赤褐色(外面は黒灰色)。ロクロ右回転、静止糸切に近く、その後、貼付高台(Ⅱ層)。
11	高台付 埴					6.3	須恵質。底部のみ。砂粒含有し、色調は灰色。ロクロ成形。回転糸切後、貼付高台。
12	高台付 埴					5.4	須恵質。色調は灰黄色。右回転、ロクロ成形。回転糸切後、貼付高台(Ⅲ層)。

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部 最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
13	高台付 埴					7.4	須恵質。10と類似。砂粒を含み、色調は赤褐色。右回転、ロクロ成形。静止糸切か、回転糸切か判明しない。糸切後、貼付高台（III層）。
14	高台付 埴					7.1	須恵質。高台外面は直立し断面は三角形。体部は直線的に外傾する。砂粒を含有し、色調は灰黄色。右回転、ロクロ成形。回転糸切後、貼付高台。
15	高台付 埴	(14.0)					須恵質。底部から若干のふくらみをもって口縁部に立ち上り、口縁部下部でやや凹部をもち、そのまま外反し、口唇部は丸味をもつ。色調は灰色。右回転、ロクロ成形（IV層）。
16	高台付 埴	(14.7)					須恵質。器高の高い高台付埴と考えられる。底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。石粒・砂粒を含有し、色調は青灰色で焼成は良好。ロクロ成形。
17	高台付 埴	(14.0)					須恵質。底の深い高台付埴か。砂粒・石粒を含有し、色調は青灰色。ロクロ成形（II層）。
18	埴					5.5	須恵質。内底中央は高まる。平底。砂粒・石粒含有し、色調は暗灰色。右回転、ロクロ成形。回転糸切底。

第 27 表 表採遺物観察表

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部 最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
1	甕	(18.4)		(17.6)			土師器。「コ」の字状口縁は若干内傾し、「く」の字状に口唇部が外反する。口縁部と胴部の接合部は段状を呈す。薄手の造りである。砂粒を含み、赤褐色である。輪積み。口縁部及び内面は丹念なナデ、外面はヘラ削り。
2	甕	(20.0)					土師器。1に類似する。
3	甕			(18.0)			土師器。口縁部の「コ」の字状が若干張る。口唇部は上述2点より若干短く、外反も弱い。
4	甕	(13.8)					土師器。「コ」の字状口縁に類するが、部分的に弱い「く」の字状をもつ。口唇部は蓋を意識する形状をもつ。灰褐色で、内面の口縁部はヨコナデ、体部ハケ目調整。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。

番号	器種	口径	器高	頸部径	胴部最大径	底径	器形の特徴・胎土・調整・手法の特徴
5	羽釜	(20.0)					須恵質。口縁部は内傾し、口唇部は直線的である。鐙部は三角形を呈する。石粒を含み、黒灰色である。焼成は軟質。輪積みロクロ成形、鐙の上下とも丹念にナデ整形。
6	坏	(10.6)	4.0				底部から、わずかに外傾して立ち上る体部をもつ。砂粒を含有、橙色の焼成。口縁部内外面ナデ、底部ヘラ削り。
7	坏	(13.6)	2.2				須恵質。底径は大きい。体部中央部で凹部を形成し、外傾する。全体的に偏平な坏である。砂粒を含有、暗褐色。内面全体と口縁ヨコナデ、底部ヘラ削り。
8	埴	(15.0)					須恵質。丸味をもつ体部と外反する口縁部をもつ。高台付埴に類似する特徴をもつ。砂粒を含有、暗褐色。ロクロ成形である。
9	鉢	(28.0)					焼き締め陶器。常滑産か。直線的に外傾し、口唇部は若干丸味をもつ。内面の灰釉は降灰釉である。外面は赤褐色。

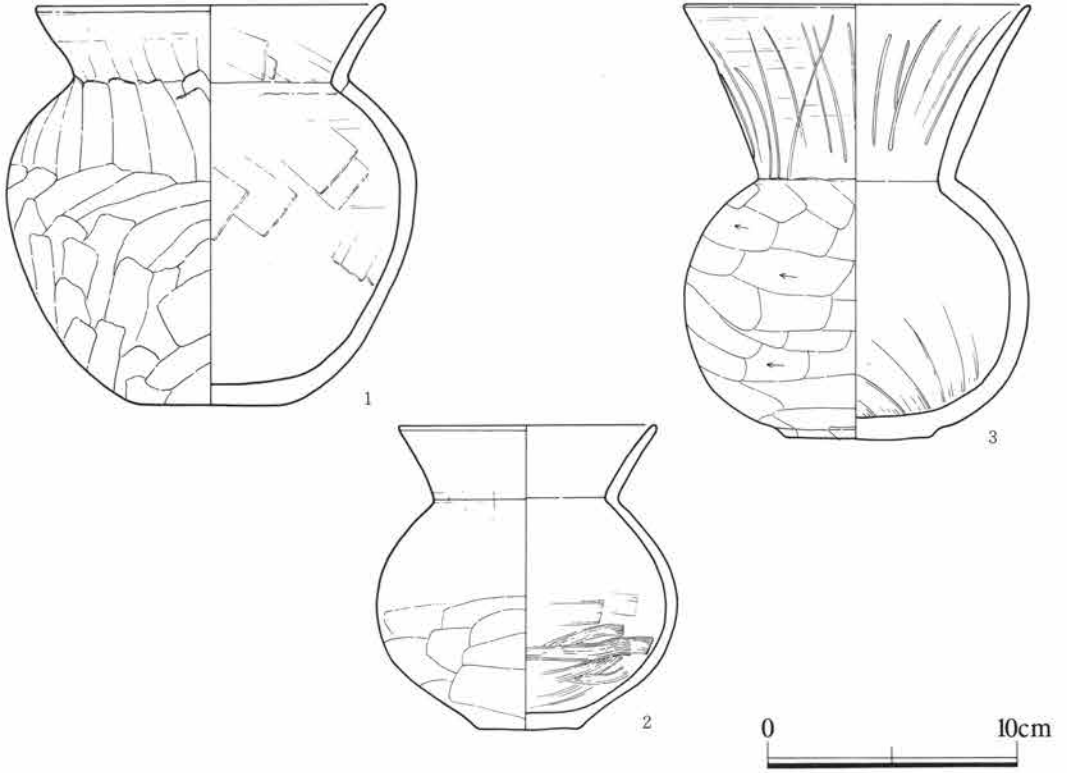
(3) 水路工事中の出土遺物 (第137図1～3、図版60)

本遺跡は森遺跡の東側、立石南部の水路工事中の断面で発見されたものである。B軽石層下の粘質土層内で同断面に焼土も確認されているから、住居址内に位置するものであろう。

第137図1は、土師器小型甕で器高15.8cm、口径14cm、頸部径11cm、胴部最大径16.4cm、底径6cmを計る。頸部は「く」の字状に外反、胴上部に最大径がくる。砂粒を含有しにぶい褐色、焼成は良い。輪積み手法で、口縁部ナデ、内部はハケ目、体部はヘラ削りである。

2は土師器小型甕で、1と同様な器形であるが、胴中央部に最大径がさがり底部が明確である。器高17.2cm、口径13.8cm、頸部径7.9cm、胴部最大径13.8cm、底径5.8cm。頸部は「く」の字状で立ち上がり、比較的長い口縁部になり、直線的に外反する。体部は丸味をもち、壺形土器に類似する。砂粒を含有、橙色で焼成は良い。輪積み、外面は体部ヘラ削り、口縁部ナデ整形後に暗文、内面は体部ヘラ削り、口縁部ナデ後暗文。

3は土師器小型壺(埴)である。器高12cm、口径10.2cm、頸部7.5cm、胴部最大径12cm、底径4.1cm。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は若干偏平な丸味をもつ。胴部中位に最大径があり底径は小さい。砂粒を含有、明るい橙色で焼成は良好。輪積み、外面は胴部下半ヘラ削り、内面はナデ、口縁部は内外面ともナデである。



第137図 水路内出土遺物 (1/3)

D ま と め

1 奈良三彩陶 (第138・139図、巻首図版)

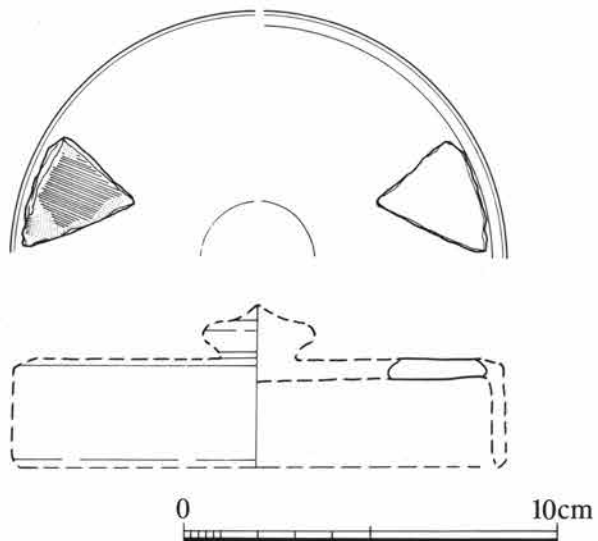
1区C-8のⅢ層より出土した奈良三彩陶は、小片ではあるが、伝神奈川県川崎市登戸出土や和歌山県高野口町一里山古墓出土の大形短頸壺に伴う宝珠形鈕をもつ蓋がみられるが、本遺跡出土の奈良三彩陶は、その蓋の肩部付近の破片である。口径は推定で12.5cm前後、器高は4cm～5cm程になると思われる。器厚は残存している部分で5mm～7mmを測る。

素地は、軟質で卵殻色を呈し、若干の砂粒を含んだ胎土である。表面の釉薬は、緑釉・褐釉の二釉しかみられないが、裏面に白釉が施釉されている点や二釉陶は白釉・緑釉からなっている点から本来は白釉・緑釉・褐釉の三釉を千鳥文に配してあったものと推定される。また釉調は、風化・剝落・褪色現象はまったくみられず、鮮明な色調を残している。緑釉部分には濃淡がみられる。裏面はうすく緑色かかった白釉が全面的に施釉されていたと推定される。

大形短頸壺および、それに伴う蓋の出土例は全国でもわずかに7例(注1)しか知られていない。それぞれの出土状況等を見ると千葉県鴨川市江見町嶺岡の東牧上遺跡の墳墓より蓋(注1)、伝神奈川県川崎市登戸からは蓋・壺が出土しているが、詳細は不明であるが、発見当时には火葬骨が納められていたと伝えられ、高台裏に朱がついている点からも骨蔵器(注2)と推定されている。大阪府茨木市安威大職冠山の一墳墓から、石櫃に納められて蓋・壺がセットで出土している。和歌山県伊都高山口町一里山古墓からは滑石製の石櫃に納められ、中に火葬骨が入っている蓋・壺(注2)が出土している。伝大分県大分市植田からは詳細は不明(注1)ではあるが、壺片が出土している。

各遺跡から出土している大形短頸壺は、ほとんどが骨蔵器として使われている。また正倉院には三彩大形短頸壺はみられないが、同型の須恵器がみられ、「芒消壺」・「戎塩壺」・「冶葛壺」・「葉壺」と使用(注3)されている。

群馬県内における奈良三彩陶器の出土は、上野国府周辺の前橋町上野国分寺跡より蓋片(注4)、前橋市山王廃寺跡(注5)、中島遺跡(注6)、清里南部遺跡群F区(注7)小片。利根川東岸では前橋市桧峯遺跡(注8)より小形短頸壺(完器)、境町十三宝塚遺跡(注9)より、火舎獸脚部・体

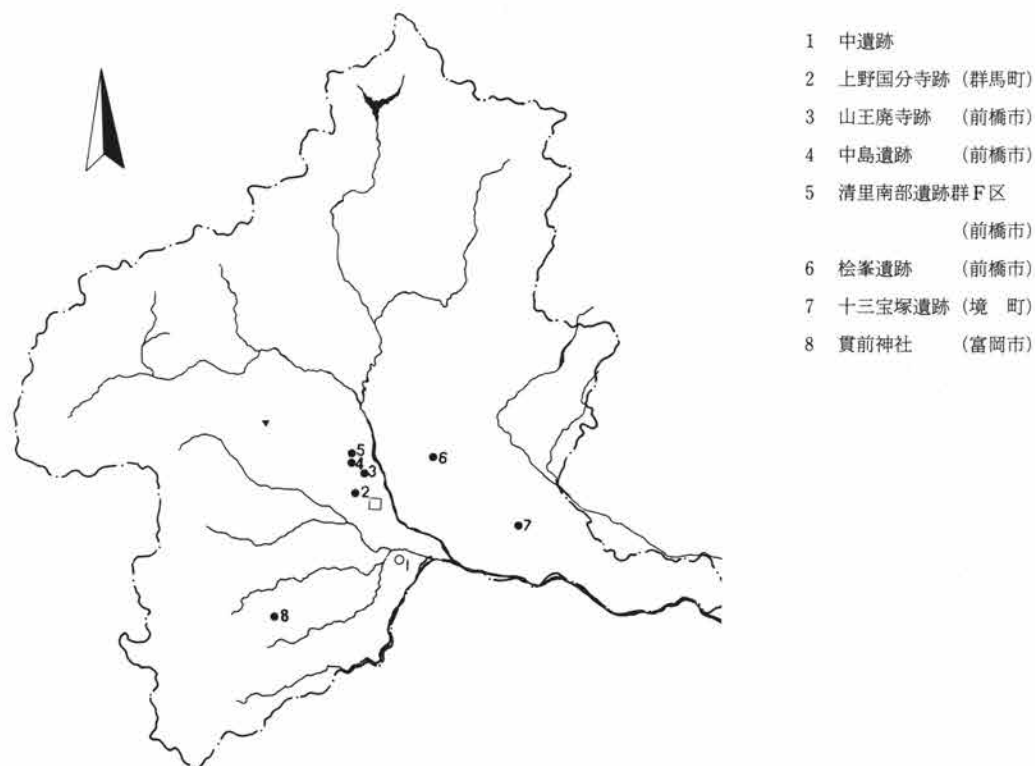


第138図 奈良三彩陶 (1/2)

部・鉢・小壺・埴の出土がみられる。この他に伝来ではあるが、富岡市貫前神社に小形短頸壺がある。各遺跡の性格をみると上野国分寺・山王廃寺跡が寺院跡、十三宝塚遺跡が郡衙と考えられる。中島遺跡・清里南部遺跡群F区は、東側に位置する下東西遺跡（注10）より官衙の遺跡の一群と考えられる。桧峯遺跡は集落址である。

奈良三彩の出土地をみると桧峯遺跡など集落址からも数例の出土例がみられるが、大部分は、官衙・寺院跡・墳墓などに限られており、本遺跡も奈良三彩を入手可能な背景なり勢力のあったことがうかがわれる。

- (1) 五島美術館編「日本の三彩と緑彩」1974年
- (2) 座右宝刊会編集「世界陶磁全集2」「日本古代」小学館 1979年
- (3) 正倉院事務局編「正倉陶器」日本経済出版社 1971年
- (4) 群馬県教育委員会「史跡上野国分寺跡発掘調査概要3」1982年
- (5) 前橋市教育委員会「山王廃寺跡第6次発掘調査報告書」1980年
- (6) 同 上 「中島遺跡発掘調査概報」1980年
- (7) 同 上 「富田遺跡群 西大室遺跡群 清里南部遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報」1980年
- (8) 中澤充裕「群馬県前橋市桧峯遺跡出土の奈良三彩小壺」考古学雑誌68-4 1983年
- (9) 群馬県教育委員会「十三宝塚遺跡発掘調査概報III」1977年
- (10) 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「下東西遺跡見学会資料」1984年



第139図 群馬県内の奈良三彩陶の出土遺跡

2 総 括

- (1) 中Ⅰ遺跡は中Ⅱ遺跡および森遺跡とともに、遺跡地西南を貫流する温井川（旧鐮川河川か）の形成した沖積地に位置する。基本土層で図示したように、何回かの河川の大規模な氾濫により形成された地形である。温井遺跡の報告書でも3回の河川の氾濫が確認されている。本遺跡でも同様な地層が確認される。
- (2) 藤岡市は本郷埴輪窯址が存在する。これは材料の粘土が周辺地域から供給できたことによるものである。同市は瓦の生産地として現在でもその地位を維持している。このため、粘土の採掘が盛んで、逆に遺跡を破壊する原因ともなっている。採掘中の断面に焼土や炭化物、あるいは遺物出土の観察ができ広範囲にわたる遺構や遺物が分布している。この地域は大字名を「小野」と呼称され、この地名は延喜式に「小野郷」として記載されている。従って、文献上からも奈良～平安時代にかけて一大集落が存在していたことは想像できる。
- (3) 本遺跡において下層に国分期後半の住居址、上層に浅間火山噴出物－B軽石－堆積以後の掘立柱遺構群が確認できた。
- (4) 掘立柱遺構群について
- イ 間数 掘立柱遺構の組合せが想定できたのは14棟であった。基本的な構造は2間×2間・総柱である。ただ第1号は基本構造に、北側に庇が加えられる。また第8号は一間が付け足され、北側に庇が考えられる。

ロ 方位

第28表 掘立柱遺構方位分類表

方 位	掘立柱遺構番号	方 位	掘立柱遺構番号
N-12°-E	10号	N-13°-E	11号
N-14°-E	6号、3号	N-15°-E	4号、12号
N-16°-E	14号	N-20°-E	1号、15号、5号 8号
N-22°-E	2号	N-23°-E	7号、9号

大別すると、第3・4・6・10・11・12・14号の一群と、第1・2・5・7・8・9・15号の一群がある。前者の一群は北方向に軸が寄るもので、後者は前者の群よりも東寄りに軸をもつものである。この方位の違いは時期差として捉えていいのか、それを判断する資料はない。調査区西側の一群が北方向の軸をもち、東側の一群が東方向の軸をもつ傾向にある。

ハ さて、これらの一群の掘立柱遺構群が住居であるのか、倉庫であるのか不明である。2間×

2間・総柱の遺構は、群馬県内および全国的にも他の遺構と混在した状況で調査され報告されている。本遺跡のように単一集中的に調査された例の報告は、管見の限り見ていない。この掘立柱遺構群は浅間火山噴出物—B軽石—よりも上位にあり、これと同時期に対比できる遺構の調査は不明確で、この遺構の性格も判断できない。

(5) 掘立柱遺構群と第1号溝について

掘立柱遺構群の位置する地層と、第1号溝を境としてその南側の地層に違いがみられた。発掘調査時点では認識がなかったが、その後藤岡市教育委員会で実施した温井川の河川改修工事に伴う発掘調査で、B軽石層下の水田址の存在が確認された。すなわち、本遺構群は第1号溝から南側には存在せず、この溝と掘立柱遺構と水田址が有機的関係を持つと考えられる。本溝（第3号・4号溝を含む）は南側の水田に用水を供給した水路であろう。調査時にB軽石の追及をしなかったのは残念である。

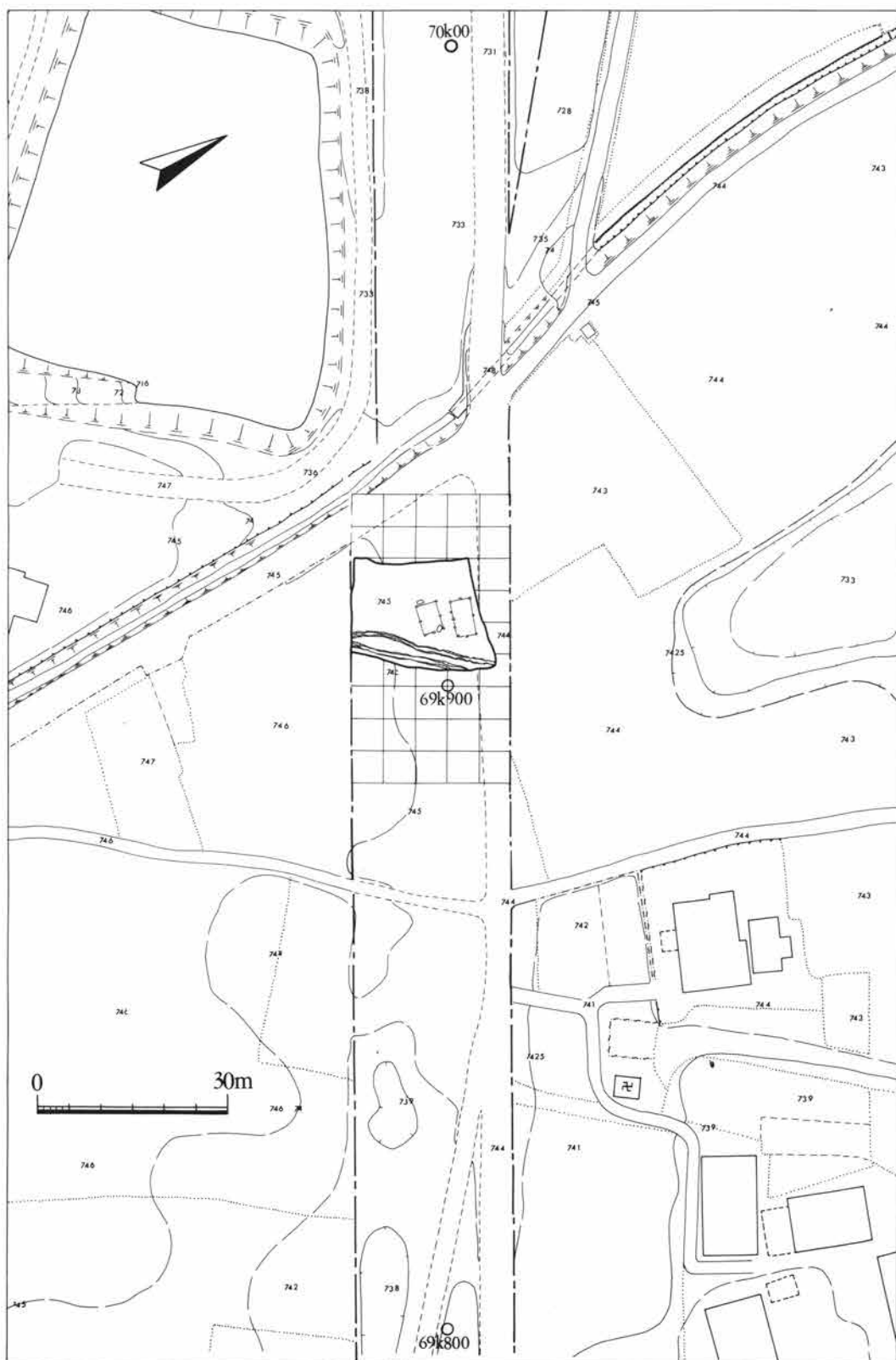
(6) 溝遺構と土壇について

第25号土壇と第26号土壇は、第3号溝及び第4号溝がそれぞれ第1号溝に流れ込む位置にある。第3号・4号溝は小範囲の調査であるが、土壇を介して第1号溝に接続している状況がみられる。第25号土壇と第26号土壇は遺構の状況に大きな違いが認められるが、ともに交点に位置しており、単純な偶然の結果ではないかもしれない。

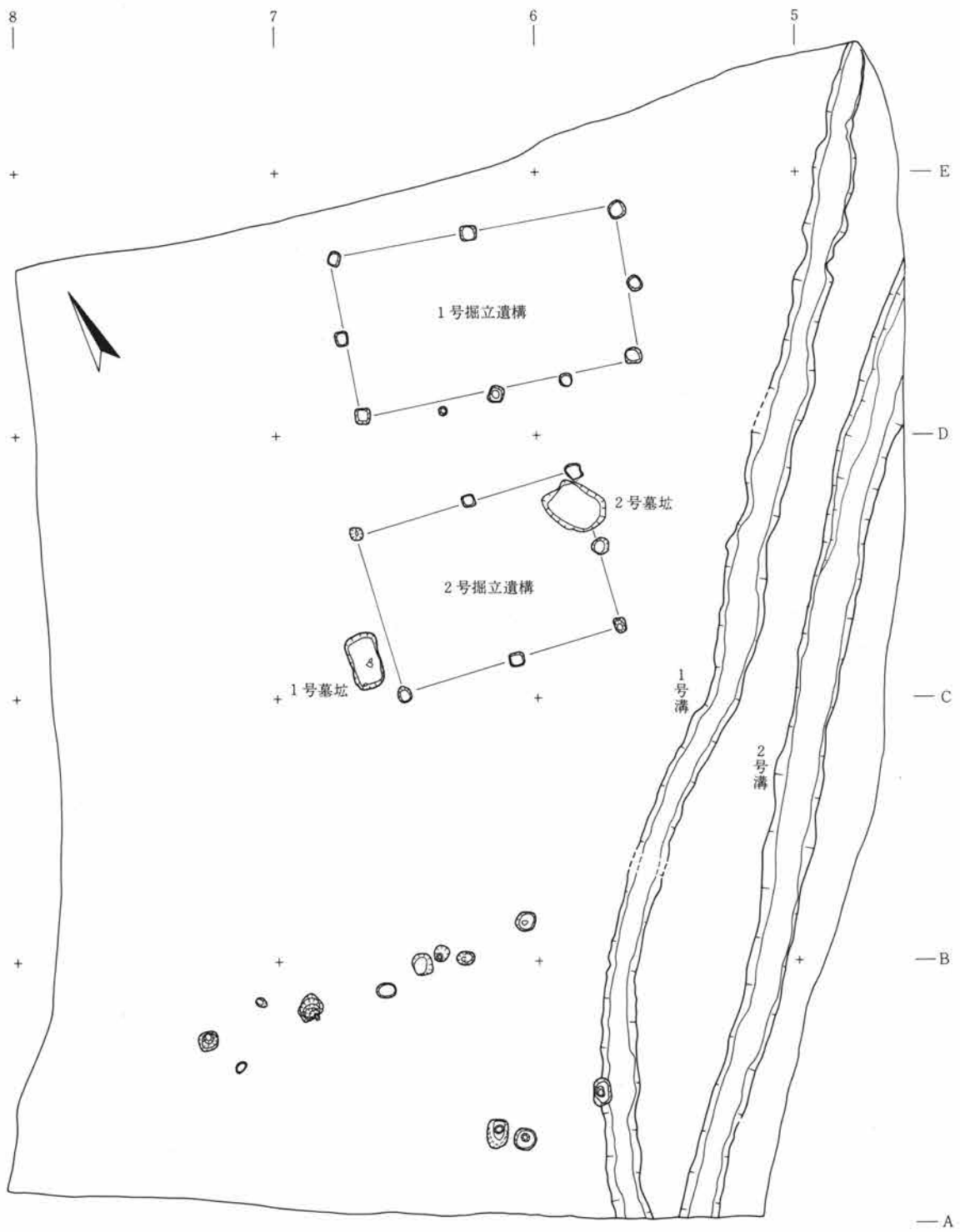
(7) 森遺跡は鬼高期を含む遺跡で温井遺跡と類似する。本遺跡は国分期から、より新しい時期が含まれる。沖積地という安定しない地形上に、人間の営みが展開されているということは、歴史的にも貴重なものであろう。なおかつ、B軽石堆積以後の遺跡は前述のように明確な確認はなされていない。この遺跡群のもつ特徴を今後の調査に生かしていただければ幸いである。

(8) 掘立柱遺構群の下層の4軒の住居址は、重複することなく位置している。しかし、4軒のみでは規則的な位置関係は求められない。ここでは、ある程度の規則性のもとに位置しているのではないかと推定する。このような住居址の位置関係は報告書に記載されているが、全体的な構造を捉える調査がなされていないのが現状であり、本遺跡も同様である。

V 中 II 遺 跡



第140図 中II遺跡グリッド設定図 (1/120)



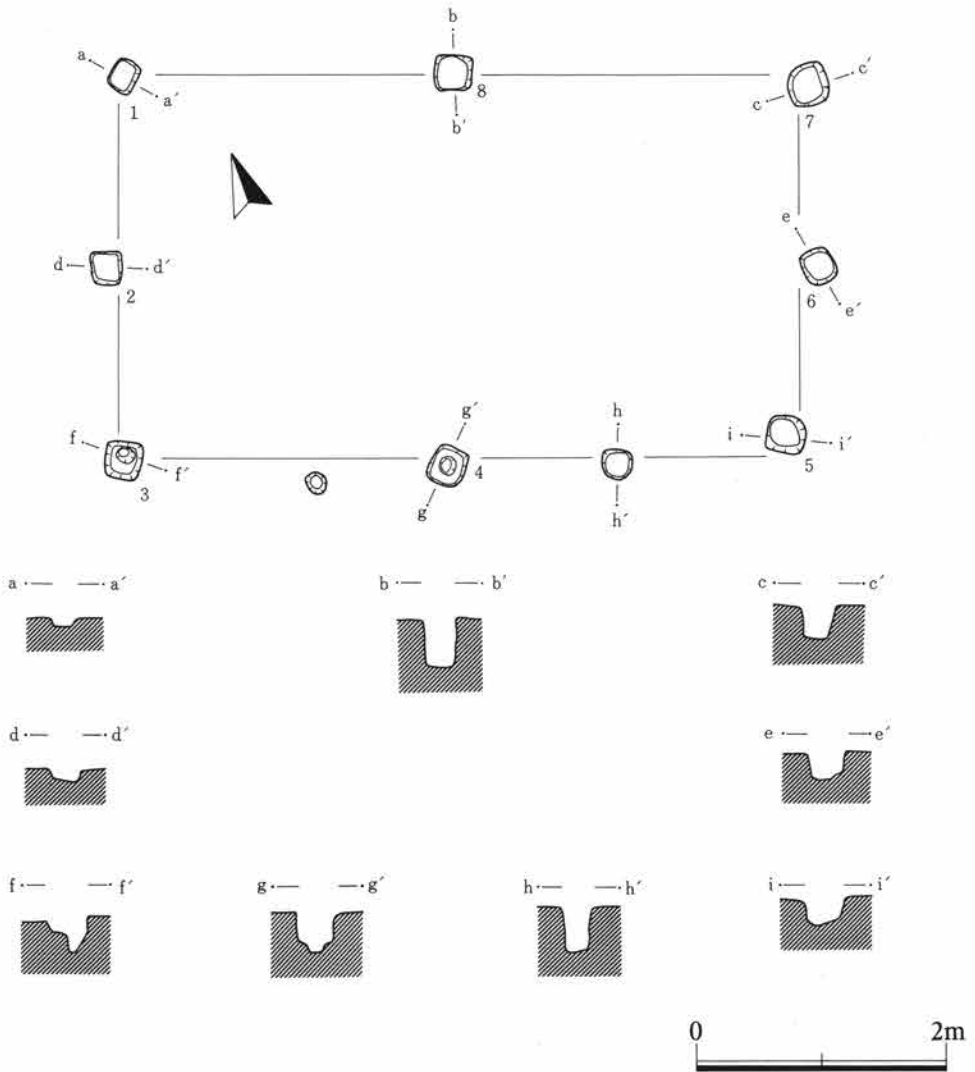
第141図 7区遺構配置図 (1/120)

V 中 II 遺跡

調査の方法と経過については、中 I 遺跡を参照。

遺構と遺物

本遺跡で調査した遺構は、上層の掘立柱遺構 2 棟、墓址 2 基、溝 2 条、柱列 1 カ所、下層の 1 条の溝である。

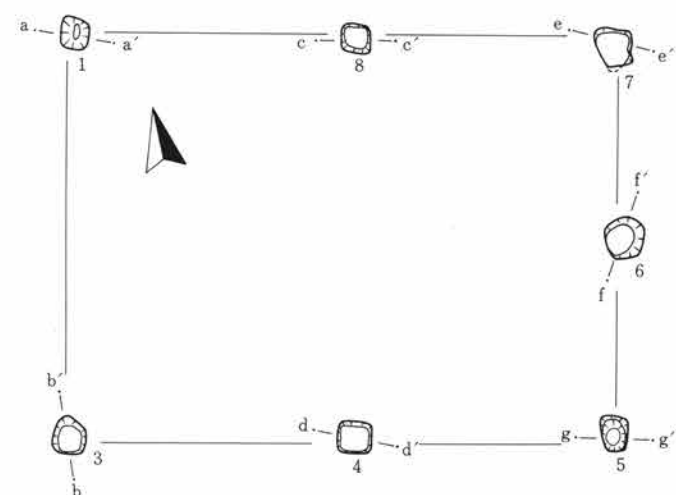


第142図 第1号掘立柱遺構 (1/60)

1 掘立柱遺構

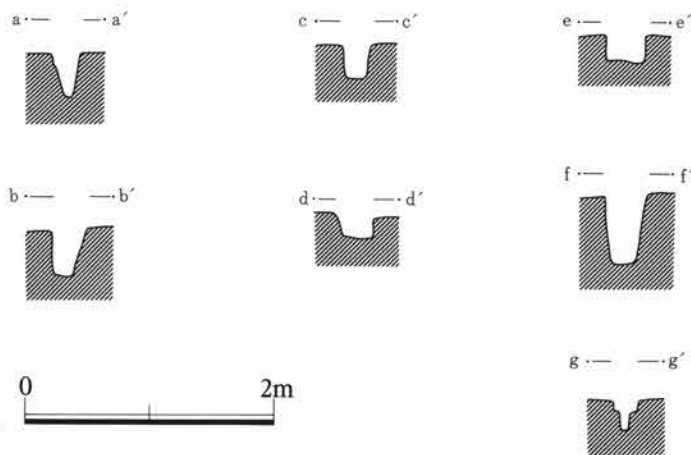
(1) 第1号掘立柱遺構 (第142図)

- a 方位 N-18°-E
 b 間数 2間×2間
 c 規模 東西5.70m×南北2.95m
 d 平面形 東西に長軸をもつ長方形
 e 柱間 ①—② 1.50m ②—③ 1.45m ③—④ 2.67m ④—⑤ 2.82m
 ⑤—⑥ 1.36m ⑥—⑦ 1.40m ⑦—⑧ 2.93m ⑧—① 2.74m
 f 柱穴は、ほぼ方形状を呈し、No.3・No.4は2段掘りである。幅は20cm~28cm、深さ17cm~52cmである。



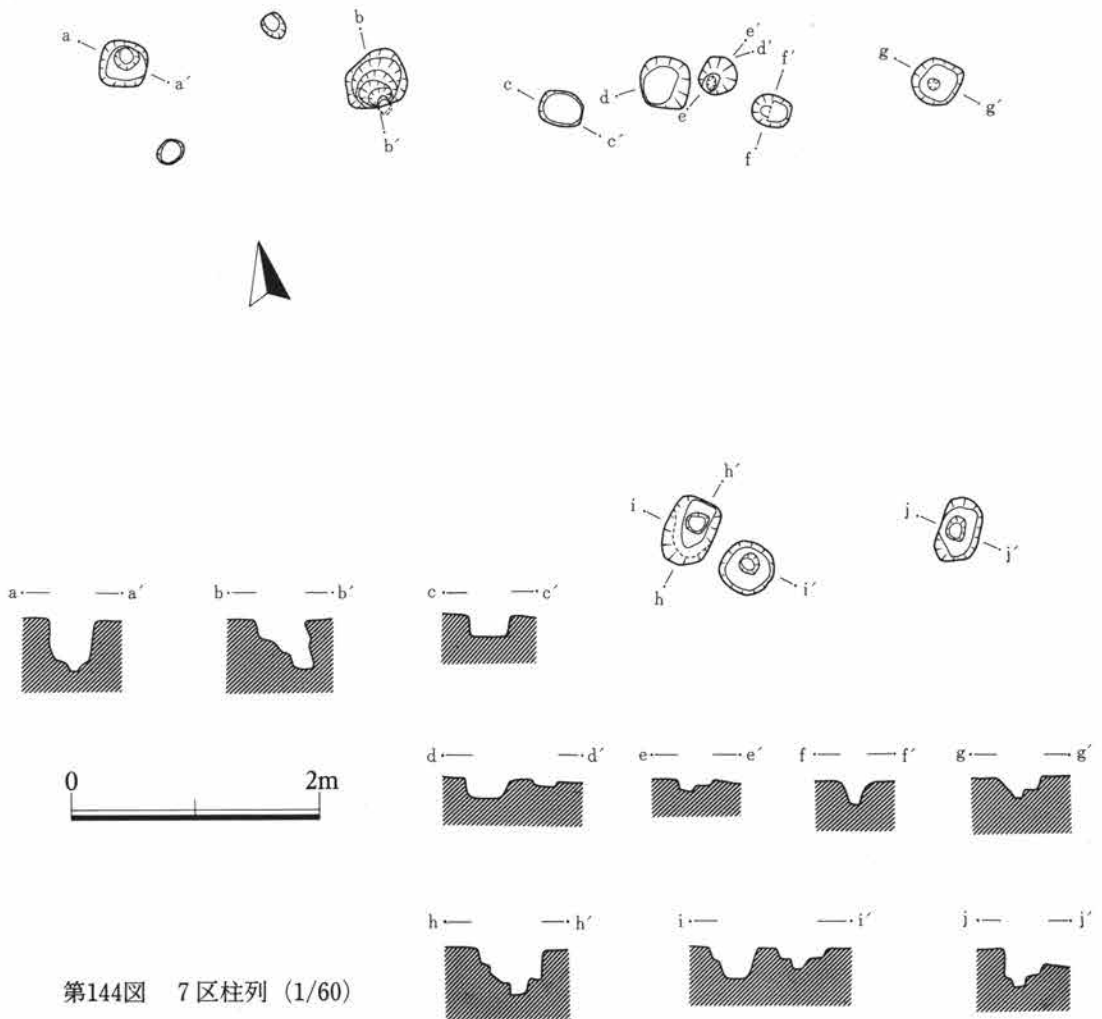
(2) 第2号掘立柱遺構 (第143図)

- a 方位 N-13°-E
 b 間数 2間×2間
 c 規模 東西4.43m×南北3.34m
 d 平面形 長軸を東西にもつ長方形
 e 柱間 ①—③ 3.34m
 ③—④ 2.38m
 ④—⑤ 2.22m
 ⑤—⑥ 1.58m
 ⑥—⑦ 1.58m
 ⑦—⑧ 2.13m
 ⑧—① 2.30m



- f 第1号掘立の南側に、並列する位置にあり、規模は小さい。若干方位がずれている。西辺の中央柱穴が欠ける。柱穴平面形は方形で、20cm~32cm、深さ18cm~54cmと不揃いである。

第143図 第2号掘立柱遺構 (1/60)

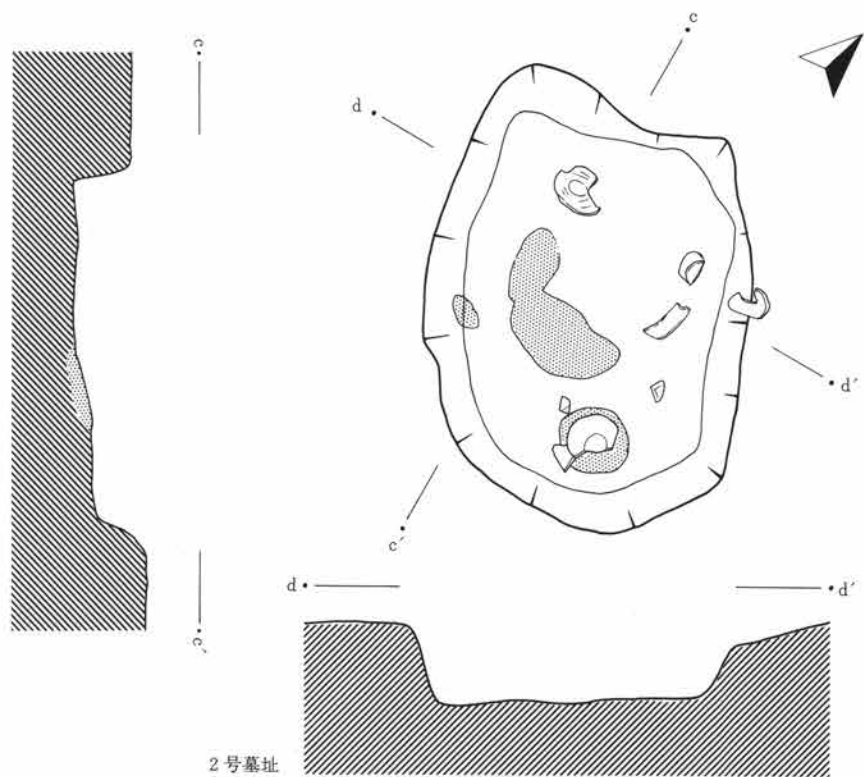
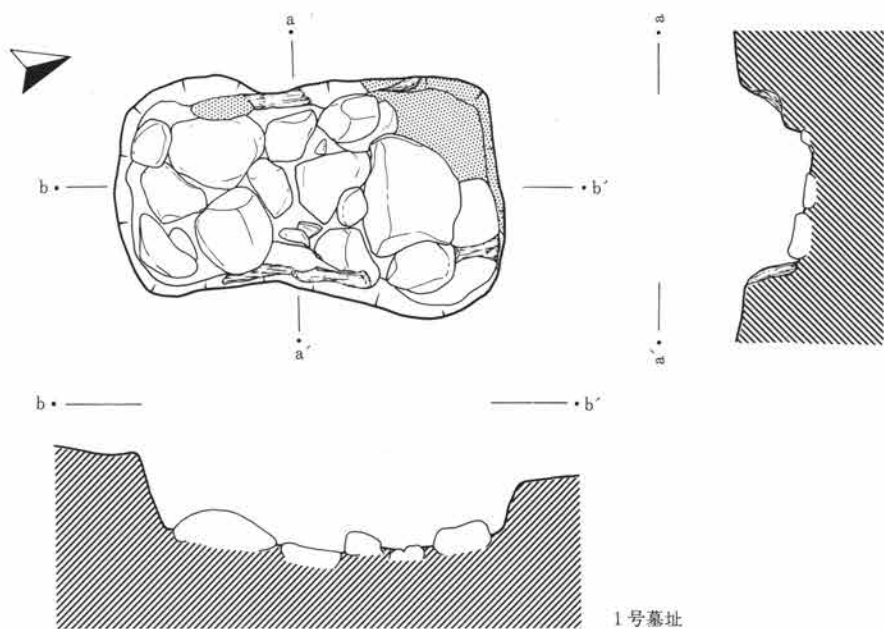


第144図 7区柱列 (1/60)

2 墓 址

(1) 第1号墓址 (第145図、図版69)

本墓址は火葬墓である。規模は長軸103cm×短軸53cm、長軸は北方向である。石敷面は凹凸があるが、最深22cmである。平面形は若干中央部付近がくびれる形状で、全体的には隅丸方形を呈する。石敷上に人骨・炭化物が存在した。東壁と西壁下中央に木炭が検出された。人骨は小片で散乱した状態であった。北西コーナーの石敷の欠ける部分は特に炭化物・焼土が厚く堆積していた。出土遺物はない。



第145图 第1・2号墓址 (1/20)



(2) 第2号墓址(第145~146図、図版70~71)

本墓址にも炭化物が確認された。規模は長軸110cm×短軸88cmで、長軸は北西方向を向く。深さ20cmほどで、平面形は隅丸長方形状であるが、北側辺が乱れる。

出土遺物は高台付埴4個である。

3 溝

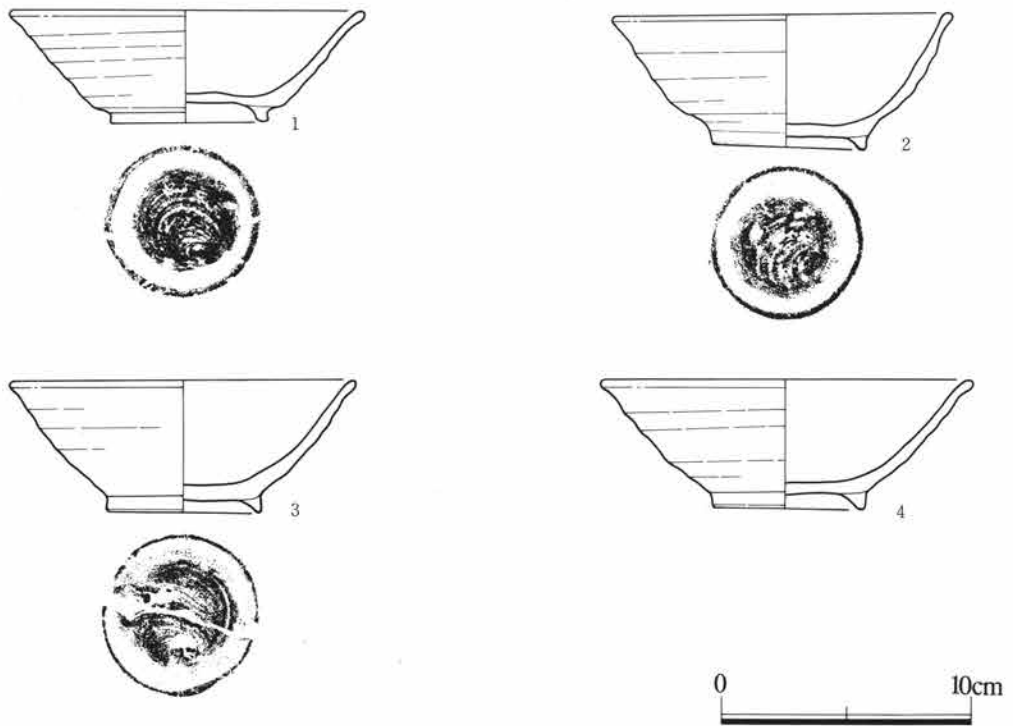
(1) 第1号溝(第147図)

本溝は第2号溝の西側に並列する位置にある。従って走向も同じである。規模は上幅平均96cm、底幅平均70cm、深さ平均30cmで、一部蛇行している。第2号溝より残存状況は良いが、底の形状は一定していない。

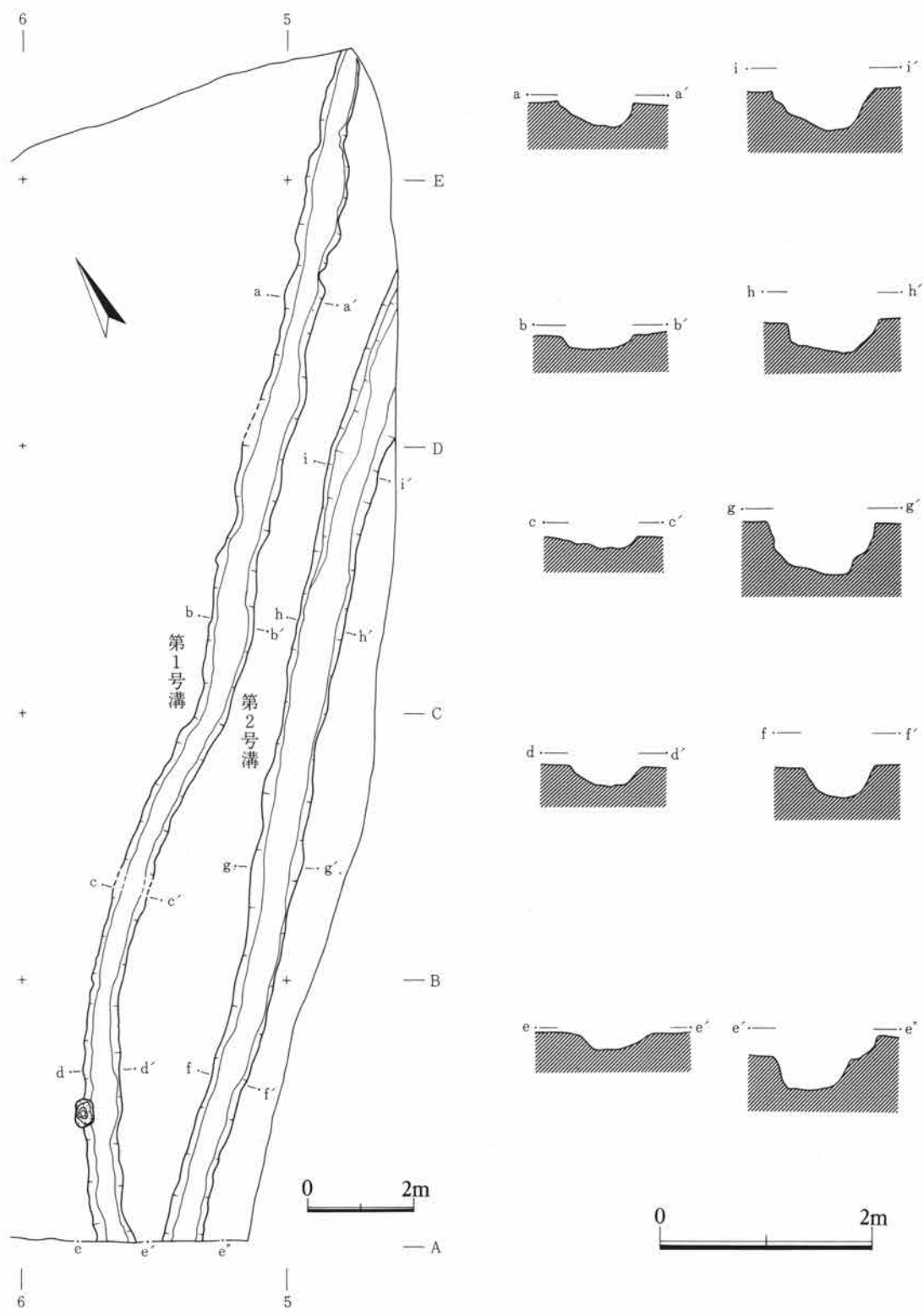
(2) 第2号溝(第147~148図)

本溝は調査区東側に位置し北東から南西方向に走る。上幅平均72cm、底幅平均42cm、深さ平均20cmの規模である。

出土遺物は第148図の土師器埴がある。



第146図 第2号墓址出土遺物(1/3)

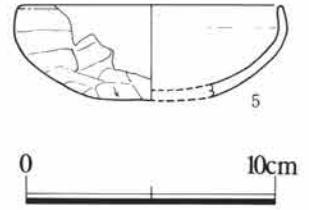


第147图 第1·2号溝 (1/120 · 1/60)

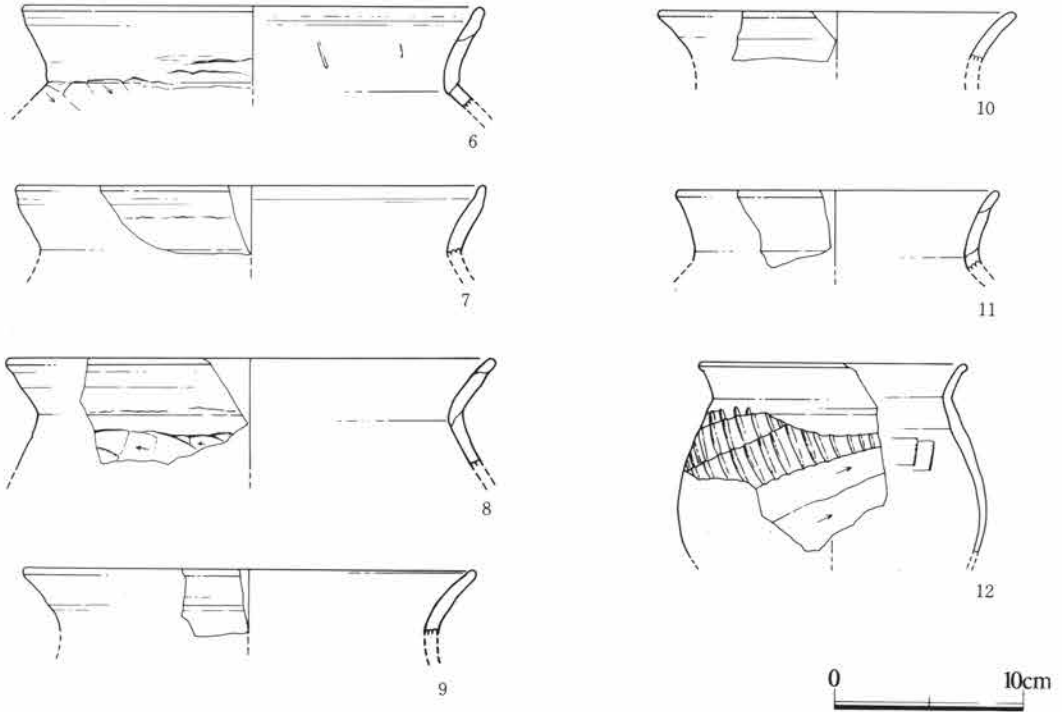
(3) 第3号溝 (第149~159図、図版67・68、71~74)

本溝は前述の遺構の下層から確認されたものである。南西方向から北東方向に向って、幅を広げる。南西部は幅96cm、北東端は350cmである。深さは一定しない。また、幅も一定せず掘り方もまちまちである。人工的な溝としての確証は困難である。覆土は砂質で、土層断面でみると乱雑な堆積である。

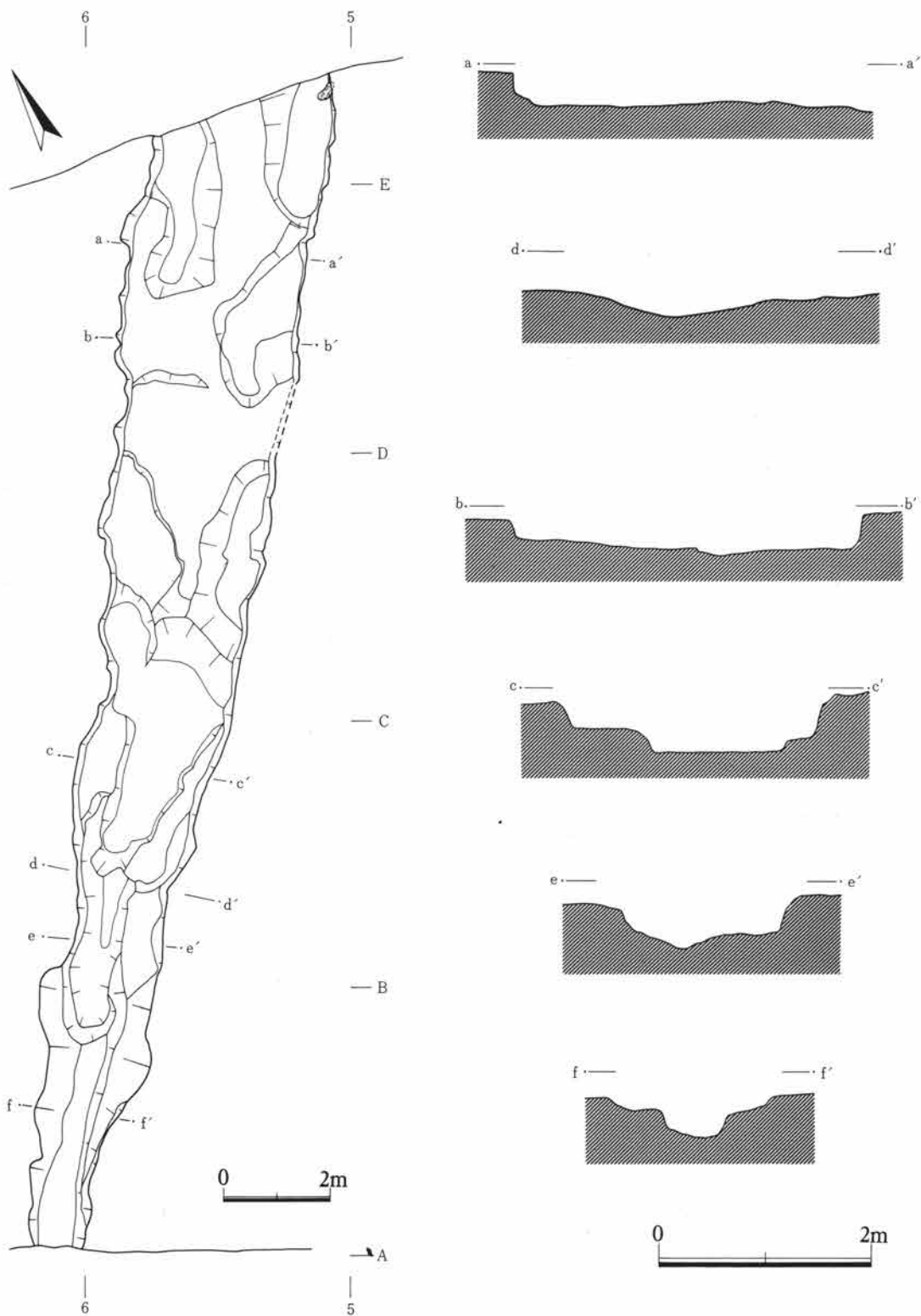
出土遺物は多量で、上層・下層に分けて取り上げたが、層の乱れから一括で処理した。図に載せた遺物は実測に耐えるものと、同種・同型からセレクトしたものである。



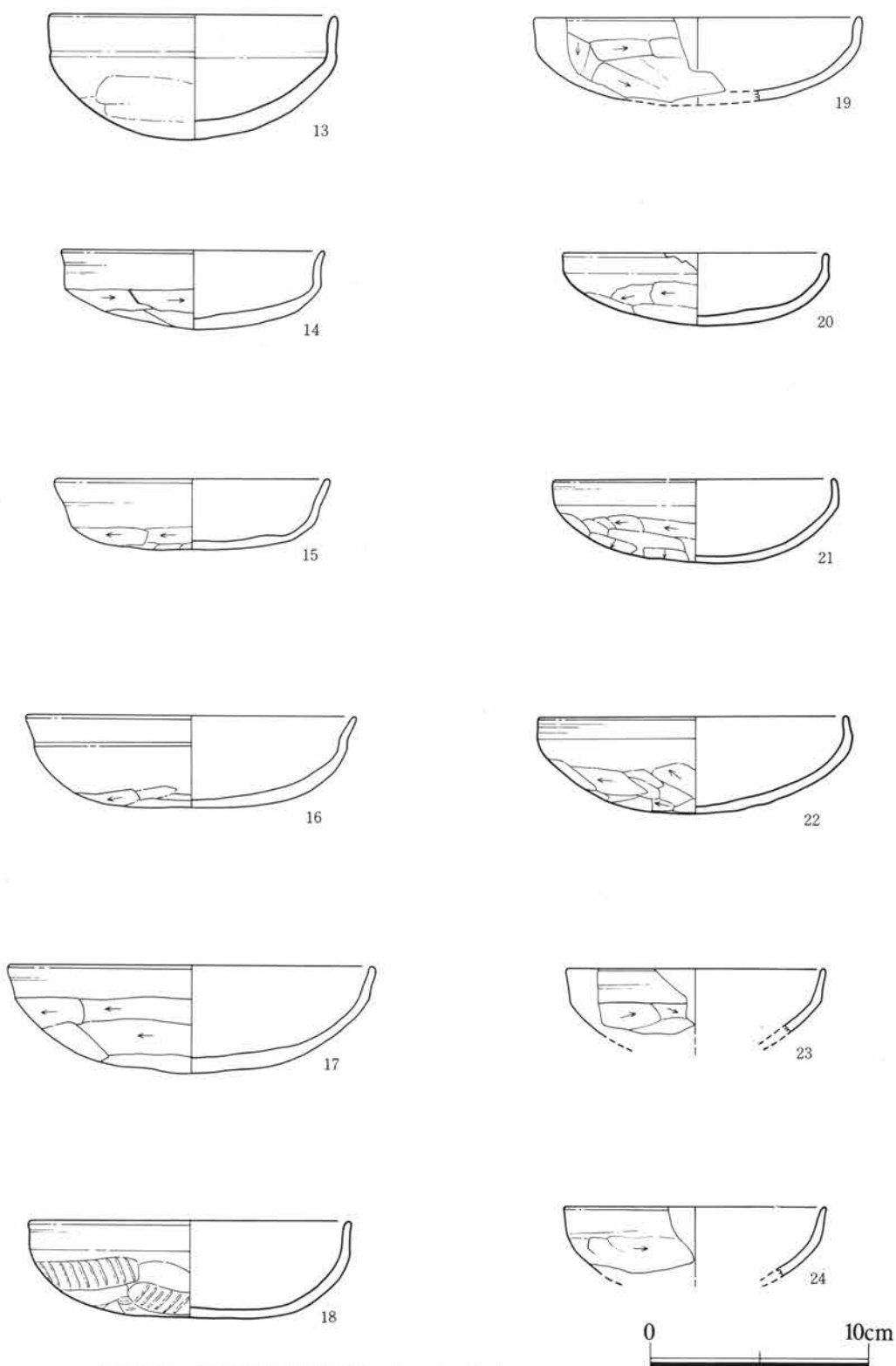
第148図 第2号溝出土遺物 (1/3)



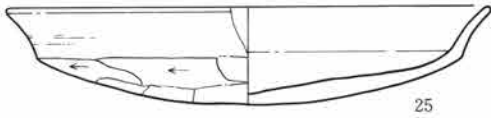
第150図 第3号溝出土遺物・その1 (1/4)



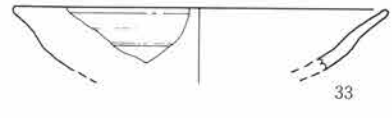
第149图 第3号沟 (1/120 · 1/60)



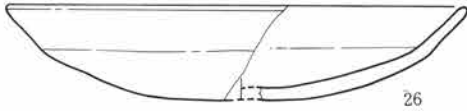
第151図 第3号溝出土遺物・その2 (1/3)



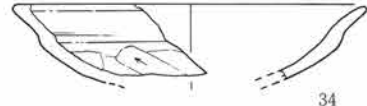
25



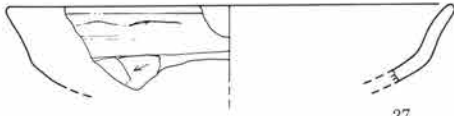
33



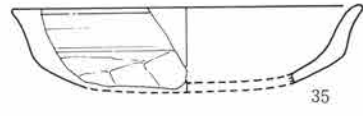
26



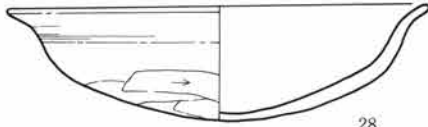
34



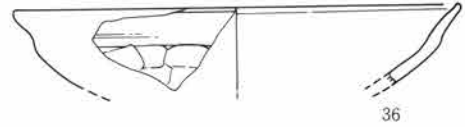
27



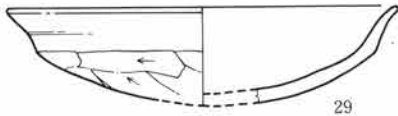
35



28



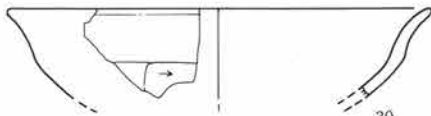
36



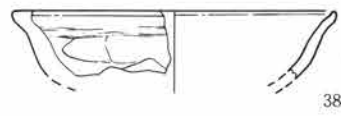
29



37



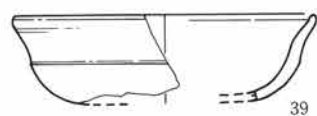
30



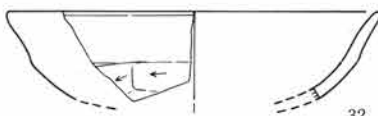
38



31



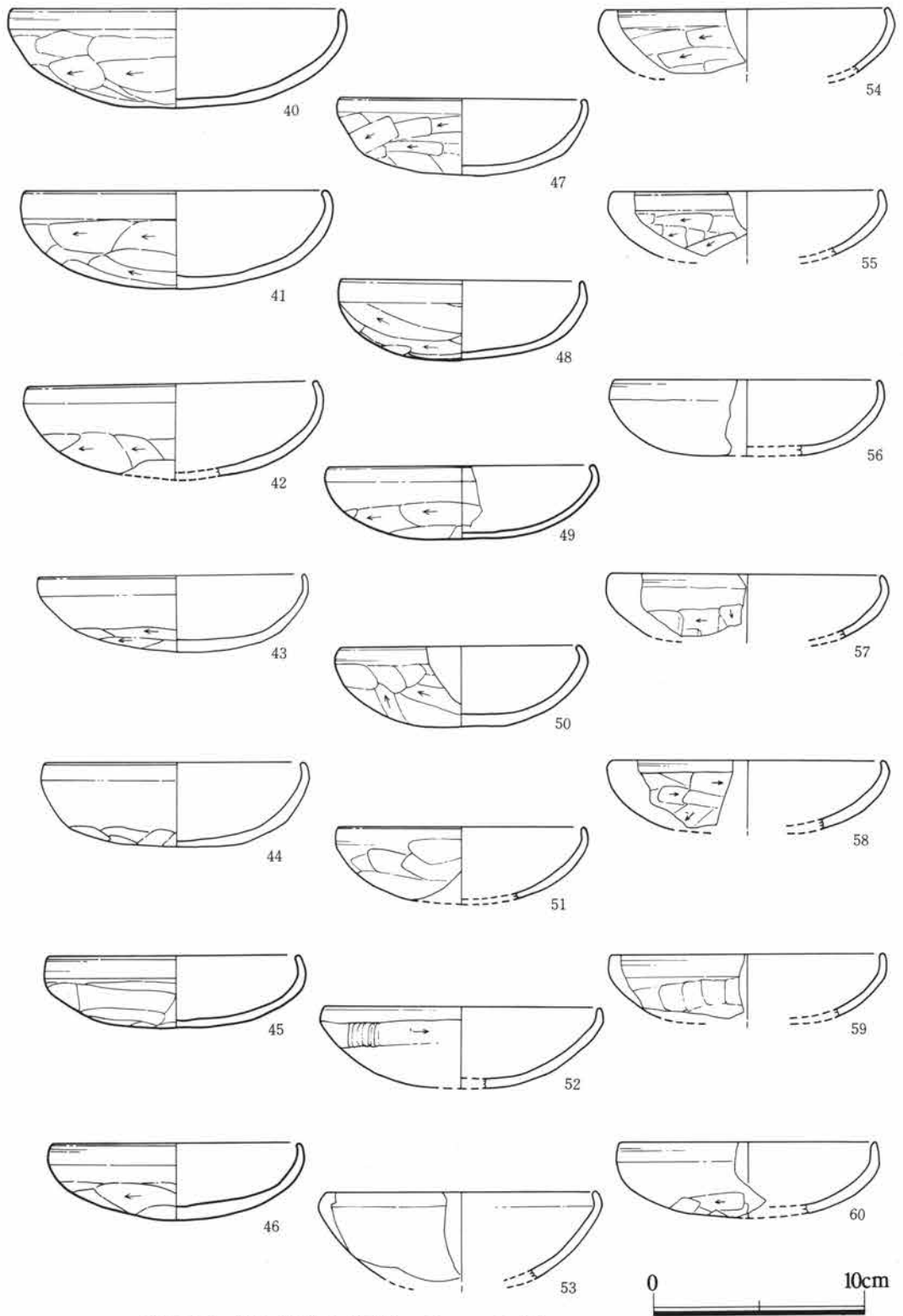
39



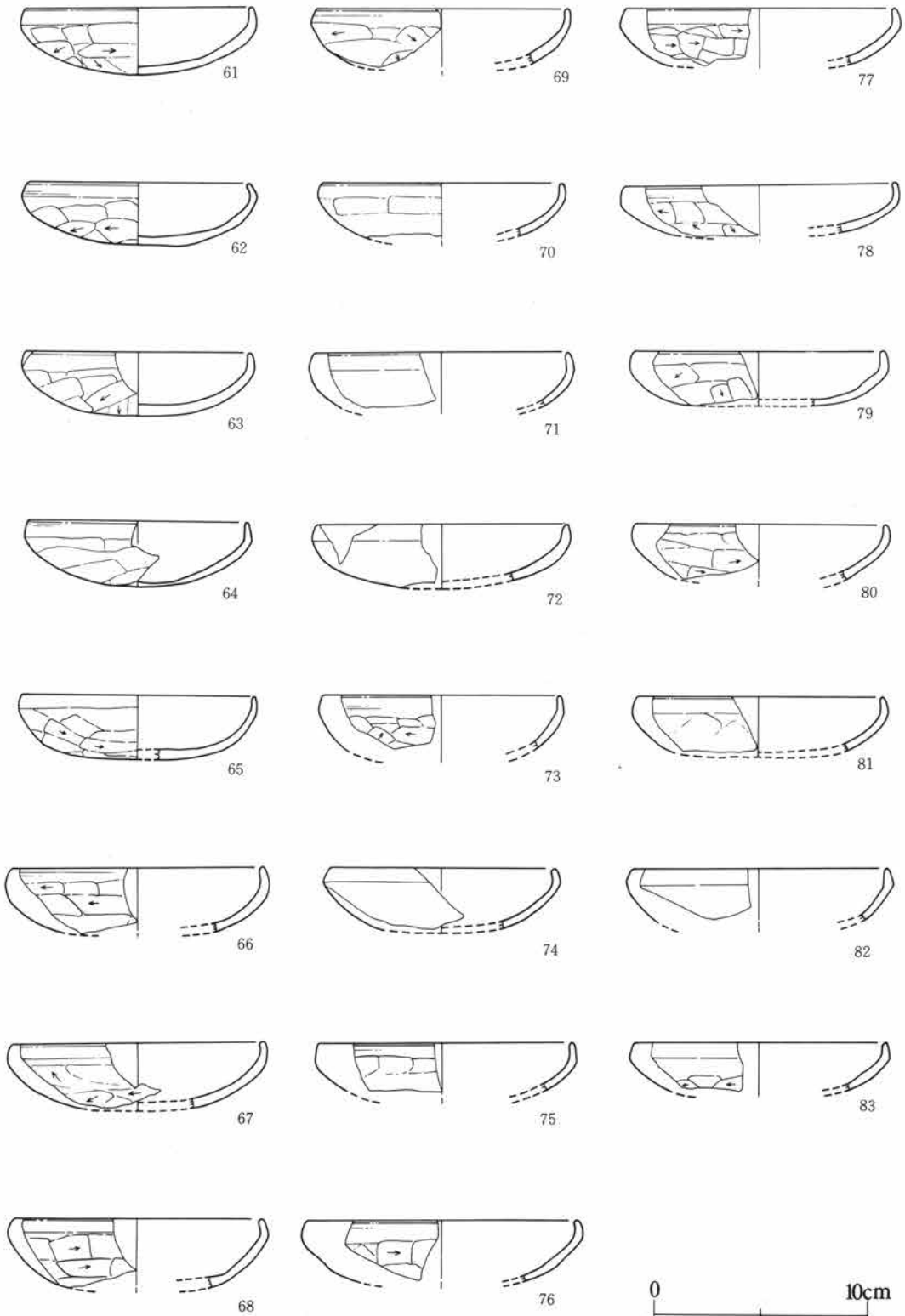
32



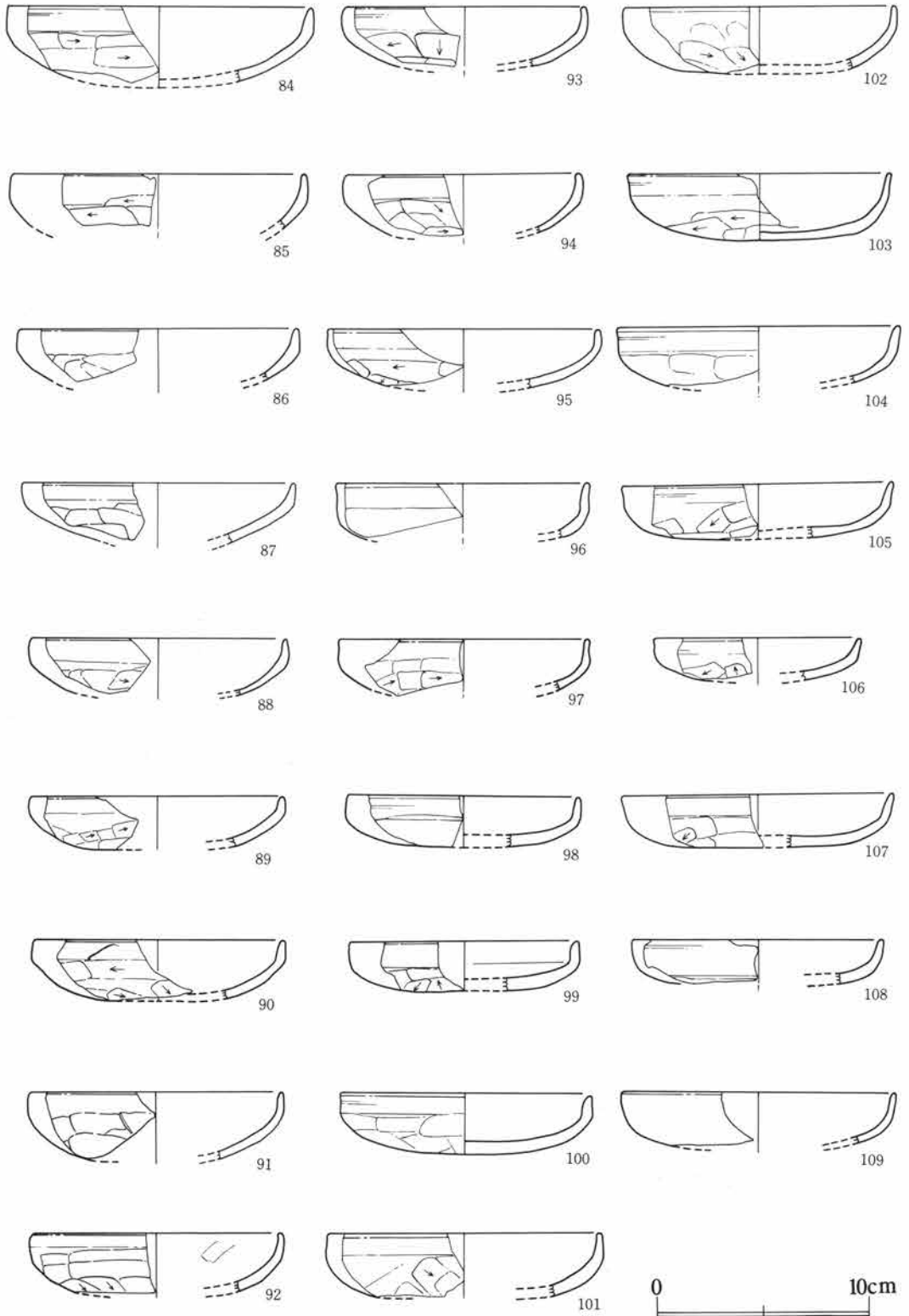
第152図 第3号溝出土遺物・その3 (1/3)



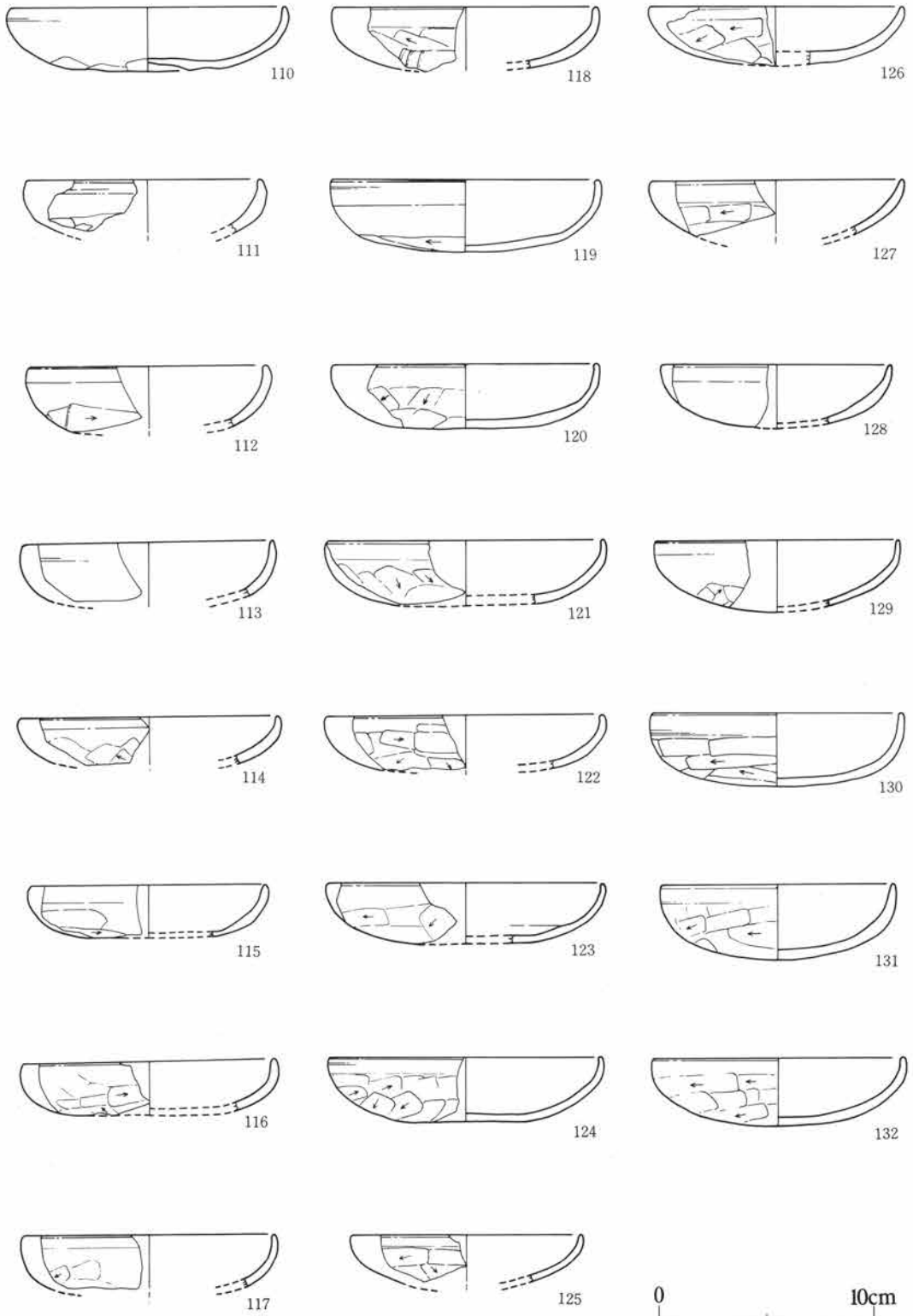
第153図 第3号溝出土遺物・その4 (1/3)



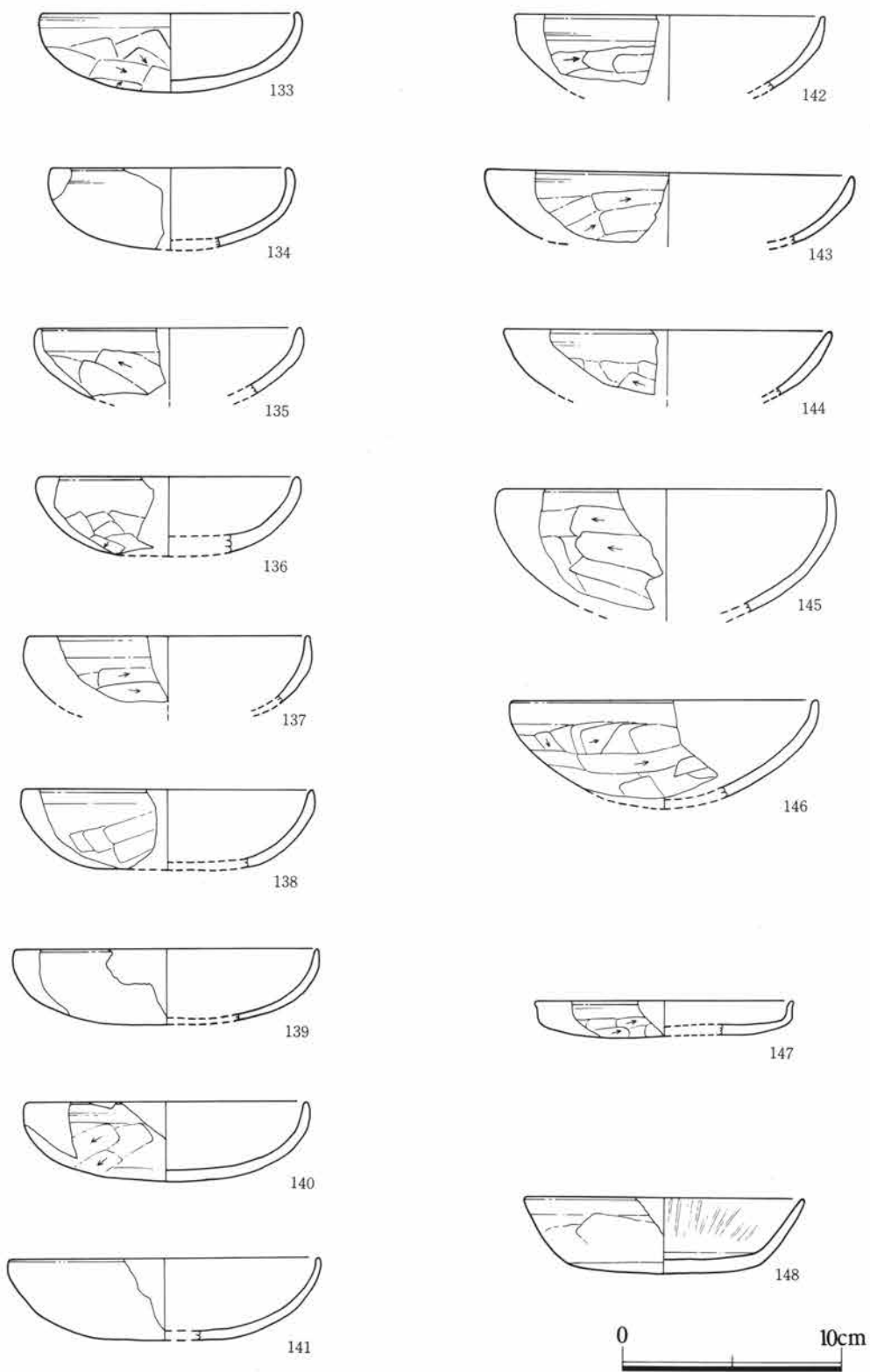
第154図 第3号溝出土遺物・その5 (1/3)



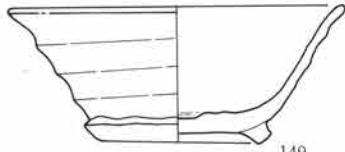
第155図 第3号溝出土遺物・その6 (1/3)



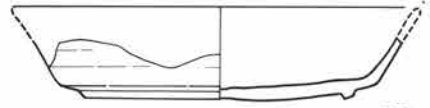
第156図 第3号溝出土遺物・その7 (1/3)



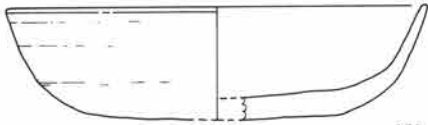
第157図 第3号溝出土遺物・その8 (1/3)



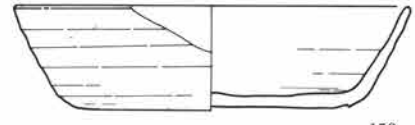
149



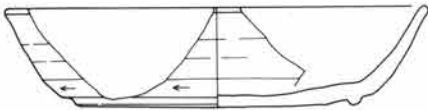
152



150



153



151



154



第158図 第3号溝出土遺物・その9 (1/3)

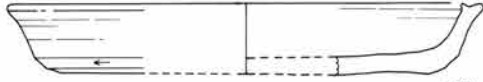




155



163



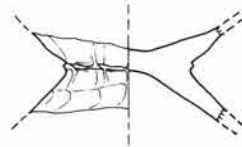
156



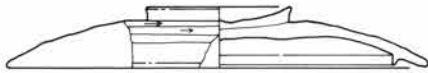
164



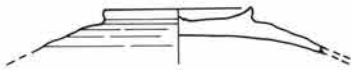
157



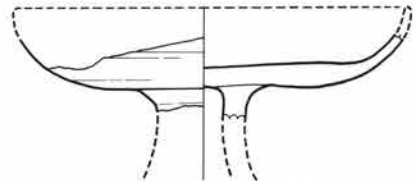
165



158



159



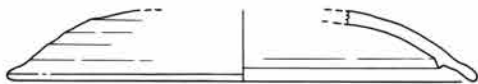
166



160



161



162



第159図 第3号溝出土遺物・その10 (1/3)

4 その他の遺物

(1) 各層出土遺物 (第160・161図)

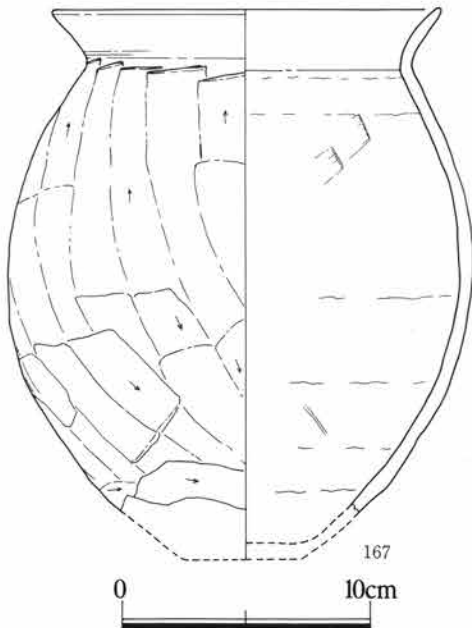
4区B-6グリッドから土師器甕が、5区Eトレンチから須恵器蓋及び瓶の小片が出土した。

(2) 1区出土縄文式土器 (第162図1~12、図版74)

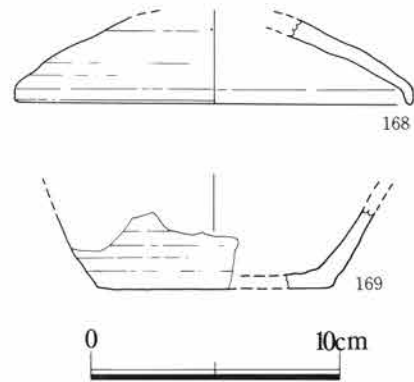
本遺物は礫層上面に密着する状況で出土した。すなわち第IX層の最上部である。藤岡市教育委員会が温井川の河川改修工事にともなう発掘調査で確認した状況と酷似する。この遺跡では縄文時代後・晩期の時期であった。

本調査区出土の土器片はすべて小片で、形態は不明である。底部が一片存在する。
出土した遺物は下記の通りである。

- 1 厚さ5mm。縄文はLR。これを地文として、三条の櫛状の工具で直線的に沈線を描く。その上部には二条の同様の工具で波状を描く。断面は軽くそり返る。胎土は砂粒を含有、外面は褐色、内面は黒色でヘラで丹念に面を整えている。
- 2 厚さ4mm。縄文は1と同様である。上面に二条の平行沈線が波状に描かれ、その頂部は鋭角的である。断面は若干そり返る。胎土は砂粒(石英が多い)を含有、内外面とも暗褐色である。

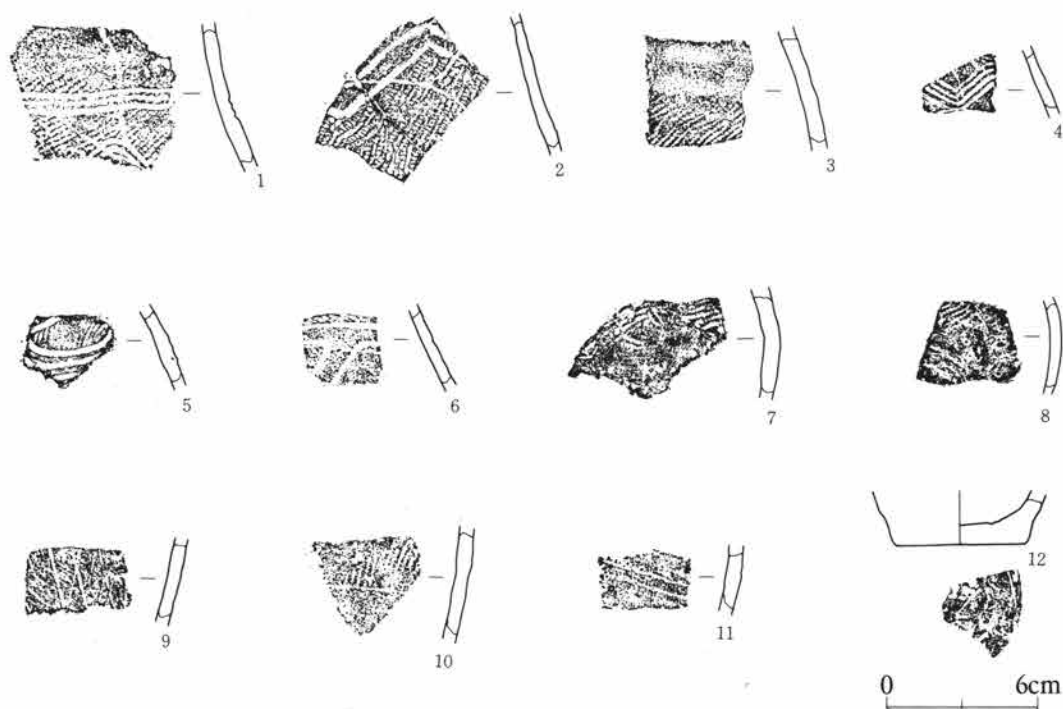


第160図 4区B-6グリッド出土遺物 (1/3)



第161図 5区トレンチ出土遺物 (1/3)

- 3 厚さ7mm。縄文はLRが破片下部にみられる。上部無文部とは若干の段がある。縄文部が高い。胎土は砂粒を含有する。外面は赤褐色、内面は暗褐色である。断面両端は接合部である。
- 4 厚さ4mm。縄文の施文はない。4条の櫛状工具で波状を描く。胎土に若干の砂粒を含む。内外面とも暗褐色。
- 5 厚さ5mm。縄文はRL。三条の平行する沈線を楕円形状(?)に描く。胎土は若干の砂粒を含む。外面は褐色、内面は明褐色。
- 6 厚さ4mm。上部端にわずかに縄文が確認できるが、走行は不明である。縄文部との境に一条の沈線が認められる。土器片中央部両端から中央に向かって一条の沈線が描かれ、12mmの幅をもって左下がりの沈線となる。胎土に砂粒を含む。外面の上部は黒褐色、下部は赤褐色、内面は暗褐色である。上端は接合部。
- 7 厚さ6mm。縄文はLR、土器片の上部に施文がある。施文下端線は凸状である。胎土に砂粒を含む。外面は黒褐色、内面は褐色。
- 8 厚さ5mm。縄文はLR、上半部に施文、下半部は無文。胎土に砂粒を多く含む。外面は褐色、内面は白っぽい褐色。
- 9 厚さ5mm。縄文はなく、土器片中部に幅10mmの浅い平行沈線が走る。器面に斜方向(右・左)の擦痕状の極く浅い沈線が認められる。平行沈線以前である。胎土に砂粒を含む。外面暗褐



第162図 1区出土縄文土器 (1/3)

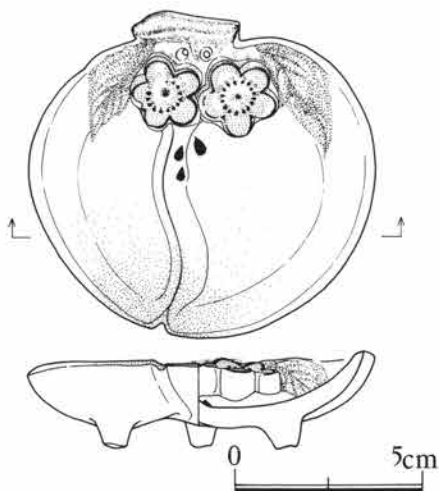
色、内面褐色。

- 10 厚さ4mm。表面が磨滅して不鮮明であるが、LRの縄文が認められる。中央部に横方向の細かい沈線が走り、それから下部は無文。砂粒（石英が多い）を含む。内外面とも赤褐色。
- 11 厚さ6mm。縄文は無い。右下がりの浅い平行沈線（幅6mm）が走る。胎土に多くの砂粒を含む。内外面とも褐色。断面下端は接合部。
- 12 底部である。厚さ6.5mm。器体は弓状に立ち上がる。小片で詳細は不明。内部黒褐色、外面暗褐色。

(3) 紅皿について

中II遺跡7区D-5グリッドから磁器小皿が出土している。

焼物種は露胎部純白の絵付磁器である。器形は平面形桃実形を呈し、その付根にあたる部分に小枝を表現した耳部があり、その付根に紐通しの小孔があげられ、底部に三足が付く。器種は小孔の存在から蓋付の器であり、華やかな絵付からみて化粧具である紅皿と考えられる。絵付は実先が柿色、花卉輪郭および蕊・蕾が小豆色、五弁の桃花が桃色、葉が深緑、その葉脈が黒色、枝が茶褐色、計6色の色絵付であり、すべて上絵付であるが脚端部を除くすべてに光沢のある透明釉が施されている。絵付の方法は、実先の柿色が霧吹掛、桃花輪郭および蕊が印判転写、桃花弁の桃色が印判によるほか筆書によっている。器の形造は小孔を先尖の工具で穿ち、貼付脚部のほか、工具の削り出しが残されていないことから型押しと考えられる。型押しによる造り出しは、見込部では花部全体が高く盛り上がり、蕾が浅く高まり、葉脈に多少の凹凸を置き陰影を生じ、枝が盛り上がり、全体に立体感が強調されている。裏面は桃割れ部と実尻部が凹んで造り出されている。



第163図 紅皿 (1/2)

製作年代は、上絵付による桃色、柿色の両者が安定した色彩に発色していることから、少なくとも18世紀以降であることが判り、さらに印判絵付を行っているため明治時代以降であり、しかも印判が転写である点から明治時代中期以降の所産が考えられる。施された印判転写は型押しによる印花部分からの喰出し、部分的に脱落が認められ、手慣れた量産の手法の域に到達しているとは思えないのである。このため製作年代は、印判転写法による絵付の初期、つまり明治時代中頃から後期の間と考えられる。

紅皿は、紅の色あいや濃淡を調整する際に、取り皿として用いた小皿や猪口（注1）をさして呼ば

れているが、本例の場合は、そうした代用物でなく、間仕切部をはさんで2つの海部があり、色調整の完成機能を有しており、それとともに明治時代中頃の家屋・調度のくすんだ褐色を基調とした一般庶民生活の中で6色もの色彩が放つ華やかさは、乙女心を魅了するに十分な容飾具であったにちがいない。

なお本稿を草するにあたり、資生堂総合美容研究所から助言をいただいた。記して謝意を表したい。

注1 久下司『化粧』（法政大学出版局）1970

5 ま と め

1 中Ⅱ遺跡は中Ⅰ遺跡で記述したように、同一地形上に位置し、地質的にも同一である。ただし、中Ⅰ遺跡は低地形上に多く位置するが、本遺跡は微高地上に占地する。中Ⅰ遺跡・中Ⅱ遺跡はかなりの隔たりがあるが、同一遺跡内に位置するものである。

2 掘立柱遺構について

2棟の掘立柱遺構は、中Ⅰ遺跡の第1号掘立(N-20°-E)を中心とするものと方位が同一である。ただし、中央柱穴を欠くことから、使用目的が違うものであろう。

3 第3号溝について

本溝のレベルは、西南端72.5m、北東端72.59mで流路は南の方向である。覆土は砂質で、この中に土器片が多量に出土した。本溝は人工的に掘られたと確信できる要素は少なく、自然的な流路としての可能性が大きい。それは溝の幅、底部の掘り方が一定していないという理由によるものである。土器片は接合できるものもあり、遠くから流されてきたものではなく、近くで捨てられたもの、あるいは故意に流されたものと推定する。本溝の土器は真間期に属するもので、その殆んどが坏の破片である。

4 第3号溝出土の土器について

本溝出土の土器片は約400点である。第150図1～12は土師器甕類である。「く」の字に立ち上がる口縁部をもつ。第151図13～24は、段を有する坏類である。13～18は明瞭な稜をもつが、19～24は明瞭ではない。これらの坏類は鬼高期の流れをもつものである。25～39は器体が外傾して立ち上がり、口縁部が外反する類である。稜は明瞭ではない。40～60は器体が丸味をもって立ち上がり、口縁部が内湾する類である。器高は高い。61～83は前類と同じ特徴を有するが、口径が若干小さくなり、器体も前類より低くなる。84～109は皿状に近い坏類で、口縁部が垂直になる。器高もさらに低くなる。110～132は前類と同様であるが、口縁部と体部は前類よりも不明瞭なものである。133～146は前述の類に入らないもので、145・146は碗状に近い坏である。147はいわゆる盤であり、148は底径が大きく、外傾しながら直線的に立ち上がるものである。これらの時期は、真間期後半に位置づけられるだろうか。

末筆ながら、奈良三彩陶器・紅皿については、神谷佳明・大江正行両氏に原稿執筆をお願いした。多忙のところ、心よく引きうけていただき御礼申し上げます。

第29表 中II遺跡出土遺物観察表

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	須恵器 有高台 埴	略完	口径 14.2 器高 4.5 底径 6.2	体部は直線的にのび、 口縁部は外反する。	右回転ロクロ成形。底部は回 転糸切り後、貼付高台。	砂粒を含む 良好 灰白 やや黄	墓一1 第2墓址出土
2	須恵器 有高台 埴	略完	口径 13.8 器高 5.2 底径 6.1	体部は丸味をもち、口 唇部がやや肥厚して外 反する。	右回転ロクロ成形。底部は回 転糸切り後、貼付高台。	砂粒を含む 良好 灰白色 内面黄	墓一2 第2墓址出土
3	須恵器 有高台 埴	略完	口径 13.9 器高 5.2 底径 6.2	体部は丸味をもち、口 縁部は軽く外反する。	右回転ロクロ成形。底部は回 転糸切り後、貼付高台。内面 にナデ有り。	砂粒を含む 良好 灰黄褐色	墓一3 第2墓址出土
4	須恵器 有高台 埴	略完	口径 14.9 器高 5.1 底径 6.3	体部は丸味をもち、口 縁部は軽く外反する。	右回転ロクロ成形。底部は回 転糸切り後、貼付高台。	砂粒を多量に含む 普通 酸化焰 にぶい黄橙色	墓一4 第2墓址出土
5	土師器 坏	1/3 残	口径 (10.5) 器高 (3.8)	体部と口縁部との境に 外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ。内底ナデ。 外底はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3 7区2溝出土
6	土師器 甕	体部以下欠	口径 (24.4)	くの字状に外反する口 縁。	ヨコナデ。頸部外面にヘラケ ズリ痕あり。内面にヘラの痕 あり。	砂粒を含む 良好 赤褐色	6-3、7D- 5、II層・III層 接合
7	土師器 甕	口縁部小片	口径 (25.0)	口唇部が薄くなる。	内外面ともヨコナデ。 内面にタール分付着。	砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7B- 5、II層
8	土師器 甕	口縁部小片	口径 (25.7)	くの字状に外反する口 縁。	内外面ヨコナデ。体部外面は 横方向のヘラケズリ。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、E-5、 II層
9	土師器 甕	口縁部小片	口径 (24.0)	緩く外反する口縁。	内外面ヨコナデ。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7C- 5、II層
10	土師器 甕	口縁部小片	口径 (19.0)	緩く外反する口縁。	内外面ヨコナデ。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7D・ E5、3溝
11	土師器 甕	口縁部小片	口径 (17.0)	緩く外反する口縁。	内外面ヨコナデ。	砂粒を含む 良好 褐色	6-3、7B- 5、II層
12	土師器 甕	1/4 残 底部欠	口径 (14.1) 現存高 9.9	口縁部がくの字状に外 反し、端部は外方へ折 れる。体部丸味あり。	体部内面はナデ、外面は叩キ の後ヘラケズリ、口縁部は内 外面ヨコナデ。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、3溝
13	土師器 坏	略完	口径 13.3 器高 5.7	体部と口縁部との境に 外稜をもつ。丸底。	口縁部はヨコナデ、体部外面 は不規則なヘラケズリを施す。	砂粒を多く含む 良好 橙褐色	6-3、立石下 川
14	土師器 坏	1/2 残	口径 (11.2) 器高 3.5	体部と口縁部との境に 外稜をもち、口縁部は 外反する。丸底。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 明赤褐色	6-3、7A5 P2

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
15	土師器 坏	略完	口径 12.1 器高 3.2	直線的な口縁部をもつ。 歪みあり。	口縁部はヨコナデ、内面はナ デ、外底はヘラケズリを施す。	砂粒を少量含む 良好 橙色	6-3、7E- 5P4、7D5 上位層
16	土師器 坏	1/2 残	口径 (15.0) 器高 4.2	口縁部と体部との境に 段をもち、内面では稜 となる。	口縁部はヨコナデ、内面はナ デ、外底はヘラケズリを施す。	砂粒を少量含む 良好 明赤褐色	6-3、7B- 5P126II層
17	土師器 坏	1/2 残	口径 (16.8) 器高 4.9	体部から丸味をもって 口縁部に至る。口縁下 に外稜あり。	口縁部はヨコナデ、外面稜以 下はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好(軟) 橙色	6-3、7D- 5、P96II層
18	土師器 坏	略完	口径 14.8 器高 4.4	体部は丸味をもち、口 縁部はほぼ直立する。 にぶい外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、内面はナ デ、外面稜以下はヘラケズリ を施す。	砂粒を少量含む 良好 にぶい橙色	6-3、7D- 5、P157II層
19	土師器 坏	小片	口径 (15.0) 器高 3.8	体部は丸味をもち、直 立する口縁部に至る。 やや扁平。		細砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7B- 5、P6
20	土師器 坏	1/2 残	口径 (12.3) 器高 3.2	丸味のある体部から直 立する口縁部に至る。 歪みあり。	口縁部はヨコナデ、外面はヘ ラケズリ。	砂粒を含む 不良 明赤褐色	6-3、7B6 No.2
21	土師器 坏	1/2 残	口径 (13.0) 器高 3.8	体部と口縁部との境に 外稜をもつ。口縁部は 内湾する。	口縁部と内面はヨコナデ、外 面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 橙褐色	6-3、7DP 281II層
22	土師器 坏	略完	口径 14.3 器高 4.4	丸味のある体部と、こ れより薄く、内傾する 口縁部をもつ。	口縁部と内面はヨコナデ、外 面はヘラケズリを施す。	砂粒を多く含む 良好 橙褐色	7B-5、P133 II層他
23	土師器 坏	小片	口径 (11.8) 現存高 3.0	口縁部と体部との境 に、にぶい外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7B5
24	土師器 坏	小片	口径 (12.0) 現存高 3.2	口唇部がわずかに外反 する。	体部外面にヘラケズリ痕を残 すが、他は磨滅して不明。	砂粒を含む 良好 明赤褐色	6-3、7A- 5P4II層
25	土師器 坏	1/2 残	口径 19.4 器高 3.9	明瞭な稜線をもって口 縁部が屈曲し、外反す る。	外底はヘラケズリ、口縁部は ヨコナデ、内面はナデを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7E- 5、P39II層
26	土師器 坏	1/2 残	口径 18.5 器高 3.7	皿状を呈する。にぶい 外稜をもつ。	器表が荒れているため、調整 不明。	精良 良好 橙色	6-3、7C- 4P6II層
27	土師器 坏	小片	口径 (18.0)	にぶい外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 褐色	6-3、7D- 5P111II層
28	土師器 坏	略完	口径 17.0 器高 4.5	にぶい外稜をもち、口 縁部は大きく外反する。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリ、内底はナデを 施す。	砂粒を多く含む 良好 橙褐色	6-3、7B- 5P17V層、7 B-5No.7

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
29	土師器 坏	ㄱ 残	口径 15.6 器高 3.8	はっきりした外稜をもち、口縁部は外反する。	口縁部はヨコナデ、体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7C-5P4・P5、7C-5Grid
30	土師器 坏	小片	口径 (17.0)	にぶい外稜をもち、口縁部は外反する。	口縁部はヨコナデを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7C-5P3
31	土師器 坏	小片	口径 (16.0)	体部は丸味をもち、口縁部は外反する。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7区A-5-3溝
32	土師器 坏	小片	口径 (15.0)	にぶい外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7D-5、P20
33	土師器 坏	小片	口径 (15.0)	皿に近く、口縁部と体部との境ににぶい段をもつ。	口縁部はヨコナデを施す。	砂粒を含む 良好 明赤褐色	6-3、7A-5PNo.7
34	土師器 坏	小片	口径 (14.1)	口縁部と体部との境に段をもつ。		砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7A-5P15I層
35	土師器 坏	小片	口径 (14.0)	外稜をもち、口縁部は外反する。	外稜部へ口縁部がやや厚味がある。口縁部はヨコナデを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7D・E-5・6VI層
36	土師器 坏	小片	口径 (18.0)	にぶい外稜をもつ。口唇部は内湾気味。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7E-5PNo.103、2層
37	土師器 坏	小片	口径 (17.2)	にぶい外稜をもち、口縁部は強く外反する。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7B-5P42II層
38	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	体部は丸味があり、口唇部は内湾気味。		砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7A-5-3溝
39	土師器 坏	ㄱ 残	口径 (12.0)	中位に段をもつ。	口縁部はヨコナデ、段以下の外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7E-5P5-I層
40	土師器 坏	略完	口径 15.7	丸底を呈し、口縁部はわずかに内湾する。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を多く含む 良好 橙褐色	6-3、7B-6、No.2
41	土師器 坏	ㄱ 残	口径 (14.6) 器高 4.6	丸底を呈し、口縁部は内湾する。	口縁部はヨコナデ、体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7B-6、P4
42	土師器 坏	底部欠	口径 14.1 現存高 4.4	口縁部が内湾する。	器表の磨滅が多い。	砂粒を含む 良好 にぶい赤褐色	6-3、7C-5P185II層他

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
43	土師器 坏	% 残	口径 12.7 器高 3.6	口唇部がわずかに内湾する。丸底。下半に外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部の内面はナデ、外面上半はナデ、下半はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7B-6 P201 I層
44	土師器 坏	略 完	口径 12.4 器高 3.9	口縁部が内湾する。外底のヘラケズリが顕著。口縁下に外稜をもつ。	口縁部はヨコナデを施す。	砂粒を多く含む 良好 橙褐色	6-3、7B-5 P151 I層他
45	土師器 坏	完 形	口径 12.1 器高 3.4	口縁部は内湾する。丸底。	体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7D-5、P58 II層
46	土師器 坏	% 残	口径 11.8 器高 3.7	口縁部はわずかに内湾する。	口縁部はヨコナデ、体部の内面はナデ、外面はヘラケズリを施す。		
47	土師器 坏	1/4 残	口径 (11.8) 器高 3.6	体部下半に凸部がある。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7E-5 P51 II層
48	土師器 坏	1/2 残	口径 11.5 器高 3.7	口縁部はわずかに内湾する。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を多く含む 良好 橙褐色	6-3、7B-6 I層、P200
49	土師器 坏	% 残	口径 (13.0) 器高 3.4	口縁部は内湾する。にぶい外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7D-5 P115 II層
50	土師器 坏	1/2 残	口径 (11.3) 器高 3.8	短かめの口縁部が内湾する。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 軟 橙色	6-3、7B-5、P45 II層
51	土師器 坏	小 片	口径 (11.7) 現存高 3.4	短かめの口縁部が内湾する。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7C-5 V層下部
52	土師器 坏	小 片	口径 (13.0)	口縁下に外稜をもつ。	体部の外面は稜以下ヘラケズリ。	砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7D-5 P325 II層
53	土師器 坏	小 片	口径 (12.6)	わずかに内湾する口縁部をもつ。やや深身。	器表荒れている。	砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7D-6
54	土師器 坏	小 片	口径 (13.5)	口縁部は内湾する。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7B-5 P80 II層
55	土師器 坏	小 片	口径 (12.8)	口縁部は内湾する。	体部外面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7E-5 P93 II層
56	土師器 坏	小 片	口径 (12.7)	口縁部はわずかに内湾する。平底状。	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C-5 P58 I層

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
57	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口縁部が内湾する。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 にぶい橙色	6-3、7C- 4P4
58	土師器 坏	小片	口径 (13.2)	口縁部が内湾する。口 唇部の器壁が薄い。	体部外面はヘラケズリ、その 他はヨコナデを施す。	砂粒を少量含む 良好 褐色	6-3、7B- 5P103II層
59	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	直立に近い口縁部をも つ。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D- 5P93II層
60	土師器 坏	1/2 残	口径 (12.0)	直立に近い口縁部をも つ。にぶい外稜がある。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C- 5P8I層
61	土師器 坏	1/4 残	口径 (10.8) 器高 3.1	口縁部がわずかに内湾 する。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 明褐色	6-3、7D- 5P279II層
62	土師器 坏	3/4 残	口径 10.6 器高 2.9	口縁部が内傾し、にぶ い外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部の内 面はナデ、外面はヘラケズリ を施す。	砂粒を含む 良好 褐色	6-3、7C- 5P222II層
63	土師器 坏	1/2 残	口径 (10.6) 器高 3.0	口縁部はほぼ直立する。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D- 5P11I層
64	土師器 坏	1/2 残	口径 10.5 器高 3.1	口縁部はほぼ直立する。 底部の器壁が薄い。	体部の外面はヘラケズリ、内 面はナデ、口縁部はヨコナデ を施す。	精良 良好 やや軟 橙色	6-3、7C- 6P1~3
65	土師器 坏	1/4 残	口径 (11.0) 器高 3.0	口縁部は体部から滑ら かに立ち上がる。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C- 5P10V層
66	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部がわずかに内湾 する。	体部外面はヘラケズリ、内面 はナデを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7E- 5P40II層
67	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部がわずかに内湾 する。やや浅い。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D- 6
68	土師器 坏	小片	口径 (11.8)	口縁部が折れ曲るよう に内傾し、底部は平底 に近くなる。	体部外面はヘラケズリ、内面 はナデを施す。	精良 良好 にぶい褐色	6-3、7E- 5P184II層
69	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部はほぼ直立する。 やや浅い。	体部外面はヘラケズリ、内面 はナデを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7B- 5P57II層
70	土師器 坏	小片	口径 (11.4)	口縁部はほぼ直立する。 やや浅い。	体部外面はヘラケズリ、内面 はナデを施す。磨滅多い。	精良 良好 褐色	6-3、7B- 5・6V層下部

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
71	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁下ににぶい稜をもつ。	体部外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	砂粒を含む良好にぶい褐色	6-3、7区3溝DE5
72	土師器 坏	片残	口径 (12.0)	短かめのやや厚い口縁部が直立する。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む良好にぶい褐色	6-3、7C-6P8V層下部
73	土師器 坏	小片	口径 (11.2)	口縁部が内傾する。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む良好にぶい褐色	6-3、7C-5P135II層
74	土師器 坏	小片	口径 (10.6)	口縁部が強く内傾し、外稜をもつ。	体部外面はヘラケズリを施す。磨減多い。	砂粒を含む良好橙色	6-3、7D-5P277II層
75	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部は直立する。	体部外面はヘラケズリを施す。磨減多い。	精良良好褐色	6-3、7E-5P72II層
76	土師器 坏	小片	口径 (12.8)	口唇部内側がわずかに肥厚する。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良良好褐色	6-3、7D-5P309II層
77	土師器 坏	小片	口径 (12.8)	口縁部がわずかに内傾する。	体部外面は丁寧なヘラケズリ、内面はナデを施す。	砂粒を含む良好褐色	6-3、7D-5P312II層
78	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口縁部はほぼ直立し、にぶい外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	精良良好褐色	6-3、7E-5P107II層
79	土師器 坏	小片	口径 (11.8)	口縁部はわずかに内傾し、にぶい外稜をもつ。平底に近い。	体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	精良良好褐色	6-3、7E-5P134II層
80	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部はほぼ直立する。	外面のヘラケズリは口唇部近くまで及ぶ。	精良良好褐色	6-3、7E-5P176II層
81	土師器 坏	小片	口径 (11.4)	口縁部がわずかに内傾する。	器表荒れ。	精良良好明黄褐色	6-3、7D-5P21I層
82	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部外面が強く内傾し、外稜をもつ。	器表荒れ。	砂粒を含む良好にぶい褐色	6-3、7C-5P11I層
83	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部外面が内傾して外稜をもつ。口唇内側に稜がある。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む良好にぶい褐色	6-3、7区3溝DE5
84	土師器 坏	小片	口径 (17.4)	口縁部は直立し、にぶい外稜をもつ。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良良好褐色	6-3、7D-5P259II層

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
85	土師器 坏	小片	口径 (13.7)	口縁部が直立する。	体部外面にヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7E- 5 P161II層
86	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口縁部は直立し、にぶ い外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。外稜部 がもっとも厚い。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7D・ E-5 V層下部
87	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口縁部が直立する。や や浅い。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7A- 5~7 V層
88	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部が直立する。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7区3 溝DE-5
89	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部は短かく、断面 三角形で直立する。や や浅い。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7C- 5 P54 I層
90	土師器 坏	小片	口径 (11.8)	口縁部は直立し、内・ 外面ににぶい稜をもつ。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D- 5 P103II層
91	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部は直立し、にぶ い外稜をもつ。	体部外面はヘラケズリ、口縁 部はヨコナデを施す。	砂粒を含む 良好 明るい褐色	6-3、7A- 6 P131II層
92	土師器 坏	小片	口径 (11.8)	口唇部内側が丸く肥厚 する。口縁部がわずかに 内湾する。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 にぶい褐色	6-3、7E- 5 P98II層
93	土師器 坏	小片	口径 (10.6)	口縁部がわずかに内湾 する。口唇部内側がや や丸くなる。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7B- 5 P71II層
94	土師器 坏	小片	口径 (11.0)	口唇部が内傾する。に ぶい外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	精良 良好 にぶい褐色	6-3、7D- 5 P138II層
95	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口唇部外側が丸味をも つ。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7E- 5 P138II層
96	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	平底に近い底部をもつ。 外稜部から上は反転し て緩く外反する。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7B- 5 P12
97	土師器 坏	小片	口径 (11.8)	口縁部はやや薄くなり、 体部から反転して緩く 外反する。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D- 5 下位層
98	土師器 坏	小片	口径 (11.0)	口縁部は直立する。や や浅い。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 褐色	6-3、7D- 5 P219II層

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
99	土師器 坏	小片	口径 (11.0)	口縁部がわずかに反転外反する。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D-5 上位層
100	土師器 坏	1/4 残	口径 (12.0)	口縁部内側が丸味をもって厚くなる。にぶい外稜をもつ。	口縁部はヨコナデ、体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	砂粒を含む 良好 褐色	6-3、7D-5 P308II層
101	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口縁部は体部から滑らかに直立し、薄くなる。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D-5 P227II層
102	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口縁部は丸味をもって直立する。	体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	精良 良好 にぶい橙色	6-3、7D-5
103	土師器 坏	1/2 残	口径 12.0	わずかの屈曲をもって口縁部が外反する。平底に近い。	口縁部はヨコナデ、体部の内面はナデ、外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7B-5 P11
104	土師器 坏	1/2 残	口径 (13.4)	口縁部は外傾する。	器表荒れ。	精良 良好 褐色	6-3、7B-5 P9
105	土師器 坏	小片	口径 (12.8)	口縁部が反転外反する。平底。	体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	精良 良好 明褐色	6-3、7B-5 P9
106	土師器 坏	小片	口径 (9.8)	口縁部は外傾する。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7B-C-7VI層
107	土師器 坏	小片	口径 (12.9)	口縁部は外傾する。平底。	体部の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7B-5 P11
108	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部が内湾気味に立ち上がる。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D-5
109	土師器 坏	1/4 残	口径 (12.8)	口縁部が外傾して立ち上がる。厚さはほぼ均一。	器表磨減。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7D-E-5・6VI層
110	土師器 坏	1/4 残	口径 (13.0) 器高 3.0	口縁部が直立する。平底。	口縁部はヨコナデ、外底はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 褐色	6-3、7C-6 P4V層下
111	土師器 坏	小片	口径 (11.5)	にぶい外稜を境に口縁部がわずかに内傾する。器壁やや厚手。	口縁部はヨコナデを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C-5V層下部
112	土師器 坏	小片	口径 (11.0)	口唇部が内湾する。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C-4 P7

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
113	土師器 坏	小片	口径 (11.8)	口縁部が直立する。	体部下半の外表面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C- 5 P14I層
114	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口唇部外表面は内湾する。 やや浅い。	口縁部はヨコナデ、体部外表面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7A- 6 II層、P73
115	土師器 坏	小片	口径 (11.2)	平底状を呈する。口縁部は直立する。	口縁部はヨコナデ、体部外表面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 褐色	6-3、7C・ D-4
116	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部が直立する。 平底。	口縁部はヨコナデ、体部外表面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D- 5 P31
117	土師器 坏	小片	口径 (11.8)	口縁部が直立する。	体部外表面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7B- 5 P51II層
118	土師器 坏	小片	口径 (12.6)	口縁部が直立する。	体部外表面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D- 5
119	土師器 坏	1/2 残	口径 12.2 器高 3.4	口縁部はほぼ直立する。 口唇内側が丸く肥厚する。 平底に近い。	口縁部はヨコナデ、体部の外表面はヘラケズリ、内表面はナデを施す。	精良 良好 にぶい褐色	6-3、7C- 5 P5
120	土師器 坏	小片	口径 (12.6) 器高 3.0	口縁部が直立する。口唇部内側が丸く肥厚する。 平底。	口縁部はヨコナデ、体部外表面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7B- 5 P55II層
121	土師器 坏	小片	口径 (13.2)	口縁部は直立する。にぶい外稜をもつ。 平底。	体部外表面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7B- 5 P46II層
122	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口縁部は直立する。	外表面のヘラケズリは口唇部近くまで及ぶ。	精良 良好 にぶい褐色	6-3、7E- 5 P87II層
123	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口唇部内側が折れ曲る。 ほぼ均一な厚さをもつ。	体部外表面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C
124	土師器 坏	1/2 残	口径 (12.8)	口唇部内側が丸味をもつ。 平底。	体部外表面はヘラケズリを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7B- 5 P19V層
125	土師器 坏	小片	口径 (11.0)	口縁部が外傾する。	体部外表面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7E- 5 P8I層
126	土師器 坏	小片	口径 (11.8)	口縁部が外傾する。	体部外表面はヘラケズリを施す。	精良 良好 にぶい褐色	6-3、7D- 5 P112II層

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
127	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部は外傾する。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7D- 5 P14
128	土師器 坏	小片	口径 (10.8)	口縁部は外傾する。	器表荒れ。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7D- 14
129	土師器 坏	小片	口径 (11.4)	口縁部は直立する。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7D- 5 P108II層
130	土師器 坏	完形	口径 11.8 器高 3.4	口縁部は直立する。 平底に近い。	口縁部はヨコナデ、体部の内 面はナデ、外面はヘラケズリ を施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7A- 6 P26II層
131	土師器 坏	1/4 残	口径 (11.0)	口縁部は直立する。 やや厚手。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7D- 5 P70
132	土師器 坏	小片	口径 (14.0)	口縁部は直立する。 ほぼ均一な厚さ。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7E- 5
133	土師器 坏	1/4 残	口径 (11.8) 器高 3.5	口唇部がわずかに内湾 する。ほぼ均一な厚さ でやや厚手。	体部外面はヘラケズリ、口縁 部はヨコナデを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7B- 5 P84II層
134	土師器 坏	小片	口径 (11.3)	口縁部が内湾する。		精良 良好 褐色	6-3、7B- 5 P128II層
135	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部は直立する。	口縁部はヨコナデ、体部外面 はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 橙色	6-3、7A- 6 P119II層
136	土師器 坏	小片	口径 (12.0)	口縁部は直立する。 厚手。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C- 5 P39I層
137	土師器 坏	小片	口径 (13.0)	口縁部は薄くなって直 立する。	体部の外面はヘラケズリ、内 面はナデを施す。	精良 良好 にぶい橙色	6-3、7E- 5 P26I層
138	土師器 坏	小片	口径 (13.2)	口縁部は緩く開く。 平底か。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C- 5 II層
139	土師器 坏	小片	口径 (14.0)	口縁部は直立する。 ほぼ均一な厚さ。		砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7D- 14
140	土師器 坏	1/4 残	口径 (13.0) 器高 3.6	口縁部は緩く開く。 平底に近い。	口縁部はヨコナデ、体部の外 面はヘラケズリ、内面はナデ を施す。	精良 良好 褐色	6-3、7E- 5 P16I層

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
141	土師器 坏	1/4 残	口径 (14.2) 器高 3.7	口縁部は緩く開く。	器表荒れ。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7C?
142	土師器 坏	小片	口径 (14.0)	口縁部は緩く開く。 にぶい外稜をもつ。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 明るい褐色	6-3、7A-5、3溝
143	土師器 坏	小片	口径 (16.6)	口縁部は緩く開く。	体部外面はヘラケズリを施す。	精良 良好 橙色	6-3、7B-5 II層
144	土師器 坏	小片	口径 (14.8)	口縁部は体部から滑らかに開く。にぶい外稜をもつ。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7A-5、3溝
145	土師器 碗	小片	口径 (14.8)	口縁部はわずかに内湾する。深身。	体部外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい橙色	6-3、7A-6 P160 II層
146	土師器 碗	1/4 残	口径 (14.0)	口縁部は直立する。	体部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 にぶい褐色	6-3、7C-5 P641 I層
147	土師器 皿	小片	口径 (11.8) 器高 (1.7)	底部からほぼ直立した口縁部はさらに端部で外方へ折れる。	外底はヘラケズリ、内底はナデを施す。	精良 良好 褐色	6-3、7B-5 II層
148	土師器 坏	略完	口径 12.8 器高 3.4 底径 8.5	丸味のある底部からほぼ直線的に外反する。	外面はヘラケズリ後ナデを施す。内面の体部から口縁部にかけて暗文あり。	小石を少量含む 良好 橙色	6-3、7B-5 P45 II層
149	須恵器 有高台 碗	略完	口径 13.4 器高 5.3 高台外径 7.5	口唇部が肥厚する。断面四角の高台は内端が接地する。	右回転ロクロ成形痕を残す。回転糸切り後高台を貼り付け、その脇はヨコナデを施す。	砂粒を含む 良好 灰褐色	6-3、7A-5 P1
150	須恵器 碗	1/4 残	口径 (16.8) 器高 4.5	底部から2回折れて外反する。	ロクロ成形。回転糸切り。外底の周囲はナデを施す。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、7E-5 P49 II層
151	須恵器 有高台 碗	1/4 残	口径 16.9 器高 4.0 高台外径11.4	口縁部はわずかに外反する。高台は削り出しによる。	内面はナデ、口縁部はヨコナデ、外底～高台脇は回転ヘラケズリを施す。	砂粒を少量含む 良好 灰色	6-3、7B・C-5
152	須恵器 有高台 碗	口縁部欠	高台外径10.8	底部から直線的に口縁部へ向う。断面方形の高台は削り出しによる。	内底はナデ、外底は回転ヘラケズリを施す。外底高台内にXのヘラ記号あり。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、7E-5 P42 II層
153	須恵器 坏	1/2 残	口径 15.8 器高 4.1 底径 11.0	底部から直線的に開く。	右回転ロクロ成形。外底は回転ヘラケズリを施す。	砂粒を少量含む 良好 灰色	6-3、7D-5 P25・P26
154	須恵器 坏	1/4 残	口径 (13.0) 器高 3.2 底径 (9.2)	底部から外反気味に開く。	右回転ロクロ成形。外底は回転ヘラケズリを施す。	砂粒を少量含む 良好 灰色	6-3、7D-5 P18他

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
155	須恵器 有高台 坏	小片	口径 (14.0)	体部にやや丸味をもつ。 高台は内端が接地する。	体部下半～底部はヘラケズリを施す。その他はヨコナデ。高台は削り出しによる。	砂粒を少量含む 良好 灰色	6-3、7C-5 P48II層
156	須恵器 盤	小片	口径 (21.5)	口縁部内側が断面三角につまみ出される。 蓋か。	口縁部と内面はヨコナデ、底部との境はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、7D-5 P304II層
157	須恵器 蓋	1/2 残	口径 11.8 器高 2.1 かえり径 9.6	ボタン状撮みをもつ。 かえりは口縁部とほぼ同じ面になる。	右回転ロクロ成形。天井部外面は回転ヘラケズリ、撮みはヨコナデを施す。	砂粒を少量含む 良好 灰褐色	6-3、7A-5 P6
158	須恵器 蓋	1/4 残	口径 (16.8) 器高 2.5 かえり径(14.0)	ボタン状撮みをもつ。 かえりは口縁部よりも内側になる。	右回転ロクロ成形。天井部外面は回転ヘラケズリを施す。	小石を含む 良好 灰色	6-3、7D-5 P59II層他
159	須恵器 蓋	小片	撮径 (6.0)	ボタン状撮みの中央部が渦巻状に突出する。	天井部外面はヘラケズリを施す。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、7B-6・7VI層
160	須恵器 蓋	撮み部	撮径 4.2	ボタン状撮みのみ遺存。	天井部内面に渦巻状の成形痕あり。	精良 良好 灰色	6-3、7B-6 P3
161	須恵器 蓋	小片	口径 (16.0) かえり径 (13.4)	かえりは完全に内側に入る。	ロクロ成形。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、7C・D-4
162	須恵器 蓋	小片	口径 (18.5) かえり径 (15.6)	断面三角のかえりは完全に内側に入る。	ロクロ成形。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、7B-5 P88II層
163	須恵器 蓋	小片	口径 (16.0) かえり径 (13.4)	断面三角のかえりは内側に入る。	ロクロ成形。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、7D-5 P60II層
164	須恵器 蓋	小片	口径 (18.0) かえり径 (15.4)	断面三角のかえりは内側に入る。	ロクロ成形。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、7D-5 P46VI層下部
165	土師器 台付甕	本体と脚部の接合部のみ残		脚台部は外方へ大きく開く。	本体底部外面はヘラケズリ、内面はナデ、脚部の外面は指頭ナデ、内面はナデを施す。	砂粒を含む 良好 褐色	6-3、7B-5 P3
166	須恵器 高坏	口縁部・脚部欠		丸味のある坏部をもつ。	ロクロ成形。坏部内底にヘラケズリを施す(非回転)。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、7C-5、P186II層
167	土師器 甕	底部欠	口径 15.6 現存高 20.0	丸味のある胴部に、外反する口縁部がつく。 最大径は胴中位18.6。	輪積み成形。口縁部はヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラケズリを施す。	小石を多く含む 良好 にぶい橙色	6-3、4B-6 P1・2
168	須恵器 蓋	1/2 残 天井部欠	口径 (15.7)	口縁部は折れ曲る。	右回転ロクロ成形。	砂粒を含む 良好 灰色	6-3、5E、トレンチ

番号	器種	遺存状態	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
169	瓶	底部小片	底径 (9.5)	底部からほぼ直線的に体部が開く。長頸壺の破片か。	外底はナデ、その他はロクロ成形痕を残す。	砂粒を含む 良好 灰色	

圖 版

森 遺 跡

図版 1



遺跡付近地形図 (1/5,000)



遺跡付近航空写真 (1/4,000)



(1) 左 旧多胡郡 中央 山字郷 右 旧片岡郡 (東から)



(2) 5～6区全景 (東から)



(1) 1～4区全景（東から）



(2) 第2・3・5・8号住居址及び第2号水路（南から）



(1) 第6・7・10・11・13・14号住居址（北東から）



(2) 1～3区を南西から望む



(1) 第1号住居址
(西から)



(2) 第1号住居址
カマド
(西から)



(3) 第2号住居址
(南から)



(1) 第2号住居址
遺物出土状況
(南から)



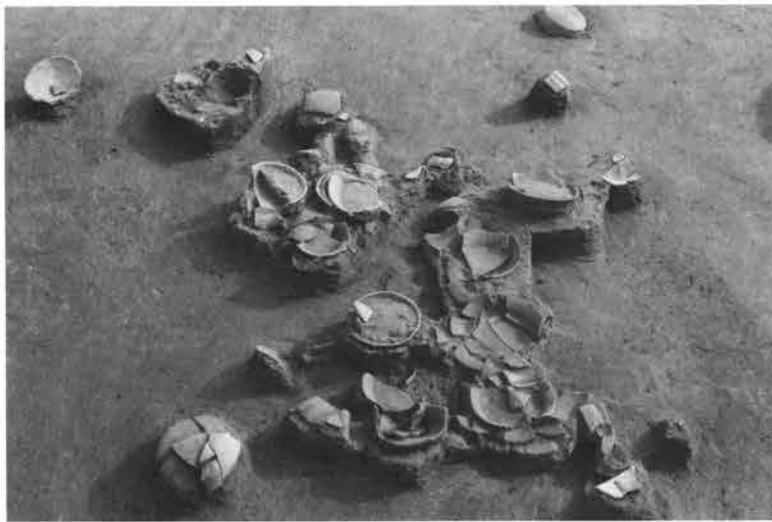
(2) 第3号住居址
(南南東から)



(3) 第4号住居址
(東から)



(1) 第4号住居址
遺物出土状況
(東から)



(2) 第4号住居址
中央部・坏出土状況
(東から)



(3) 第5号住居址
(南から)



(1) 第5号住居址
カマド付近遺物
出土状況(南東から)



(2) 第5号住居址
東壁下遺物出土状況
(北から)



(3) 第6号住居址
(西から)



(1) 第6号住居址
カマド
(西から)



(2) 第7号住居址
(西から)



(3) 第8号住居址
(西から)



(1) 第8号住居址
カマド
(西から)



(2) 第8号住居址
カマド前遺物出土
状況(北西から)



(3) 第9号住居址
(西から)



(1) 第9号住居址
カマド前遺物出土
状況 (西から)



(2) 第10号住居址
(西から)



(3) 第10号住居址
遺物出土状況
(西から)



(1) 第10・11号住居址
(外側11号)



(2) 第11号住居址カマド
ト(手前10号カマド)



(3) 第11号住居址
貯藏穴内遺物



(1) 第13・14号住居址
(南から)



(2) 第13号住居址
遺物出土状況
(南から)



(3) 第13号住居址
カマド
(南西から)



(1) 第13号住居址
カマド右脇貯蔵穴
(南東から)



(2) 第14号住居址
カマド一部と右手
貯蔵穴 (西から)



(3) 第14号住居址
貯蔵穴
(南から)



(1) 第15号住居址
(西から)



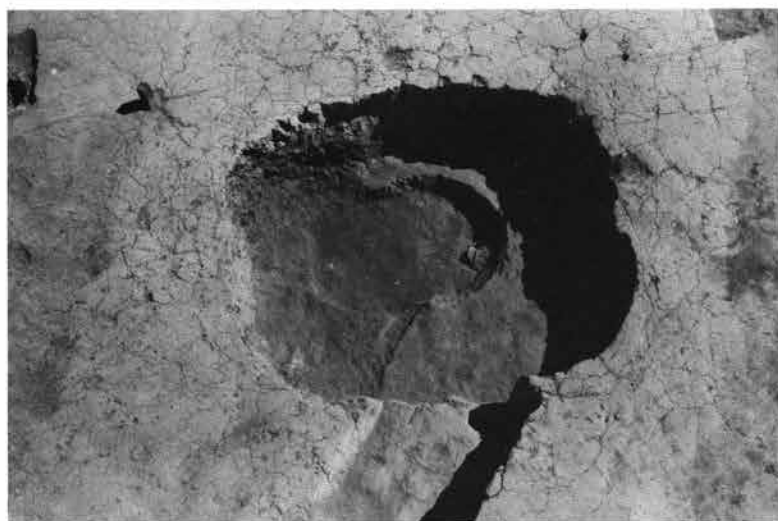
(2) 第16号住居址
(南西から)



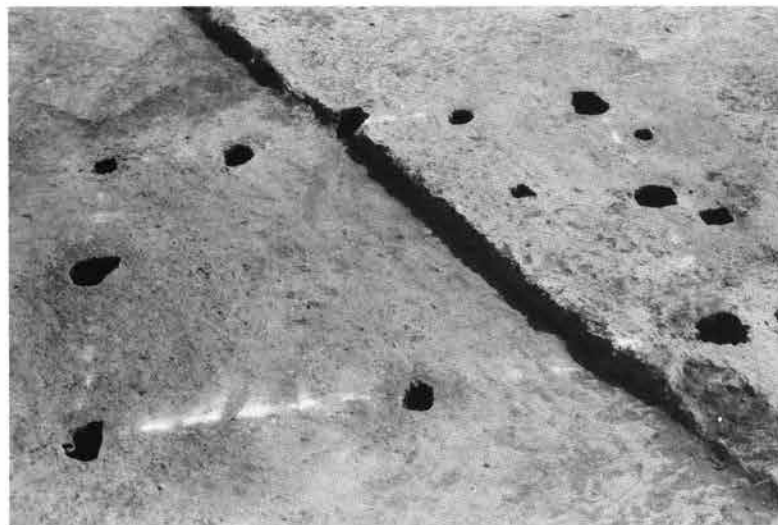
(3) 第11号土坑内
須恵器大甕出土状況
(西から)



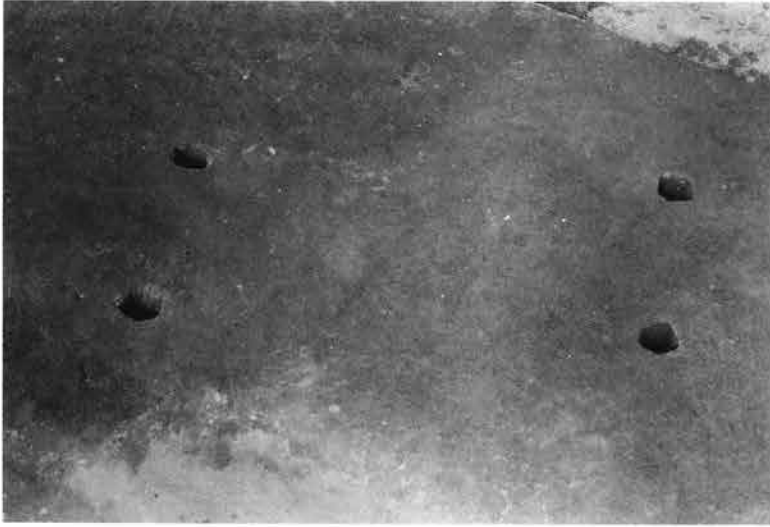
(1) 第11号土壇内
大甕出土状況
(西から)



(2) 第11号土壇
掘り方
(西から)



(3) 第2号掘立柱
家屋(南から)



(1) 第3号掘立柱
家屋（南から）



(2) 第1号水路址
（南から望む）



(3) 第1号住居址付近
畝状小溝群
（南東から）



(1) 5区弥生時代
遺物出土状況



(2) 5区弥生時代
石器出土状況



(3) 5区弥生時代
土器出土状況



(1) 第1号住居址以南の遺構



(2) 第6号土坑(西から)



(3) 第4号土坑遺物出土状況(南西から)



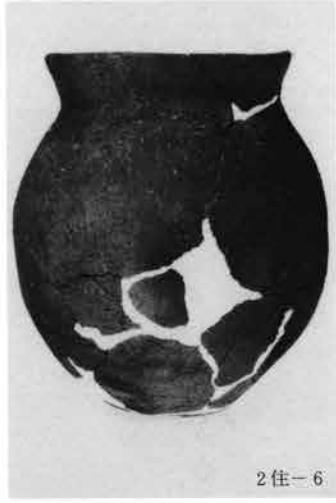
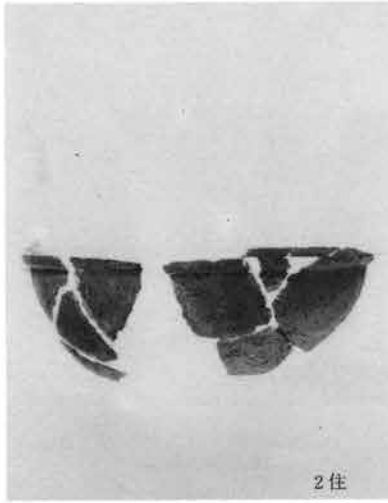
(4) 第16号土坑(西から)



(5) 第13号土坑(北から)



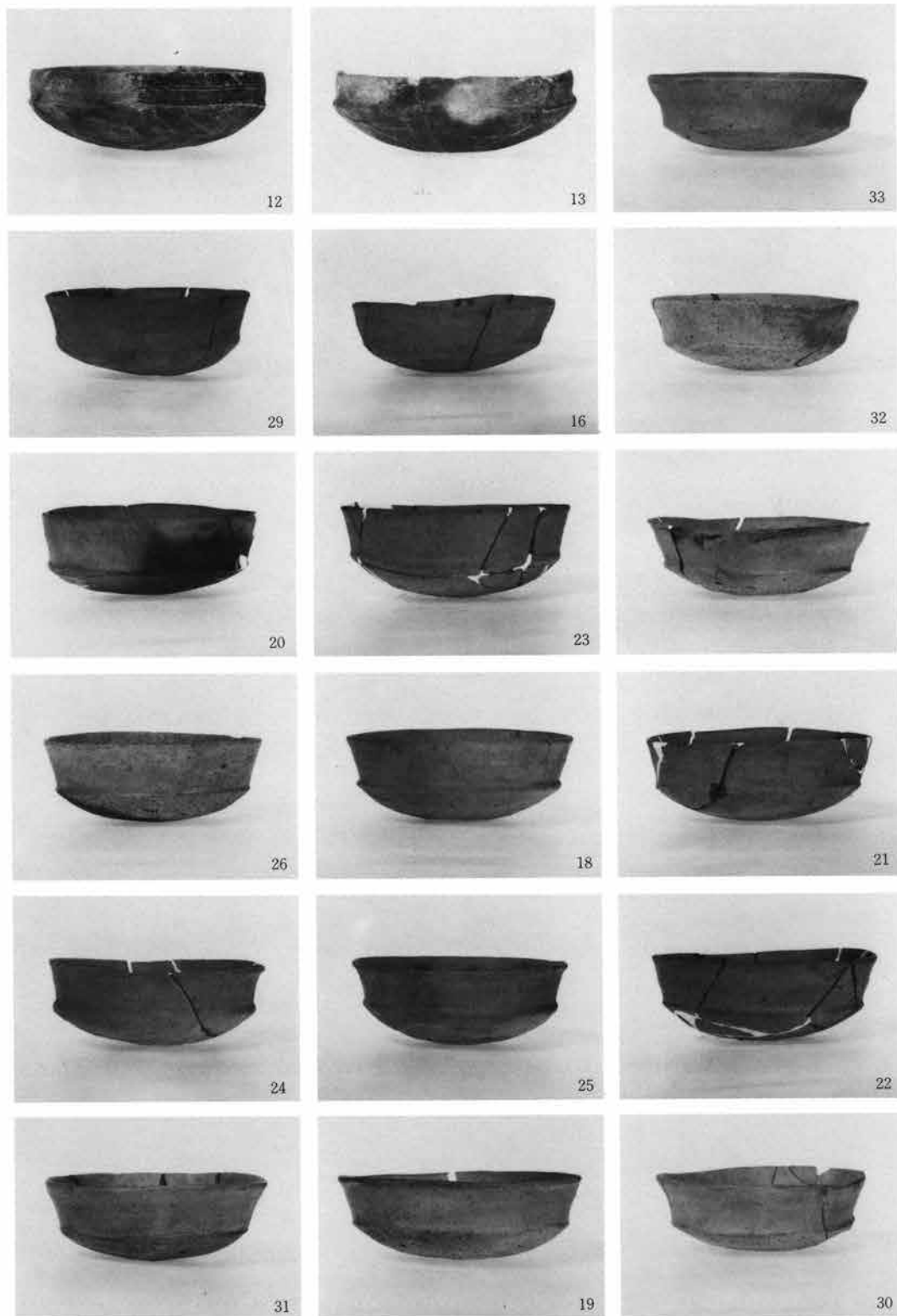
第1・2号住居址出土遺物



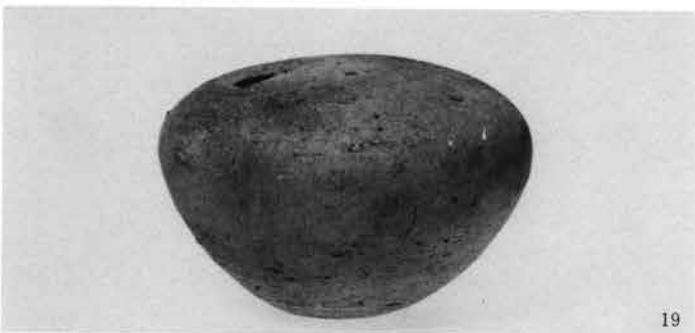
第2・4号住居址出土遺物(その1)



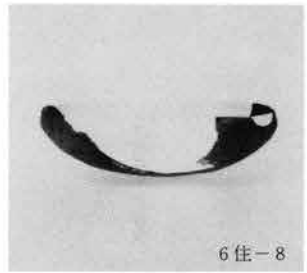
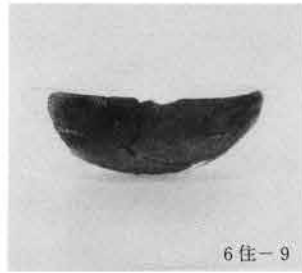
第4号住居址出土遺物（その2）



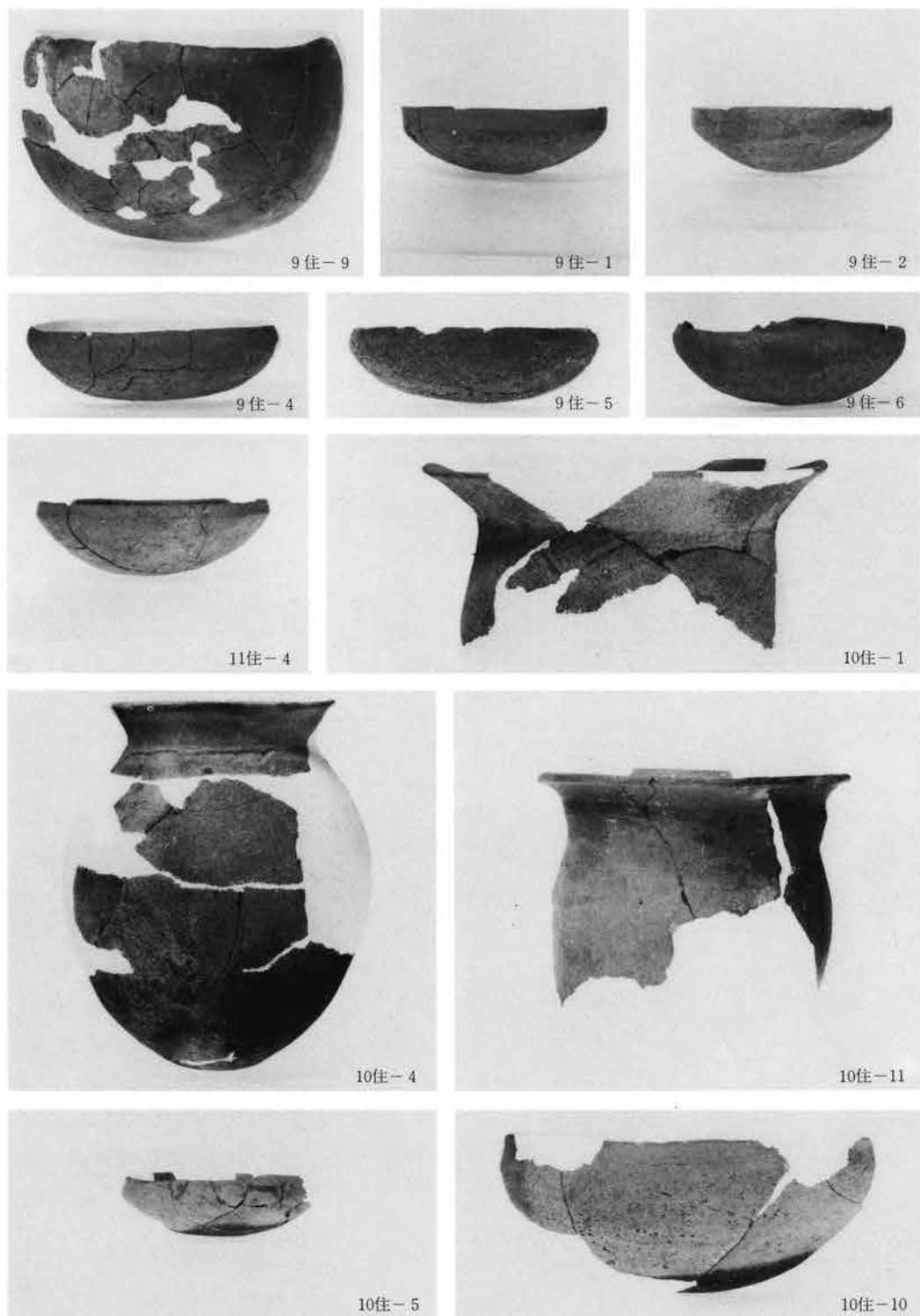
第4号住居址出土遺物(その3)



第5号住居址出土遺物



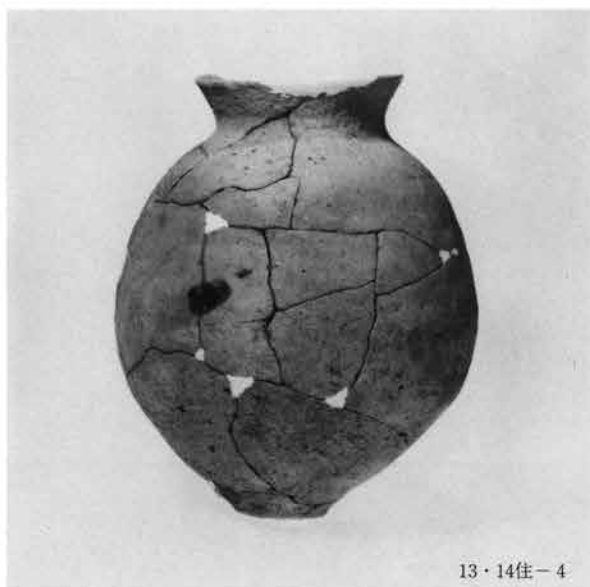
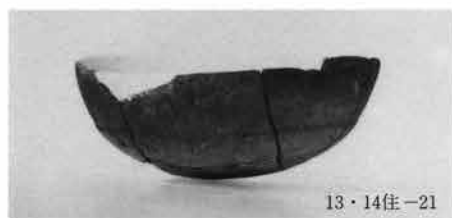
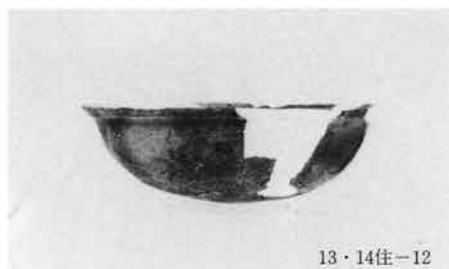
第6・8号住居址出土遺物



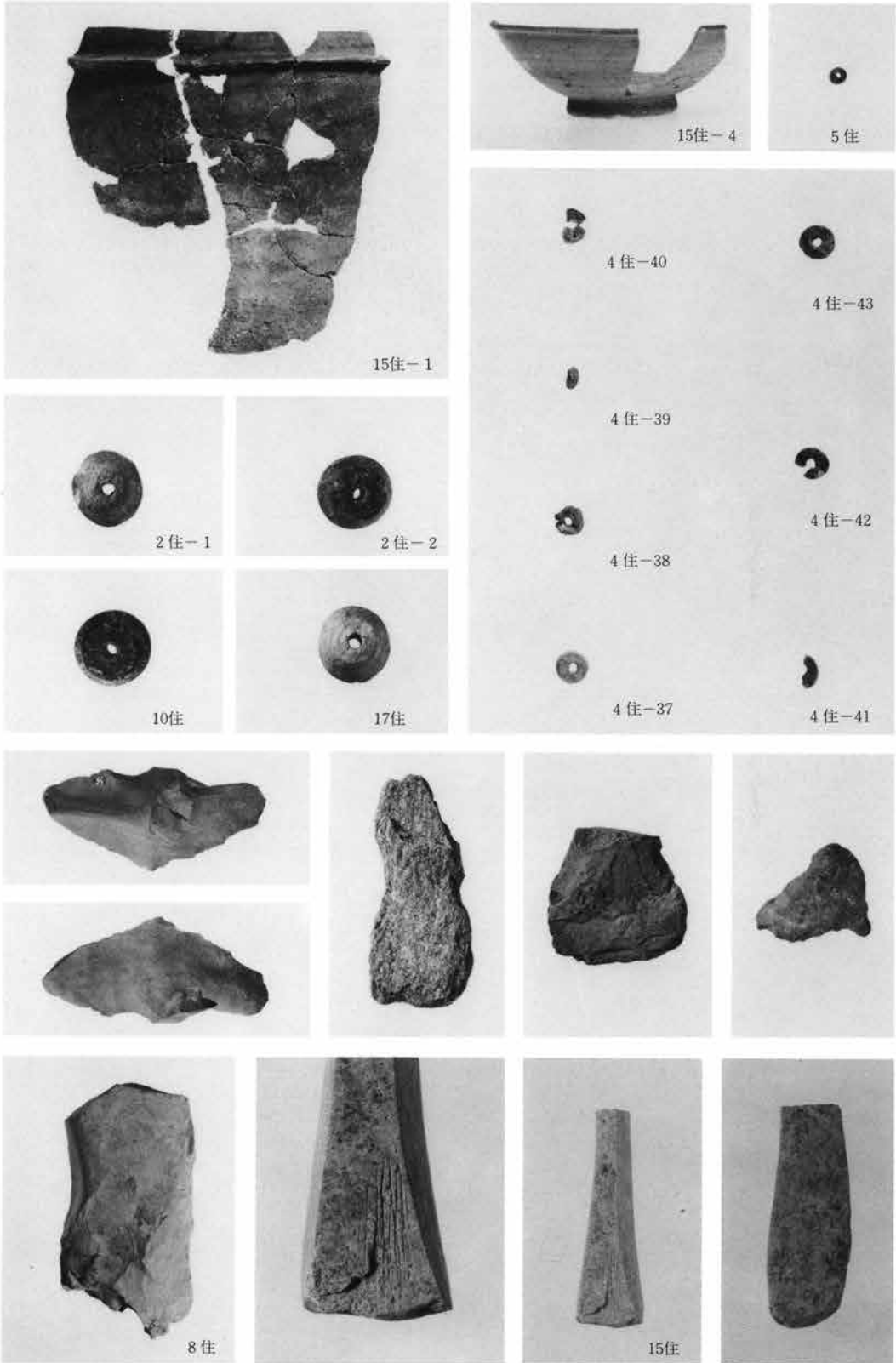
第9・10・11号住居址出土遺物



第13号住居址出土遺物

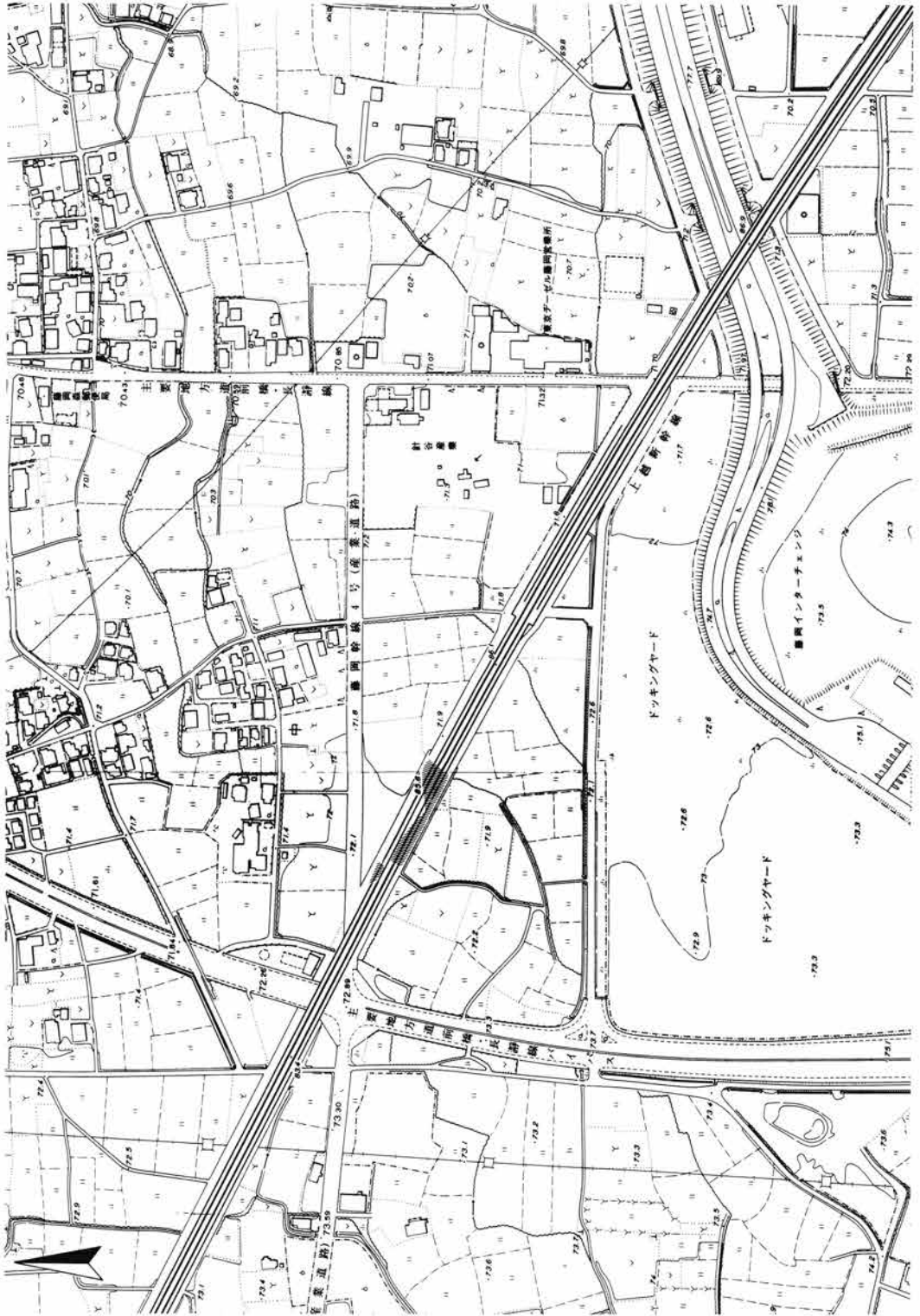


第13・14号住居址出土遺物



第15号住居址出土遺物及びその他の石製品

中 I 遺跡



遺跡付近地形図 (五千分の一)



遺跡付近航空写真 (四千分の一)



(1) 調査前遺跡全景（北西から）



(2) 調査風景



(3) 掘立柱遺構群（北から）



(1) 第1号溝（北西から）



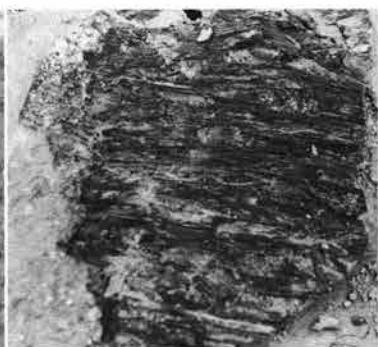
(2) 掘立柱遺構群（北西から）



(1) 第1号住居址遺物出土状況①(北西から)



(2) 第1号住居址遺物出土状況②(北西から)



(3) 第1号住居址
炭化物出土状況



(1) 第1号住居址（北西から）



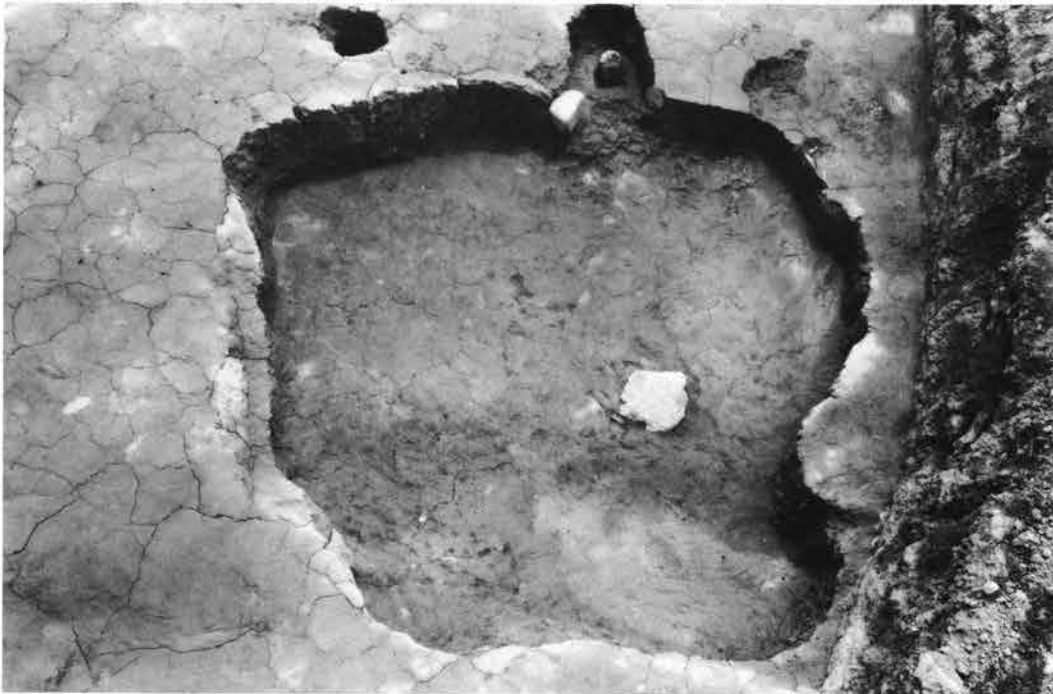
(2) 第1号住居址カマド検出状況
（北西から）



(3) 第1号住居址
カマド袖石架構使用状況



(1) 第2号住居址遺物出土状況 (2) 第2号住居址カマド遺物出土状況 (3) 鉄器出土状況



(4) 第2号住居址(北西から)



第3号住居址（北西から）



(1) 第3号住居址（北西から）



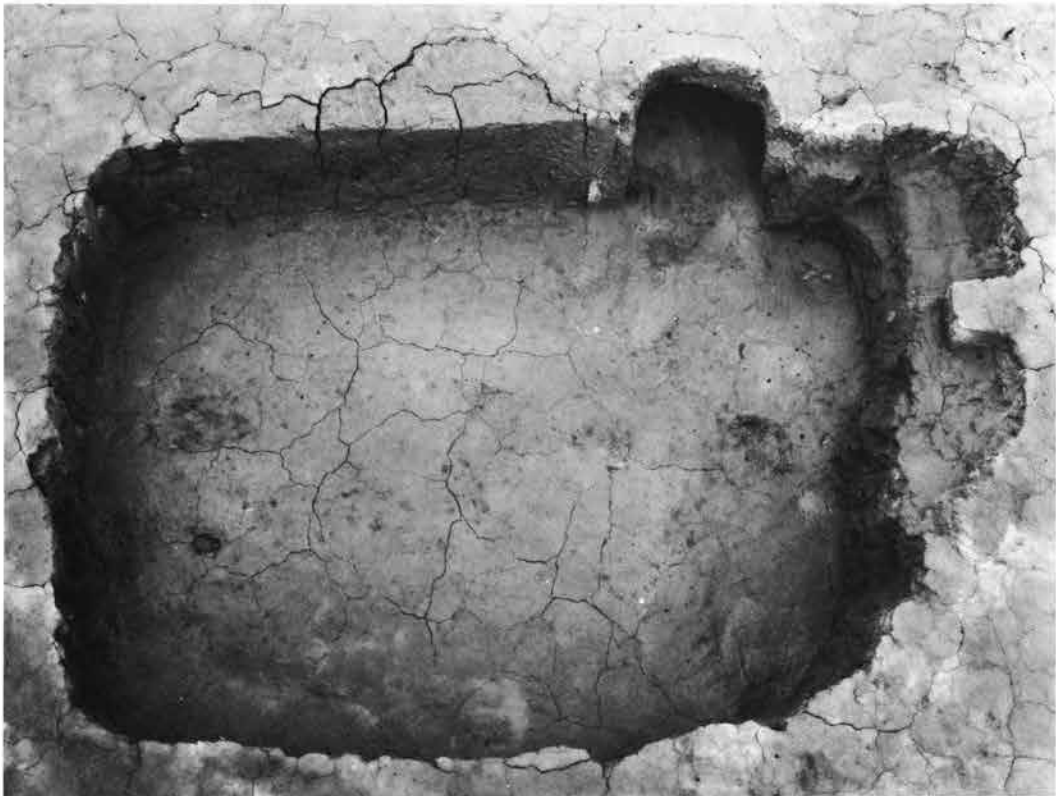
(2) 第3号住居址カマド



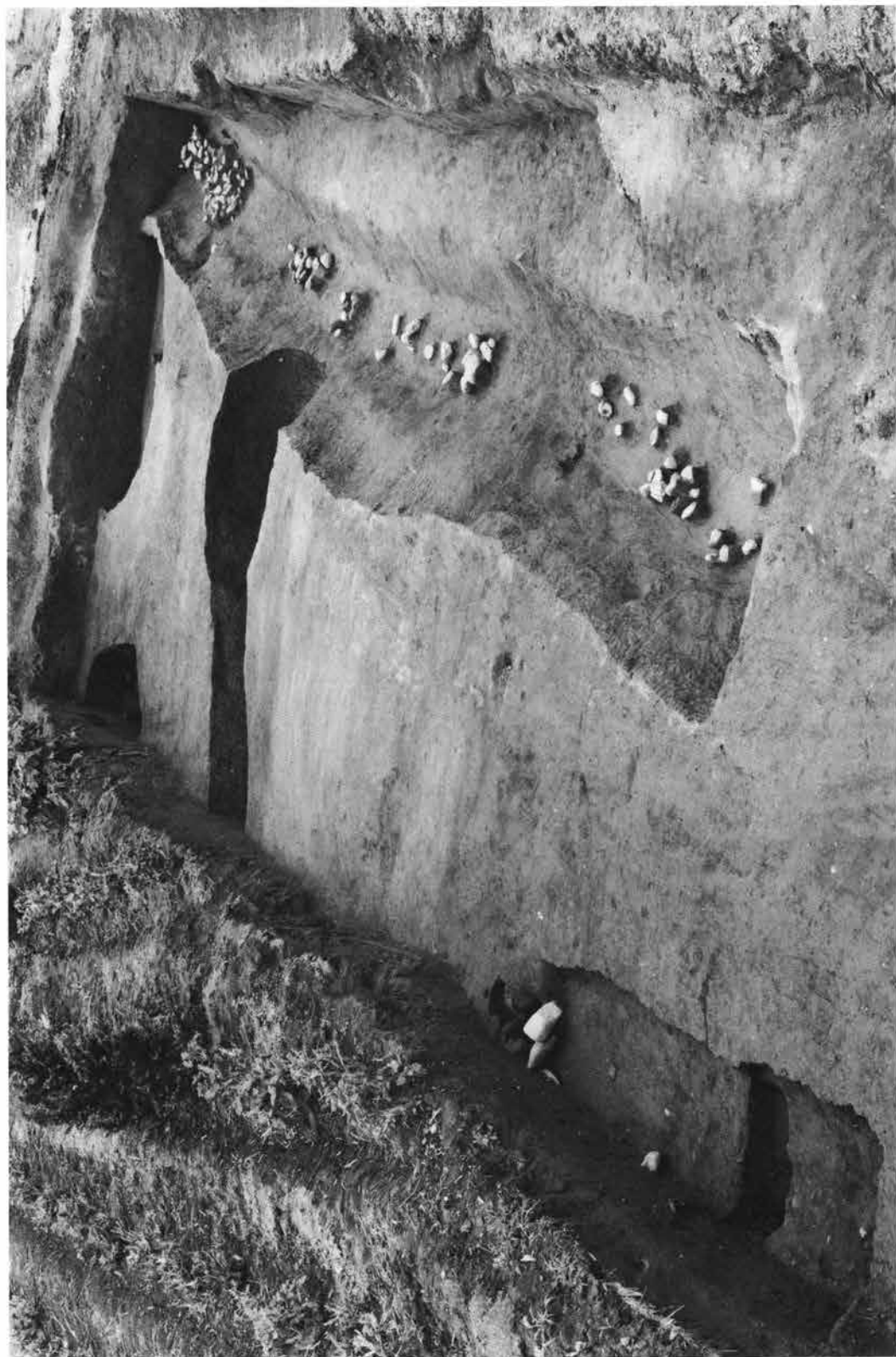
(1) 第4号住居址遺物出土状況



(2) 第4号住居址カマド
遺物出土状況



(3) 第4号住居址（北西から）



第5・6・7号住居址及び第1号溝遺物出土状況（北西から）



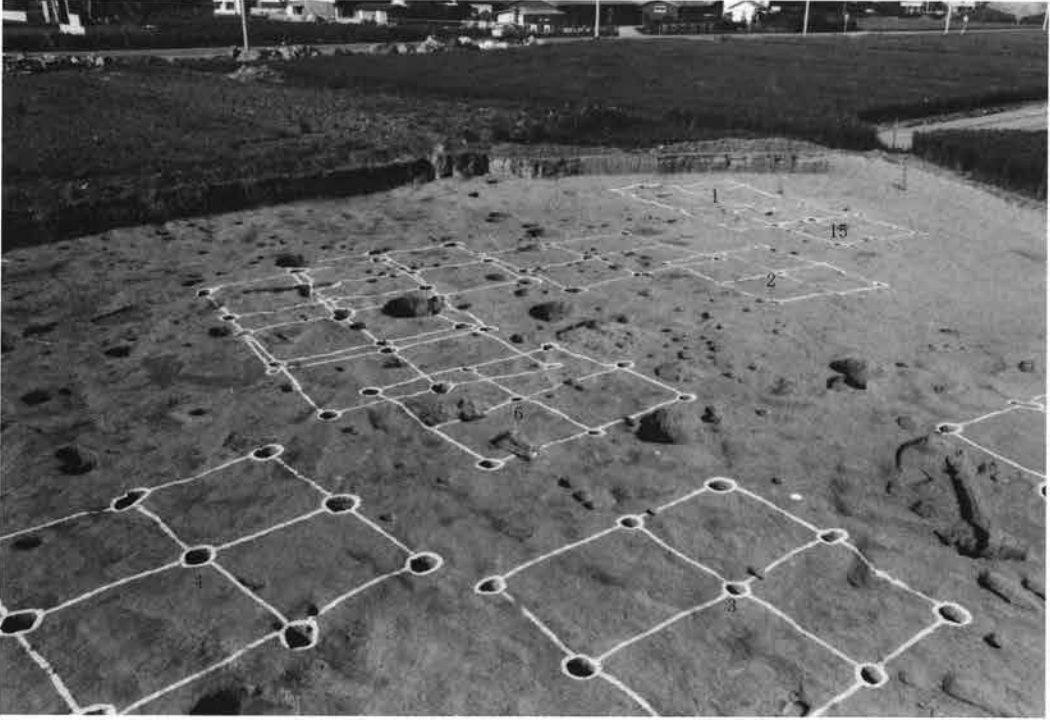
(1) 第5号住居址 (南から)



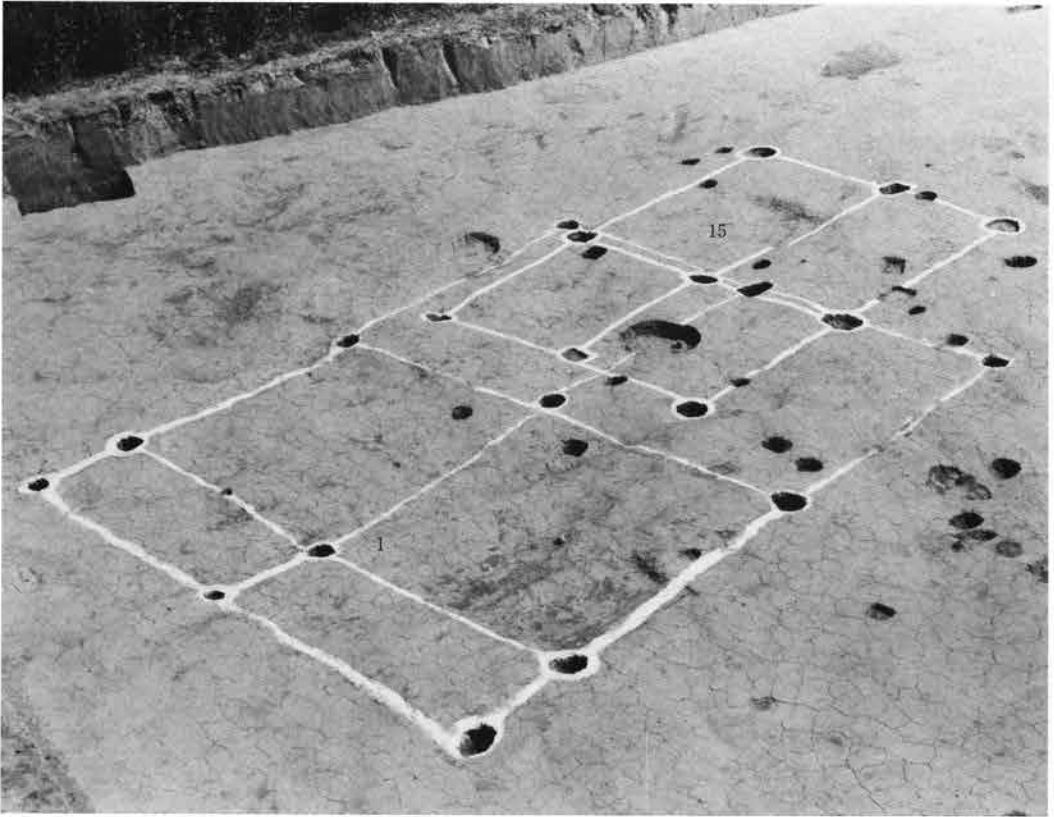
(2) 第6号住居址 (北西から)



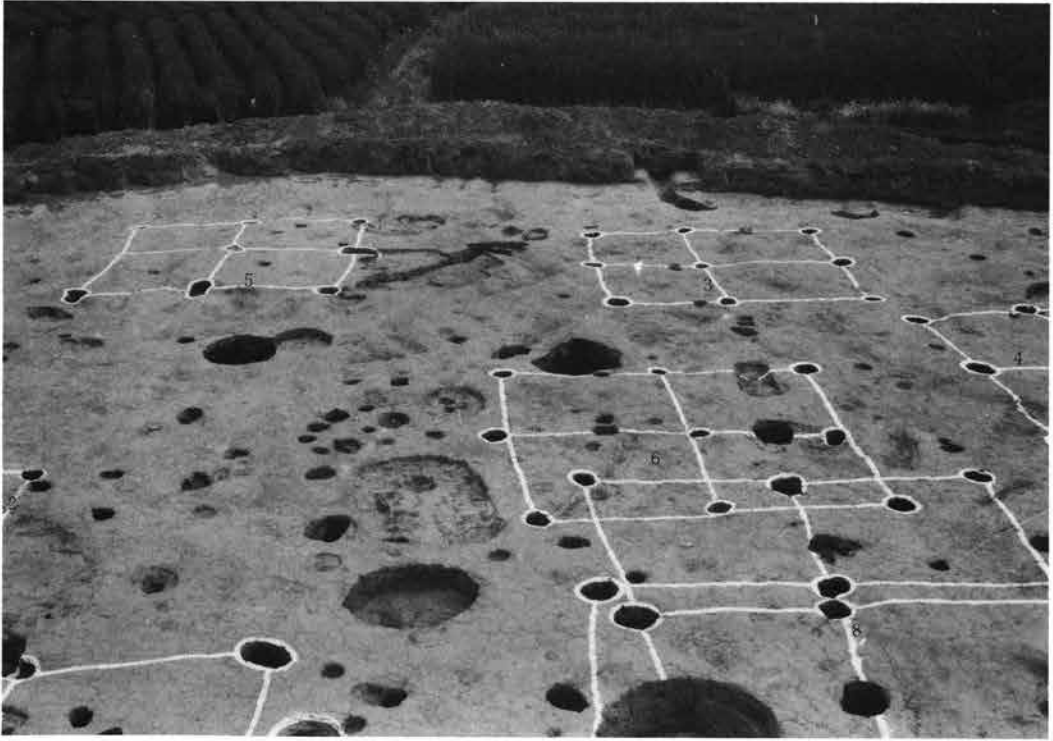
(3) 第7号住居址 (北西から)



(1) 第1・2・3・4・6・15号掘立柱遺構（南西から）



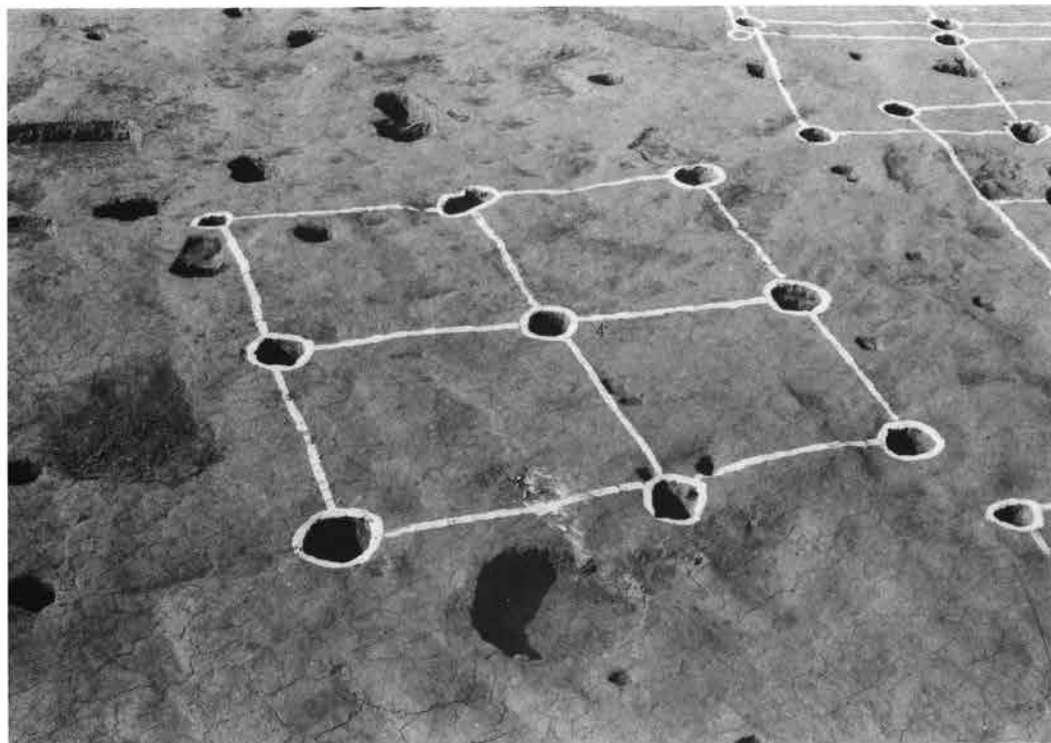
(2) 第1・15号掘立柱遺構（北西から）



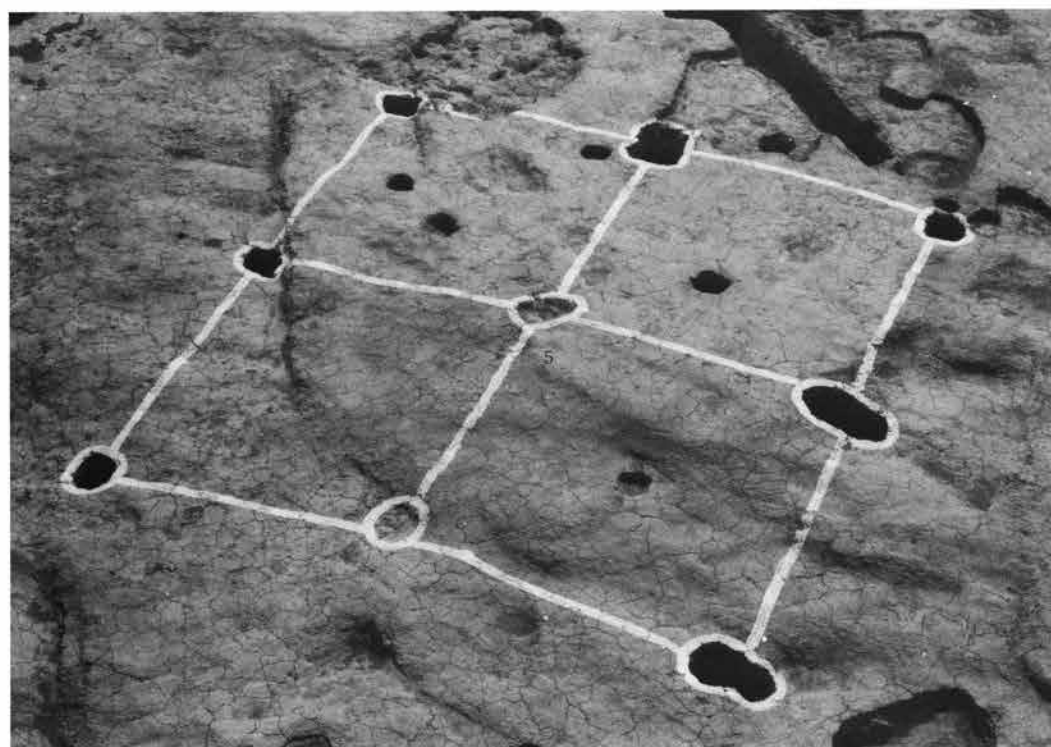
(1) 第2・3・4・5・6・8号掘立柱遺構（東から）



(2) 第3号掘立柱遺構（東から）



(1) 第4号掘立柱遺構（南から）



(2) 第5号掘立柱遺構（南東から）



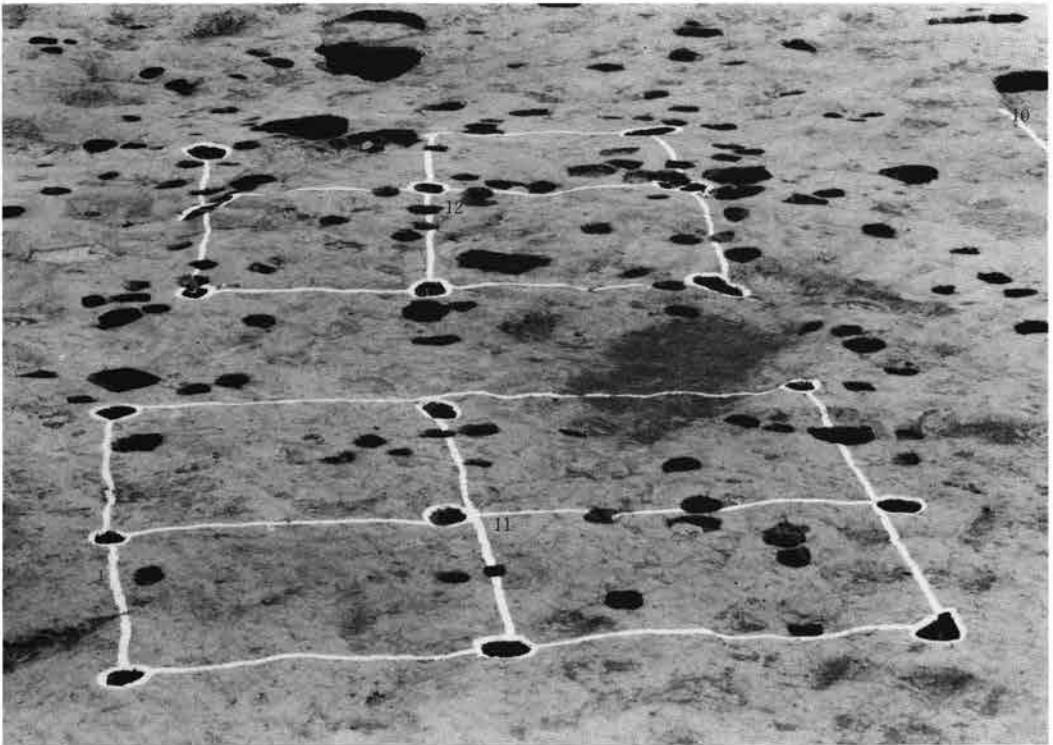
(1) 第3・4・6・7・8・10・14号掘立柱遺構（東から）



(2) 第4・6・7・8号掘立柱遺構（東から）



(1) 第4・6・7・8・14号掘立柱遺構（東から）



(2) 第10・11・12号掘立柱遺構（南から）



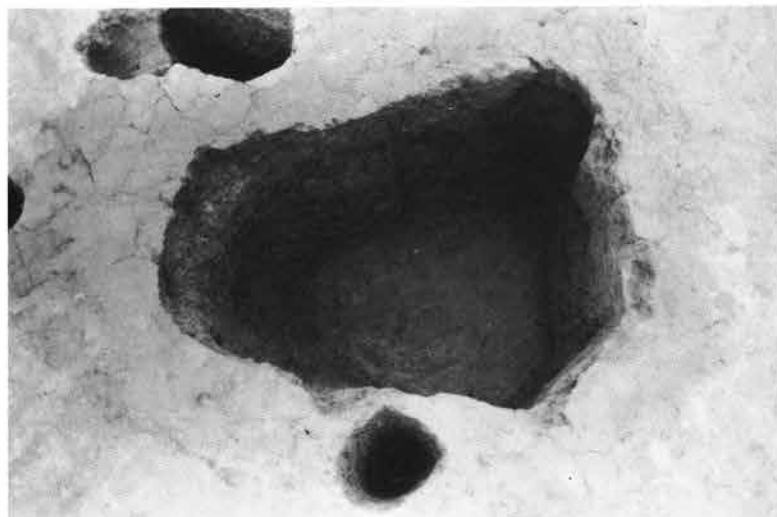
(1) 第1号井戸址
(北東から)



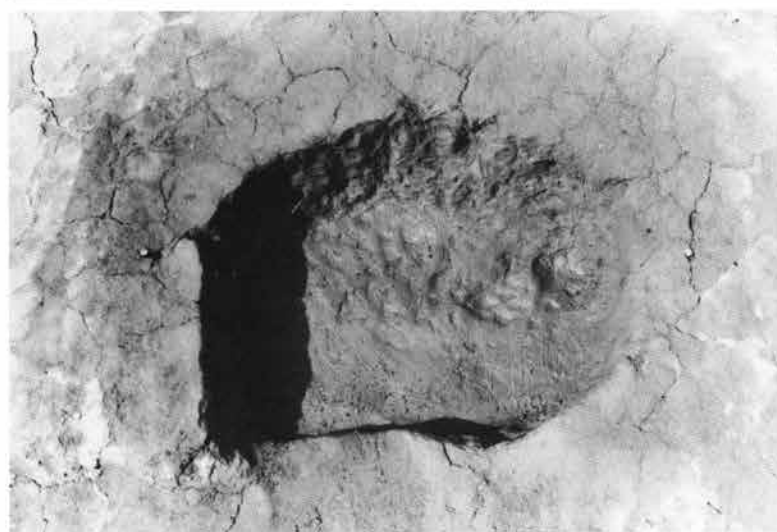
(2) 第1号井戸址
井戸枠組痕検出状況
(東から)



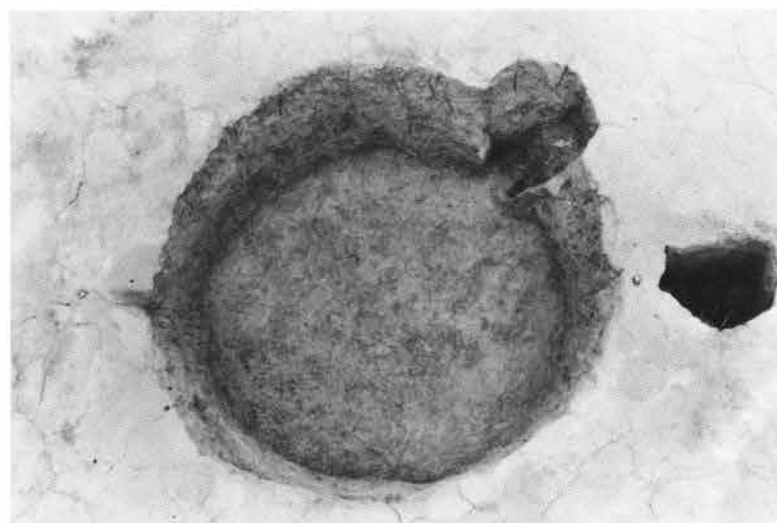
(3) 第1号井戸址
井戸枠圧痕



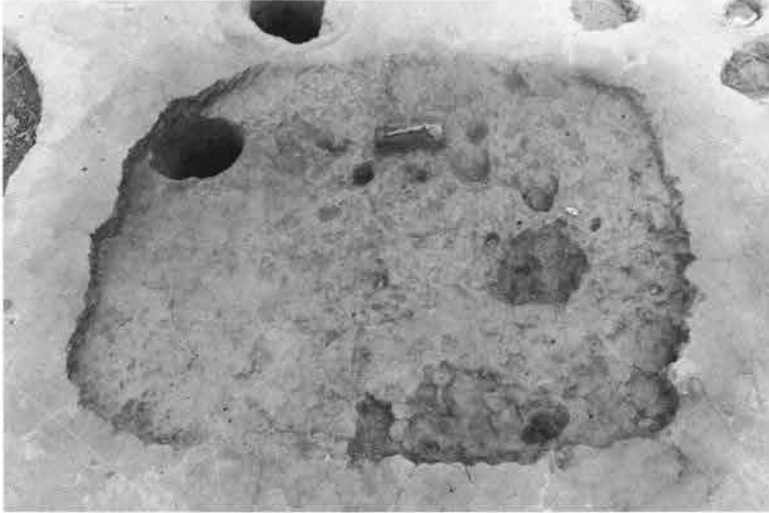
(1) 第11号土坑
(北から)



(2) 第15号土坑
(南から)



(3) 第17号土坑
(南西から)



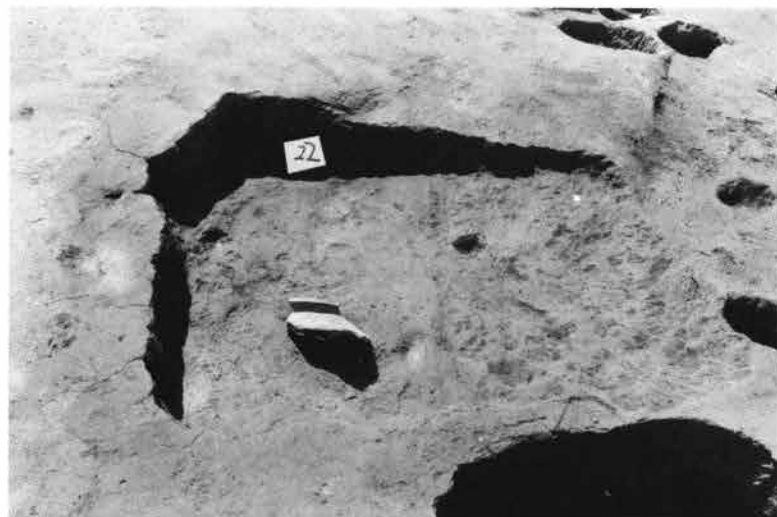
(1) 第18号土坑
(西から)



(2) 第18号土坑鉄器
出土状況(西から)



(3) 第20号土坑
(北から)



(1) 第22号土坑
(西から)



(2) 第25号土坑配石
検出状況(南から)



(3) 第25号土坑配石
除去後(南から)



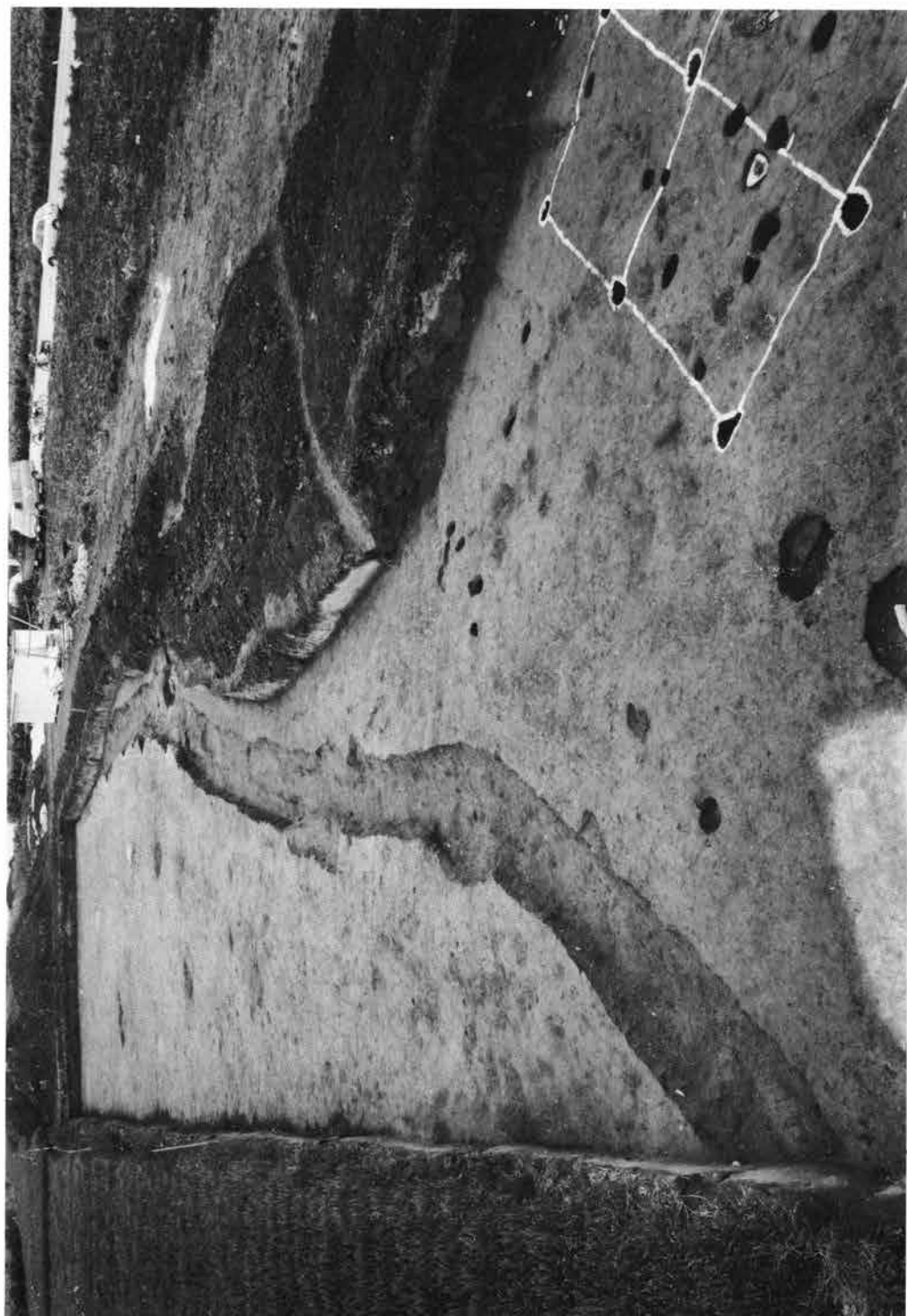
(1) 第26号土坑
(南から)



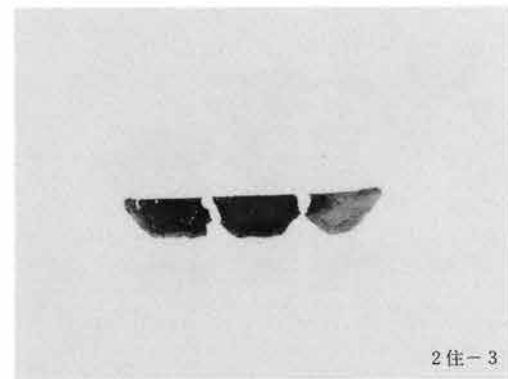
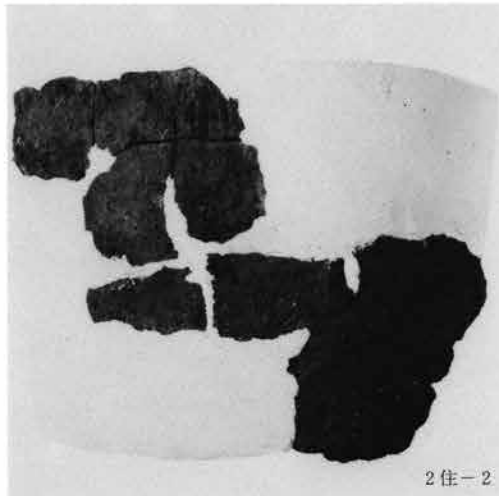
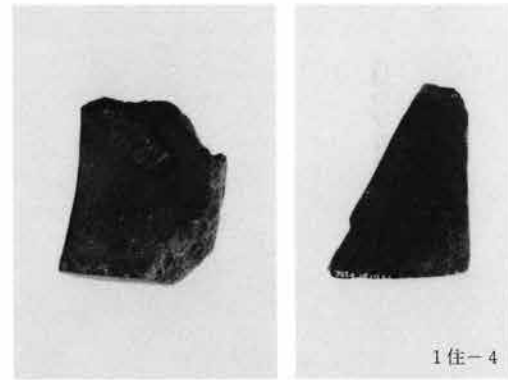
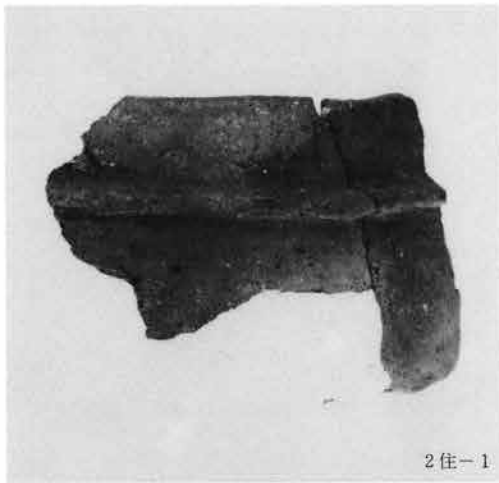
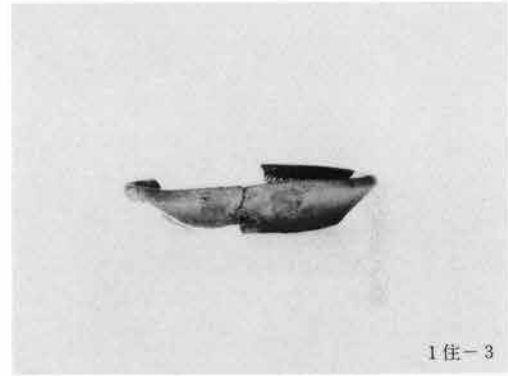
(2) 第1号溝土層
断面(北西から)



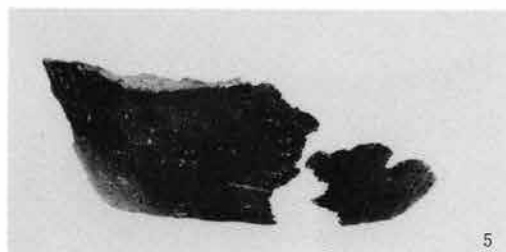
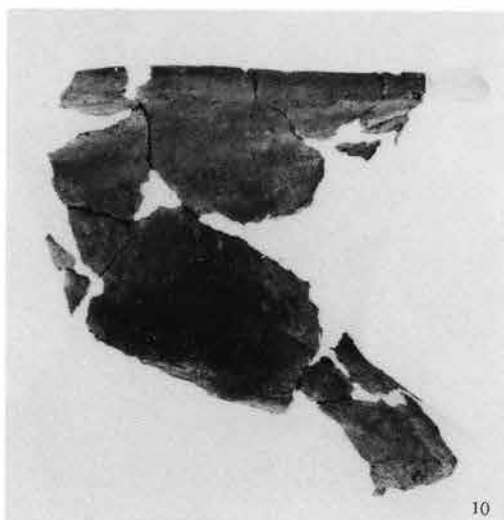
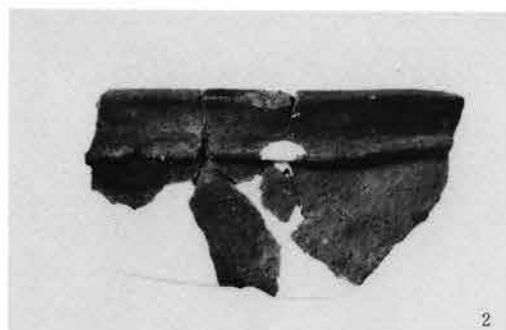
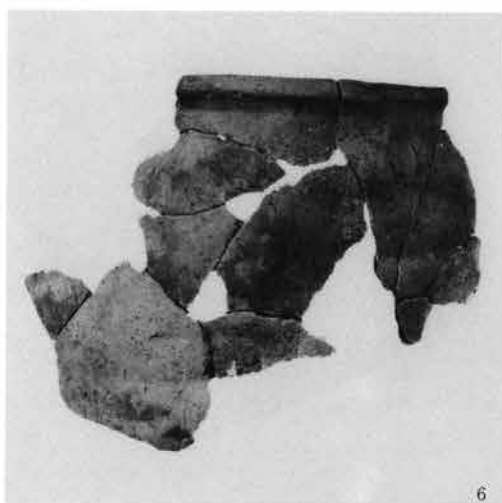
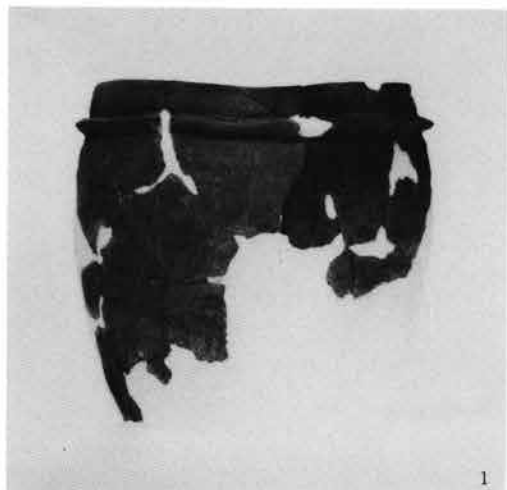
(3) 第1号溝遺物
出土状況
(南から)



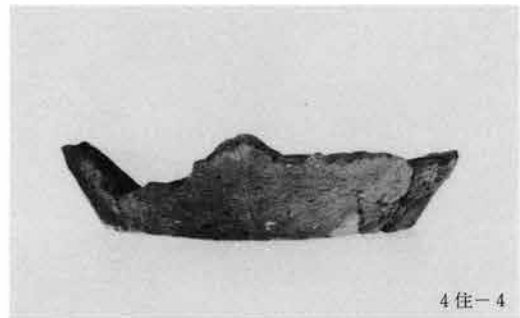
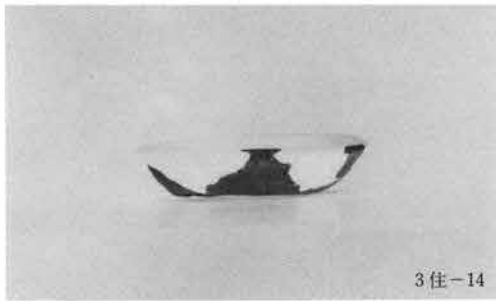
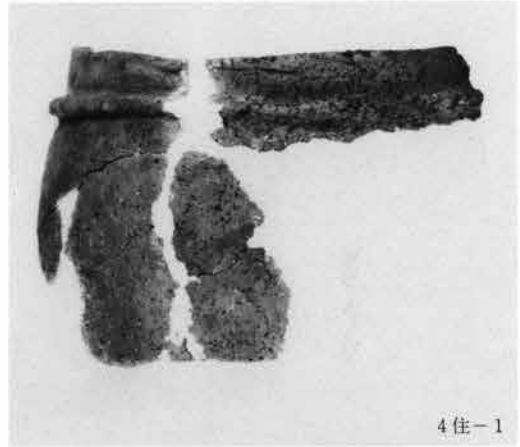
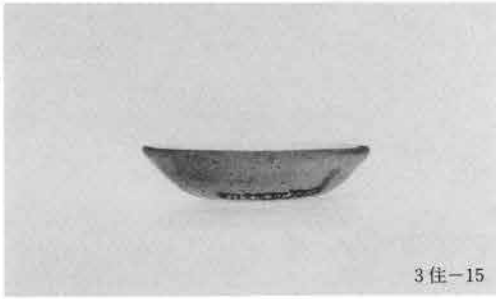
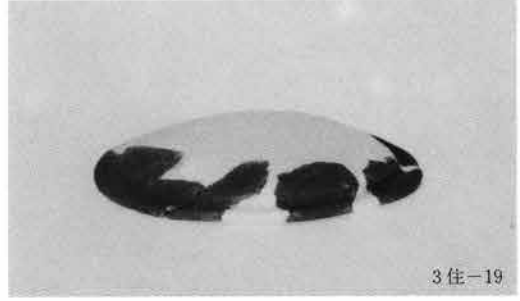
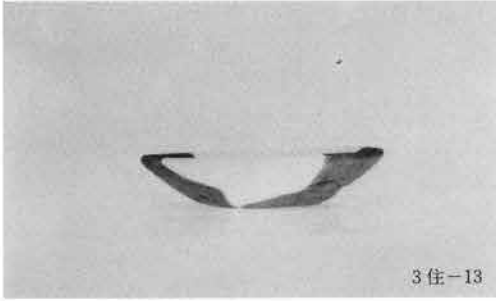
第1号溝（北東から）



第1・2号住居址出土遺物



第3号住居址出土遺物

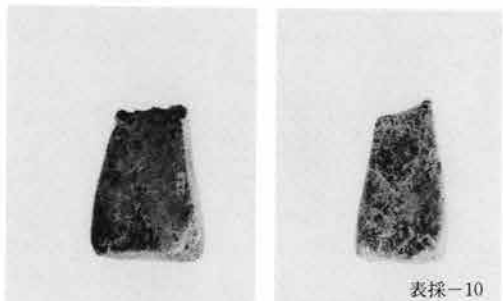
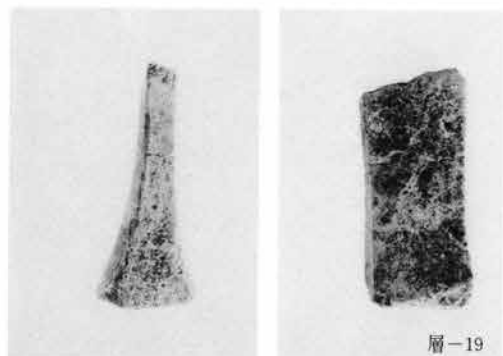


第3・4号住居址出土遺物





第6・7号住居址、第1号井戸址、第22号土坑、第1号溝出土遺物

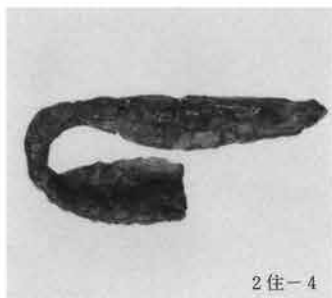
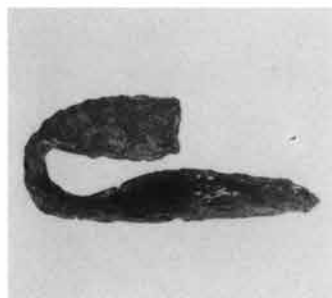


第4号溝出土遺物及びその他の遺物(その1)



その他の遺物（その2）





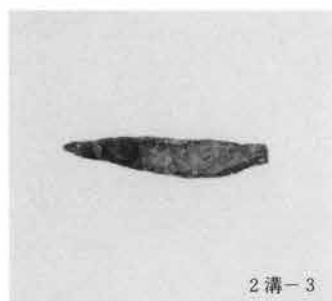
2住-4



1住-5



25土坑



2溝-3



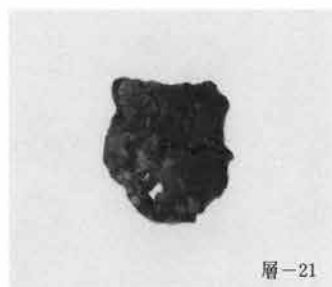
2溝-4



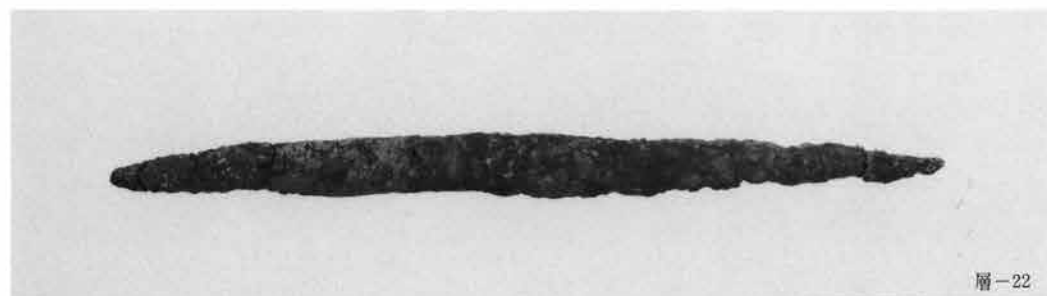
層-20



1溝-7

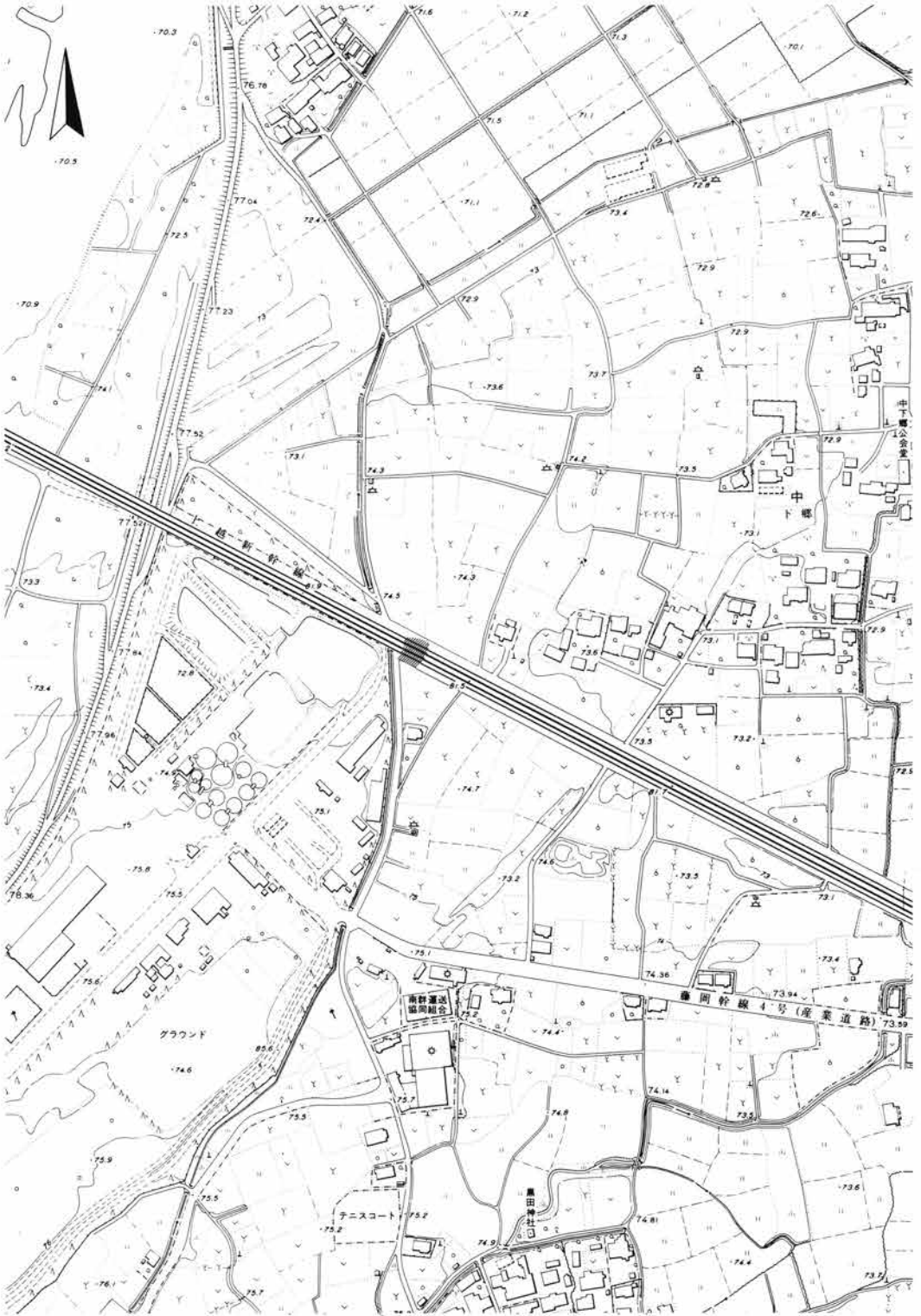


層-21



層-22

中 II 遺跡



遺跡付近地形図 (1/5,000)



遺跡付近航空写真 (1/4,000)



(1) トレンチ調査 (南東から)



(2) 1区全景 (北西から)



(1) 2区東西壁



(2) 5区南北壁



(3) 7区上層全景(北東から)



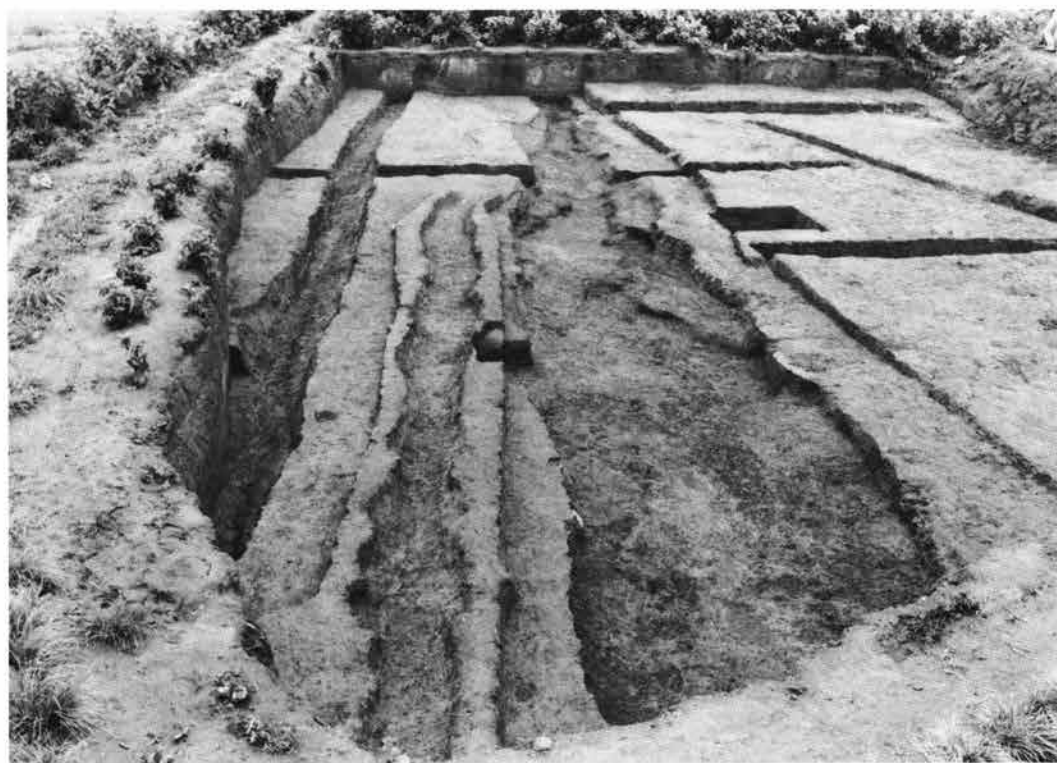
(1) 上層掘立柱遺構（西から）



(2) 調査風景



(1) 上層溝全景（北から）



(2) 下層溝全景（北から）



(1) 第3号溝
遺物出土状況
(北東から)



(2) 第3号溝
遺物出土状況
(その1)



(3) 第3号溝
高坏出土状況
(その2)



(1) 第1号墓址
人骨出土状況
(東から)



(2) 第1号墓址
敷石出土状況
(西から)



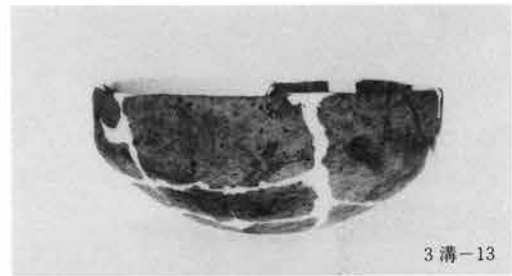
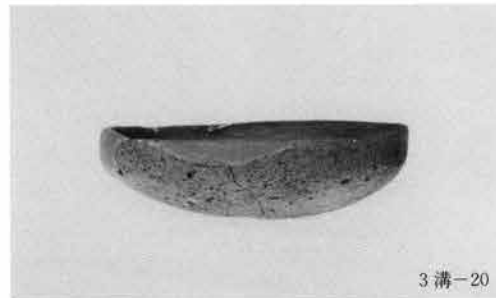
(3) 第1号墓址
敷石除去後
(東から)



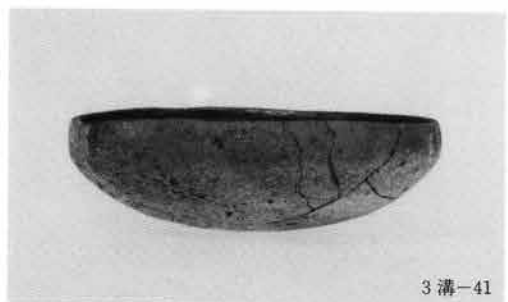
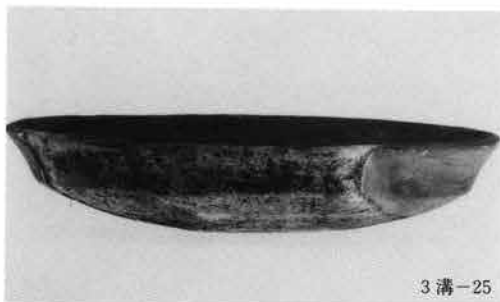
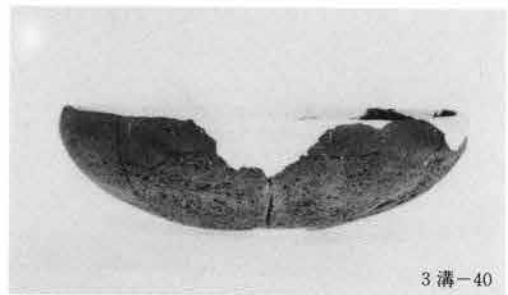
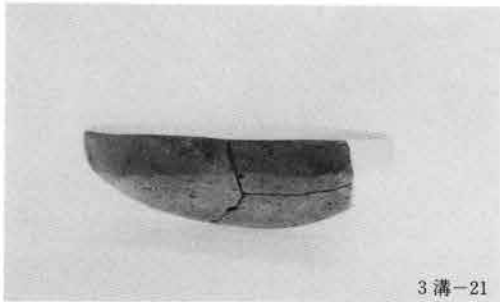
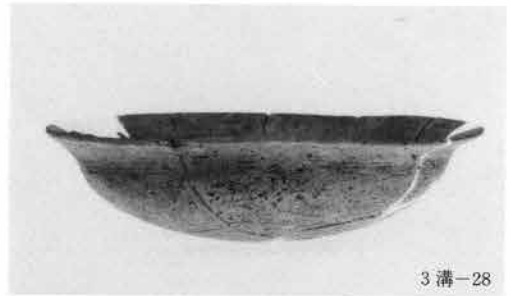
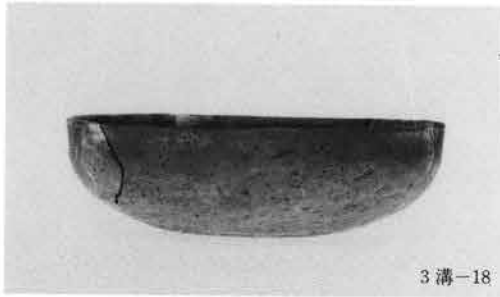
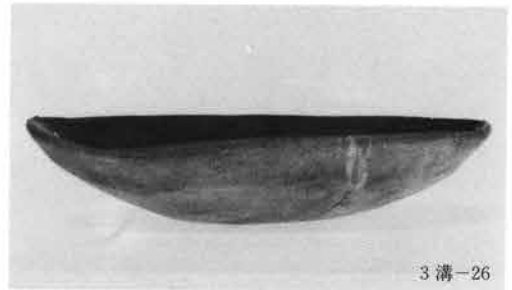
(1) 第2号墓址遺物出土状況(北東から)



(2) 第2号墓址(北東から)



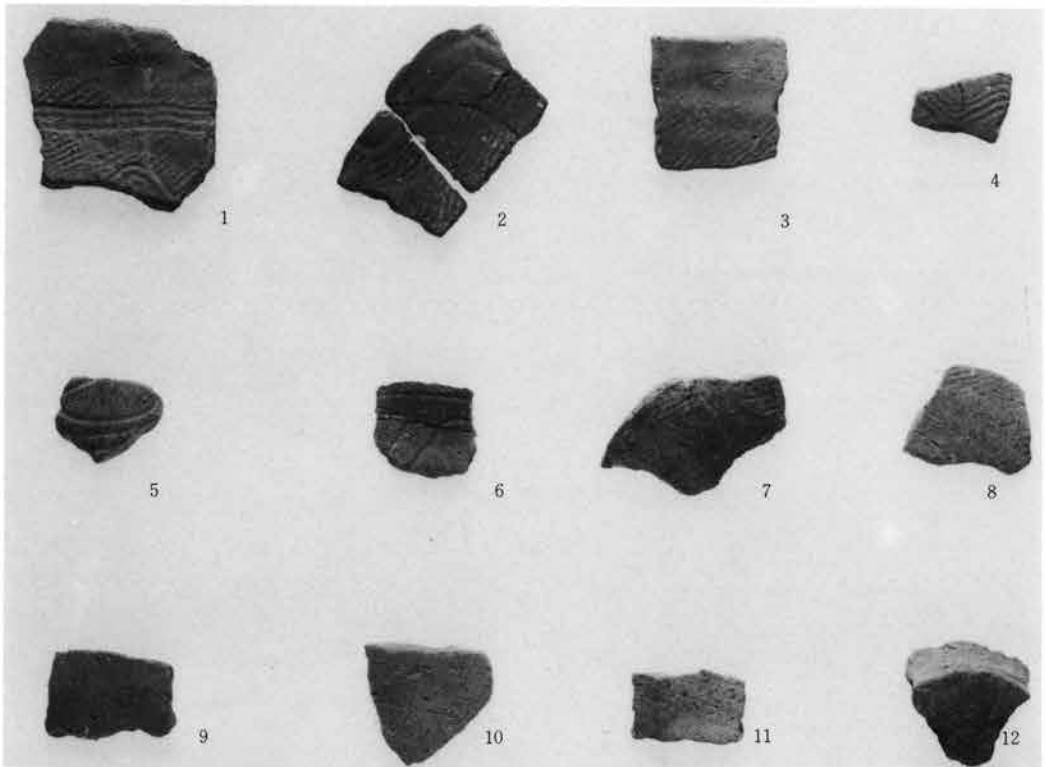
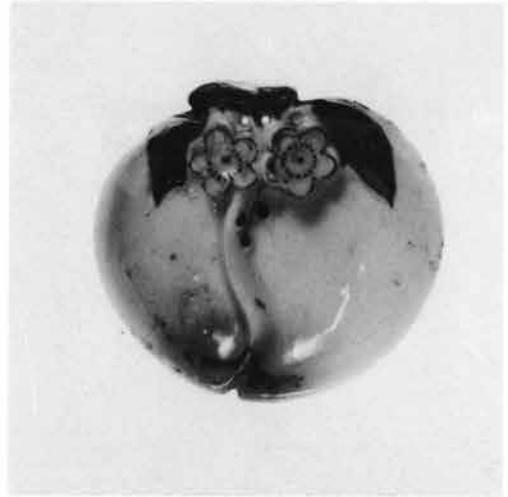
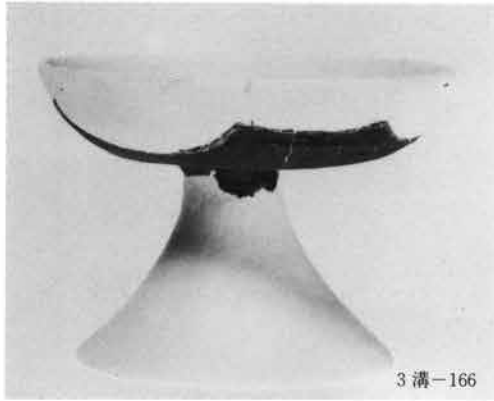
第2号墓址、第3号溝出土遺物（その1）



第3号溝出土遺物（その2）



第3号溝出土遺物（その3）



第3号溝出土遺物（その4）及びその他の遺物

森・中I・中II遺跡

一上越新幹線関係埋蔵
文化財発掘調査報告第2集一

印刷 昭和58年3月26日

発行 昭和58年3月31日

編集 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
(0279) 52(代) 2 5 1 1

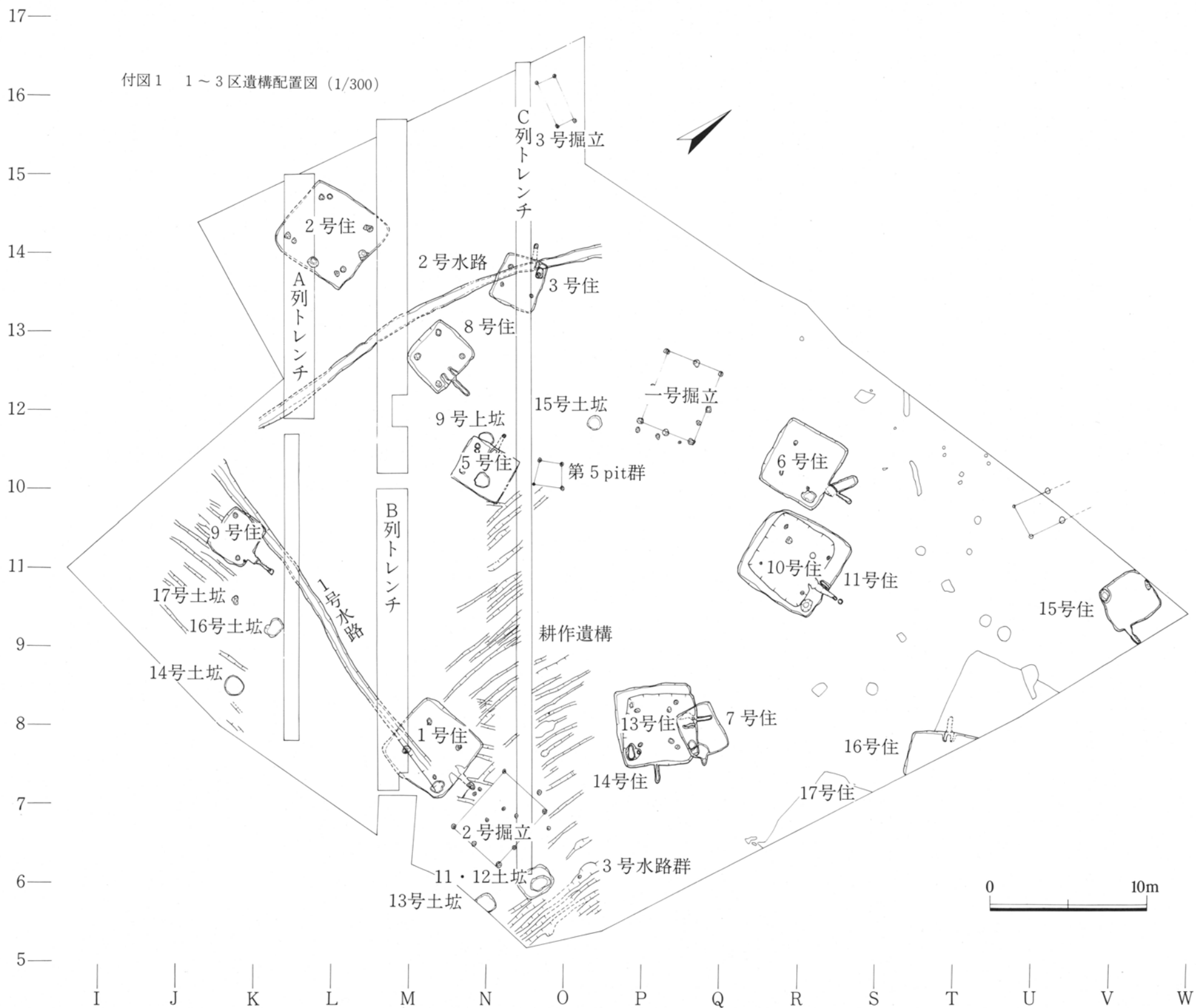
発行 群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
(0279) 52(代) 2 5 1 1

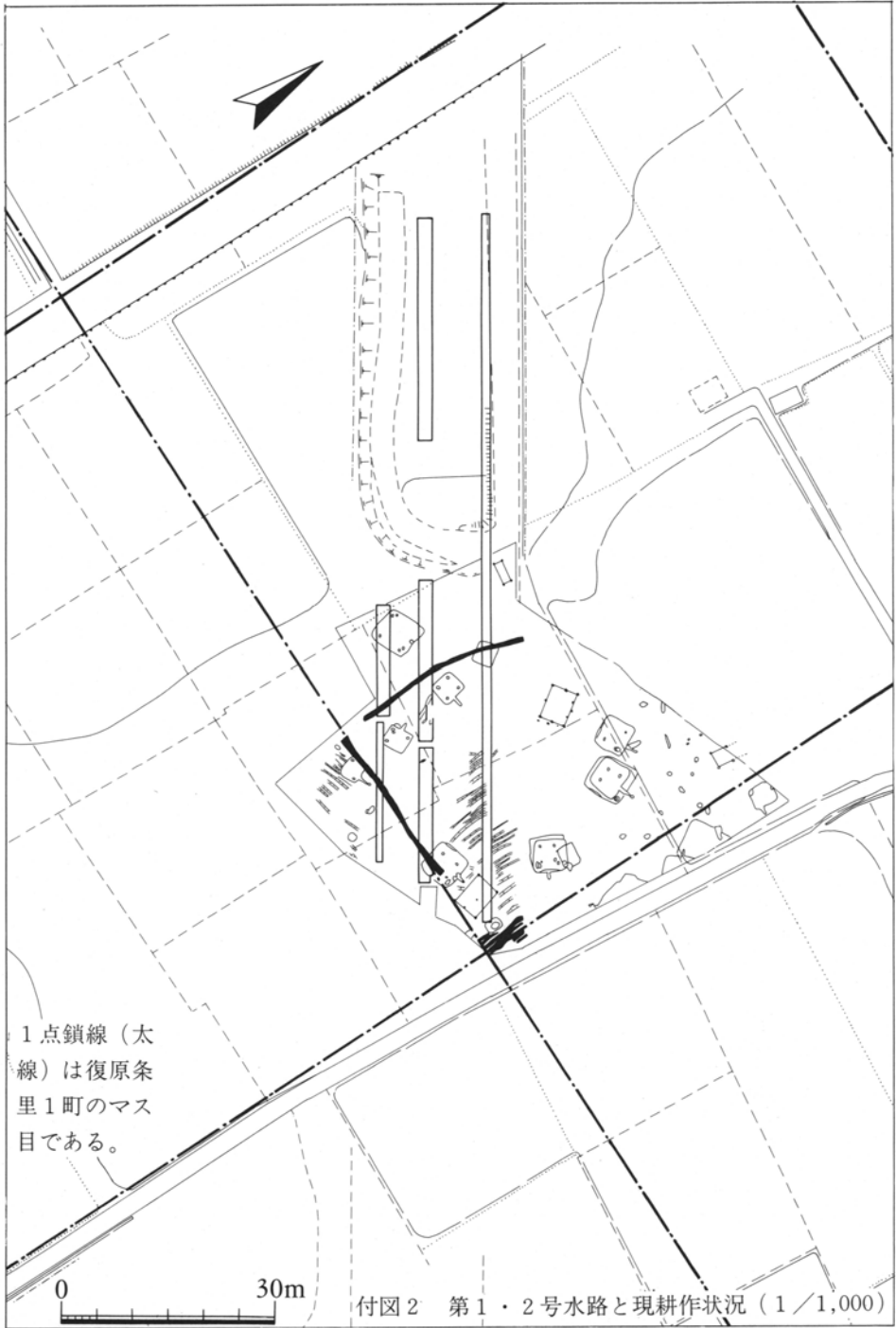
印刷 朝日印刷工業株式会社

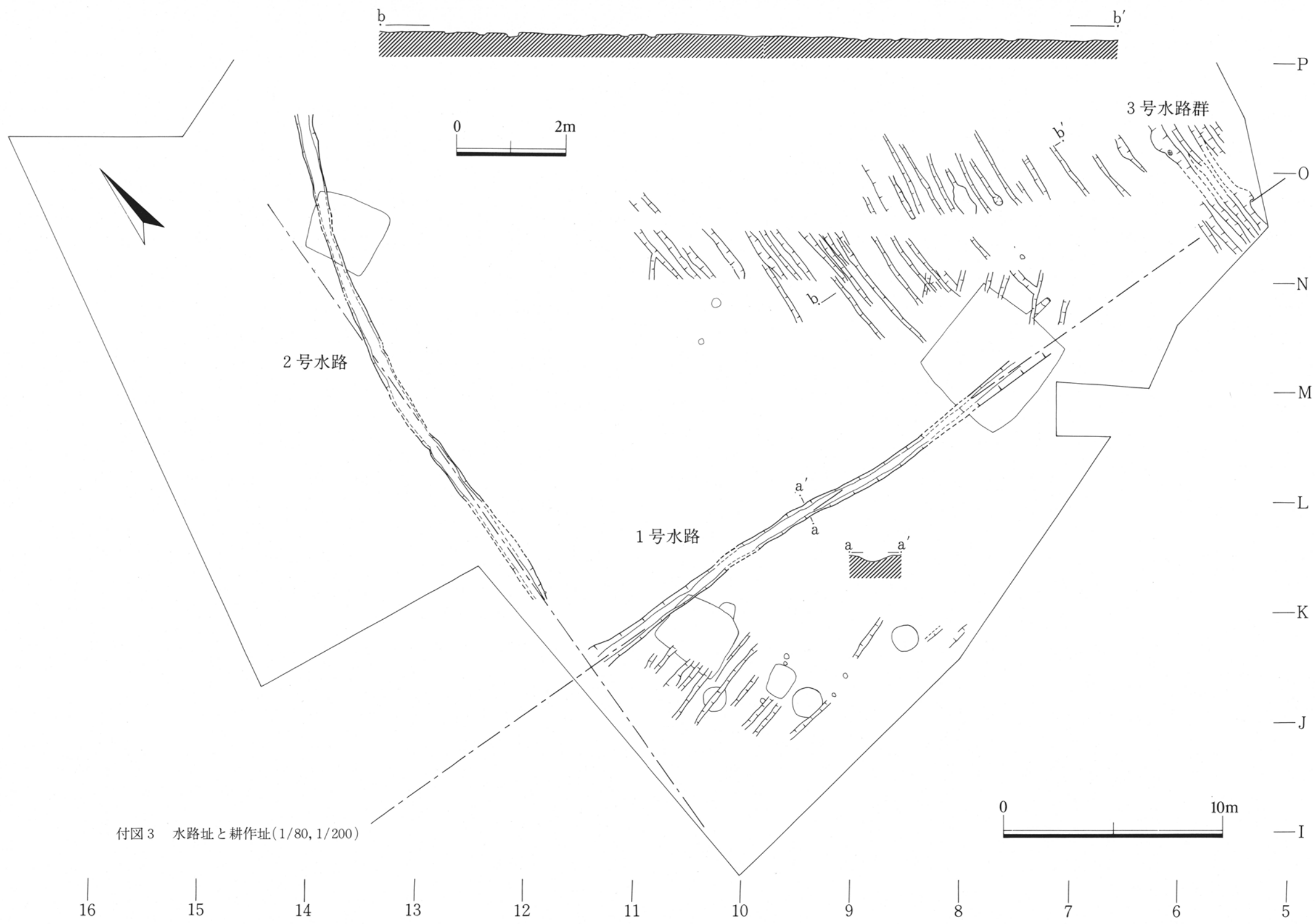
森・中 I ・中 II 遺跡 正誤表

頁	誤	正
目次 III A	調査方法と経過	調査の方法と経過
39頁 11行目	No. 4 は後世の	No. 3 は後世の
48頁 6行目	第38図の如くである。	第38・39図の如くである。
67頁 14行目	図版16～30	図版16・30
75頁 10行目	図版16～17)	図版16～17・巻首図版)
87頁 24行目	本遺跡山土の須恵器	本遺跡出土の須恵器

付図1 1～3区遺構配置図 (1/300)







付図3 水路址と耕作址(1/80, 1/200)